

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別授受承認第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第11号 昭和38年10月1日発行(毎月1回1日発行)

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別授受承認第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第11号 昭和38年10月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

裏窓

10月号

定価 250 円

IBM 1807

振替・東京10756番
(久保書店宛)

武芸残酷物語

忍者一代

小山竜太郎
木屋進 著

凄惨きわまりない忍者の世界！ 勝つた
めには親も子も妻も斬らねばならぬ！
必殺の闇にうごめくは妖しの白猫かまた、
白裸のままに縛られた女忍者か！

230円 送料40円

これが忍術だ！

その歴史
と技法

小山竜太郎・著

これ一冊で忍術のことならなんでもわか
る。歴史的に文献的にさらにまた実技の
写真を多く挿入した、もっとも正確なそ
して興味しんしんの忍術入門書！

170円 送料40円

お手頃な値段で たのしい読みものが
いっぱい！ あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区江古田一の二三〇二
株式会社 あまとりあ社
振替・東京一〇七五六・久保書店宛

裏窓叢書 ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

350円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 秋吉 樹絵

350円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 吉正英生絵

400円 送料80円

捕えられた美女群の危難に
つく危難！ 凄絶のクライ
マックスが連続する 息も
つかせぬ迫力編！

ウソのようなホント

続・話のネタになる本

¥170
= 40

野高一作・著

★目次の一部★コケが乳房を大きくする★ガマン出来なくなる薬
★出歯カメは長生きしない★妻の値段★アメリカの女トルコ風呂

裏窓・十月号・目次

◎表紙 カメラ・吉田 久 ◎目次カット・中川彩子
モデル・津木百合 とびらカット・江渕晃夫

二色オフ
絵物語

竜宮城の反乱

文・祖父江新
絵・落合竜二

(10)

雁形城落城図

小日向一夢

(223)

オフセット
絵物語

妖説朽木女忍伝

文・島本春雄
絵・鬼頭暁

(103)

アメリカSM絵物語より

フェニクス商会

(128)

伊賀の闇の葉

佐藤達四郎

(24)

裏切り

九十九十郎

(32)

新刊
紹介

『燃える薔薇』における
マゾヒズム心理

黒田史朗
村山省一

(70)

ほも紳
録⑩

詩人Kの流転角

かびや・かずひこ

(96)



選
特
グラビア

海外の公刊誌より……………

フェニクス商会

(215) (15)

ミッドナイト……………

カメラ・吉田 久
モデル・エダキリコ
高野晴子

(111)

■裏窓タウン…(53)

■読者コーナー…(221)

■海外SMマンガ……………

(68)

女の「魔」をまさぐる舟橋聖一 安東 泉

(135)

裏説本能寺炎上……………

文・井村 錠
絵・小日向一夢

(44)

寄稿作品ご紹介と短評の欄……………

編集部・編

(66)

現代マゾヒズム文化時評①⑨……………

森下高茂

(60)

異端の城……………

文・三鬼 俊
絵・中川彩子

(84)

コレハオドロ記『葉っぱブーム』……………

左次 朗

(92)

ああ、ぼくは女、女、女の大行進の下に
骨片となって踏みしだかれたい

水尾 究

(144)

お転婆学園奇襲作戦……………

郷 保夫

(154)

毒ぐもに巻かれる弓子……………

北園透一郎

(166)

中島喜美時代妖美画集……………

ミッドナイト撮影記……………

エダ・キリコ

(182)

裏窓叢書名場面集……………

編集部・編

(186)

蛇樽女切支丹……………

義川 源

(192)

ゴルドンの記憶⑦……………

阿麻哲郎

(202)

■編集後記……………

(214)

連載マ
ゾ小説

江戸の
暗黒

モデル
ずい想

ユーモア
アブ小説
アラビア
の城・5

体当た
りM論

S
マンガM

サ
絵物語ド

M
文獻の

戦
絵物語国

裏窓文
芸評論

☆☆☆ 幻想絵物語 ☆☆☆

龍宮城の反乱

祖父江新・文
落合竜二・絵



龍宮城の龍王が死んだ。

いままで龍宮城の門番や、雑役に使われていた者たちが寄り合って、こそこそ相談をはじめた。

「俺たちは浦島太郎のきた親の代から、ずっとこき使われてばかりきたんだ。龍王が死んじまえば、あとはこわいものもいねえ。こちらでいい目をさせてもらおうじゃねえか」イカの墨吉が大きな目を、ぎろりと光らせた。

「そうだ、そうだ」

みんなが一せいに声をあげる。平和だった海底に、ときならぬ反乱がぼっばつした。

墨吉や、タコのぬる八は手足が多いだけに、いちばん活躍した。わずかの間に、反乱組は勝利をおさめた。龍宮城の魚たちはことごとく捕らえられたが、かんじんの乙姫さまだけが、水をかすみと逃げられてしまった。



だが、勝利は勝利にちがいない。
反乱者たちは、いままでの腹い
せに、捕らえた魚たちをじわじわ
いじめてたのしんだ。
「おいおい、俺にもおこぼれをち
ようだいしないな」と、イソギン
チャクの吸太郎。よしきた、とク
ラゲのふら吉が魚を与えると、み
るみる魚は吸いこまれていく。

エビのく字助はあきらめなかった。
彼は、得意のエビ責めで魚たちをい
ためつけた。

「わしは雑魚ばかりじゃ承知できね
え。さあ、乙姫のいどころをキリキ
リ白状しちまうんだ」

じっさい、反乱組のなかには、乙
姫さまの顔をおがんだ者もない。

魚いちばい、ふとったフグのふく
子は耐えきれずに悲鳴をあげてしま
った。

「いいます、いいます。乙姫さまは
龍王さまのヒツギの部屋にかくれて
おられます」



「おうい、わかったぞ、乙姫のいどころがわ
かったぞ。みんな、雑魚たちは岩穴に押しこ
めて、ヒツギの部屋へ押しかけろ！」

く字助の知らせに、魚たちはさらにきびし
く縛りあげられたうえ、暗い岩穴にほうりこ
まれてしまった。

「わっしょい、わっしょい」

く字助を先頭に、反乱組はどっとヒツギの
部屋にくりだした。

ふく子のいったとおり、乙姫さまはヒツギの部屋にかくれていた。

だが、はじめて見る乙姫さまは、想像とは似ても似つかぬ、皺だらけの婆さんだった。

「ちえっ、こんな皺婆あには用はねえ。そのかかえている箱をよこせ」

たちまち縛りあげられて、玉手箱は奪われてしまった。

ぬる八が、ぱっと箱の蓋をあけた。





玉手箱の中から、さっと白い汁がとびだし、
たちまちのうちに部屋ぢゅうにひろがった。
と、あら不思議、皺だらけだった乙姫さま
が、みるみる若く美しい乙姫さまによみがえ
ってゆくのだった。
奇蹟はそればかりではなかった。ヒツギの
蓋を押しあけて、若々しい龍王が生きかえっ

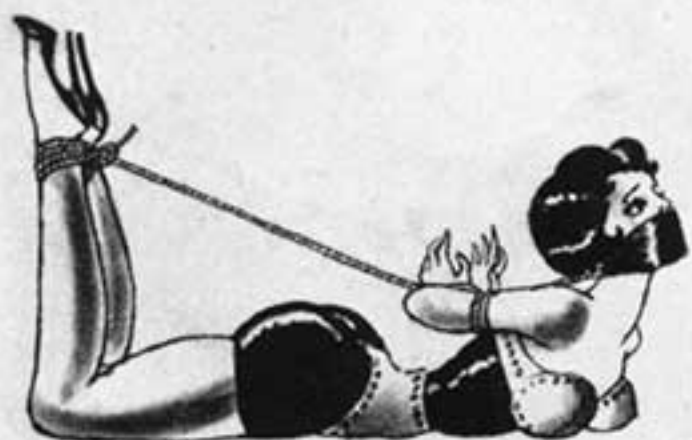
てきた。
「ああ、よく眠った。ありゃ、乙姫、そち
はどうして縛られているのだ」
目をまるくしている龍王のあたりを、もは
や原形を失ったプラントンのただよって
る中に、赤ん坊になったぬる八だけが、すい
すい、すいと逃げていく。

海外の公刊誌より

カルフォルニア・フェニクス商会・特約

















裏

窓



10 月 号

第 8 卷 · 第 11 号

江戸城内の奥庭、真夜中である。月もなく暗黒ばかりが支配する中を、二つの黒い影が音もなく飛び交っていた。

二つの黒影は互いに争っていた。一方は追ひ、一方は逃がれんとしているのだった。

だが、それはもし誰かがそこにいたとしても、身近にそのような二つの動く影があるとは信じられぬほどの、音のない交錯、静寂の中の死闘であった。

追う影は、やがてもう一方の影を庭の一隅に追いつめ、追いつめられた影が必死になって放った八方手裏剣がビュン、ビュンと夜気をつんざいてとんでくるのを苦もなくかわして、一步とびすきると同時に、大地に向かって何やら投げつけた。

「忍法、百鬼青火！」

瞬間、闇の中に鋭い青い光が閃いて、追いつめられた影を地上にはっきりと浮かび上がらせた。黒覆面黒装束、明きらかにそれとわかる忍び姿、その黒い影のまわりを、青い光はまるで無数の鬼火のようにポツポツと輝きながら取り巻いて、その影に逃がれるすきを与えず、金縛りにしてしまった。

「そなた、伊賀者か。しかも女?！」

闇の中から鋭く浴びせられたその声も、低いがよく透る女の声であった。城内の警戒中

■ 甲賀女忍帖

伊賀の闇の葉

佐藤達四郎

古正英生・絵



に曲者を発見し、ここまで追いつめた、甲賀女忍組頭領、甲賀霧姫だった。

曲者は、青い鬼火の輪の中から逃がれられなかった。今はこれまでと思ったのか、曲者はやにわにふところから何か紙片のようなものを取り出し、それを口に押し込むと、一気に呑み込んだ。

「しまった」

さすがに霧姫も、意外な成り行きにおどろき、おどろかかって曲者をねじ伏せ、高手小手に縛りあげた。だが、紙片はすでに呑み込まれてしまったあとであった。

霧姫は曲者の覆面をはいだ。その下からは予期した通り、長い黒髪と白い顔とが現われた。

そのころになってようやく、異変を知ってあちこちから人があつまりだした。たすき十字に白鉢巻、なぎなたをこわきにかいこんだ大奥の女中たち、そして城中警護や宿直の役の武士たち。……

その中の女中たちのうちで、主だった一人が曲者の顔を見て、

「こ、これは、御中老八重路の方さま付きの新参女中、名はたしかお露！」

とおどろきの叫び声をあげた。

「捕えた曲者はすぐ吟味する。引ったてい」



右往左往の中で武士たちにそう命令しているのは、大目付の衣川頼母の声であった。

「お待ち下さい」

その時、忍び姿の霧姫が一步前へ進み出た。

「おお、女忍組頭領、霧姫どのか。お役目ご苦労、で、何と？」

「曲者は何やら紙片のようなものを呑み込みました。まずそれを吐かせて、何であるか確かめることが先決と思われませんが」

「ふむ、だが、どのようにして？」

「おまかせ下さい。私がやりましょう」

霧姫は縛りあげられてころがされている伊賀の女忍をあおむけにさせ、かたく食いしばっている歯と歯の間へ無理に小刀の刃をこじ入れて、その隙間から小さな筒に入っていた油のようなものを、タラタラと流しこんだ。

吐き出そうとする女の背を強く打って、その薬を飲みこませた霧姫は、武士たちに言いつけて、女を立木に逆さ吊りにした。

「う、うう……」



見るみる女の顔に苦悶の色があらわれ、やがて激しい嘔吐感に耐えられなくなった女忍は、胃の中のを食道から口へと逆流させた。女の吐いたものの中から、霧姫は胃液に汚れた一枚の丸めた紙片をひろいあげ、まわりの人を遠ざけて、破れぬようにそつと拡げて見た。そして、

「あ、これは！」

と低く叫んだ。おどろくべし！ それは城内の奥深くに秘蔵されているはずの、江戸城

の見取図の、小さいがしかし精密な写図であった。

江戸城内の一隅に、秘密の重罪犯人をおし込め、あるいは吟味するための牢がある。とらわれた女はそこへ引き立てられて、きびしく吟味されていた。

拷問牢の中で、足の爪先を床上三寸の空中に泳がせて、両手をひろげて高く吊り上げられている半裸の女体を、二人の男と二人の女

がじっと見すえていた。

「申せ！ 何者に頼まれたのじゃ？ そちの仲間もまだ城中におろうが。その仲間の名も白状しや。ええ、強情な女め」

美しい眉をつり上げて叫んでいるのは、中老八重路の方である。大奥の取り締りの任に当たっている八重路の方は、自分の使っていた女中の中に、このような曲者のいた責任感と、飼犬に手をかまれたような口惜しさで、狂気のようになっているのであった。

「ええっ、これでも白状せぬか！」

八重路の方の右手に握られた竹の鞭が、ヒュウヒュウとうなりながら、ガシッ、ガシッと女の胸や背に噛みついた。

しかし女は、唇をかんでただ低くうめくのみであった。

「お方さま、まあお待ち下さい。そのようにせかずとも、このようなたたか者は、ゆるゆると泥を吐かせるにかぎります」

そう言って女の前に立ったのは、老中飯村大和守の腹心、ふところ刀と言われている建部小十郎であった。あとの二人の男女は大目付衣川頼母と甲賀霧姫である。この四人が曲者の取り調べの任に当てられたのだが、頼母と霧姫はどちらかという、さっきから傍観的にこの場に居合わせていた。

「女、まあよい。強情を張るのも今のうちだ
けだ。あれを見るがいい」

小十郎の指さす方、拷問牢の一角に、見る
ものを思わず恐怖の中へ誘いこむような奇怪
な形のさまざまな拷問具が、黒々と置かれて
あった。

「あれらにかけられたら、鞭で打たれる苦し
みなど蚊に刺されるようなものだということ
を思い知るであろうよ。あれらに責められて
耐え通した者はかつて一人もおらぬ。さあ、
あの鉄の車の間で、手足を締めつけてやろう
か、それとも海老吊り具にかけて、背骨の折
れるまで曲げてやろうか」

異常なまでの残忍さが、小十郎の目の中に
は光っていた。それは、猫がネズミをもてあ
そぶときの、暗いよろこびに燃えた目であっ
た。

女に何の反応もないと見るや、小十郎は拷
問具の中から幅の広い帯のようなものを取り
出して来た。その裏には細かいトゲのような
ものが一面に植えつけられてあった。

小十郎はその帯を、トゲのついた側を内側
にして、女の胸、乳房の上にかく巻きつけ、
背中で帯の端についているひもでかたくしば
った。たちまち、無数のトゲが女の肌を責め
て、女はハッハッと荒い息を吐きだした。

だが、苦痛はそれだけでは終らなかった。

小十郎が、背中でむすんだひもをぐっと引く
と、どんな仕掛けになっているのか、帯はキ
ュッ、キュッと音を立てながら少しづつ縮み
はじめ、トゲで肌を噛みながら女の乳房をぎ
りぎり締めつけていった。

「あ、う、うーむ……」

次第に身体のだるさに達してくる苦痛に、
女は身体をよじり、腰をくねらせ、足で空を
けり、あおむけた顔を左右に振った。そのた
めに長い髪は宙にゆれて、汗のびっしりと浮
き出した身体中にまつわりついた。

やがて、こらえきれなくなった女の口から
かすれたような小さな悲鳴がもれ始めた。

だが、それから一刻あまりの飽くことのな
い拷問のくり返しにも、女は、うめき、さけ
び、悲鳴をあげ、そして悶絶するのみで、肝心
な事柄は一言もしゃべろうとはしなかった。

「建部どの、今日はもうこれくらいで、また
明日にでも……」

大目付衣川頼母は、小十郎にそう声をかけ
た。すると霧姫もことばを發した。

「忍者はその目的は生命に換えても口外いた
しません。おそらくはいくら責めても無駄で
ございましょう」

そう言って、牢から外へ出てゆこうとする

のを、

「あ、今しばらく。それがしに最後の手段が
あるのです。それで駄目ならいたしかたない
が――」

そういつてとめた小十郎は、配下の者に言
いつけて牢の片隅に炭火をおこさせ、その中
で一本の鉄の棒をまつ赤に焼いて、それを右
手に持ちながら女に迫っていった。

「女！ 貴様も忍者とはいえやはり女、ふた
目と見られぬ顔になるのは厭であるうが。ど
うだ、お前に頼んだ人物の名さえ言えば許そ
う。それとも、その顔にこの鉄の棒を受ける
か？」

重なる拷問に、なかば吊りあがって生気を
失った女の目に、まっ赤に焼けた鉄棒が映る
と、恐怖が女の顔いっぱいに見え現われてきた。
一呼吸、また一呼吸、女は喘ぎ、目をいっば
いに見ひらき、しかもそれでもなお唇はかた
く閉じられている。

「ふむ、ではやむをえぬ」小十郎は、左手で
女の髪をつかんで顔を動かせぬようにしてお
いて、右手の鉄棒の焼けた部分を、女の左の
目の上から頬にかけておしあてていった。ジ
ュン、というような音がし、続いてシリシリ
と肉の焼けていく異様なにおい！

「うわあっ、ああーっ！」

頼母、霧姫、そして八重路の方さえも、一瞬間をそむけた。ビクビクと全身をけいれんさせていた女は、やがて五体から力を抜き、気を失った。

三日のち、やはり深夜、江戸の町並の一角を、二つの影が疾走していた。一つは江戸城内に囚われていたはずのあの伊賀の女忍、他方は甲賀霧姫である。

しかし、霧姫は女をとらえようとしているのではなく、知られぬように尾行して、女のゆく先を突きとめようとしているのだった。

今宵、牢の鍵がなかばこわれかけているのを発見した女忍者は、拷問に弱った体力の限りをつくして、江戸城から脱出したのである。

だが、それは衣川頼母と甲賀霧姫とによって企てられたワナだった。江戸城の絵図を狙う黒幕を突きとめるための苦肉の策なのだ。

いくら弱った身体とはいえ、疾走する忍者を気づかれぬように尾行するのは容易なわざではない。まして人っ子ひとりいない深夜のことに集中していた。と、不意に女は跳躍して、一つの屋敷のへいをとび越えた。

「はて、あれは誰の屋敷か？」思いつつ霧姫もへいの上に音もなくとび移り、中のようすをうかがった。女の姿は消えていた。そして霧姫の直感は何かえたいの知れないものを感じとり、それをたしかめようとして庭に降り立ったその時、

「ホホホ、甲賀霧姫どの、ようこそ!!」

庭の一角の闇から鋭い女の声がした。それは追っていたあの女の声ではなかった。

「甲賀霧姫、ワナにかけたつもりが逆にまんまとワナにはまったね」

「そなたが、あの女忍の頭か」

「そう、私は伊賀の女忍、闇ノ葉。霧姫、お前はもう逃がられぬ。十重二十重に包んだ伊賀包囲陣は、蟻一匹といえども逃がしはせぬ」

「……」

無言ながら、霧姫はいま自分の立たされている危機をはっきり感じた。

闇の中に、二人の女忍はむかい合った。それは、甲賀と伊賀、忍者の世界に宿命のように続いてきた二つの流れの対決でもあった。

跳躍、疾走、二つの影は闇の中を縦横に動き、とどまることを知らなかった。だがこの時、霧姫にはいっぴくもなくあせりがあった。単独で行動し、追跡に夢中で自ら重囲の中へ落



ちたことへの自嘲がそうさせたのかもしれない。

霧姫の手から放たれた投げピシ、手裏剣はむなしく空を切り、忍び刀の刃風も相手を倒しえなかった。

いつか、霧姫は庭の大樹の下へ追いつめられていた。

すると突然頭上の木の葉が、まだ夏のさかりというのにバラバラと雨のように降りだした。しかもその木の葉は霧姫の身体に集中して降り注ぎ、身体に当たると激しい痛覚を与えた。

「伊賀の木ノ葉つぶてを思い知れ！」

無数の木の葉にうたれ、霧姫は身体を自由を失っていった。

一夜が明け、そして、また夜が来た。一昼夜、霧姫は鉄鎖に全身の自由を奪われて、地下の部屋に閉じこめられていた。夜更けて、彼女はいましめのまま庭先へ引きだされた。

庭は昨夜とはことなり、かがり火のあかりで昼のように照らしだされていた。あちこちに武士たちと忍者の団が屯していた。廊下には数人の武士に守られた一人の頭巾で顔を

かくした男、そしてその傍には忍び姿の伊賀女忍闇ノ葉。……

「霧姫、わしが誰か、わかるか」

濁った作り声であった。

「女忍者をワナにかけようとした、もれるはずのない秘密がもれたことを考えればわかること。あのような企みに疑いを持たなかったのは不覚だった。そなたは、衣川頼母」

「ふむ、よう見破った。——わしはな、この忍者たちを使って江戸城絵図を盗もうと思ったのだ。徳川の下にあることをよろこばぬ外様大名どもには、あの絵図一枚は何十万両という価値のある代物だ。霧姫、お前さえ片付ければ、絵図は手に入ったも同然じゃ、ハハハ」

傍から、闇ノ葉も口を切った。

「霧姫、伊賀忍法を思い知ったか。——徳川家康の生命をしばしば救った服部半蔵は伊賀者だった。以来、將軍の護衛役は半蔵を中心とする伊賀者がつとめていた。それがいつか幕府お庭番、公儀隠密は甲賀者の手におち、伊賀者は追われた。甲賀の卑劣な企みのために。——だが、今こそ伊賀忍者の執念を甲賀者に思い知らせてやろう。手はじめに、まず霧姫、お前だ」

闇ノ葉の声は、はらわたをえぐるように鋭

利であつた。

「だがその前に、もう一人、思い知らせてやる女がいる。お露、あの女を！」

「は！」

答えて立ったのは江戸城内に囚われていたあの女忍者、顔の左半面を白い布でおおったその女忍お露に引き立てられて来たのは、髪も着物も乱れ放題の中老八重路の方であつた。

「お露、お前を苦しめた三人の男女のうち、

建部小十郎は今日私が倒した。あとの二人、八重路と霧姫はここにいる、存分にしかえしをしてやるがよい。まず八重路から」

たちまち、八重路の方は着物をはがれ、そのぬめぬめと白い体は、庭の立木を背負うようにしてしっかりと縛りつけられた。そのかたわらに、隻眼を光らせてお露が立った。

「お方さま、その節はいろいろと。……今日

はたっぷりとお礼をさせて頂きましょう」

言うなり彼女の右手に持った革の鞭がひらめいていた。その鞭は、先へゆくにしたがつて幾条にも分かれていて、白い女体のいくつかの部分に、激しい音とともに平行にからみついた。

「うわあ、あーっ！」

咽喉が裂けるかと思われるほどの悲鳴をあげて、八重路の方は全身を硬直させた。その



悲鳴が消えおわらぬうちに、もう第二撃が襲っていた。

バシッ、バシッという鈍いひびきの中で、八重路の方の悲鳴はしだいに細くなり、やがて唇から血を流して悶した。

「ホホ、だらしないお方さまじゃ。さて、次はいよいよ霧姫どの」鉄鎖に自由を奪われている霧姫に近づいてくる女忍お露の手に、彼女自身が小十郎に責められた時と同じようなまっ赤に焼けた鉄棒が握られていた。

一瞬、見ている者は呼吸をとめた。顔前に突き出された鉄棒をさけようともせず、霧姫は静かに目を閉じた。その美しい顔の左半面に、焼けた鉄棒はジジッと不気味な音とともに押しあてられた。――

わずかの時間がたった。霧姫は鉄鎖にいましめられたまま庭に倒れていた。頼母も、闇ノ葉も、お露も、額に汗を浮かべたまま少しの間呆然としていた。その一瞬の虚を破るように、その時突如つむじ風のような黒い一団が、倒れている霧姫のまわりに降ってわいたのである。

「霧姫さま！」

「ご無事でございますか?!」

甲賀女忍組、六人の女忍たちであった。捕

らえられる寸前に霧姫が放ち、屋敷のまわりの木々に刺さっていた鉄ピシが、彼女らをここへ導いたのである。

凄壮な死闘が続いた。だが、不意を打たれた伊賀忍者団は次第にくずれ立って、一人、また一人と倒れていった。

お露を倒し、衣川頼母の両眼に鉄ピシを射込んだ霧姫は、女忍闇ノ葉を追っていた。いまあせりの見えるのは闇ノ葉の方であり、霧姫は傷にもめげず冷静そのものであった。

ついに霧姫は闇ノ葉を追いつめた。霧姫の忍び刀は闇ノ葉を真正面から襲い、闇ノ葉はそれをかわす間も刃で受けとめるとまもなくかった。闇ノ葉のからだは、あわやまっ二つと思われたその瞬間、闇ノ葉は左手をさっと前に出し霧姫の刀をその左手で受けとめた。

パツと散る血飛沫とともに、闇ノ葉の左腕はひじのあたりから両断されたが、その反動を利用するかのように、闇ノ葉は高く跳躍していた。

闇ノ葉はその名の如く、闇の中へ木の葉が散るように姿を消した。トカゲのように腕一本を犠牲にして。――

追跳はもはや不可能だった。

「闇ノ葉、あの女とは、またいつかどこかで戦わなければならぬだろう。……」

やがて夜は明けた。屋敷の近くの小川のほとりで、霧姫は配下の報告を聞いていた。

「牡丹と小萩は死んだか。――」

残る四人の配下たちを見まわして、霧姫は言った。

「そなたたちのおかげで、私は助かった。だが、甲賀女忍組、残るは私を入れて五人。――」

「霧姫さま、お顔のお怪我は？」

「案ずることはない。あの時、涙をほとばしらせて、目は助かった。――そなたたちは先へ」

やがて、小川の水にその半面をしばらくひたしていた霧姫は、静かに顔をもち上げた。

と、何という不思議、水鏡に映る彼女の顔にはもはや焼けただれた跡さえもなく、その顔は、さっきまでの顔とはまたどこやら違うような感じの、凄絶なまでに美しい女の顔であった。

「甲賀秘法、解脱！」

その、水に映った自分の顔をしばらく眺めていた霧姫の心の中に、ふいと雲のような疑惑がわいて来た。

（私には、自分の顔がない?!）

霧姫はすっと立ち上がった。忍者は感情を動かしてはならなかった。水に映るおのが姿を、石を投げつけて目茶苦茶に碎いて、霧姫はその場を立ち去った。朝の風とともに。

九十九十郎

繪・秋 吉 巒

一

看守は独房ののぞき窓を開けると、傍に退いて場所をあけた。

「のぞいて見ろ」

背後に立った将校が言った。

彼はのぞいた。

独房の内部は薄暗く、赤色フィルターをとおして眺めているような感じだった。それは狭い房内にしては高過ぎる天井に、冥王星から望んだ太陽のように、心もとなく灯っている電灯のせいだった。

女はカンバスベッドに腰を掛けて、背後の壁に頭をもたせかけ、眼の前の壁を見つめていた。身じろぎもなかった。明りが頭上にあるので、くぼんだ眼が黒い陰になり、女の

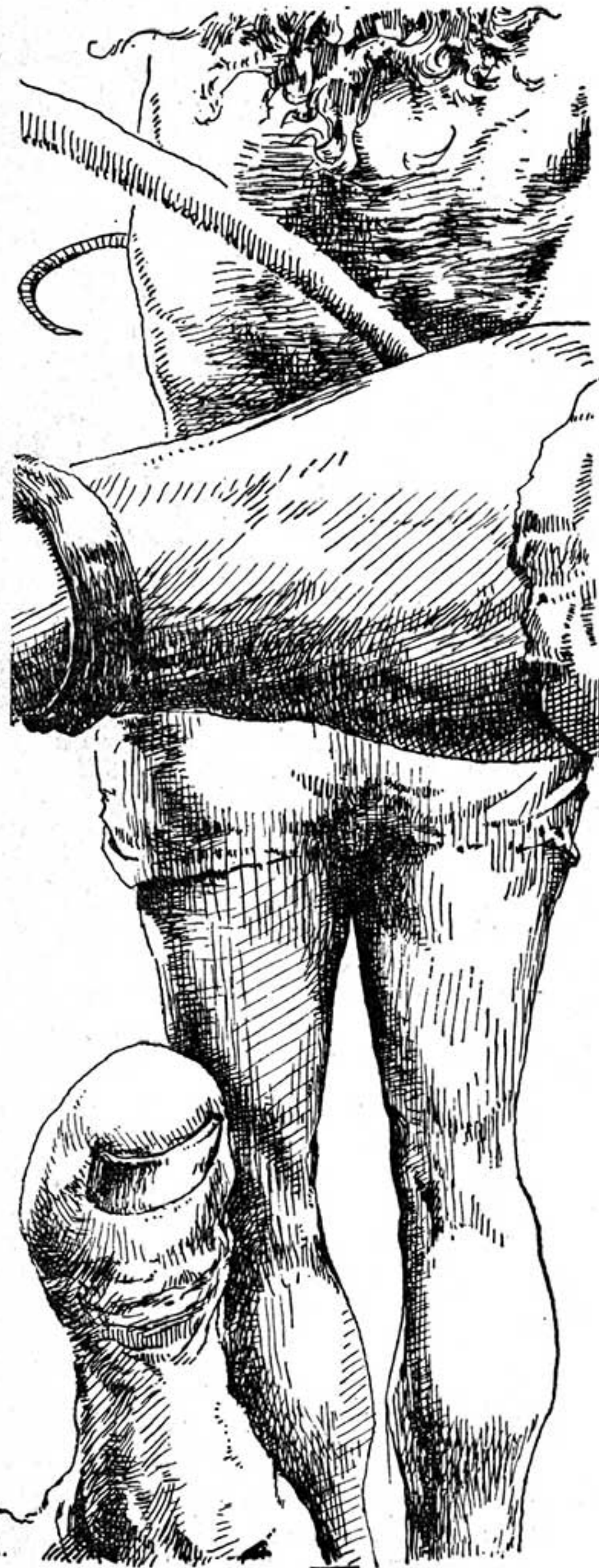
表情を殺していた。高い鼻と薄く引きしまった唇が、彼の視線を拒否しているかのようだった。

「どうだ」

背後の将校が長靴の底をジャリツと鳴らした。彼は将校の視線が自分の背中に注がれているのを意識しながら、女から眼を離すことができなかった。

女は切りそいだような横顔を見せたまま身動きもしない。

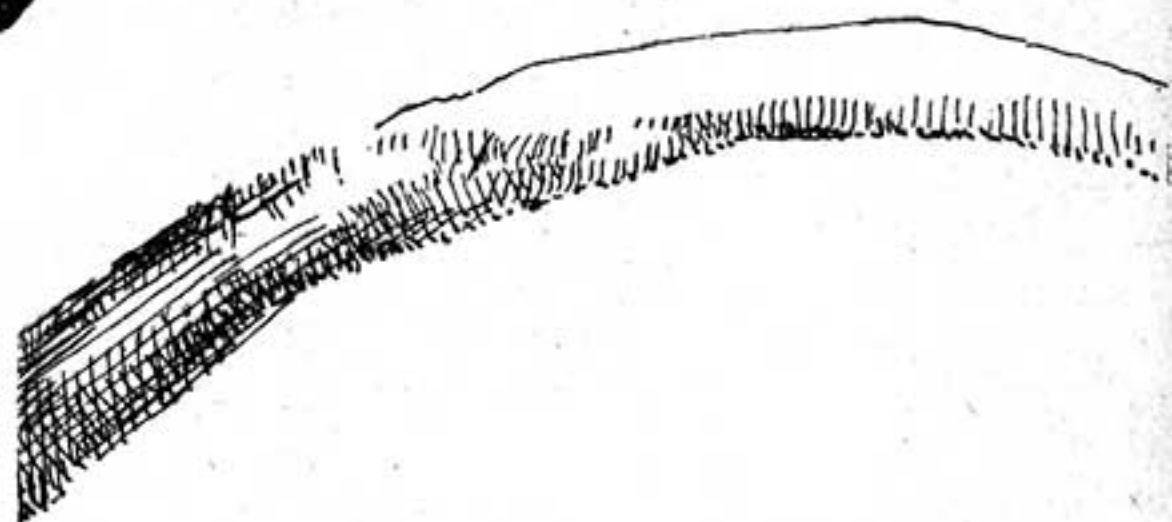
ただ、男もののカーキ色のシャツの胸が、はち切れそうなまゐるみを見せ、それがゆっくり上下しているのが、ちやうとスローモーション映画を見ているようだった。膝を両手に抱くようにしているために、黒いスラックスの腰が、不自然なほど誇張された格好になっ



裏切り

■鞭をふるう裏切り者を襲う

死と孤独の影！



ていた。

女が身につけているものは、シャツとい
よごれたズックの靴といい、どれも女として
の魅力をそぐようなものばかりなのに、その
女は彼の気を重くさせるほど美しかった。

その美しさは形の美しさではなくて、その
人間の内奥からにじみ出る精神の美しさ、強
固な意志によって抑制された躍動する生の美
しさだった。彼女の発散する体臭さえ彼は嗅
ぐことができた。

すると、と彼は心の中でつぶやいた。これ
が俺の生死の鍵を握っている女なのだ。

彼の心は、女の重みの下にきしんでいるカ
ンバスベッドのようにきしんだ。知らない女
なのが、せめてもの救いだった。

「どうだ、もう決心はついただろう」

将校が、面会はこれで終りということと言
葉におわせて言った。

彼はのぞき窓から引きはなすように眼を離
して、将校の方をふり返った。しばらく、将
校の蔑んだような青い眼を見つめていたが、
「やりましょう」

とつぶやくように言った。

「これからすぐやってもらおう。時間は朝の
四時までだ」

彼は、将校のはいているピカピカに磨きあ
げられた長靴のとがったつま先に眼を落とし
て、それが自分の裸のひ腹に食い込んだとき
の事を思い出して、そこに鈍痛がよみがえっ
て来るのを感じた。

鈍痛はしつこい疥癬のようにそこにへばりついて、そこから出る毒が全身をしびれさせた。

「何だ、自分が拷問されるようなしおれ方じゃないか。元気出せ」

将校は意地の悪い言い方をした。勝者が敗者を慰めるとき、あの優越感を隠そうともしなかった。

「ゴメス、女を調べ室に出してくれ」

看守にそう命じると、将校は男の手錠についた鎖を取って、出口の方に歩きだした。男は手錠を引かれて、それに従った。将校のたてる長靴の響きと、男が素足にはいたズック靴のしのびやかな音とが、両側に独房の長い列をひかえた廊下に奇妙なこだまを呼んだ。二人の頭上には、青白い螢光灯の列が冷たい光を投げかけていた。

「知っている女だったか」と将校がだし抜けに尋ねた。なにげない言い方だったが、青い眼は、鋭く傍の男の表情の動きを盗み見ていた。

「いや」

男は何か、別の事に心を奪われているようすで短かく答えた。

将校がしゃべり始めた。

「あの女はトレーダの地下組織の指導者パプ

ロ・グリスの情婦だ。名前はマグダ。むろん本人も組織の有力者だ。いや、だったと言うべきだろう。密告する者があって、アジトを襲って逮捕した」

密告という単語をその将校は微妙な、それに関心のある者にしかそれと判らぬほどのアセントをつけて発音した。男はそれを脳髓に錐をもみこまれるように感じとった。

「仲間四名も同時に逮捕したが、親玉のパプロだけは逃げた。その隠れ家を知りたい。もちろん、できれば他の仲間の名前も」

長い長い廊下だ。男は、両側の独房から自分に向けられているかつての同志、裏切りによって捕らえられた同志の視線に追われるように足早やに歩いた。実際は、そんな視線など、どこにもなかったのだが。

「これは新しい試みなのだ」

と将校は言葉をついだ。

「組織を離れた者に、国家への認識のあかしを身をもって立てる機会を与えるために、元の同志の尋問をやらせる。もし、尋問——これはどうしても拷問にならざるを得ないが——に失敗して、何も聞き出せなかった場合には、国家に対する誠意不十分と見なして——銃殺」

将校はしゃべりながらも、その青い眼は傍

の男の反応を絶えず観察しつつつけていた。銃殺という言葉で、男の蒼ざめた頬が痙攣するのを見て、将校は内心ひそかに満足を得たらしかった。

「しかし、ファン。お前は幸運だ。相手が女だからな。主義だ組織だと言ったところで、たかが女だ。急所をひねりあげれば必ず吐く。それが吐かせられないようなら——」

将校は声をと切らせた。後をつづける気はないらしかった。薄い唇の端をぐいと下げ、鼻を鳴らした。

ファンは、ズック靴のゴム底がたてるひそやかな音に、耳をすましながら歩いた。獲物をなぶるような将校の言葉はさして気にならなかったが、さっき見たあの女のこと、振り払っても振り払っても彼の意識に重くのしかかってくるのだった。

そして、それが立っていることもできない程の無力感を感じさせるのだった。それは、組織の中にあつて働いていた時にも、しばしば襲われたことのある感覚だった。

しかしそのときには同志というものがあつた。無力感を支えはげましてくるものがあった。その支えをみずから破棄してしまった今は、この無力感を自分で支えてゆかなければならないのだ。

「いま何時です」

ファンはふと立ちどまってきいた。

将校はズボンのポケットから、金がわの懐中時計を引っ張り出すと、天井の明かりにすかして見た。

「十時半。時間はたっぷりある」

四時まであと五時間半。正味五時間。

一人の人間を、しかも主義と組織と、その上におそらく愛のよろいをまとった人間を、たった五時間で屈服させることができるか。あの自由な生命を、生きたまま死の手にとらえることができるか。

ファンの全身の毛孔という毛孔から、あぶら汗が吹き出してきた。

二

ファンはその部屋が嫌いだった。それは、自分がこの部屋で拷問に屈服した思い出のためばかりではなかった。それよりむしろ、この部屋が拷問部屋にしては明かる過ぎ、清潔過ぎることがファンを不安な気持ちにさせるのだった。

それは、真昼間に大通りを素裸で歩かされているような、身の置き所のない、落ち着かない気持ちだった。その気持は、前を両手で隠したくらいで消え去るものではない。

ファンはパイプ製の椅子に浅く腰をかけ、与えられた煙草をしきりにふかした。手錠はすでに取り去られていた。テーブルをへだてた椅子に席を占めた将校は、ファンを警戒するでもなく、乗馬ズボンの前ポケットから懐中時計を引っ張り出しては、しきりに龍頭をいじっていた。

部屋の中には二人の外に誰も居なかった。人間ばかりでなく、道具類もテーブルと三脚の椅子をのぞけば何ひとつなかった。ただ、白一色の室内を明かる過ぎる程の蛍光灯が、残るくまなく照らし出していた。それは手術台を取り去った手術室のような感じだった。

ファンが尋問されるためにはじめてここに連れてこられたとき、この部屋のしきいに立って、何とも名状しがたい恐怖におそわれたことを覚えていた。そしてその後でおこなわれたことは、麻酔薬を用いない手術といつていいものだった。

左手の扉が開いて、白衣を着た背の高い男が、黒くふくらんだ革かばんをさげて入って来た。かばんの中から聴診器の端が二本たれていた。

「やあ」と、濃い口ひげの底から将校に挨拶して、かばんをテーブルの上に置いた。ひげが濃いせいか、顔が蒼白く見える。緑色の眼

が、立とうか立つまいかとまどっているファンの方を、ちらと見た。

「立ち合うのか」と、将校がいった。

「うむ。個人的にだが。許可は取ってある」

「物好きだな。博士にでもなろうというのか？」

「まあそんなところだ」

「だが、助かる。退屈な仕事だからな」

ファンには、二人の会話は別世界のもののように聞こえた。怒りが冷汗となって腋の下を流れた。

「遅いな」

独り言のようにつぶやいて、将校は再び懐中時計を取り出した。

「いや、もう来る。さっき上でちょっと女の

内診をやらせてもらったのだ」

と医者が言った。

「ばかに熱心だな」

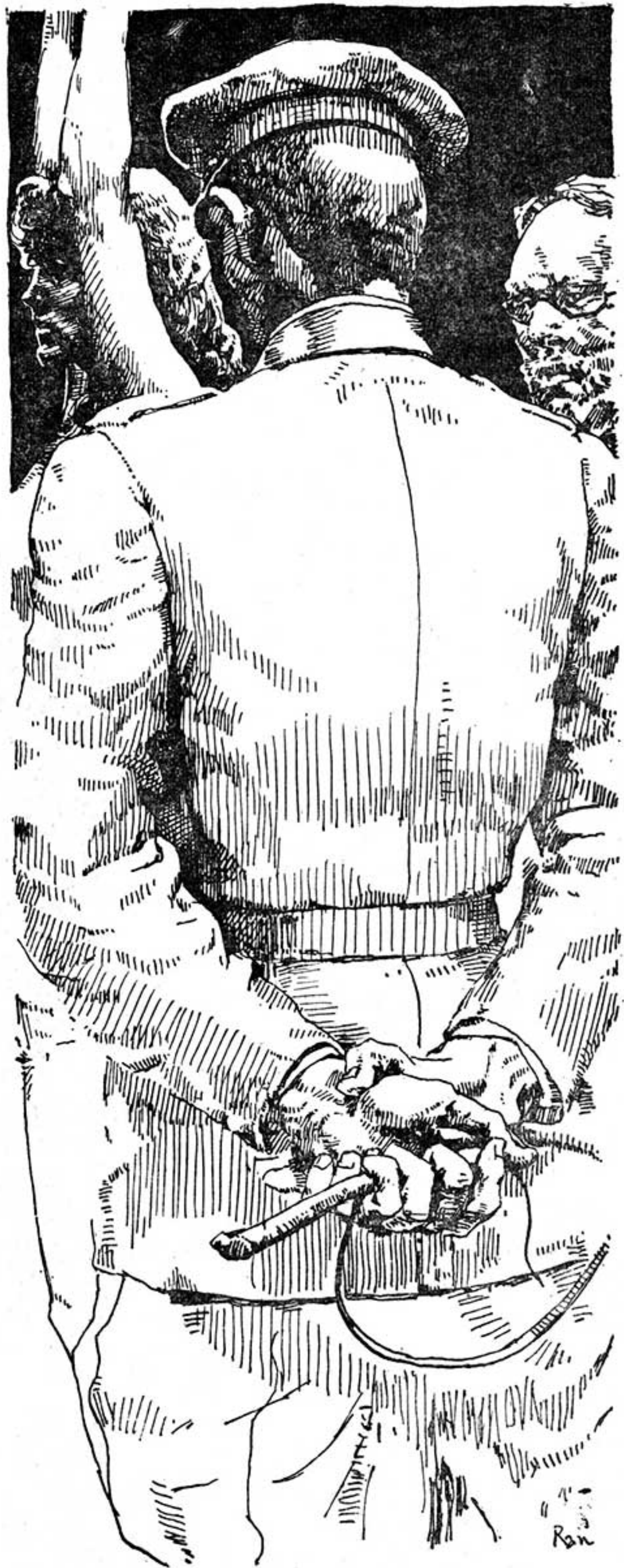
「ふふ、いい女だった」

医者は口ひげを指先で整えながら、さして興味もなさそうに言った。

「なんだ、きみの研究というのは、そんなことか」

と将校は笑った。

再び戸が開いて、看守が女を連れて入って来た。女を将校の前に立たすと、看守は壁際



に退いた。

女は、将校、医者と、順番にゆっくりと視線を移し、最後にファンをじっと見つめた。

独房で見た時同様に、デスマスクのようなまったく動きのない表情だった。ファンは眼をそらした。

「これが最後の機会だ。パブロ・グリスの隠れ家はどこだ」

ほとんど尋問とはいえない形式的な質問の仕方だった。

女は固く結んだ唇をわずかにゆがめて、首

を横に振った。それは知らないという意味にもとれたし、言いたくないという意味にもとれた。

不意に将校の体が動いて、右手が女の頬に痛烈な音をたてた。女は小さな悲鳴をあげて床の上に横ざまに倒れた。分厚い腰が床を打つ鈍い音がした。手錠をかけられた不自由な手について起き上がろうとする女のひ腹に、将校の長靴の先が鋭く食い込んだ。女の体が奇妙な音をたて、芋虫のように床の上に伸縮した。

「吊るせ」

看守にそう命じてから、将校はファンをふり返った。

「ちよっと手伝ってやった」

「ウォーミング・アップか」

と医者がひやかした。

「近ごろはジムに行くひまさえないんだ」

将校は煙草に火をつけながら言った。

ファンは、ほとんど苦痛に近い恐怖に襲われていた。

これが彼らのやり方なのだ。拷問などは、

スポーツですらない。彼らにとって、囚人は一個のものにしか過ぎない。

彼らのこの考えは、拷問される囚人たちをも墮落させる。そして、この墮落の誘惑に打ち勝った者だけが真の生命を獲得するのだ。いま、彼らは、それにさえ飽きて、墮落した囚人を使いその仲間にも同じ道を選ばせようとしている。

看守が入口近くの壁に取りつけてあるハンドルをまわすと、乾いた音とともに天井から鉤のついた鎖が降りてきた。将校が女の手錠についた鎖をその鉤に引っ掛けた。看守がハンドルを反対にまわした。

手錠を引掛けた鎖が、徐々に天井に巻き上げられ、それと一緒に女の手が、次ぎに体が、まるで皮をはぐように、床から引き起こされていった。

女は無抵抗だった。それは従順というのではなく、退屈な遊戯にいやいやながら加わっているような無関心な態度だった。そんな女の態度が、妙にファンをイライラさせた。女の手が頭より高くなり、腕の極限の高さより更に引きあげられると、どこかの骨がポキリと鳴った。

看守は手を止めて将校の方を見た。将校は女の張り切ったズボンの尻に眼をやったまま

左手のひとさし指を上の方に動がした。鎖がまたきしって、女はいっそう引き伸ばされた形になった。

ズック靴の低いかがとが床を離れてつま先立ちになり、女の体が、重々しく左右にゆれた。女は眼を閉じていた。

女の太腿やふくらはぎの筋肉が、びったりしたスラックスの下で、体の均衡を保つためにせわしなく伸縮を繰り返し、つま先が小刻みに床をふみかえているのを見て、ファンはほっと緊張のゆるむのを覚えた。それは掌中に雛鳥のうごめきとぬくもりを味わうのに似ていた。

「裸にしてはいけませんか」

とファンは眼を光らせて言った。

将校は薄く笑って、

「その意気だ」と言った。

医者 of 緑色の眼が、ファンが急に元気になったのを興味深げに見ていた。その視線を無視しようとすればする程、背すじのあたりがちりちりするのを、ファンはいらだたしく意識しないわけにはいかなかった。

看守は鎖で高々と天井に伸びている女の袖口に手をかけると、そこから一気にわきの下にかけてシャツを引き裂いた。左の方がすむと、右の方も同じようにして引き裂いた。体

の前後に分れたシャツは、自然に女の体を離れて床に落ちた。女はシャツの下に何も身につけていなかった。

看守の手さばきがあまり見事だったので、見る者の眼には、あらわになった女の上半身がまるで奇蹟のように映じた。

「下もか」と、将校がファンを振り返った。その眼にはファンの動揺を楽しんでいるような色が動いていた。ファンはそれに反撥するように、強くうなずいた。

看守は、将校の命令を待たずに、女のスラックスのホックをはずし、ジッパーをおろした。

腰の張りのために自然には落ちないのを、両手でめくり取るように降ろしていった。足首の先からそれを脱がすときは、ちょうど馬に蹄鉄を打つときのように、女の足を片方ずつ持ちあげなければならなかった。女の履いていた靴も、そのとき一しよに脱がされた。

女は靴下をはいていなかった。看守に抱え上げられていた足を再び降ろされたとき白い素足が、じかにタイルの床を踏んだ。

女が身につけているものは、黒いパンティだけになった。薄いレース模様の下から、青白いほどの肌がすけて見えていた。

ファンはそれを見てなぜかひるんだ。

「これも取るのか」

将校は、パンティのゴムに右手のひとさし指の先をひっかけて、それを引張ったりゆるめたりしながら、ファンに問いかけた。

「いや、それは……」

取らなくてもいい、と言うつもりなのが声にならなかった。引き伸ばされたレースのかげに消えてゆく、透きとおるような肌から、あわてて眼をそらした。

「ふふん、欲がないな」

将校はこう言ってパンティのゴムを思い切りのばして、その内側に好色な視線をたっぷり走らせてからそれを離した。

ゴムは女の肌にパチッと、かすかな音をた

ててはじけた。

女は素肌を四人の男の視線の集中に曝したまま、身じろぎもせず、四千年の雨風に耐えて、生き残った砂漠のスフィックスのように、そこにいた。

「みごとなものだ」

不意に医者が無意識の底から浮かび上がったような声で低くつぶやいた。あの、見るものを石にせずにはおかぬ緑の眼が、その魔力を解いて女の裸像をいつくしんでいた。

「うむ、いい体をしている」

と将校があいずちをうった。医者は自分の言葉が将校の好色な心に違ったふうに受け取られたのを知って、ちらと眼に軽蔑の色を浮

かべ、唇をゆがめたが、何も言わなかった。

ファンは女を裸にしたことの失敗をさとり始めていた。彼は、女を裸にすれば自分が取りもどしかけていた優越感を、さらに強めることができると思ったのだった。

しかし、その優越感は彼女の生命力に満ちあふれた肉体には通用しなかった。いや、裸にしたために、今まで衣服によって隠され、せき止められていた彼女の存在の強みが、あらわに彼の心を圧倒するのだった。これは、これまで数多くの女に接した経験のあるファンにとっては、理解しがたいことだった。

将校が、壁にはめ込みになっている戸棚を開けた。

「どれでも好きなものを選べ」

中にはいろんな種類の鞭が、整然とゆきとどいた手入れを見せて掛けてあった。

初めてのことで、ファンにはどの鞭がどんな効果を人間の体に与えるのか見当がつかなかった。ただ、自分が拷問されたとき、苦痛を頼りに選ぶしか方法はなかった。あのとき、自分を裏切りに導いた鞭が、今度は自分の命を救ってくれるのだ。

あの皮膚が赤むけにむけるような痛みを与えたのはどの鞭だったか。細い先端が肌にからみついて、そこだけがまるで焼けただれる





ように、はらわたにしみ通るほどの疼痛を与えたのはどんな鞭だったのか。よみがえってくるのは苦痛だけだった。

ファンは革ひもを編んだやや長めの鞭を手にとって見た。握りの部分をのぞけば、とかげの尾のようにしなやかで、編み目が鱗のような光沢を持っている鞭だった。

ファンは、ずしりと意外に重いその鞭を手にして、吊るされた女の背後に立った。将校は坐ったまま椅子を壁ぎわまでずらした。

「気をつけろ。その鞭は初心者には扱いにくい代物なんだ。こちらにまで、とぼっちりをかけないようにしろ」

医者はゆったり椅子にくつろいで、これからはじまることを、じっくり観察するつもりだった。何のためか、左手にストップウォッチを握り、親指を龍頭にあてがい、緑色

の視線がファンの動作を追っていた。

やがて、ファンが決心をきめて鞭をふりかぶったとき親指がカチリと龍頭を押した。細い針がせわしく、きちょうめんに、十分の一秒刻みの目盛りの上を息せききって走りはじめた。

三

ファンには目の前にゆるやかな脂肪の起伏を見せている女の白い背肌が、巨大な白い壁のように見えた。その壁の彼方には彼の生が横たわっているはずだったが、それは確信というにはあまりにも弱々しい希望だった。

彼に鞭を振り降ろさせたのは、生きようとする欲求からというよりは、むしろ恐怖からだった。

鞭の先端がグロテスクな曲線を描いて女の

体からみついたとき、彼女の体は一瞬電撃に打たれたかのように硬直し、つま先立った足指を軸にして半回転した。

伸び切った脇腹から、上向きに反った乳房の下に巻きついた鞭がゆるむにつれて、その下から、赤く充血した部分が鮮かに現われてきた。

ファンは女と向きあっていた。

女は悲鳴をあげたろうか。ファンにはわからなかった。鞭が皮膚を打つ音の間に、確かに押し殺したうめきを聞いたような気がしたが、それは、あるいは自分の発した呻き声かも知れなかった。

鞭打つという作業は、二人の間に被害者と加害者という関係以上の、強い共感のようなものを作りあげてしまうのだ。

ファンは切り取られた自分の手を見るような眼で、あらためて女の顔を見た。

女はまつ毛を伏せ、唇を固く引きしめていた。歯をくいしばっているために、頬骨が高く盛り上がっていた。臍のくぼみを中心にした部分が、あらあらしい起伏をくり返して苦痛を耐えていた。

ファンは、その腹をめがけて第二撃を振り降ろした。女の頭がガクンとのけぞり、腹部の筋肉が急激な収縮を見せて、瘤のようにふ

くれ上がった。半廻転して、女の体は静止した。

女の体から発散する甘酸っぱい汗のにおいが、ひろがったファンの鼻孔をくすぐった。

ファンの瞳孔が針の孔ほどに収縮して、ひくひくふるえていた。

「おい、そんなことじゃ、音をあげさせるのに一年もかかるぞ」

と将校が長靴の足を組みかえながら、さして気にするふうでもなく言った。

「もつとも、俺の命には関係のないことだが――」

医者の方はストップウォッチの龍頭をギリギリ巻きながら、血管の浮き出したファンのこめかみのあたりを見つめている。

ファンは汗にねばる掌をズボンにこすりつけて、鞭を取り直した。なぜか気おくれのする自分を鞭打つような心地だった。鞭が女の体にからみついたときの、あのねばりつくような感覚、自分の体が蛇に巻きつかれてもしたような、嘔吐の出そうな手ごたえがたまらないのだ。

まるで死体を引きずっているような感じだった。それは、女が無感覚にファンの責め苦に耐えているためばかりではなかった。

長い革鞭が、いやに重く感じられた。ファ

ンを駆り立てているのは眼の前に立ちほだかっている死の恐怖ではなかった。それは無為でいることの恐怖、鞭を通して知った相手の実在感を絶たれることに對する恐怖だった。

ファンは革鞭を棄てて別のを取った。ホイップアンテナのような、細い鋼鉄製の鞭だった。ちよつと振ってみても、空気が引き裂かれる鋭い音がするやつだった。

彼はそれを小さく振りかぶっては、まるでじゅうたんの埃でもはたくように、続けさまに女の腹を打った。腹は、短かく鋭い音をたて、女は白いのどを見せてのけぞったまま、打たれるたびに本能的に鞭を避ける格好に体全体をよじった。腹は皮膚が破れて、赤く血に染まった。

この連打は相手に息つくひまを与えなかったのが効果があったのか、女はヒッヒッとかすれた音をのどからたて始めた。

「腹が好きとは妙な男だな。何かのコンプレックスじゃないか」

と将校が医者をかえり見て言った。「きみが尻を好むのと変りはないさ」

と医者が答えた。

ファンは、女の腹が激しくあえぐたびに、血が傷口から樹液のようににじみ出るのを見つめていた。再び吐き気がこみあげてきて、

彼の口の中をすっぱくした。吐くな、と思ういとまもなく、彼は床の上に激しく吐いた。吐きながら、しきりに何かに向かってのしりつづけた。

「だらしがないな」

と将校の言う声が耳に聞こえた。医者がしきりに何かをメモしているのが眼の片隅に入った。だれも助けに立とうとしないのが、ファンに切ない満足感を与えた。

彼は再び鞭を握り直して、今度はまだ傷ついていた女の白い乳房を狙った。そして、眼をつぶって鞭を振り降ろした。細い鞭が乳房の柔かい肉に当たり、薄い皮膚を切り裂く手応えが、眼をつぶったファンに生命の手ざわりのような安らぎを与えた。

鞭がしなやかなので、その手応えは直接手で相手の生命に触れるような重みがあった。手を止めているときの、あの見すてられたような孤独感が消えて、快よいつくしみの中にくるまれたような気持ちになるのだ。

ファンは、自分がみずからの死を忘れて、倒錯した快楽の中にのめり込んでゆきそうになるのを意識して愕然とした。

この眼の前に吊るされている肉体は、自分の生命をはばむ壁であると同時に、真の生への手がかりを与えてくれる何かでもあるの



だ。この肉体を殺せば、自分は真の生を永久に見失うことになるのではないか。

この錯雑した生の裏切りに気付いて、ファンは立ちすくむ。眼はうつろにひろがり、真赤な血が女の白い体の前面をほとんど覆わんばかりにひろがり、なお女があえぐたびに新しい血が、乳房からにじみ出るのを見つめていた。

このとき、不意に女が顔をあげた。深い霧の奥から太陽が、徐々にその光を現わしてゆくように、女の黒い瞳の中心に徐々に光が凝

縮してゆき、それがやがて、銀色の鋭い針先のように、ファンの混濁した瞳に突きささってきた。

ファンは唇の端をゆがめて冷笑し去ろうとしたが、その唇はゆがんだ形のまま凍りついた。

先ほどの苛責にも、ほとんど呻き声さえたてずに耐えてきたこの女は、たったひとつ自分に残された武器が眼であることを知っているようだった。それはすがりつくようなファンの視線を拒否し、その孤独に食い入り

彼の全存在をむしばむのだ。

救いを求めてふり返ったところに、医者の方の緑の眼があった。

「クソッ」

ファンは食いしばった歯の間から絞り出すような唸り声をたてて、再び最初の革鞭を手にとった。二、三步後退して適当な間合いを取ると、渾身の憎悪をこめて伸び切った女の太股にたたきつけた。

長い鞭の先は、女の股の付け根に二重にからみついた。それを力いっぱい手元に手繰り

寄せると、女の体は、血をしたたらせながら二、三度回転した。その運動が止まるのも待たず、ファンは女の細腰めがけて鞭の先を繰り出した。

グッ、窒息するような声が女ののどからもれた。将校が何か言ったようだったが、ファンには聞き取れなかった。

女のつま先が力を失って天井の鎖にもろにぶら下り、分銅のように左右に揺れながら廻転し、やがて、肩で息をついているファンに正面を見せて静止した。

彼女の全身を覆う鮮血は生命の炎のように燃え上がっていた。

ファンは、自分の生命に達する道が完全にとざされたのを、気の遠くなるような頭で実感した。さっきひらめいた。ある生命への手掛りは、けっきょく、追いつめられた者の幻影でしかなかったのか。裏切り者は自分自身の生にも裏切られ、遂に死に到るより道はないのか。

「あと二時間だ」

将校がばかりもなくあくびをしながら、傍の医者をつり返った。

「どうだ、退屈しないか」

「いや、なかなか興味深い」

と医者は答えた。

「ひとが痛いめにあっているのを興味深く眺められてはたまるまい」

「同情しろというのかね」

「その方が退屈せずにすむ。きみはスポーツのファンかね」

「いや、あんなものは退屈だ」

「それだよ。どちらかのチームの肩を持たなくちゃ、スポーツなんて退屈きわまる」

「僕は同情しなくても、退屈はしない方なんだがね」

医者はついと立って女の傍に寄ると、頸動脈に指先を当て、ストップウォッチの針先を眼で追った。女は医者の方を見もしないで、なすがままになっている。

「少し早いが不整はない」

女の黒い眼と、医者の緑の眼が一瞬出会ったが、どちらの視線も相手に何かを伝えようとする意志もなく再び離れた。

医者はファンの傍に寄って来た。

「ちょっと脈を見せてくれませんか」

ファンは思はず後ずさって、両手を背後に隠すようにした。

「こわいですか」と、医者の眼が笑った。

将校が、おかしくもなさそうな笑い声をあげた。

四

さらに時間がたっていった。部屋には血の臭いが充満していた。煙草の煙は天井にうごめき、汗の臭気は床を這い、湿り気を帯びた血の匂いは、人間の鼻にまつわりつくらしかった。

女は血と汗の中に死んだように動かなかった。まだ呼吸は通っていても、肉体はすでに死んでいるのかも知れなかった。それがファンにとって生死の問題なのだった。

もし肉体がそのまま死ねば、精神は永遠の生を獲得することになるだろう。肉体の死に直面したある一点で、精神は死の恐怖を呼びさまされるのではないか。そこが拷問者のつけ込むすきであるはずだった。

その極点、生と死とを分つ微妙な境界点を見逃がしたなら、いままで加えた拷問は、すべて拷問者の単なる自慰に過ぎなくなってしまうのだ。ファンの不安と恐怖はそこにあった。

「他に何か方法は許されないのですか」

ファンはべとつく鞭の柄をこわばった指の間からもぎ取りながら、噛みつくように言った。

将校は椅子の端に尻をかけ、足を長く前に

伸ばし、首を胸の上に折って眠っていた。

相変わらず、ストップウォッチを左手に握って、右手の万年筆で何かしきりにメモを取っていた医者が頭をあげた。ちらと将校の方を見たが、それを起こす気もないらしく、

「何が欲しいのです」ときいた。

「圧搾器とか、電極とか……」

言いながら、ファンは自分のいま用いた言葉のグロテスクさにゾツとした。

「それを使えば成功すると思うのですか」

「時間さえあれば……」

ファンは、医者の緑色の眼の微妙な動きに冷汗が背中を流れるのを感じた。嘔吐が胸を突きあげてきた。

「鞭のようなまぬるいことじゃ、こんな力チカチの女に吐かせるなんて、できっこないんだ」

「じゃ、なぜそれをもっと早く言わなかったんです。あなたはこの女を鞭打つことに、何か救いを感じていたんじゃないですか」

「ばかな」ファンはいたたまらなくなって、そこら辺を歩きまわりはじめた。

血が床の上にゴム底の形を印した。それはねばりつくような感じだった。悪感のようなものが突然おそってきて、ファンは歯をガチガチ鳴らした。

「どうしてあんたはそこに居るんだ。なぜおれの脈を見たりするんだ。そんなにおれのことが面白いのか」

女は身じろぎもしなかった。傷ついた樹皮から粘ばっこい樹液をにじみ出して、自らの傷をいやす大木のようにそこにいた。

「ある意味で、あなたはこの女を愛していた。愛せざるをえなかったからだ。愛することによって、裏切りの孤独から救われようとした——」

「うそだ」ファンはどなったが、それは悲鳴に近かった。

「本当の拷問者は、鞭などははじめから使おうとはしないものです。僕の知っているある殺し屋は、獲物をしとめるのに必ずナイフを使う。せめて手ごたえの楽しみがなくちゃ、淋し過ぎる、とその男は言うのです」

ファンは女の肉体の重みが、急に握りしめた指先にずしりとよみがえるのを覚えた。「裏切り者が孤独から救われようとは、虫がよすぎる」

医者は別にファンを非難するでもなく、独り言のように言った。そして再び眼を机の上のメモに移した。

女は血を流しながらそこに居た。将校はますます深い眠りに落ちてゆくらしか

かった。ファンには、女の姿がえたいの知れない怪物のように見えた。

あの鞭の手ごたえが自分に与えてくれたものは、結局虚妄に過ぎなかったのか。裏切り者は、遂に自分の肉体の感覚にさえ裏切られながらそれを信じ、やがて暗黒の罠の中に墜落してゆかなければならないのか。

ファンは女の下腹部を力まかせに蹴り上げた。女はムツと呻いて身じろぎした。

頭を胸に落したままの女の髪の毛を掴んで力いっぱい仰向けにしたファンは、思わず息をのんだ。女の瞳が、じっとそこに見開かれていたからだ。汗でべったり張りついた髪の間から、草むらに光る螢火のように冷たく静かに燃える瞳が、ファンを見つめていた。

「見るな。見ないでくれ」

どこか遠くの方で、ベルのこもったような音がした。将校がむっくりと頭をもたげて、唇のよだれを袖でぬぐった。ズボンのポケットから懐中時計をつまみ出すと、急にベルの音が大きくなった。懐中時計が、時間が来たことを告げているのだった。

「よし、それまで」

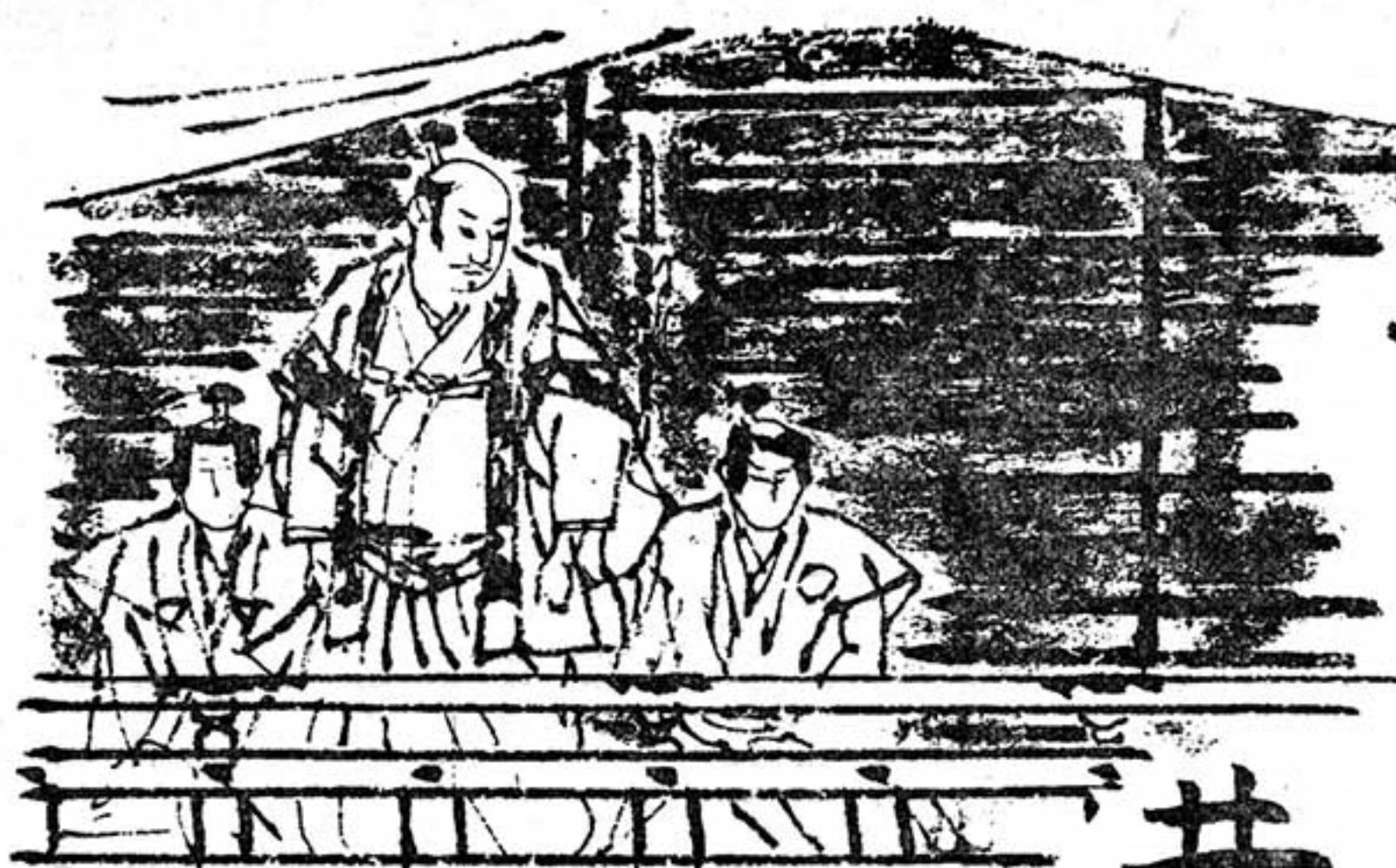
将校は軽く伸びをしながら、まだ眠む気を取れない声で言った。

時代絵物語

本能寺奇変上

井村錠

小日向一夢 絵



① 白い顔

梅雨の小止みを、ひやりとした風がこころよく境内を流れている。

湯に火照った顔を冷氣にさらして、織田信長は、さきほどからじっと本能寺の回廊に立ちつくしたままであった。信長の切れ長な鋭い目は小さく動きながら庭の一隅にそそがれている。

そこには、雨に光る敷石を、一心に掃き清めている若い寺僧と、小柄な寺小姓の姿があった。はや夕闇のほの暗い光のなかにも、敏捷に立ち働く小姓の顔が、浮きでたようにく



つきりと見えて、女に見まがう紅い唇や、黒目がちの双眸が、信長のところをとらえて回廊へ釘づけにしたのだった。

信長の脳裡にはすでに天下の形勢も、西国攻めの秀吉のこと、今日明日にも援軍として進発するであろう明智光秀のことも失せて、いや、信長の後ろに控えている蘭丸、菊丸の二人の美小姓のことさえ忘れていた。

いま信長の心ちゅうには、花にも似た寺小姓を闇に召しいれて、おのが手で蕾を開花させたい欲望が猛りつづいていった。

信長は、敷石にほうきを使っている若い寺僧を手招いて呼びよせた。

② 寺小姓鬼童丸

「これは右大臣さま。気づかぬとは申せ、失礼をつかまりました」

寺僧はあわてて、濡れた敷石の上に平伏した。そこは、信長の意志を伝えるには遠すぎる。回廊は、人の背丈よりも高かった。

「よい、よい、ちと内密の話だ。これへきてくれぬか」

寺僧は、おそろおそろ信長の前にきて、あらためて手をついた。寺僧としては意外なほど、日焼けしてりりしい顔だちである。

「あれなる美童、名はなんと申す」

だしぬけながら、信長の声はやわらかい。

「はい、……あの者は拙僧の縁者にて……鬼童丸と申しまする」

よどみながら……僧は答えた。

「鬼童丸とな、ふふ」

容姿に似つかぬ名に、信長はふと微笑をもらした。

「ご坊、そちに頼みじゃが……」

信長はつと、寺僧の耳に口を寄せた。

「さて……」僧はためらいの色をみせたが、

「しかと頼んだぞ」信長に念を押されて、

「はっ、はい、なんとか」

回廊に頭をつけざるを得なかった。





③ 蘭丸、菊丸

寺僧沢念に信長の要請を聞いた鬼童丸は、一瞬、長いまつ毛に悲壮な決意に似た影を走らせたが、拒むことはできなかった。

湯に入って身を清め、匂うような肌を白無垢につつんだ鬼童丸は、息をのむばかりの美しさである。

鬼童丸は長い回廊を渡り、本堂にある信長の居室に通ずる部屋の襖に手をかけた。

静かに襖を開ける。と、何の置き物もない十畳の居間に、端坐していた二人の美小姓が鋭い視線を鬼童丸の方にふり向けた。

信長の寵愛する蘭丸と菊丸である。二人は明きらかに嫉妬と敵意に充ちた眼ざしを、鬼童丸の一挙一動にそそいでいた。

鬼童丸は二人の突き刺すような視線を感じて、会釈のまま間をすり抜けようとした。

「またれよっ」

声をかけたのは菊丸だった。

「殿のご寝所に召される者は、一応衣服をおあらため申す」

はっ、と胸に手をかばって身を堅くする鬼童丸をおしつっむように、蘭丸と菊丸は鬼童丸の前後に立ちはだかる。

一瞬、鬼童丸の顔は蒼白に変わった。

④ 露 見

「くっ、曲者っ！」

菊丸は信長の寝所であることも忘れて、思わず驚愕の声をあげた。

鬼童丸の襟をおしはだけ、胸を締めつけた晒布にいぶかる菊丸の手に、晒布の下の堅いものが触れたからである。すぐさま、それは懐刀であることが知れた。

「蘭丸っ、ぬかるなっ」

叫ぶまでもなく、蘭丸は背後から鬼童丸を羽搔いじめにどっとそこへ引き倒した。

必死にあらがう鬼童丸の両腕は、蘭丸の強力に背へ高々と締めあげられていった。

「菊丸っ、縄打てっ！」蘭丸は叱咤した。

こころ得たり、と菊丸は刀の下げ緒をとって、鬼童丸の手首、腕から胸へ、力まかせに縛りあげた。

「ややっ、おのれは女」

横倒しにした鬼童丸の胸に目をやって、二人は同時に声をあげた。

はだけた襟、争ううちにゆるみをみせた晒布の間に、白桃のような半球がのぞいているのを二人は見た。

「くっ」

と、手首も千切れるような苦痛の中に、鬼童丸の顔をさっと羞恥が刷いた。



⑤ 寺僧の逃亡

「何事だ」

騒ぎをききつけて、信長は三人の前に立っていた。

「殿、こやつは殿を害したてまつらんとした曲者にごさりますぞ」

「なにっ、おれを殺そうとか」

聞いて、信長ははっと気づいた。

「待て、その者には縁者と申した坊主がおつたはず、探せっ、捕らえろっ」

信長の叱咤で、夜更けの本能寺に時ならぬ騒動がおこった。が、信長の従臣ら必死の探索にもかかわらず、忤念の姿はすでに消えていた。

「おのれ憎つくきやつ、この上は女を責めて坊主のゆくえを吐かせよ」

鬼童丸、いや、女はあらためて嚴重な繩をかけられた身を、信長の面前、庭の敷石の上に引き据えられた。

「女、この信長を仇とするしれ者、まことの名をなんと申す」

女はすでに観念していた。口辺に、おのれの失態を自嘲するような微笑さえあった。

「先年、汝のために討たれし高塚丹波の娘鬼姫、早々に首打ていっ」女は言い放った。





⑥ 高塚鬼姫

信長の額に青い稲妻が走った。が、それをおし殺すように信長はひくく呻いた。

「ふふふ、丹波には隠し女があると聞いてはいたが、なる程、おのれがその娘か。残党はおのれ一人ではあるまい。沢念とか申した坊主らの居所を、素直に吐かねば痛い目におうぞ」

「知らぬつ、高塚の者はわらわ一人じゃ。信長、汝はおのれの犯した罪に、おのれ自身でおびえているのかっ」

鬼姫は、恐れげもなく吐きつけた。

「おのれ、小ざかしいやつ、菊丸っ打て」
努気が、信長の満面を蒼白にしていた。

蘭丸が鬼姫の襟に手をかけて引き裂く。その白く肉ついた背へ、菊丸の手にした錫杖が、力の限り降りそそいだ。

「う、う——うっ」

土砂を壁に打ちつけるような音が続き、皮肉に紅い血がふき出て、背を焼かれるような苦痛に、鬼姫は耐えきれずに食いしばった歯の間から呻きをもらす。だが、あくまで口は割らなかった。そのとき、

「待て、この女は一筋縄で口は割らぬぞ」
蘭丸が、菊丸の手をおしとどめた。

⑦ 欄間吊り

いぶかる信長に、蘭丸は願いでた。

「殿、この者の責め問いは、このようなことで口を割りませぬ。女には女の問い方があるもの、この蘭丸におまかせあれ」

「よし、蘭丸そちにまかす」

信長は、好奇の目でこの寵童を見た。

蘭丸の目は刺すように、くずおれている鬼

姫のむきだしになった太もものあたりにそそがれている。信長麾下の智将、明智光秀を譏したのもその刺すような目であった。

家臣に手伝わせて鬼姫を立たせると、新たな二本の縄を首縄の前後に結び、前に結んだ縄を足の間をくぐらせ、後ろ手の縄目を縫って引き出す。同様に後ろの縄は胸の縄目を編んで、二本の縄は欄間におし、下からぐいと縄をたぐった。

「ああっ」

からだを縦に引き裂かれるような痛みに、さすがの鬼姫も思わず悲鳴をあげた。二尺、三尺、鬼姫が宙吊りになったところで縄尻を固定した蘭丸は、

「申せ！残党の居所を吐くのだ」

鬼姫の両足を掴んで、ぐいぐい下へゆすりおろした。唇にかすかなけいれんがおこり、やがて、鬼姫は動かなくなった。



⑧ 信長の最後

闇の底から、誰かが呼ぶ声に鬼姫ははっと魂をとり戻した。目の前に、のぞきこんでいる大きな瞳がほっと安堵の色を浮かべる。

「おお、気がつかれたか」

すでに、縛しめは解かれて、ここは本能寺の築山であるらしい。

「あつ、あなたは沢念どの」

「いかにも、しかしまことは先年信長のために討ち滅ぼされし甲賀部落の残党、龍鬼と申す。あなた同様、信長に怨みを抱いていた」

「いた……と申されるのは？」

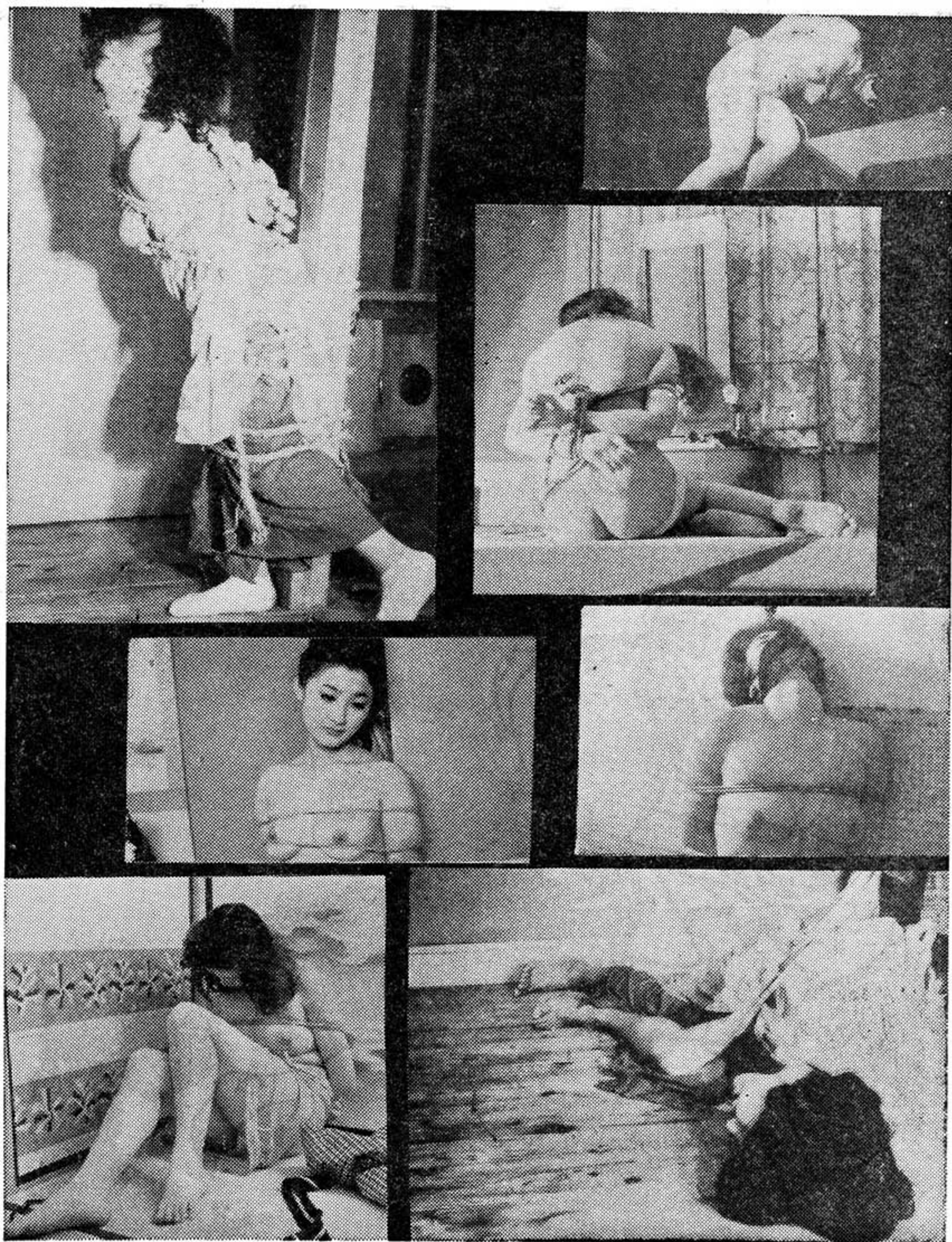
「あなたにはお気の毒だが、信長はたつたいを龍鬼が討ち果たし申した」

がくり、と鬼姫の全身から張りつめていた力が抜け去り、鬼姫は再び龍鬼の腕に身を投げかけた。

「仲間の知らせによれば、間もなく明智の軍勢が本能寺を攻めるとか、さ、背を貸し申す」
鬼姫を背負った黒形は、たちまち闇に消えていった。

天正十年六月二日。積年の怨みを本能寺に晴らした光秀も、遂に信長の首級を見ることが出来なかった。





●SMフォト特選集



「臭い金」の

マゾ描写

「オール読物」九月号は、ユーモア小説特集。そのなかで巻頭掲載の、飯沢匡「臭い金」がおもしろい。

ある地方都市の建設会社の社長が、五百万円という現金入りのカバンを持ったまま、真夜な近しいエレベーターの中へ閉じこめられてしまう。

これは自動式エレベーターで、折柄の嵐のために、突然停電してしまい、ゆえに、動かなくなってしまったというわけ。

ところが、このエレベーターの中に、もうひとり、閉じこめられている男がいる。

じつは、これが男ではなく、若い女で、このへんから、お話は、「裏窓」的ムードをただよわせてくる。

社長の持っている現金は、市長選挙の応援のためにバラまく金であまり大っぴらにしたくない。し

かもこの金は、至急先方へとどけねばならないという、時間的切迫がある。

そのうちに社長は、さっき飲んだビールのおかげで、尿意をもよおしてくる。

だが、若い女とふたりきりのエレベーターの中で、まさか、おしっこをするわけにはいかない。

なんとか脱出しようと考えているうち、エレベーターの天井に、穴があいていることを思いだす。

「そうか、君が私の体に乗れば天井の穴に届くわけだな。いい考えだ。踏台になることなんか何でもない」

と、提案する。しかし、社長はさっき暗闇の中で、うっかり娘のおしりをなでて悲鳴をあげさせている。

娘は警戒して、社長のからだに触れたがらない。

「三万円やるから、私の体の上に乗ってくれ」

と、哀願する始末。

「早く乗って天井の穴をみわけて

くれ。さあさあ」

社長は、ふうふう、息を切らしながら四つんばいに近い恰好になる。

そんな形をすると膀胱が圧されて、尿意がいつそう、つのるのである。

「ねえ、いつそ肩車というやつをやったらどうだい」

と、社長はまた提案する。

「肩車って、小父さんの首のところに両足で挟むんじゃない？」

と、娘。

「うん、そうだ。危くなったら、手で足を抑えてやるよ」

「いやだよ、その手がいけないんだ。その手を縛ったらいい」

「縛る？」

「そう、ハンケチで」

ということになり、社長の両手首は大型のハンケチで、前に縛られてしまう。

「さあ、手を縛ったら安心なんだから、早く肩車しなさい」

ひどく足の長い娘で、かたんに足は肩に、かかってしまう。



当然、社長は首筋のあたりに、やわらかい女のからだを感じてしまふ。

「よいしょ」と立ちあがったとたんに、娘のあたまが天井にぶつかる。娘のからだは平均を失って、左右に大きくゆれる。

「あっ」とさけんで、娘は社長の両耳をつかむ。

「痛いー」

と身を縮めたとたんに、耐えに耐えていた膀胱がセキを切ってしまう。

エレベーターの中は、ビール半ダースが変化した液体で充満。その排泄物は、だいたい現金までぬらしはじめる。

社長は、その金をぬらすまいと腰をかがめて、ひろいはじめる。

娘は空中に宙ぶらりんになると早合点して、離れていく社長をひきとめるため、きゅうに自分の股に力をこめる。

それは結果として、社長の首をしめることになり、

「うーっ」

と、社長は気絶し、みずから放った液体のなかに倒れてしまう、というお話。

いかにも都会風な、しゃれたセンスと、裏窓的エスプリが巧妙に配合された、この作者らしい、好短編である。

本誌読者のうち、とくにマゾ派に、ご一読をおすすめしたい。

(蘭)

ほどほどにして もらいたいこと

著名な出版社が発行している週刊誌にも、このごろ、ちよくちよく「裏窓」的效果をねらった記事が目につく。

(ほんとうは、このごろ、ではなく、だいぶ以前から、だけど)

さいきんは、その傾向が、かなり、あくどい。「裏窓」顔負けのものがある。「裏窓」で遠慮している部分まで、ロコツに表現しているのだから、すさまじい。

某一流(だろうと思う)週刊誌にのっていた「コールガールへの

リンチ」なんていう記事は、どう読んでもウソにきまっているが、それを、いかにも本当らしく書いているのだから、いかにも根性が見えすいている。

あるコールガールの組織は、いちど入りこんだら容易なことではぬけられない。

逃げだそうとすると、一室に監禁され、おしりをむきだしにされて、焼け火バシを肛門に突っこまれるというのである。

むろん、うごけないように、女は、うしろ手にしばりあげられ、おさえつけられている。

おしりの穴に焼け火バシを突っこむのは、ほかのところに突っこむと、かんじんの商売にさしつかえるからだそうである。

いかにももつともらしく書かれているが、ちよっと考えれば、すぐ頭のなかでデッチあげたデタラメだということがわかる。

そんなところに焼け火バシを突っこんだら、いくらほかのところ



裏窓タウン

があるのは、わかりきったことである。

あそことあそことは、そんなに距離があるわけではないのである。

第一、そんなことを本当に実行したら、生命そのものに危険があるはずである。

たまたまその場に居合わせていて、その残酷さにおどろいた、などと書いているが、事実だったらおどろいたではすまない、人道上の大問題のはずである。

いいかげんな週刊誌なら、読者のほうでも、はじめからデタラメと知りつつ「実話記事」を読む。

しかし、権威ある出版社が発行するものだと、つい、信じてしまう場合もある。

あまりひどい「実話記事」は、どうか、えんりよして頂きたいものです。

(豊)

きれいなオシッコ

さいきん、また新書判ブームが起こって、ふるい作品までもぞくぞく装ていをあらたに出版されて

いるが、そのなかのひとつ、佐藤弘人先生のお書きになられた「はだか随筆」を読んで、非常におもしろかった。

なかに「小便哲学」という項がある。裏窓的興味のある箇所だけ要約してみよう。

——とにかく、世間では小便小便と云って、小便をきたなく、け

責めの部屋 のある娼家

という、マゾ族のなかでも、とくに、コプロ派むきの一節であった。

(洋)

先日のプロヒューモ事件は、はしなくもわたしたちに、イギリスの上流階級の夜の生活ぶりの一端をのぞかせてくれたが、セックスの誘惑の前にもろいのは人間共通の弱点で、これだけはいくらおすましやの英国人だってどうにもならない。むしろ昼間はセントルマを気取っていなければならぬだけ、夜は思いきり羽根をのぼして乱痴気さわぎをしたくなるのが人情というものではないだろうか。

フランスの女流作家マリイ・ショワジイに「パリのどん底」と

とにかく放出した瞬間の尿水、健康体の、特に子供の、は不潔なものではないが、それが二、三分



ランスでもいかに毎夜のように娼婦通いをする貴顕紳士が多いか、ということがよくわかる。

もつとも、それだけではわざわざここに紹介する価値はないが、フランス人の場合、世にときめく貴顕紳士になればなるほど、マゾ的傾向が強いというからおもしろい。

したがってパリの高級な娼家では例外なく「責めの部屋」が作っており、それがなければたとえ調度がどんなにデラックスでもけっして一流にはランクされない。

「責めの部屋」は、普通真四角な窓のない薄暗い部屋で、首かせ、十字架、房鞭（ふさむち）、乗馬用の鞭と棒、といったような責め道具がそなえつけてある。そして紳士たちは、ここで敵娼の女から思いきり責められ、いじめられてエクスタシーにひたるわけだが、地位の高い紳士ほど残酷な責めをよるこぶ傾向があり、現に何度か大臣の椅子にもつき、政界にも勢力のある某上院議員などは一週間に

三度も折檻を受けに、ここを訪ねてくるそうだ。

中には、責めの効果を一そう大きくするため、ずいぶん手のこんだ舞台装置を考案し、演出する客もある。クレールという名の醜い老人だったが、部屋に通ると持参した大型の鞆の中から十九世紀の末頃流行した白絹子のローブと花嫁のベールをとりだして、それを身につけ、相手の女には男の服を着せた。

そして棒で叩かれ、鞭で打たれると身をよじり、苦悶し、女にはとても出来ない表情をして哀訴歎願した。そして、

「ねえ、あんた、お願いだからそんなひどい目にあわせないでってば、よう」

女のおろおろ声でそう繰り返すのだった。

その挙句、断末魔の苦しみをさんざん嘗めつくした花嫁は、花婿に抱かれて初夜の床にはいる段取りとなるが、マゾもここまでくればたいしたものので、わたしたち日

本人にはやはりちよつと真似のできない境地ではないだろうか。

(豹)

中禅寺湖心中 に関連して

七月八日の朝、日光の中禅寺湖で、若い女ふたりの水死体がみつかった。

日光署の調べで、ふたりとも茨城県結城市の二十三歳の工員と確認され、また、ふたりの部屋にあった遺品などから、同性愛の心中とわかった。

うんぬんと翌九日付け朝刊の片隅に報道されていた。

私も日光に生まれ、日光に育ったので、幼少女のころから聞き知っているが、夏でも中禅寺湖にはいったら、たいていの人はすぐ心臓マヒを起こして死んでしまう、ここでの水泳をかく禁じられていたものだ。つまり、それほど水が冷めたいのである。

そしてそれだけに、むかしからこの湖水では、投身自殺や心中が



多かった。このふたりの女性もそれを知ってか知らずか、いずれにしても完全心中といえよう。

女子工員同士、とくに女子工員寮には、同性愛がすくなくない。もちろんそれは、比較的家庭環境などの似ている若い女性同士で、共同生活していることの機会的なものが、大半らしい。

さいきん、私が葛飾区のある会社の女子工員寮を訪れたとき、その寮長の女性からきいたところでは、この寮には十七歳〜二十三歳までの女性一七〇名ほどがいるが、五人のうち一人くらいが同性愛をおこなっているらしい、ということだった。

愛しあっている同士が、いっしょに外出するとか、ひとつしとねに寝るとか、いつも行動を共にするのである。

肉体的行為の点はわからないと、その寮長は言葉を伏せていたが、事実、それら同性愛のほとんどが、女学生のS関係程度の精神的なもので、せいせい抱擁とか、

乳房にふれあうくらいが、関の山らしい。

また、十七、八歳から二十歳くらいまでの若い女子工員には、寮長の女性（二十五と二十八歳の二名）にたいして、姉にたいするよううな、ときに母にたいするよううな、憧憬や思慕をよせてくるものがすくなく、その愛の争奪から、工員同士のあいだに争いごとが起こる場合もある、ということだった。

性科学研究所の福岡武男氏が、ある女子工員寮の工員たちの性行動を、統計的に調べたところでは、五五〇名のうち、同性愛をおこなっていたものが三九名あった、と報告している。

そのうちの十六歳の少女同士は、いつもいっしょにねて、だきあって、たがいに深い呼吸をしあう、接吻をする、そしてけっして結婚しないことを誓いあったのち、相互的なオナニーをおこない同時にオルガズムするよう努力するという。

濃度こそ強いが、いかにも少女らしくオセンチで、ほほえましい感じである。

中禅寺湖心中のふたりの女性が、どの程度の同性愛関係であつたかは知る由もないが、死ぬほど愛しあっていたことは事実であろう。ふたりの冥福を祈りたい。

（葉）

中公新書

「徳川家康」から

家康ブームに乗って、中央公論社からも「徳川家康」という、まじめな、しかも値段も手ごろな新書本がでている。（二百円）

著者の北島正元氏は、東京都立大学人文学部教授、文学博士。

小説ではなく「科学的歴史学の立場から組織者となる条件を家康の中に探る」目的の歴史本で、それゆえに、この一冊のなかには、数編のSM小説の素材がひそんでいて、おもしろい。

まず、有名な「築山殿」事件。

——築山殿は家康より年上であ



ったらしく、素行がわるく嫉妬ぶかい性格だったと伝えられているが、それにくわえて今川氏の一族意識がつよく、夫の家康が今川氏の庇護をうけながら、それにそむいたことに不満をもっていたようである。

——於義丸の生母お万は三河池鯉鮒の住人永見吉英の娘で、築山殿の侍女であった。家康が築山殿に内証で手をつけてはらませたのを築山殿がしり、激怒してお万を裸にしてしぼり、林間にほうりだしてあったのを、本多重次がその泣き声をききつけ、ひそかにつかかえって生ませたのが於義丸であるという。(後略)

記述はかんたんだが、それゆえに、小説としてのイメージはふくらんで、時代サド小説の一編は、たちまち構成できる。

また、家康の氣にいらぬ家臣、大賀弥四郎が、敵方の武田信玄に内通したという罪によって、極刑にされる。

——まず弥四郎の顔を馬の尻の

方にむけて鞍にしぼり、叛逆のためにかねがこしらえておいた旗を

ささせ、首金をはめて、螺、鐘、笛、太鼓ではやしたて、岡崎と浜松の町を引きまわしたうえ、岡崎の町の四辻に生きながら土中にうずめた。そして首に板をはめ、指をきり、足の筋をたち、竹鋸を置いて通行人に首をひかせた。弥四郎は七日たって死んだ、といわれる。(後略)

これだけの記述では、味もソツケもないが、この弥四郎に若い妻をからませ、その妻(もろろん美人)も、夫同様に、いや、女の身なるがゆえに、さまざまな刑罰と屈辱をあたえられるというストーリーをふくらませると、これももしろい一編の歴史サド小説ができるわけである。

妻のほか、娘か、または、メカケのような美女でも加えれば、責められる女は複数となって、物語はさらに興味を増す、という次第である。

S M小説の題材は、どんなところ

ろにもころがっている、というおはなし。(光)

日本カルメンのムチ打ちシーン

井上梅次監督の松竹映画「真赤な恋の物語」は名作「カルメン」を現代の日本に置きかえた映画でヒロインのカルメンには岡田茉莉子がふんずる。

以下、私服刑事の吉田輝雄がドン・ホセ、ダンサーの藤木孝がエスカミリオ、ボスの大木実がガルーシャ、キャバレー支配人の根上淳がダンカイロという役どころ。これに松原浩二を加えた五人の男が彼女を恋し、彼女のために、五人ぜんぶが死んでしまうというたいへんな、男性マゾ派むきの映画。

なかで圧巻は、吉田輝雄の愛が捜査の手段であったことを知った茉莉子カルメンが、地下室の天井から吉田輝雄の両手をしばって、バンザイ型に吊り、はだかにしておいて背中をムチ打つという、そ

裏窓タウン

のものずばりのシーン。

洋画では、よく海賊ものなんか
に、お姫さまが奴隷をムチ打つシ
ーンが登場するけど、日本の映画
で、はだかにした男を、女性がム
チ打つなんて演出は、おそらく、
はじめてではないだろうか。

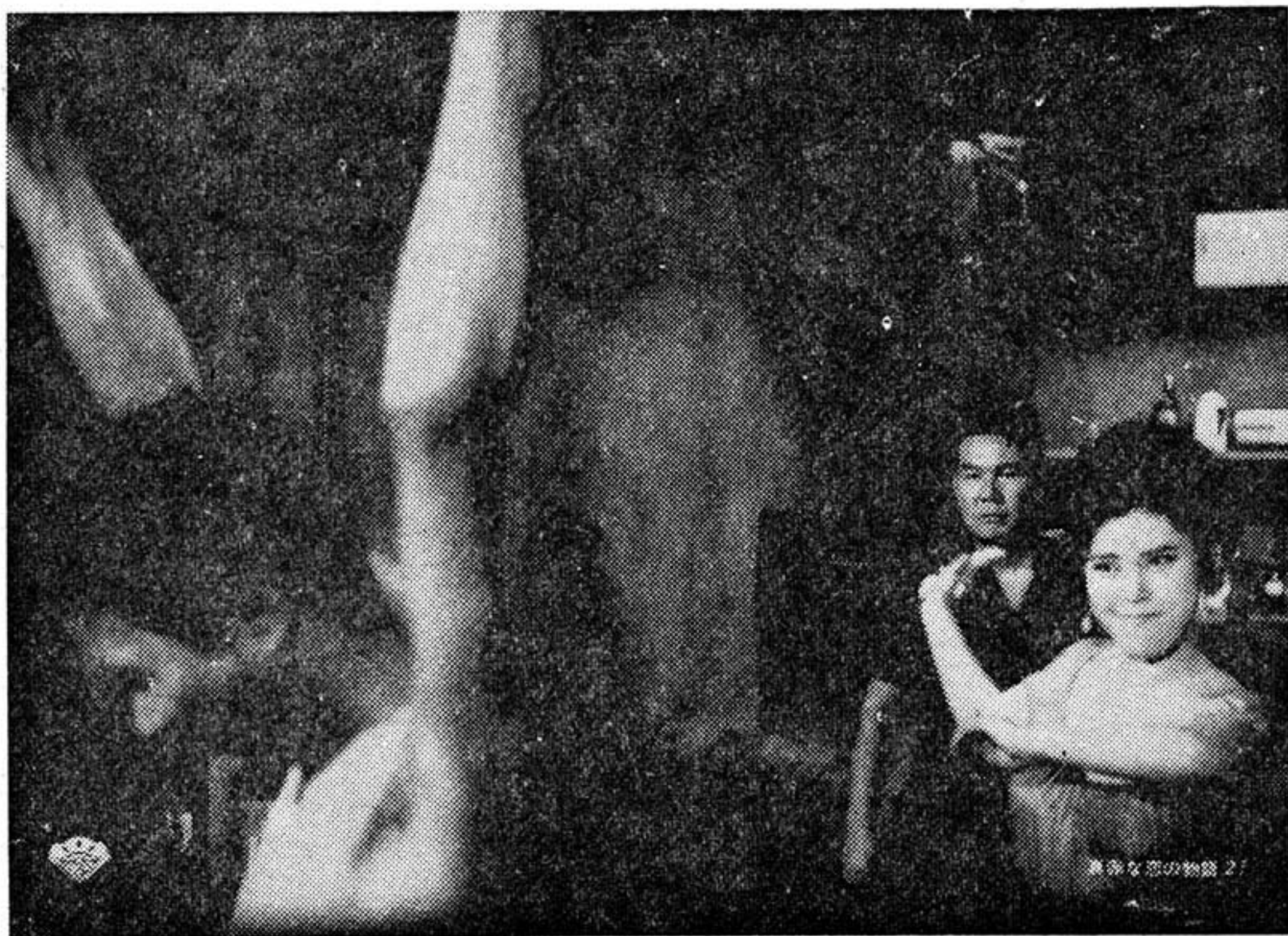
戦後十八年、ようやくにして男
女同権(?)が地についてきた、
という感じ。

とにかく、マゾ派には必見の映
画といえよう。

(南)

松竹映画

「真赤な恋の物語」の一場面↓



■映画・演劇・出版物に現われた

現代マゾヒズム文化時評

⑬

森下 高 茂

ガブリエレ・ダヌンツィオと
クロード・ドビュッシー

『聖セルバンティアンの殉教』この楽劇は、おそろくわが国では上演されたことはないはずです。

ご承知のようにダヌンツィオは、ムッソリーニと友人でしたし、フィューメの占領というチェコスロバキアとイタリアとの間の紛争にさいして、ひとり飛行機を馳って、まっ先にフィューメ占領に力をかしたこと。それに

よって「愛国詩人」と言われているため、じつさい彼の作品から受けるイメージとは、かけはなれた感じで伝えられたのです。

もちろん現代イタリアでは、詩人、劇作家また小説家としても一流人ですし、その異様に黒ずんだ人生観は、シヨペンハウエルの亜流にも似て、すでに捨てがたい魅力を今日まで失ってはいません。

いっぽう、クロード・ドビュッシーは『牧神の午後への前奏曲』に代表される近代フランスの印象派作曲家のなかの白眉、アンチ・

ワグネリズムの旗手と目されているひとりです。

ダヌンツィオが正統なダンテ以来の名文で、嫉妬、殺人、ただれるような愛欲をえがいたのに反し、ドビュッシーは、異様な題材——たとえば髪フェチズムの典型的な音楽的表現で——『ペレアとメリザンド』半人半獣の強姦をえがく、気だるい名作『牧神の午後への前奏曲』、そしてワグナー的ドラマチズムを極度に癡しながら、別個の新しい色情的なクライマックスを考案しながら、この『聖セルバンティアンの殉教』などを書きつづけました。

ここにかかげる写真——むごたらしい殉教場面は、四月十七日（一九六三年）午後八時半から、フランス・TVで放映されたものです。

主演者はリュドミラ・チェリーナ。彼女は有名な女優であり、バレリーナーでもあります。かつて、バレエ映画『エロイカ』でナポレオン・ボナパルトを雄弁に再現したことがあります。

いささかサジズムの対象にちかいものですが、反面彼女が女性であることから考えると使命感からくる男性的マゾヒズム——腸系マゾヒズムは、このジャンルに入りますし、と



リュドミラ・チェリーナ

きには禪愛好癖さえも、この系列に入ることがある——ともいうべき、M派の表現形式の一つとしては、十分なM系の資料であるとは思いません。

しかしジャンヌ・ダルクより抽象化してヒロイズムがかった故事にくらべ、このほうがより倒錯的なおいが濃いように考えられます。

「私はこれになりたかった」

以前に、黒柳徹子女史が競馬の騎手になりたかったという談話を、なにかの誌上で読んだ記憶がある。

そのころ、まだ黒柳女史というひとのイメ

ージがなかったので、かつて丹下キヨ子女史が「私は女調教師になって、猛獣を仕込みたかった」というゴシップと同様のスリルしか感じなかった。

ところが彼女がテレビに出演していることを知り、イメージがはっきりした。みているとなかなかひんぱんに出演している。それに

年齢だって、そう若くはないらしい。だから彼女が——騎手になりたい、と発言したのは当時の流行とか、有名なだしものとか、あるいは他の発言者の暗示によって、ごく一時的なものちがいあるまい、と考えていた。

そして何年かたち、黒柳女史が、こんな発言をしたことなど忘れてしまっているはずだと思ひこんでいた。

ところが手に入れた週刊文春（一九六三年五月十三日号）に、偶然それに関する記事を発見したのである。

「あなたは小さいとき何になりたかったか」という質問に答えて、以前と同じ女性騎手になりたかったと答えているのだ。それだけではなく玲利な容姿をもって、騎手の扮装をしたグラビア写真までそえてあった。

これは、きわめて注目すべきことがらである。もちろん黒柳女史自身が、この希望と性的なフィーリングが合致しておらず、もつとずっと、明朗かつ、単純にお山の大将的なものとして、競馬の騎手と答えたのである。とすれば、大へん失礼な言い方かもしれないが——なにしろ女史は日本の良識の代表とも言いたげなNHKの代表的タレントなのだから——私の立場から言えば、まさしく女史は視界の中に侵入してきたのである。

馬にまたがるということだけで、女性の多くが性的な感覚を刺激されるというのに、女史は、敏感な部分に最大の刺激をあたえつづけなければならぬ《騎手》をえらんだのである。

もちろん、またがることだけではペルフェルジオン《倒錯》とは、なんの関係もない。それはまだおろかしげな、そしていやしげな笑いをたたえた、いたずらに巨大なエロチシズムの領域なのである。

局所に対する直接、間接の刺激、この意味もなく本能的な、そして安っぽい感覚作用だけが世の過半数をしめる通常人の、ひそかなたのしみの源泉なのである。かれらは血なまこになって、そのうずきをいやすために性器を求める。

だからヌード写真のかげりさえもが、かれらにとっては性器の姿としてうつるのだ。まるで盛情期の野良犬のように「正常人」は、乳房を、やわらかい女体を、たくましい男根を、そしてそれらのまわりに必ず随伴しているだろうと思ひこんでいる毛深い所、まさつによる刺激、春画による姿体などを探しまわり追いつづけるのである。

魔女の山でのタンホイゼルのごとく、ついには本能以外の何ものをも求めえない動物的

人間となりさがるのである。これが健康で正常なエロチシズムの持っている。おおいにさされたうらの手の正体である。

だから女性が性器をくらに押しつけ、何分間かの急激な刺激をあたえることは、まさしく性的な行為にほかならない。その意味で女と馬を結びつけたアホらしいヌード写真もはんならんしている現状だ。

しかし黒柳女史が、そんな単純な意味で馬にまたがるのだとは信じられない。とすればある意味で二つの仮説が想定される。

一つは、馬にまたがるということが性的に作用しない場合であり、そのひとりひとりの性的体験によってそれが起こりうるだけだ。

いま一つは、競馬でなくてはならない——という理由を持っている場合、つまり卒直に言えばペルフェルジオンを心理的に持っている場合である。この場合には、エロトマニア風な傾向を持たない人びとに往々に起こりうる心理的現象である——反語的にこういうふうに発言することが、かえって不自然な感じをあたえない——と潜在的に考えうることもありうるのだ。

しかし特定人を対象にして、この種の追究や分析をおこなうことはつつしむべきであることは、あらためて言うまでもない。

「世界のサーカス」

一時休んでいたNHKテレビ番組だが、ゴールデン・ウィークに放映された。

サーカス・メドレイというタイトルであったので、またまた軽業の連続かと、大した期待もせずにいたのだが、なんとその最後にスリリングな番組が登場したものである。

「芸をするオラン・ウータン」というタイトルで演じられたこの番組、まずはじめにジャングルの女王よろしく、獣皮で身体の要所だけの扮装で登場する。手には三メートルはあろうかという太い革のムチ、それを引きずって現われる。

空中でピシりとムチを鳴らすと、ひょこひょこオラン・ウータンが現われる。不体裁な劣悪な感じのする動物である。ライオンやトラの持つ威厳もなく、象の巨体やカバのたくましい表皮もない。ただ逃げまわるだけの小才のきいた、いわばジャングルのたいこ持ちと言った感じである。

腰のスプリングを十分にいかせて、ウータンはとんぼを切りこるげまわる。かなり大きなサルを思わせるけれど、女調教師がひっきりなしに鳴らすムチ、それが必要以上に酷ではないかと思われるほど従順に、また彼女の

演出に合わせて器用にうごきまわるウータンのようすは、それだけでマゾヒストの感覚をしびれさせるに十分である。

その上、止めてくれと、叫びたくなるほど女主人（調教師）はムチをウータンのからだにあびせかけた。そのたびに巻きつくようなムチの動きが痛ましさを呼ぶ。

からだを硬直させながらも、ムチの下でつぎつぎに芸をひろうしていくウータンであった。その後半に心臓の強さ、体力のねばりのほどを見せ、客席に飛びこんだりして、女主人の手をやかせ、ムチの洗礼をうける。

フィナーレーに宙返りをつづけ、番組が終わるころ、サルの面をぬいだのは意外にも、ひとりの青年であった。まさしく人間が動物のぬいぐるみを着ての大活躍であった。

この瞬間、おそらくは女主人の対象となる動物の種類は異なるにせよ、血のおどる思いで画面にひきつけられていたのは、私ひとりではあるまい。ズウミミクであるほとんどすべてが、そうであつたらう。

これこそズウミミクの夢であろう。ズウミミクがサルを対象と考えなかったのは、いったいなせか。この点は十分考えてみる必要がある。

なにゆえズウミミクの多くが、馬や犬や、

そしてもっと力強い猛獣にだけなりたがっていたのか。この答えは簡単である。

サルやネコやネズミは人間に虐使されることが少ないからだ。少なくともムチをもってなされることはなかった——と言えるではないか。

この番組では、もっとも人間が模しやすい体格、動きを持つオラン・ウータンをえらんだところに意味があることに注目したい。ジャングルの女王が「曲馬の番組であるがゆえに」ムチを持ち、SMを露呈しないためにコミカルな演技に終始したこと。これらの点には、表に現われない重要な意味を汲みとることがができる。

そして最後に、今までムチ打たれ、こき使われていたのは私です——と、言わぬばかりに、面をとり顔を見せた青年——という心憎い演出は、これを演じた男女（夫婦）のいずれかの発案ではあるまいか。

かつての『トロイの兄弟』では、ふたりの兄弟がぬいぐるみに入ってコミカルな馬を演じ、女調教師がこれを演出するというやり方で、内容のみならず、はじめから人間による馬であることをわざとコミックに演じていたのがわかっていた。それを観客に示していたのだ。ところが、ウータンでは最後までサル

としての演技をつづけさせ、ムチ打ちや足蹴にしたのである。この試みは観客の側から見ているに十分成功している。そして、それを演じたふたりがSMと無縁であるとは、とても信じられない印象をあたえてくれたのだ。

だからテレビ番組としては、近來まれに見る興奮と熱っぽいあと味とを見るものの目にあたえた。この演目のアイデアは、日常生活のなかで、また、特殊なプレイの場においても、十分に活用できる。

いったいロマンスが、このふたりを結びつ

け、のちにこのような演目に手を染めるにいったのか。あるいは、ふたりの秘密がふたりを結びつけて、その欲求と生活の資が偶然に結びついたのか。

遠くスエーデンでの出来ごとである。私は強い期待を持ち、このカップルに手紙を出してみた。それには、よい返事を、できるならかれらふたりの心情を知りうる糸口とを返信から期待できることを願いながら。

西ドイツ旬刊誌から

友人から送られた誌名不詳の西ドイツの雑誌に、女性騎手による競馬に関する記事が出ていた。

これまでも、しばしば女性騎手についてはふれてきたように、女性だけによる競馬というものは、それだけでズウミミクにとっては興味深いことである。

写真 Aは優勝騎手。

Bは出場騎手たち。

Cはラストスパート。



写真 A



写真 B

写真 C



寄稿作品

ご紹介と

短評の欄



「開股医院」……………(神戸) 岡島 史朗

▼作者は掲載などアテにしていけない？

のではないか、と思われる。ある意味では傑作だが、とても発表できるしろものではない。(C)

「鉛色の漁港」……………(青森) 厚木 修

▼北海の漁港を舞台にしたストーリーはいい。多ぜいの男が女を嬲るといった場面は、よほど慎重に書かないとあぶない。(B)

「アパート腐爛巢荘」…(東京) 伊丹 清市

▼文字どおりのデカダンアパートの話、いい線までいっていなから物足りないのは、やはりSM的要素の不足か。(B)

「あかねという女」……………(姫路) 田代 守雄

▼文章が実にうまく、いささかの抵抗も感じさせない。強いて難をいえばS女あかねに、もう少し脂こいところがあってもいい。(A)

「芽」……………(大阪) 抽斗 五郎

▼釜ヶ崎周辺の風景描写がおもしろい。家出娘が売られていくストーリーもうまいが、リアルすぎるので発表は無理。惜しい。(B)

「モデル魔子」……………(東京) 夏川 俊

▼サド小説には幾度か顔を出した画家と

モデルの話、それだけにもっとま新しいアイデアが欲しい。(C)

「白い淫獣」……………(北九州) 巽 惣一郎

▼このストーリーも使い古されている。文章もサド女の性格にも従来のもものと変ったところが見だされない。(C)

「島原の血」……………(滋賀) 土屋 進

▼切支丹受難もの。文献としても、小説としても中途半端。書くまえにもっとしつかりと構成をまとめてかかることが肝要。(C)

「ペテン師コボロ」……………(京都) 乃木 修介

▼軽いタッチがウィットに富んでいておもしろい。適当にお色気を盛ってところがよいがSMムードとほど遠いところが欠点。(B)

「因果峠」……………(山口) 高木弥一朗

▼時代サド小説。スリルや意外な結末など盛り沢山で、おもしろく読ませるが、全裸シーンが多く、責めかたがひどい。書き直せばなんとかなりそう。(A)

「パパの恋人」……………(東京) 赤木 新吾

▼少年がつづるたどたどしい文章が、妙になまなましくてギョツとさせる。現代ものの作品にはリアルすぎるのが難点となっている場合が多い。(B)

「腹切り残酷史譚」……………(東京) 夏川浩一郎

▼これだけのものを書くにはかなりの資料と努力が要る。話のつながりもよく、おもしろく読ませるのになによりも魅力。(A)

「砂登子抄」……………(大牟田市) 久保 洋

▼緊縛写真モデルの話、ヒロインの心理描写が少し不足、だが百十枚の長編をうまくまとめた筋もおもしろい。砂登子のいじらしさをよくだしている。(A)

「忍者」……………(東京) 和田浩一郎

▼M的忍者が主人公、マゾ小説としては珍重に価する。Mを忍ぶ者とひっかけたらしいが、題名にもうひとひねりが欲しいところ。(A)

「由美子の死」……………(千葉) 真崎 陽介

▼心理劇を書くにはちょっと筆力不足と
いったところ。男にくらべてマゾ女由美
子の感情の起伏が描き足りない。(B)

「あの日盛りの公園で」(東京) 原 遊児

▼かなりきわどい責め場も、公園のベン
チに於ける老人の幻想ということで救わ
れている。責め道具の凝りようはなかな
かのアイデアマンである。(A)

「裏窓いろはかるた」…(福岡) 詩川 博

▼どうも聞いたような作品の多いのがい
ただけない。時代ものに限らず。ここら
で一発、奇抜な作品が欲しい。(C)

「おんな壇ノ浦」……………(千葉) 斎藤 正清

▼源平の合戦を女武者に置きかえた着想
がいい。ちょっと度が過ぎる責めシー
ンも、男を出さずにうまく逃けている。こ
ういった作品は歓迎。(B)

「ひどいやつら」……………(大阪) 風巻 太郎

▼SMビート族といった若者たちのただ
れた生活。サド・シーンがすべてセクス
に直結していて直しようがない。(C)

「もの憂い歓びと憧れと」……………

(東京) 白木ゆりこ

▼原稿の文字もきれいで、文章も上手。
内容にも非常な迫力がある。ある結婚

の生態”という副題のとおり、結婚生活

の偽りない告白だが、いかんせん、迫力
がありすぎて、公刊誌としては、発表が
無理。心理描写がよくできているので、
没にするのは、まったく残念というより
ほかはない (B)

「神変縄文字小僧」…(名古屋) 津々木光也

▼この時代小説は、かなりおもしろい。
七十枚近くの作品だが、小説としては、
シリ切れとんぼで、結末のないのが惜し
い。いくらサド・シーンが売りものの作
品でも、小説としての最低の条件は心得
て欲しい。(B)

「蜜の罠」……………(青森) 加地 稔

▼二、三枚読むと結末の想像がつく、単
調なストーリーに、文章も特色がないの
で全体にだらだらした感じ。(C)

「星降りやまず」……………(東京) 小石川信夫

▼なめらかな文章が実にうまい。ほんの
小さなサド・シーンが筆の力で光ってい
る。が、なんとしてもものたりない感じ
なのは残念。(B)

「あの男の密月」……………(京都) 長谷部 勇

▼マゾ男の密月、ちょっとおもしろいと
ころはあるが、文章がどうも……。主人
公の職業も、ひかるの性格も全然わから

ない。(C)

「しがらみ縄」……………(和歌山) 日暮 充

▼きわもの、というよりズバリものとい
うか、掲載はとても無理。小説としては
単調すぎるので、ソレを削ってしまうと
何も残らない。(C)

「おやじの女」……………(八日市) 桜井 俊彦

▼S趣向の父親を軽べつしながら次第に
同化されていく話におもしろい。が、あ
る部分はハードボイルド調、ある部分は
ねばりつく、といったように一貫したテ
ンポがないのが気になる。(B)

「白髪党伝奇」……………(大阪) 志田 杜夫

▼登場人物が多過ぎてまとめきれなかっ
た。結末をいそがず二部、三部に分ける
べきだ。中編で結ぼうとしたため、おし
まいが都合よくつくりすぎている。惜し
い。(B)

■AⅡ水準作。または書き直せば掲載可能な

もの。出来るかぎり掲載したい。

■BⅡ掲載にはいま一步というところ、惜し
いとは思いますが。

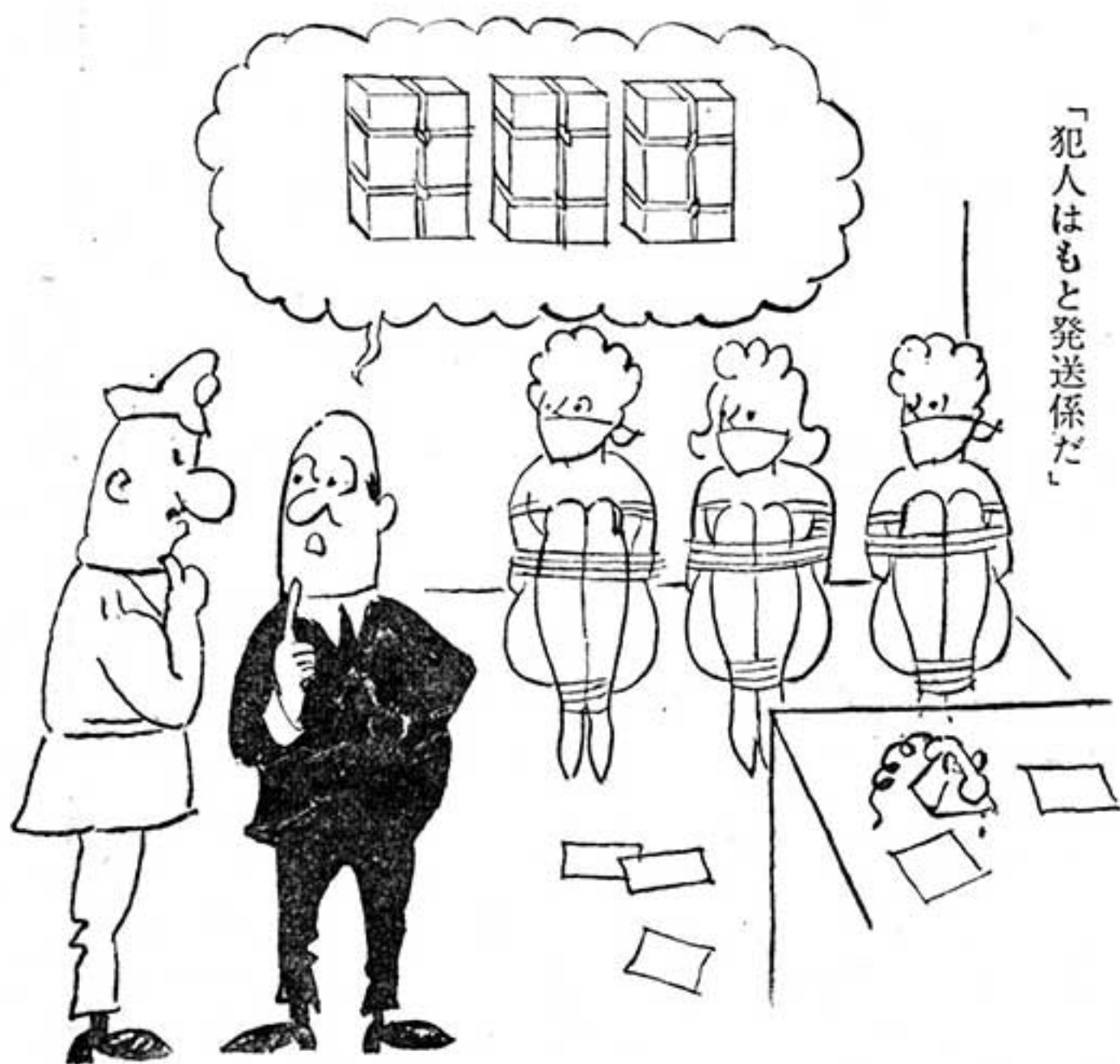
■CⅡ本誌に不向きなもの、直しようのない
作品。まず、没と思って下さい。

海外SMマンガ

フランク・ペーカー
ダス・マクドナルト

習性

「犯人はもと發送係だ」

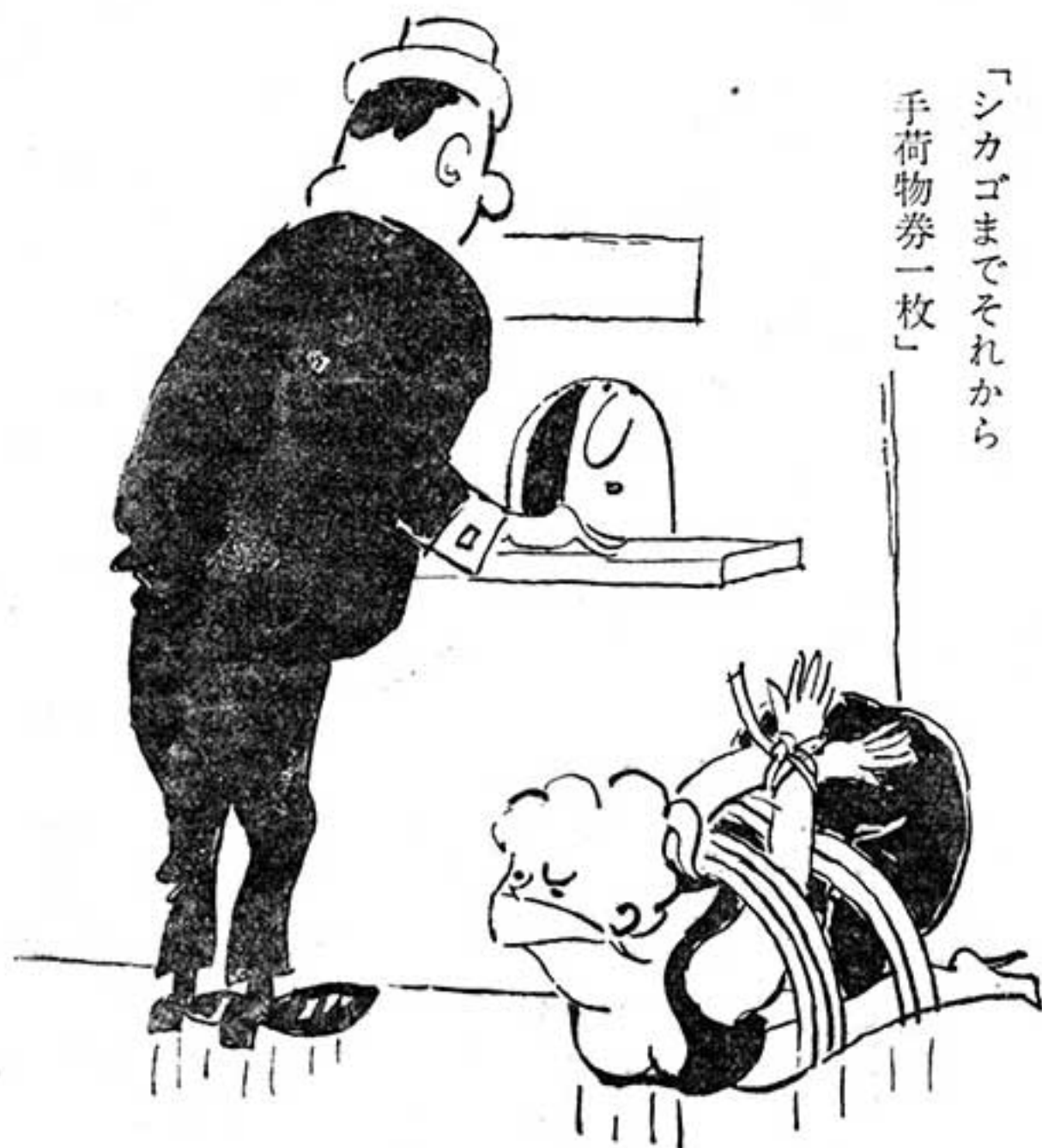


マゾッホ・サド候爵の自殺



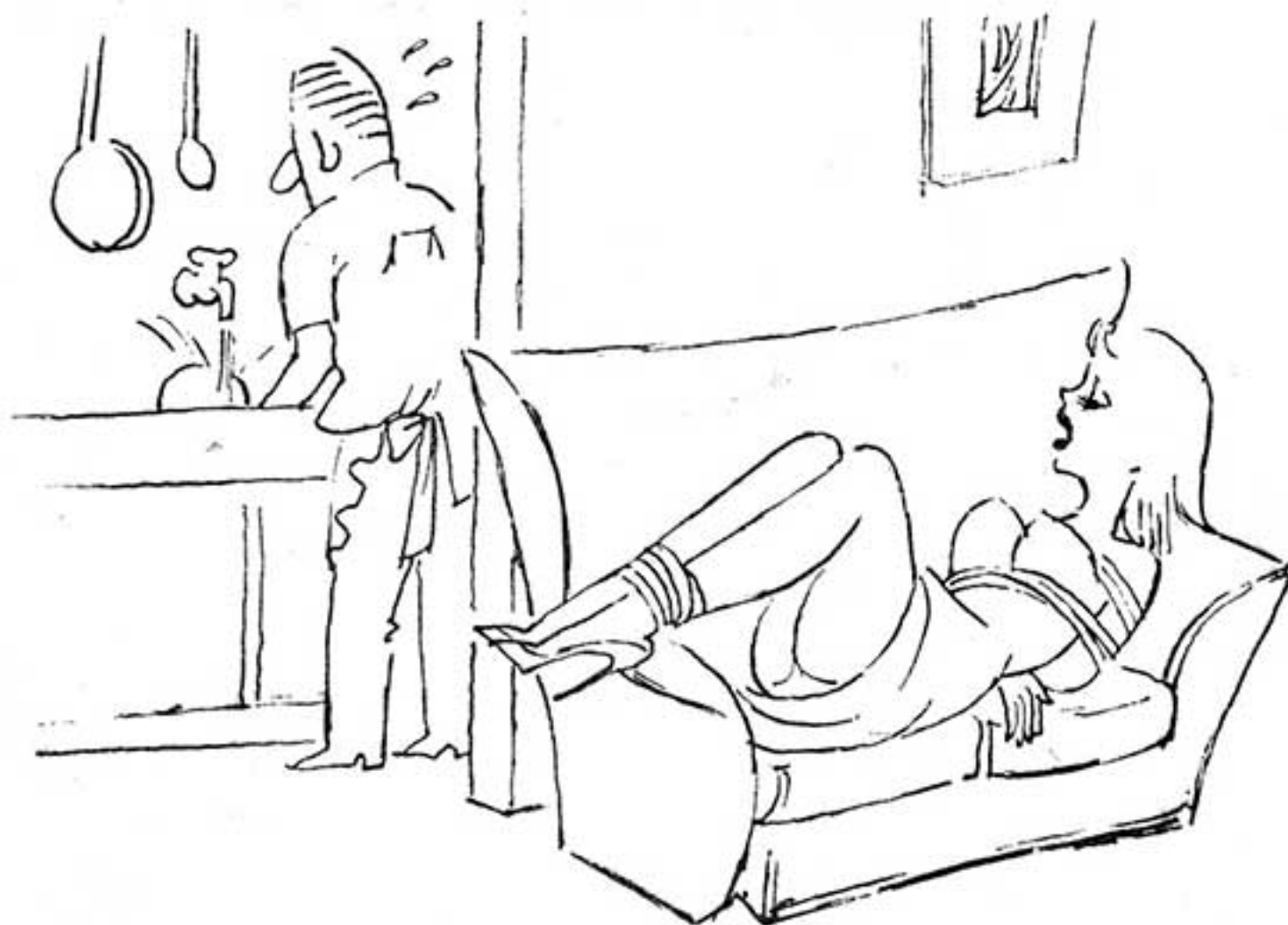
出札にて

「シカゴまでそれから
手荷物券一枚」



道はきびしい

「ねえジョージこんなことが
そんなにいるならこれから
毎日縛られてやってもいい
ことよ」



必死のセールスマン

「旦那見ちゃった」
「キヤツあいつまだいたのか」



縛るものがなかった





中村真一郎著『燃える薔薇』におけるマゾヒズム心理――

《燃える薔薇》の三者願望

黒田史朗

1

マゾヒズムを真正面から取り上げた作品に遠藤周作の『月光のドミナ』という中編があるが、それに続いて、今回は中村真一郎の力編『燃える薔薇』が講談社から出版された。講談社はかつて佐藤春夫の訳でマゾッホの代表作『毛皮を着たヴィナス』を出した出版社であることを考え合わせると、きわめて興味深い。

『毛皮を着たヴィナス』を加えた以上三作、それに合わせて谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』を加えると四作、これが戦後におけるマゾ派の代表作となるのではなからうか。もつともかつて奇譚クラブに、沼正三の『家畜人』

ヤブー』という未曾有の異色編が連載されたが、これは別格の例外として本稿ではふれない。また『毛皮を着たヴィナス』も、新作というよりは文献的意味からいっても既に古典の部類に入るもので、かつ外国作家の翻訳だということ、この稿ではいちおうふれずにおく。とすれば、残るところは『瘋癲老人日記』と『月光のドミナ』、それに続く中村真一郎の『燃える薔薇』という系譜をたどる。

さて『瘋癲老人日記』は、本誌でも以前安東泉氏が詳細に作品解剖を行なったことでもわかるとおり、マゾヒストである老人を主人公に、そこではケンランたる、というよりは、旺盛な食欲にもたとえられるべき、マゾヒス

トの日常が、手放しの楽天的筆致で、何の懷疑も苦悩の跡もなく、悟りすました或るトホウもない図太い神経でどんらんに語られる。批判の予地もあらばこそ、そこにはテコでも動かないといったマゾヒストの実人生がデンとして居直っている。だから、マゾヒストが主人公でマゾヒズムが主題であっても、これを改めて人間の問題、人生の問題、あえていえば哲学的課題として真正面から見つめ直すという問題意識からは遠くはずれる。またはずれたところに『瘋癲老人日記』の価値はある。

ところで『月光のドミナ』と『燃える薔薇』は、主人公はマゾヒストというよりむしろマゾヒズムで、また、このマゾヒズムという一のイデーが、同時に問題意識として真正面にすえられたいわばまっとうな思想小説の形態をとる。これがこの二作の同じMをその軸としながらも性格として『瘋癲老人日記』と質を全く異にするゆえんであろう。

2

『月光のドミナ』は、マゾヒズムの究極を苦痛より凌辱の線で捕え、『燃える薔薇』は凌辱の線をさらに押し進めて三者願望の世界にまで高めた。この系譜は本誌連載の水尾室氏の『体当たりM論』と符節を合わせて、ほ

とんど同じ方向をさすものである。

だが、『月光のドミナ』と『燃える薔薇』は、それでも明らかに二つの異なった体質が感じられるのである。これは、作者遠藤周作と中村真一郎ふたりの体質の差に終局的には帰すべきものであろう。

『月光のドミナ』を一口にいうと、これは熱心なフアンを観察記とでもいったらいいか、臨床記録のたぐいである。『燃える薔薇』を一口にいうと、これはためらいがちにつぶやかれる、マゾヒスト自身の内的告白である。ということは、旺盛な好奇心と興味をそこに集中しながら、遠藤周作自身は別段マゾヒストではない、いわば良き理解者の範ちゅうからは出ない観察者というのに対し、中村真一郎は自身、マゾヒストであるというふたりの体質的相違を、結果的にそれぞれの作品に反映したと想定されることである。

『月光のドミナ』が労作であり、それなりの的を適確に射ていることは否定できない。これは同じ観察者でも、広池秋子の『変な男』のような、誠にどうも浅薄な、上すべりな観察眼のあいまいさに比べると、『月光のドミナ』の目は確かである。

ということはいちおう本稿では別にして、マゾヒスト自身の内部告白と想定される『燃える薔薇』にこの際視





点を当ててご紹介しようと思う。

と書けば、中村真一郎氏はひどく迷惑がられるかもしれない。おれは関心は持つが、決してマゾヒストではない、と、おっしゃられるかもしれない。あるいはそうかもしれない。しかし、《燃える薔薇》でしつこく追求される脇坂心吾の三者願望は、もうすでにその世界は、単なる観察者の立場からではのぞけない世界である。のぞけたとしても、あれだけ回り道をし、言い訳をしながら、かえって自己の所在をそこにはっきり自白するテイの、実に微妙なためらいは当の本人でないと云えない質のものである。《燃える薔薇》は、明らかにマゾヒスト自身の内部からの告白である。脇坂心吾こそ作者の有力な分身であり、城戸郁子は彼自身の思い描く理想的サジスチンの一典型である。

3

《燃える薔薇》は、私が語る一人称形式になっているが、実質上は脇坂心吾を主人公にした三人称小説である。私は単なる狂言回しか、あるいは脇坂心吾が作者のいつわらざる分身であることを、何とか煙幕で見すかされないように取りつくろうために、あるいは心吾が本人と見すかされても、何かある生な告白へのはじらい、た

めらいを、本人に代わってもっともらしく言い訳をしてくれる便宜上から、語り手としての私を登場させた、そういう私である。

だから私なる人物は、作者にとっては、安全弁みたいな、それが居るからその弁護射撃で安心してマゾヒストが書ける、そういう必要性から意味を持つのであるが、読者にとってはわずらわしい。私なぞが仲介に出てなくて、脇坂心吾にじかに交渉を持たせてくれればありがたいのである。だが中村真一郎はそうはしなかった。私を仲介に立てなくて、脇坂心吾としてじかに読者には面映ゆくて、顔向けができなかったのだ。それがかえって、作者自身のマゾヒズムを、それも高度のマゾヒズムを、思わず露呈した形になったのである。

私は、

『二十年の役人生活にもかかわらずまだ慣れていない、そのために、文化関係というような、役所の仕事としては、本道を外れた方面を、やらされる破目になって、役所では文化人を通っている』

男である。あまり知恵のある設定とは言いがたい、あまりにもありふれた、つまり居ても居なくてもどうでもいい、蜃気楼みたいな立場の男である。

この私は決断力のない優柔不断な官吏で、或る面では

官僚的で或る面ではいつまでも官吏になりきれない、趣味人的でせいたくな半文化人という、これもありふれていてまたか、と思わせる設定である。同じ私を仲介に立てるにしても、もう少しピリツと皮肉のきいた人物をでも仲介人にとすると、まだよかったのではないか、そんな気がする。

4

大手エリサは楽壇の重鎮大手協之助の娘で気ままな画家である。彼女は、

『不幸な結婚に破れて、実家に帰ると、いつの間にか、朝から酒と安定剤を交互に飲むような習慣に陥っている』

ような女である。

私にはエリサの、

『正体がわからない、いや、正体がわからなくなったのである。十年近い交際の間（そのはじめは私が絵を習いたいという気紛れを起して、ある友人の紹介で、彼女のアトリエに通いだしたことからだった）、私は彼女の奇癖に驚き、しかし、それらを全て、私のようなディレクターとは異なる、本物の芸術家の性癖であると説明して、納得して来た』

間がらにあった。

『彼女は私の絵の先生であり、一方で、私は常識家として、非常識な彼女の処世の相談役となっている。友人であり、それともかなり気の合った友人である。しかし、毎日、会わなければならないというほどではなく、絵の稽古も、この頃は、月に一度程度で、その時、会って、愉快に話して、それで終りである。別れば彼女のことは忘れていく』

これもきわめて知恵のない、ありふれた設定となる。なお悪いことに、この設定にはもっとダソクがついて、エリサの父親大手協之助の七十歳祝賀会の冒頭での場面で、いつもは私は、

『気持を動揺させることはなかったが、今日は闇の中で言葉だけを聞いて』

彼女に困乱させられる。彼女を性的な色彩のもとで、チラチラと、ヤユされるようなぐあいに見え隠れして感じさせられる。何とも、いっそう通俗性のかった、いよいよお話にならない設定とはなっている。第一、こう考えてくると、エリサという、カタカナ書きの、無国籍じみた当世風の名前まで、いんちきくさくなる。ありふれすぎた好みなのだ。なぜ花子ではいけないのか、エリサと片かな書きの名でなければいけないのか、開き直って聞き





たくもなってくる。

『彼女のアトリエの乱雑さと、それから彼女が親しい客を招び入れる寝室の、あの家具や装飾品の過剰さ——アトリエの庭先の、おびただしい酒の空瓶。それから寝室の床の上に幾つも投げ出している、色とりどりの派手な座布団。仕事場の男のような飾り気なさや寝室の女性らしさの誇示とは、一体、どのような関係があるのか？』

そうだ、アトリエの中で、じみな色のスラックスを穿いて、動きまわっている時の、色気のない彼女と、たとえば今日のように、満艦飾という古い形容の適わしいような、お化粧をした、三十女の欲情的な美が大きく開いた胸元から溢れ出ようとしている彼女、との矛盾は——』

と、やっきの説明を加えても、ただ、それだけのことが、ということと終わってしまう。

5

大手エリサや私をめぐっての、こういうテイのダソクが、あまりにも時代にこびた通俗的な設定で、何の新味もないものだということぐらい、そこは名手中村真一郎のこと、百も承知のことであろう。承知の上でなおかつ作者はその上にそういう通俗的な各条件を塗り上げていく。

『大手エリサには度がない。彼女の服装も、言葉づかいも、あるいは金の使い方にも、一定の市民的な基準がない。つまり、生活に根がないのである』

これは中村真一郎の『太陽の季節』、太陽娘、あるいは大江健三郎的な没世間の女性を、人間を、気取ってみせたのであろう。そうしてそこに展開される生活図といえ、

『早く妻を亡くしてから、独身生活を続けている大手氏は、離婚して戻って来たエリサと、独特な家庭生活を行っている。——彼女の異常さは、つまり大手家の異常さである。』

——あれは「家」だろうか。七十歳の大手氏は二階に住んでおり、三十何歳かのエリサは階下を占領しているが、大手氏の方は、庭から直接に二階に通じる裸の階段によって出入し、食事は台所で、家政婦の作ってくれたものを、二人とも別々に摂っている。——大手氏は、私人としては奇行に満ちていた。——彼の名前は、世人にとっては、歌曲にはじまって、我国最初のオペラ交響曲までを作った作曲家というだけでなく、次々と若い女歌手などと浮名を流し、その何人かとい短い間、同棲もするという、一夫一婦制の通念の完全な破壊者として、印象づけられている』

それを、

『一般の人が許しているのは、彼が芸術家であるから』であつた。という中村真一郎の説明は、これだけからいうと、すこぶる常識的な口調で、それでいてけんめいに非常識的人間の、その非常識さを、これでもかこれでもかと押しつけようとするのだが、その効果はまどろっこしいおしゃべりがうるさくてあがらない。非常識の非常識振りを納得させるには、語り口も頭から理不尽におつかぶせてくる非常識な口調でないと、効果はない。大江健二郎的理不尽な世界は、大江健三郎的独尊振りを發揮した、筋の通らない、ひとりよがりののほせ方がないと、説得に弱い。中村真一郎は、決して血が頭に上ることのない人である。いつも冷静である。しかも常識人である。だから非常識なエリサと、その周囲についての説明は、わずらわしいだけで効果があがらない。

6

だが、効果が上がろうと上がるまいと、とにかく、そういう非常識的世界と、非常識的人間の設定を、無理にでもしないと、脇坂心吾というマゾヒストを、城戸郁子というサジスチンを、中村真一郎は登場させづらかったのに違いない。当たり前でない世界、当たり前でない人

間たちの間に、心吾と郁子の異常な関係をおけば目立たなくなる、目がそらされる、作者自身の内部欲求と告白の真意がカムフラージュされる、ほかの異常さの中に置いてマゾヒズムを同じ平面で見過ごしてもらおう、そういう作者のはじらいからくる計算が、私という仲介人や、大手協之助、エリサの非常識さを保身用のタテとして必要とした。だから、かえって『燃える薔薇』でのマゾヒズムは、それが本物であるということを証明する結果となつて作者に返ってきたのである。

城戸郁子は名家の令嬢である。そして脇坂心吾とは婚約者である。初対面の時、彼女は、私のすすめたプランデーを辞退しなかった。かえって『挑戦するように強い笑顔を作った。こちらを見る眼の表情が、性格のきつさを示していた』このあたり、郁子の面目は、もうほうふつとして生きてくるのである。それと対比して、脇坂心吾は『有望な美術史家、美術評論家』で、また『極度に内気な青年』ということ、これだけでこの男女の関係はどういうものだか、自然に推察がつくことになっている。

7

さて、『燃える薔薇』でのクライマックス的情景がど





のようなものか、作品の中から次に抜き書きしてみる。

『私の眼の前に展開されている光景は何とも奇妙なものであった。脇坂は床に跪いていた。鉛筆でも落して探しているにしては、その姿勢は、あまりにも貴女の足許に跪く騎士の姿を、典型的に模倣していた。彼の顔は蒼白でそして唇は微かに顫えていた。その唇は、彼の婚約者の足の甲に、今にも触れようとしていた。———』
———とは、脇坂の跪いた直ぐ前に、彼の婚約者、城戸郁子の足が延びていたということ———私は凝然としてその不自然な光景を眺めた。———と、不意は郁子は椅子の上に身体を延したままの姿勢で、手にしていたブランドーダラスを口に持って行き、ひと息に呻った。その時、仰向いた喉から胸への線が、美しく盛り上った。———突然に彼女は私の方を見た。そして、私の眼と彼女の眼とが出会ったのを、彼女は確認したように微かに素早く顎で私に向ってうなずくと、いきなり足で、脇坂の顔を蹴上げた。脇坂は悲鳴をあげながら、床へ倒れ———』

と、情景描写では的確なポイントを押えて書かれている。そして続けて、

『彼等の行為は非常識すぎる。跪く方も変なら、その顔を蹴上げるといふようなことも（しかも第三者をたしかに意識した上で決行するということは）、常人の心理で

は説明がつかない』

と書かれているが、これは言わずもがなの作者のアリバイづくりである。作者の真意は、既に常識人としての私を離れて、脇坂心吾として、郁子の足もとにひざまずき、彼女に顔を蹴上げられているのであって、それを今さら仲介人としての私の口を借りて、『彼等の行為は非常識すぎる。———常人の心理では説明がつかない』なぞと、そららしくシラをきることもないと思われるのだ。第一、ここで特筆注意すべきことは、三者を意識した上で初めて決行されたという、三者願望の明らかな表現である。

「郁子は———ほくを喜ばそうとして、あんなことをしたんです」と脇坂は私に言っている。しかも第三者の見ている前で、そのことでマゾヒスト心吾の興奮はいっそう高められたのであった。これは△月光のドミナ▽で遠藤周作が提起した、苦痛より凌辱を、という線を、三者に見られることで確認することである。みじめったらしい醜状を、三者の前でいよいよみじめにすることである。

これがマゾヒズムである。これが私の願望である、中村真一郎の本音である。

三者願望のほかに『燃える薔薇』の特徴は貴女崇拜の強調である。郁子の家は日本でも超一流の名家で、人に絶えず頭を下げさせる習慣の中で育った。心吾はずっと低い家からの出で、ひどい劣等感を持っている。内攻するこの種の劣等感、ポイントの押え方によってはさまざまなサジストを作ることがしばしばある。その分かれ目の接点の微妙さこそ、人の心の秘密というものであろうか。

ところが、心吾は、郁子との出会いによってマゾヒストとなった。心吾の背中の異様な傷跡は郁子からつけられたものだった。その傷を恥じるために、彼は決して他人といっしょにふろにはいることがない、それほど他人の目から隠れるように自己の秘密を隠す心吾が、他人の目の前で、郁子に顔面を蹴上げられてみたいと熱望したことは、これだけを見れば、ずいぶん矛盾したことである。一方では隠し、一方では露出するということ。しかしこれこそマゾヒストの最も肝要な秘密なのである。第三者を現場に参加させて、そのことによっていっそう自己をみじめにさせるということは、それだけで、いかにも三者願望の心理状況を十分説明し尽くしたように判断されるとしても、まだ実は、肝心なその先があるのである。みじめになりたいのなら、自分のほだかをなぜ人目

から隠そうとするのか、女にムチ打たれた傷跡を、なぜ他人の目から隠すのか。むしろその傷を他人にさらすことで、いっそうみじめになればよいのではなからうか。

それをあえてなし得ないほど小心で恥じらい深い脇坂心吾なのである。その心吾が、女に顔を蹴られるところを他人に見てもらいたいと望み、あえてそれを実行した果敢さは、確かに矛盾したものである。だが、このことは実は決して矛盾したものではなく、このことのためにマゾヒズムが本物になり、その告白を実証する結果を生むに至るのである。

貴女が身分いやしき男を足蹴にすることは当然なのである。その当然さを、改めて郁子という女性に他人の前で確認させる、この時、郁子が意識するのは他人の目だけであろう。心吾の存在なぞ、他人を意識する心の中ではほとんど眼中には入らないはずである。ただ他人の目と、自分の行為が大きく浮かび上がるだけである。その時心吾は彼女の前にあっては無になっってしまう。自然の風景の中に没してしまう。

郁子の存在だけが大きくクローズアップされる。これが心吾のねらいである。人の目から、背中の傷を隠す心吾と、三者願望にもだえる心吾とは決して矛盾はしないのだ。ここにこそ作者中村真一郎自身の秘密があるようだ。





『燃える薔薇』における――

階級的劣等感とSM

村山省一

人間の生活が、かれらの置かれている環境や条件によって形づくられるように、男と女の関係も、ふたりが置かれている条件によって、さまざまな形をとる。これに加え、ふたりのからみ合いが軸となりながら回転している。そこで男女の置かれている環境や条件の相異が、どのようにふたりの関係やからみ合いに力を加えるかを考えてみるのも、一つの見方であろう。

たとえば、ここに貴族的な性格の娘がいるとする。彼女が貴族的である一つは、生まれおちたときから人に頭を下げたことはない。そういう特定の家庭に育ち、すべて向こうから頭を下げてくるものだと思いこんでいる。

そしてまた、きわめて小市民的な家に生まれ、たえず

生活以上に背延びすることを強いられてきた青年がいる。彼にとっては、経済的優位が生活のすべての上で優位なものと、それが結びついているのだと思ひこむ。そのような社会的通念に押しひしがれている。そのことは彼にコンプレックス以外の何ものもあたえはしなかったとする。

この男女の出会いでは、優越感と劣等感のからみ合いからはじまる。ふたりの間に生じるものは、たえず他を支配しようとする力であり、それを軸として回転していく。各々が身につけ目撃してきた過去の垢を武器としてまとい対峙する。

すなわち青年の側にすれば、精いっぱい背延びするこ

とで支配者になろうとこころみる。生まれながらの支配者であるべき娘は、被支配者の側にまわることと「愛」というあかしを彼に期待しようとする。これがふたりの間で維持しうる段階では被従は生じない。

ところがこの力の均衡は、ふたりの「愛」の進行と途中で分裂する。つまり地肌が出てくるということである。

背延び状態にしびれがきれるころ、青年は本能的に身の安全の方向へ傾く。同時に娘の側にすれば、青年のそのようなポーズの変化に「愛」のゆらぎを感じ、青年に對する不信をさとり、自己の不安に気づく。だから娘も生まれながらの貴族性の中へ、後ろを見せてかえってしまふ。

こうして力の均衡にひびが入り、たがい己れの地肌をむきだしにしたときから、嘘のないからみ合いがくりひろげられる。



中村真一郎の『燃える薔薇』のなかで、小市民的な家に生まれ、美術評論家である青年脇坂心吾は言う。――『その時、ほくに彼女を抱かせたのは、愛ではなかったのです。お判りにならないかも知れませんが、一種の復讐心のようなものです――』

と。つづいて――

『いや、お判りになるはずはありません。あの人は、それまでに、もう何人もの下らない男と関係があることをほくは知っていたんですから。だからほくはその軽蔑すべき女の肉を破壊してやろうと思って、むしろ憎悪から彼女を腕にしめつけたんです。それに、そこが彼女の部屋であることが、ほくの破壊欲をいよいよ強めてくれました』

インテリ青年のこの言葉は、フィアンセであるブルジョア娘、城戸郁子への強いコンプレックスから出たものである。

かれは自分が小市民的な生活の垢に全身しみだらけであることを、しかと意識することで、ブルジョア娘への復讐心を燃やしていた。そのかぎりにおいて、彼はノーマルな性の営みを覚え、彼女に立ち向かうことができた。また彼女の側にすれば、そういう彼の出立ちに「愛されることを信じ、愛されたい病氣」をいやしてくれと思いがした。

ところが、じっさいは彼女以上に、青年脇坂が「愛されたい病氣の重患」であることがわかってくる。これはもともとそうであったと考えるべきである。つまり青年の背延びしたポーズは、それがポーズであるだけに「愛」





という心を裸にしたからみ合いの中では、持続できなくなるのだ。もはやフィアンセへの憎悪や復讐心だけでは根っからの貴族性を身にまとい、およそ母性的な色合いを持ちあわせてない性格の郁子に抗しきれなくなってしまう。

別な言い方をすれば、脇坂青年は己れ自身の安全をはからねばなくなる。そのためには「愛する」立場から「愛される」立場へとまわらねばなくなる。

このことはフィアンセ郁子に、

『私の餓えは、今まで以上に激しくなり、絶望的になりました。目の前に愛してくれるはずの人がいて、その人は自分の方で愛されることばかり考えているんです。私たちの変態的な行為なんてものは、私と彼との心の餓えに比べたら、恐ろしくも何ともないわ……』

と言わせるのだ。

とにかく背延びのポーズで郁子との「愛」を進行させることに行きづまりを感じてきた青年はカブトをぬいでしまう。すると、――

▲いよいよ郁子の攻撃的態度を激化させることになり、快楽を通りこして苦痛を、彼に与えることに熱中していった。そしてこの変態的な関係は、つまり二人の人格の本質そのものに根差すもので、二人は自己の資質に忠実

になればなるほど、関係は悲惨なものに変わっていったわけである▽ということになる。

この場合、ふたりが「自己の資質に忠実になる」ということは、青年脇坂はMの立場に身を沈めることであり同時にフィアンセ郁子の側にすれば、Sの立場に立ちただかつて餓えに狂うことである。

脇坂がMに、郁子がSにと、それぞれの立場をとり明確なからみ合いが、ここにはじまるのである。ふたりの性格の本質がこのような形であらわれてくるまでのプロセスには、それが偶然の一致ではなく、そうなるべき必然性を裏づけるような、いくつかの出来事も述べられている。

『燃える薔薇』は「私」という語り手によってストーリーイがはこばれている。その「私」が、それぞれの人物との接しよくによって得たことがらを述べているのである。

問題は、そのプロセスにあるのはもちろんだが、郁子の言葉を借りれば「愛されたい病気」ということに焦点をしばってみたいと思う。



ふつう男女の関係、それがプラトニックな「愛」であれ、肉欲的なものであれ、つねに両者のからみ合いには

スタミナがともなわなければならない。

心理学の理論をもちだすまでもなく、人間のからだは、外から加えられる刺激によりさまざまな反応をしめす。それが興奮や快感をひき起こすのは、いずれも加えられた刺激への反応であると同時に、各自の体質や性格により異質の形をとる。

いったんひきおこされる快感にしる興奮にしる、刺激の度合が深まるにつれ、快感が正比例をつづけるとはかぎらない。どこかで快感がストップするか、あるいは刺激に対する反応がにぶることもありうる。

また刺激に耐えうる快感にも限度が考えられる。その限度を越えるところで狂ってくる。狂ったところから、さらに新しい快感を求めることが可能であるとしても、そのためには、より以上のスタミナが必要となる。だから男女の関係においてスタミナが伴わなければ、中途半端なことにいたるのは、あらためて言うまでもない。

アブノーマルという言葉が、適切かどうかはべつとして、特異な男女のからみ合いは、たとえば、それがSMの場合を上げてよい。そこではスタミナの変容が要求され、それが習慣となれば、より強い刺激を根ざしての工夫が必要となろう。

またアブノーマルがノーマルな男女の関係の延長とし

ておこなわれる場合は少ない。根っから異質なものの、SMの要素をふくむ男女は、だからノーマルな男女の関係やからみ合いとは、あるプロセスにおいて決定的な瞬間とも言うべき壁に突き当たってくる。それは支配するものと支配されるものとの関係であり、支配される側より、支配する方に、より多くの疲れが早くやってくる。

『燃える薔薇』において、インテリ青年脇坂心吾が、ブルジョア娘、郁子にくらべ「愛されたい病気の重患」であったということは、ノーマルな男女の関係では、とうてい、いやしきれない病いを心に植えつけられていることだ。そのことは、彼が小市民的な家庭で、つねに背延びして生きることを強いられ、それを見せつけられてきたこととも合わせて見のがせない。同時に、郁子を知る以前、五つも年上のエリサという女性との出会や恋愛も、脇坂心吾の病気を考える上に見のがせない。

エリサは脇坂にとって保護者、あるいは母性として彼の要求はすべて受け入れた。たとえば本代や下宿代まで気前よく払い、遊びの金もエリサが出した。しかしふたりの間に「愛」が発生し、エリサへの欲望が彼のなかで高まってくると、彼女は肉体については吝嗇であった。

だから脇坂は、燃えながらも果たされることのない欲望のために苦しんだ。その苦痛は、エリサに対する「要





求」から「懇願」へと態度が変わっていく。彼は甘えたり泣いたりして極度に卑下を示す。彼のその卑下、奴隷的な態度をエリサはたのしむようになる。これはエリサにすれば一種の「前戯」「偽制」となった。そのことについて脇坂心吾は言う。

『それはぼくには屈辱でした。しかし、やがてその屈辱が快楽になってきました。そして、その屈辱的な懇願自体が快楽となると共に、ぼくの中の正常（ノーマル）な欲望は、次第に退化しはじめたんです』と。

インテリ青年脇坂と、五つも年上であるエリサとの恋愛は、こういうものである。そして優しい母性だったエリサが、やがて手のつけられない暴君と変わり、彼の肉体を傷つけることの喜びを見出すまでになる。そうした狂暴な遊びの結果、ついに彼が病氣となり入院してしまう。と同時にエリサの中の「優しい母性」が復活して、ふたりは、それっきり別れることになる。

先に上げた脇坂の言葉は、Mの世界に己れを沈めることで徐々に自己のよろこびや快楽を、外的な刺激を通じて求めていることがうかがわれる。この心理的うごきはM派にとっては、ごく当たりまえなことである、だからその点に関するかぎりでは、とりたてるほどのことはなからう。が、強いて言えばエリサとの出会いや恋愛（関

係）において、脇坂は支配者の側には立ち回れない青年であるということだ。

それは「愛すること」よりも「愛される」ことの方に彼の病氣がやみついていたためであることを示す。つまり脇坂の内部、心の底には、支配する側には立ちえなないとわかれば、反射的に支配される側に回ってしまうこと、作者によれば「階級的劣等感」であり、言葉をかえていえば被虐に生きることになり飼ならされる世界があることだ。

これは小市民的な生き方、その一種の変容ではないか、ということである。自己の持つ「生活圏」を犯されまいとすることも、一つの小市民的な、現代人の病氣であるとするならば、いっぽうでは、背延びしても、ついに征服しきれないと感知すると、逆に自己のすべてを投げだしてしまう。自から支配され、さらには屈辱さえも快楽として受け入れる立場に身を置くことである。

そうすることによって、脇坂の言葉をかりていえば、『ぼくの中で正常な欲望は退化しはじめた』ということである。これは一般的に言っても、かなり重要なことがらであろう。つまり、正常な欲望が退化しはじめた——ということとは、外的刺激によって歪曲されていく人間の姿であり、欲望の変容ということができよう。

変容された欲望は、男女の関係やからみ合いについてだけとり上げると、SM一般であり、また、ホモやレスビアンという同性愛の現象を加えることもできる。そう言った現代人に可能な「愛」の姿勢が、いまの生活や社会から切りはなしては考えられないところ△それらのなか▽に人間の姿を見ることができるといことになる。

これは変態とか、Hとかいう軽はずみな言葉や見方はすまされない、もっと重要な「愛」の支配関係△力▽として、今後の課題に大きく取り上げられるべきところまできているのではないか、ということにもなる。



以上のように見てくると『燃える薔薇』はMの世界の人物を描きながら、同時に現代人の心の底にひそむM的な問題にまで結びつくものがある。

はじめに上げたように、この小説は「私」という語り手を通じてストーリーがすすめられていく。そのなかで「私」と脇坂、「私」と郁子、「私」とエリサという接しよくにしたがい、それぞれの人物について描いている。そして、M派を楽しませるような描写もいくつかでてくる。

たとえば脇坂心吾は、はじめて「私」に郁子を紹介し

たとき、「私」の応接間で彼女の足蹴にざれるところを見せつける。これは「私」に対して大変な無作法でもある。また、郁子がほかの男と関係するのを、ひそかに悦楽すると言った脇坂である。

そういう出来事に出会うたび「私」は、己れの「生活圏」を犯されないので、かれらのために「正常な愛情」を復活させようと手をやく。なぜ己れの「生活圏」にとじこもっている「私」が、そうせざるをえなかったかを考えるとき、あらためて現代人の心の病いについて考えさせられる問題を、この小説は提供してくれる。

だから「私」の懸念をよそに、かれらのからみ合いは、ますます深い泥沼に入ってしまった、「私」をとらえてはなさない。

△私の存在を認めてくれ……私から何十年間の平和な生活を奪わないでくれ……▽とは、最後に「私」が郁子への愛の告白とも取れると同時に、現代人の叫びとも言えよう。

その郁子は、エリサの父、七十歳の老作曲家のもとへ「愛されたい病氣」のために走ってしまう。だから「私」の叫びは、男女のからみ合いにおける支配関係の恐るべき力にひきずられながらも、身を持って突入できない者の慟哭がこめられているのではないか――。



異端の城

文・三鬼 俊 / 絵・中川彩子

一
一七七三年九月の、とある日暮れかた、南仏プロバンスのラ・コスト村のでこぼこ道を長旅の泥にまみれた一台の馬車が駆け抜けて

行った。

「お館に新しい女が来たそうな」

道ばたに馬車をよけた百姓が車窓に若い女の姿を認めて、傍の羊飼いをふり返った。

「気違い侯爵のことじゃ、又、パリから遊び

女でも呼び寄せたんじゃろ。またぞろ地獄そ

このけのドンジャン騒ぎよ」

羊飼いはベツと唾を吐きながら答える。

「ミオラン要塞を出られたのが、つい先じゃちゅうに、性こりもないことじゃ。今度お上



に知れたらバスチーユ行きだで。ルネ嬢さまもあげいな極道者を婿に選びなすって、ほんに難儀なことよ」

「奥方ならあきらめもつこうが、無理強いに女中に召し出された女子は災難じゃ。水車場の娘のアンヌなあ、丸ぼちやの愛想のいい娘じゃったが、召し出されて三月になるというに、とんと音沙汰もねえと」

「役人衆は何してくさるだかなあ」

「ああお館の出入りが厳しゅうては、いくら御役人衆が躍起になったとて、淫蕩三味の証拠もなかなか掴めまいて。アンヌの親も泣き寝入りじゃ」

二人は無然とした面持ちで、向かいの丘の中腹に、夕陽を背に黒々とわだかまっている領主館の方をふり仰いだ。今しも、その黒い影に、先程の馬車が呑み込まれようとしている所だった。

二

ジュリエット・ド・ペルシエは馬車の窓から、刻一刻迫って来る領主館の怪異なたたずまいに眼をこらしていた。

彼女は領主夫人に招かれてパリから来た家庭教師だった。だが、その胸は、新しい職場に対する期待に弾むかわりに、意に反して負



わされた秘密の任務で重くふさいでいた。

彼女が夫人の招きでラ・コスト館に行く事を採知したパリ司法警察は、彼女に侯爵の私生活を探る事を半ば強制的に依頼して来たのである。これははたちを過ぎたばかりの若い

娘には荷の勝ち過ぎる任務だった。

馬車はそんな乗り手の胸中も知らず、轟音をたてて館の跳ね橋を馳せ渡った。

ジュリエットが家人に紹介されたのは晚餐

の席上でだった。

城主侯爵は三十を過ぎたばかりの、すうりとした伊達男で、どこから見ても、これがあの破廉恥な行為の常習者とは受け取れなかった。ただ、絶えず何かを追い求めているような熱っぽく光る青い眼だけが、侯爵全体の与える印象と、何かちぐはぐな感じを与えるのだった。ジュリエットは、自分に世話をまかされた六つになる男の子の事も、傍の小柄な美しい夫人の事も忘れて、城主の一挙一動を追った。

席を立つとき、侯爵はジュリエットに言った。

「この屋敷内の事について、何事でも外部にもらすことは一切つつしんでもらいたい。気の毒だが、手紙には眼を通さしていただく」

ジュリエットの顔に血が昇ったのは、あながち屈辱の為ばかりではなかった。敵中に孤立した恐怖が胸をしめつけるのだった。

こうして教師とスパイの二重生活が始まった。

三

ジュリエットは、手始めに出来るだけ女中に近付こうとしたが、女中たちにはなぜか彼女を避けようとする素振りが見えた。そして



遠くからでも彼女の姿を認めると、手首のあたりを隠すようにして足早やに通り過ぎるのだった。

あるとき、ジュリエットが背後から近寄って来るのを知らずに、洗濯物を干している女中の手首に紫色の、確かに縄で縛られた跡と思われる傷を見つけて、どうしたのかとその傷の出来た理由を問いただした事があった。

手を背中に隠し、真赤になって立ちすくんでいる女中を救ったのは、侯爵お気に入りの従僕ラトゥールだった。

「ぐずぐずしていいないで、さっさと洗濯物を片付けんか」

そしてラトゥールは、威嚇するような眼でジュリエットをじろりとにらみつけた。

その夜、眠れないジュリエットの耳に、どこか地の底からでも、女の悲鳴が聞えて来るような気がしてならなかった。

女中が当てにできないのなら、自分で探るより仕方がない。ジュリエットは隙を見て侯爵の書斎を探る事にした。その機会は意外に早くやって来た。

ある晴れた日の午後、侯爵は珍らしくラトゥールを従えて馬で出かけた。彼女は時をおかず書斎に忍び込んだ。

目指すものは何の苦もなく見つかった。それ

はまるでこんなものは、秘密でも何でもないといわんばかりにデスクの上にひろげてあった。上質紙に細字でギッシリと何かメモしたものだ。読み進む、純潔な乙女は眼もくらむ思いだった。

それは侯爵が行なった「実験」の詳細なメモだったのである。その内容は口にするだにいまわしい、神をおそれぬ悖徳の文字に満たされていた。

そのとき、あわただしくページを繰っていた彼女の耳に、聞き覚えのある声が霹靂のように響いた。

「何か面白いものでも見つかりましたかな、マダム」

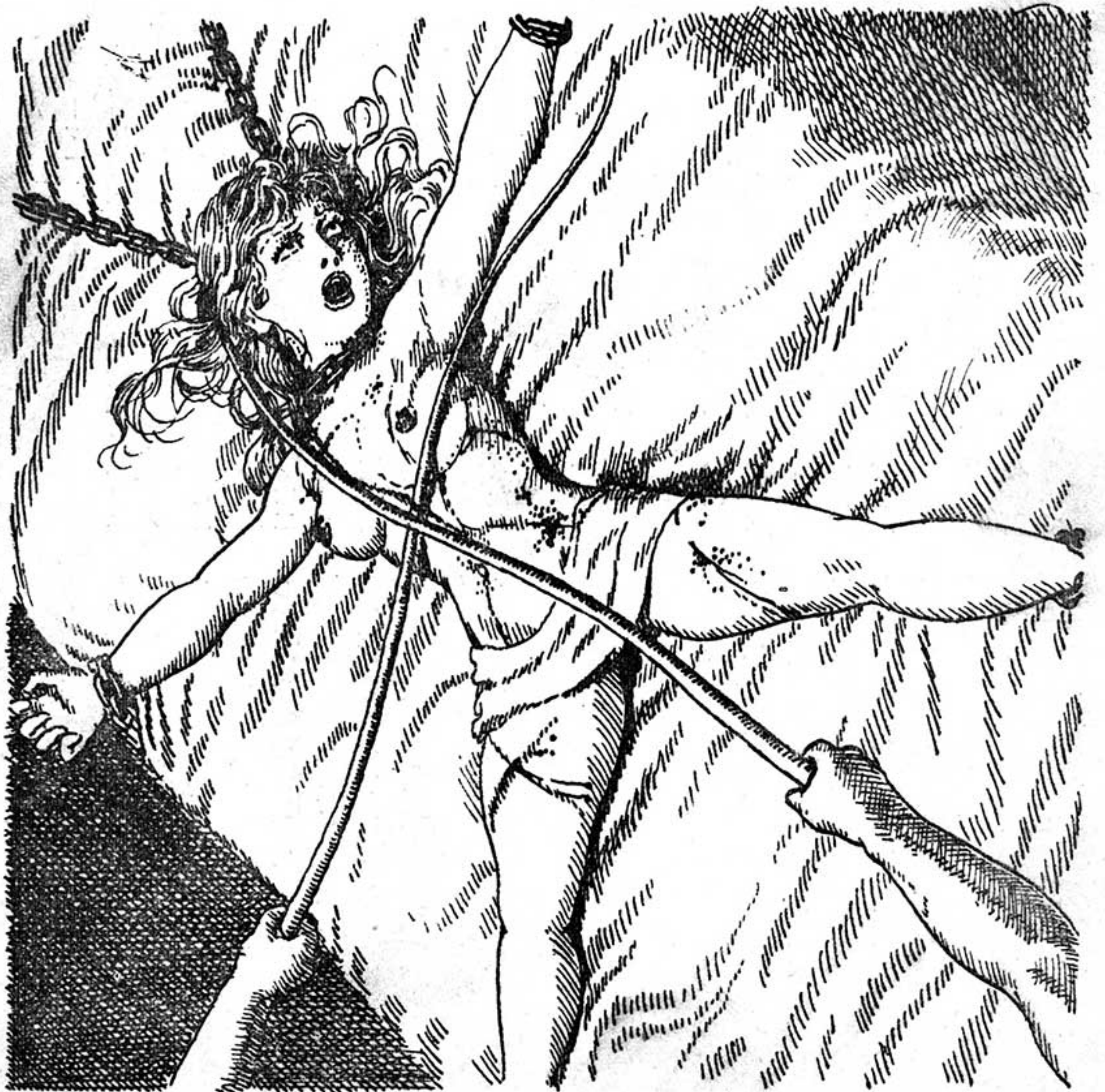
棒立ちになったジュリエットをニヤニヤ笑いながら、傍のラトウールが侯爵に言った。

「殿様のおめがねに間違いはございませんでしたな」

罨だったのだ。

四

ジュリエットが連れ込まれたのは、重ねられた悪業の数々が、壁の石組の間からにじみ出ているような地下室だった。据えられた数々の奇怪な拷問具は黒光りを放って異様な雰囲気をかもし出していた。



侯爵の尋問にジュリエットは固く口をつぐんだまま、答えようとしなかった。

「マダムは、このわしを何を好むか御承知の上でこの館に來たはずだが、口を割ろうとしないのは、身をもってわしの実験台に立つおつもりと見えるな」

小娘の反抗など、へとも思わぬ傲慢な侯爵の言葉だった。

「ラトウール、遠慮はいらぬ。鞭打ち台に御案内せい」

それは、背に革を張った背の高い木馬だった。ラトウールは、もがき叫ぶジュリエットを赤児をあやすようにして、その上に腹ばいにねかせ、手足を木馬の脚に革バンドでくくりつけた。台は一方に傾斜しているので、彼女は尻を高く持ち上げた恥ずかしい恰好になった。

スカートがめくり上げられ、コルセットがゆるめられ、真白なパンタロンを足首の方にずり下げられると、水蜜桃のような初々しい双丘が剥き出しになる。

「ほほう、これは美事な。まだ生娘と見える。これはラトウールに一番槍をまかせられぬ」

侯爵は、その温かく柔かな手ざわりを楽しみながら、悪魔のような微笑を浮かべた。

先の分れた革鞭が汚れを知らぬ柔肌にからみついた。

「ヒューッ」

生まれて初めて知った鞭の味に、ジュリエットは悲鳴をあげた。絹の下着の間からポツカリのぞいた白い尻が羞恥に染まっとうごめくのが、侯爵をこよなく楽しませた。

「ラトウール、よく見ておれ、同じ所は二度打たぬぞ」

侯爵はジュリエットのある悲鳴と流す涙を楽しみながら、何度となく鞭をふりかぶった。

ジュリエットは苦痛と屈辱に身も世もなかった。それに追い打ちをかけるように、侯爵は鞭打ちに興奮して来ると、聞くに耐えぬみだらな言葉を吐き出しては、ジュリエットをなぶるのだった。

打ち手をラトウールと交代して、侯爵はジュリエットの乱れた髪を掴んで顔を仰向けにした。そして、苦痛にゆがみ、涙を流す彼女の美しい顔を興味深かげにのぞき込んで、熱にうかされたように、放埒無恥な雑言を怒鳴った。

ジュリエットが、ついに屈服して一切を白状したのは、鞭打ちの苦痛よりも、処女の耳には、死に勝るこれらのはずかしめのためで

あった。

五

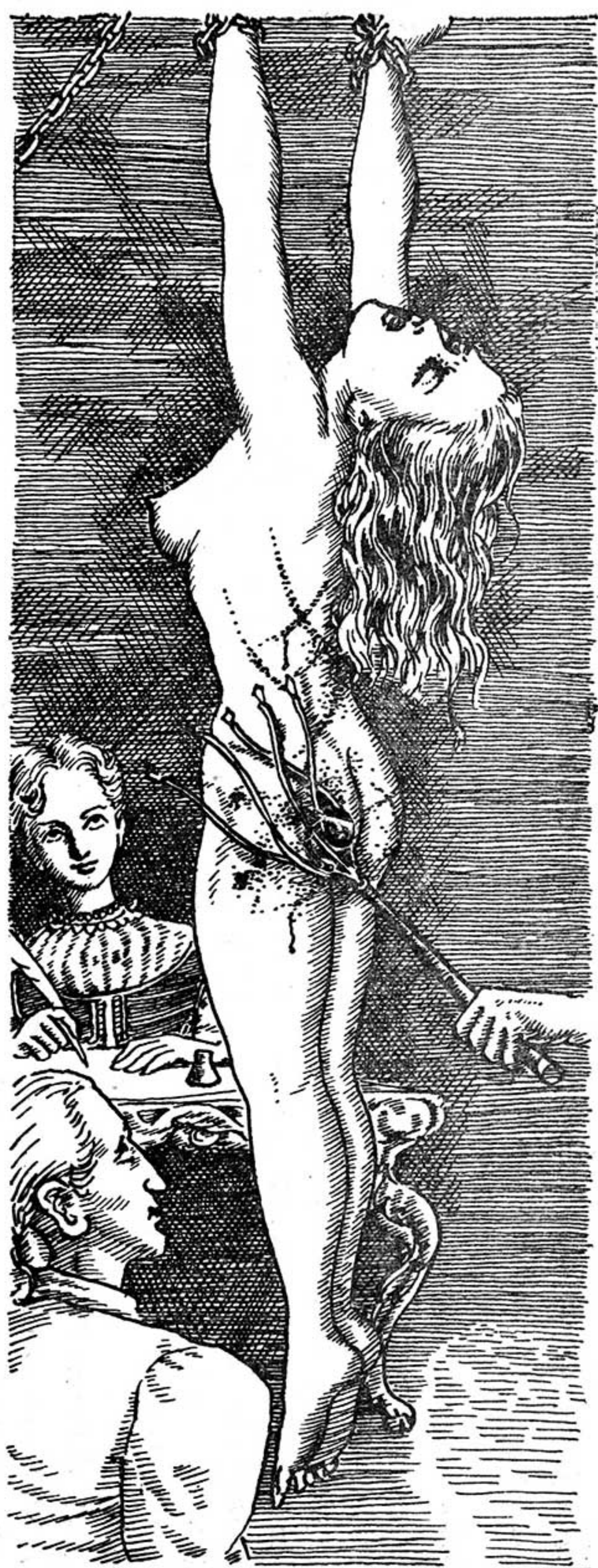
ジュリエットの自白は、苛責の終りではなくて始まりだった。警察のスパイはこうして自動的に侯爵の地下のハレムの一員に加えられる事になった。昼は教師、夜は奴隷の新らしい二重生活が始まった。

驚いた事には、このハレムの監督をしているのは侯爵夫人だった。地獄の饗宴がはじまると、夫人は傍の机に身を退いて、ときどき侯爵が口述する事を筆記するのである。鎖で天井から吊した裸の女を前にして、鞭を手にした侯爵が、興奮にと切れ勝ちにしゃべるのを、居ずまいを正した夫人が書き取っている図は、異様を通り越して気違いじみていた。

侯爵は専ら鞭打ちと、それによって女に生ずる反応、卑わいな言動と、反応する女の羞恥心に、最も興味を抱いているようだった。

ジュリエットも全裸の肌をベッドに大の字に張りつけられて、声をあげて泣く程の羞恥を強いられ、鎖に吊られた体に、あらゆる角度から鞭を加えられて、悲鳴にのどをたぎらせた事もあった。

そして、そんな彼女が翌日になると子供の前に教師として立っているのを見るのが、侯



爵のこの上ない興奮をそそるらしかった。何か口実をもうけては、その場にやって来て、衣服に包まれた彼女の姿態をなめるように眺めまわし、彼女が屈辱に身をふるわすのを見て喜ぶのだった。

ハレムには、女中の外にそこで初めて顔を会わせる女も二、三人いた。その中のアンヌというまだはたち前の若い娘は、ふっくりとお腹のふくらんだ体を後手にいましめられて、しばしば侯爵に責められた。

アンヌが腹の子供の事を少しは考えてくれ

と哀願すると、侯爵はそれが面白いらしく、抜けあがった額に青筋を浮かべ、悪魔のような笑いに口をゆがめて、

「わしの子をわしが責めるのだ。不幸にも生まれおったら、わしを呪うて殺してくれてもよいわ。その方がいっそ面白い」と断言するのだった。

そんな有様を、侯爵夫人はまばたきもせずに見つめている。

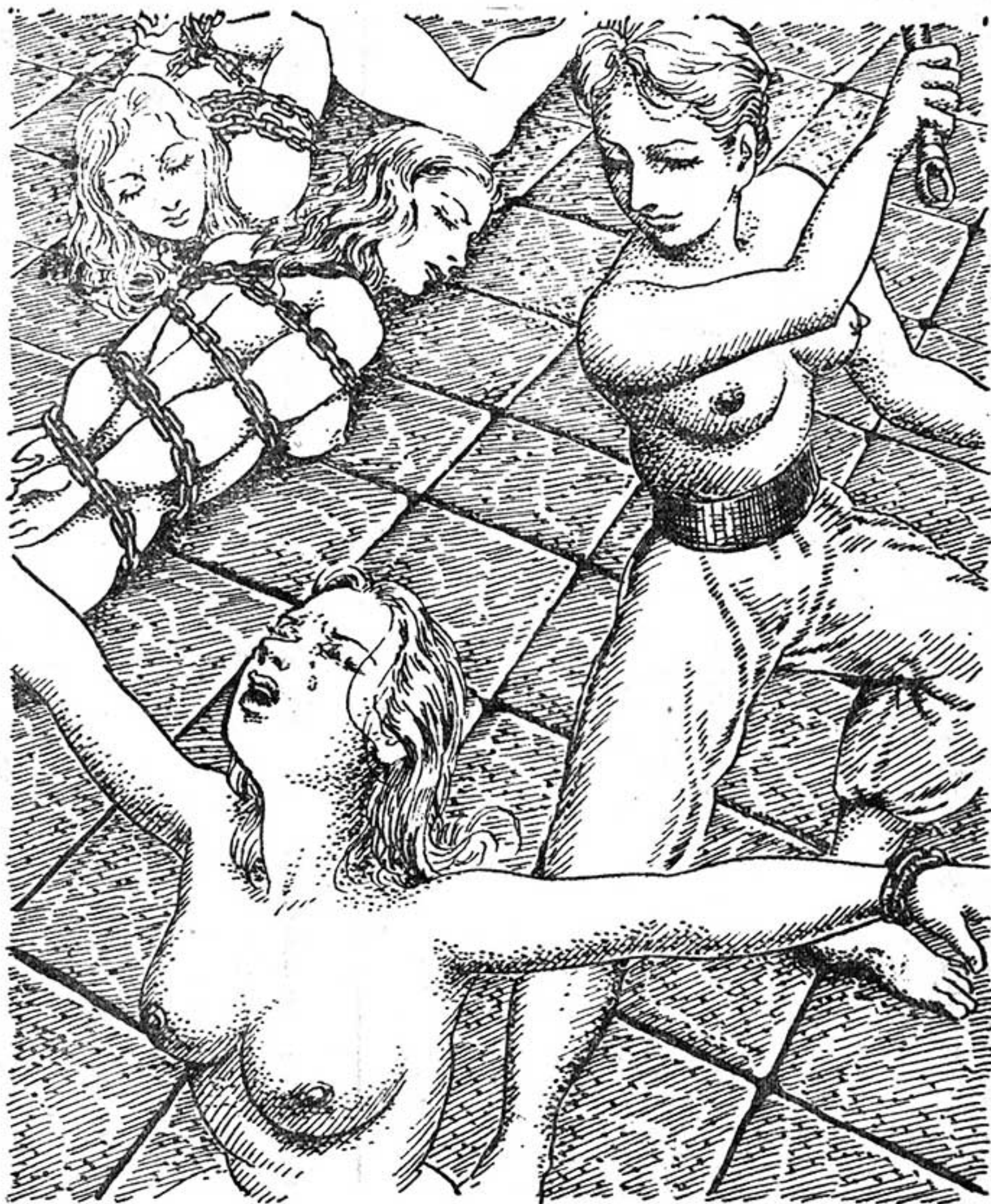
六

ある夜、全裸の体を椅子に縛りつけられて、ジュリエットは得体の知れない薬を飲まされた。眼を白黒させている彼女に向かって、侯爵は平然と言った。

「カンタリスだ。何の薬だかわかるかな」

カンタリス——ジュリエットは恐怖と羞恥で必死に身をもがいた。侯爵はそんな彼女をほくそえみながら見降ろしている。

「それ、体が下の方から熱くなって来るだろう。腹へ、乳房へ、のどへ、そら可愛い唇が開いた。眼に虹がかからないか。天国が眼の



前に見えないか、そら、そら……」

いつ椅子から解き放たれ、鎖で吊られたのか、ジュリエットには分らなかった。眼の前に色彩の渦が飛び交い、体は淫蕩な波に弄ばれて、我にもあらず呻き声をもらしていた。

その何かを求めてうねくる背すじに、細腰に、侯爵の鞭が鮮烈な音を立てて打ちおろされた。

「ああーッ」

一瞬の苦痛が体のとろけるような快感とな

って四肢のすみずみに浸透してゆく。次ぎの苦痛が待ち遠しくなつて、身をよじる。わざとじらすように鞭がおそくなると、自分の声でない声が細く長く、せがむようにのどをもれる。

「どうだ欲しいか、鞭が欲しければ腰をふれ。牝犬め」

豊かな腰が別な生き物のように右に左にみだらに動く。そこに第二の鞭が飛ぶ。

「奥、見たか。これでも上流社会の女なんだぞ」

侯爵の上ずった声で叫んだ。

夫人は顔色も動かさずに、よだれをたらしめているジュリエットの表情に、視線を当てていた。

七

甘美と苦痛の入りまじった一夜の後。ジュリエットは体ばかりでなく心も一変した。責めに対する恐怖と嫌悪が一掃されて、積極的に侯爵の「実験」に協力するようになったのである。そして、自分が責められるだけでなく、他人を責める事に大きな満足と喜びを感じるようになった。

アンヌもシモーヌもピアも、今まで同囚であつたジュリエットの鞭の下に呻いた。そし

■ 見たもの聞いたもの

「怪人カリガリ博士」



無声映画時代の一九二〇年に、ドイツの性格俳優ウェルナー・クラウスの主演で「カリガリ博士」というのがあった。が、この二十世紀フォックスの「怪人カリガリ博士」は、むしろ、それとは、あまり関係がない。

静まりかえった邸の中から現われたのが、濃い口ヒゲをはやした中年男で、これぞカリガリ博士。「こん夜はもうおそいから、泊まっていきなさい」という博士の親切なことばに従って、ジェーンは寝室にはいる。とたんに、ドアのカギが外からしめられてしまう。翌朝、彼女はこの邸にすむ人たちのぜんぶが、色情狂だと知る。博士の秘書がくれたコーヒーをうっかり飲んだ彼女は、そのまま倒れてしまう。ジェーンが浴槽にはいつていると、天井から、ふたつの目が、じいっと彼女の裸身をみつめている……という、スリラー映画。ラストの十数分間に、とんでもないドンデン返しがあるので、これ以上のご紹介は蛇足。「サイコ」の原作者ロバート・ブロックが、脚本のなかに名をつらねているので、ミステリものとしても、たっぷりたのしめる。黒白のシネスコ版。

て、女の裸体が苛責にのたうち、羞恥に染まるのを自分の手で触れ、肌に感ずれば感ずるほど、侯爵に対する理解が増してゆくように思えるのだった。

「ジュリエット、今度はこのわしを打ってくれ」

侯爵は、自分を本当に理解し得る女性を見出した満足に頬をほてらせて、こう言ったとき、二人は真の同体に結ばれたのだった。

一七七七年、侯爵はついに官憲の手に捕え

られ、ジュリエットは不本意ながら「解放」される事になった。

バスチーユ牢獄に収監された侯爵は、ジュリエットに手紙を書き、自分には二度と自由が許される事はあるまいと述べた後で、次ぎのように結んだ。

「あなたと共に過した何年かは、最も良き思い出となって、この不自由な身の生きる力となつていきます。私は今、二人で成し遂げた「実験」の結果をひとつの物語りにまとめる仕事に取りかかっておりますが、その主人公

にはあなたの化身ともいうべきジュリエットという女性を配しました。愚劣な今の世の中は、この物語が活字に組まれる事を喜びますまい。しかし、たとえ他人の目にふれる事がなくとも、ただ私一人の楽しみ、あなたとの良き思い出の記念碑として書き綴って行くつもりであります。

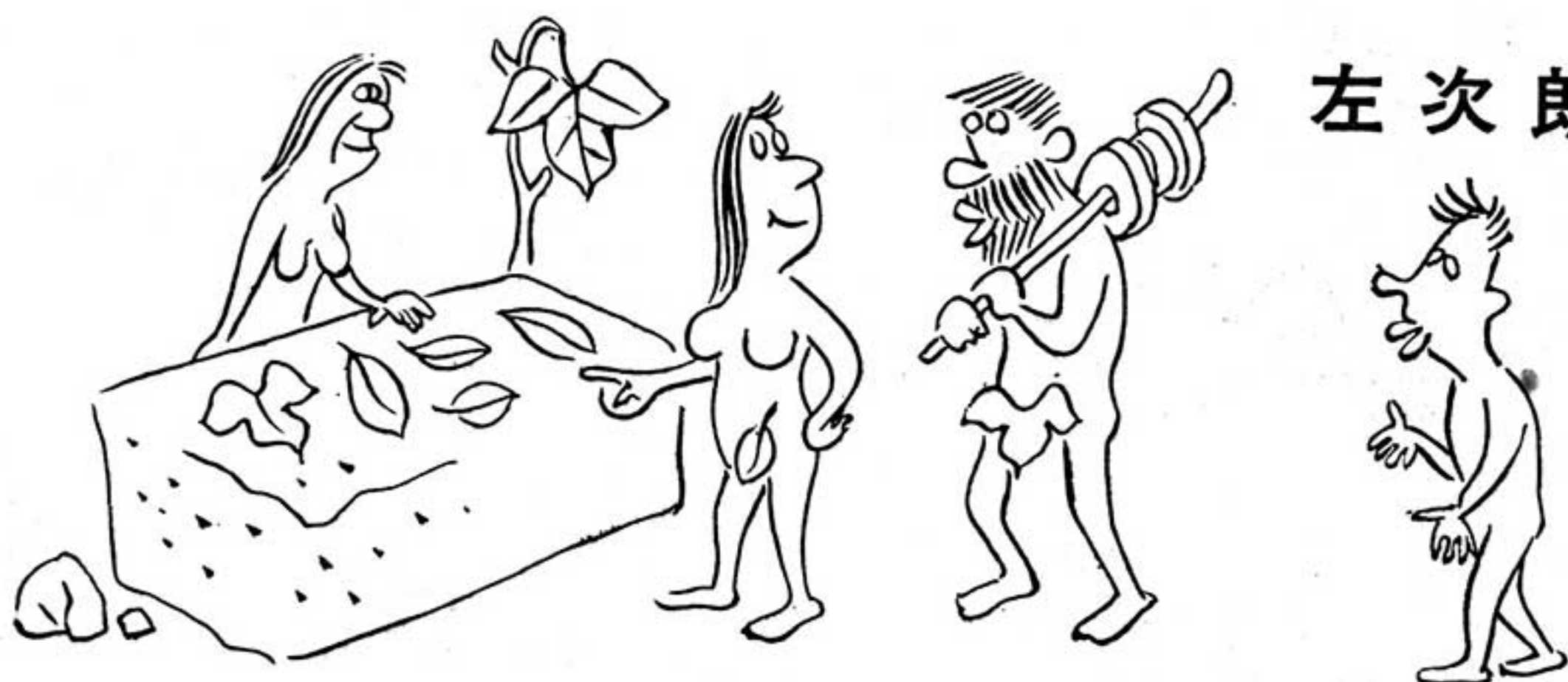
あなたの友にして従僕なる

ドナチアン・マルキ・ド・サド」

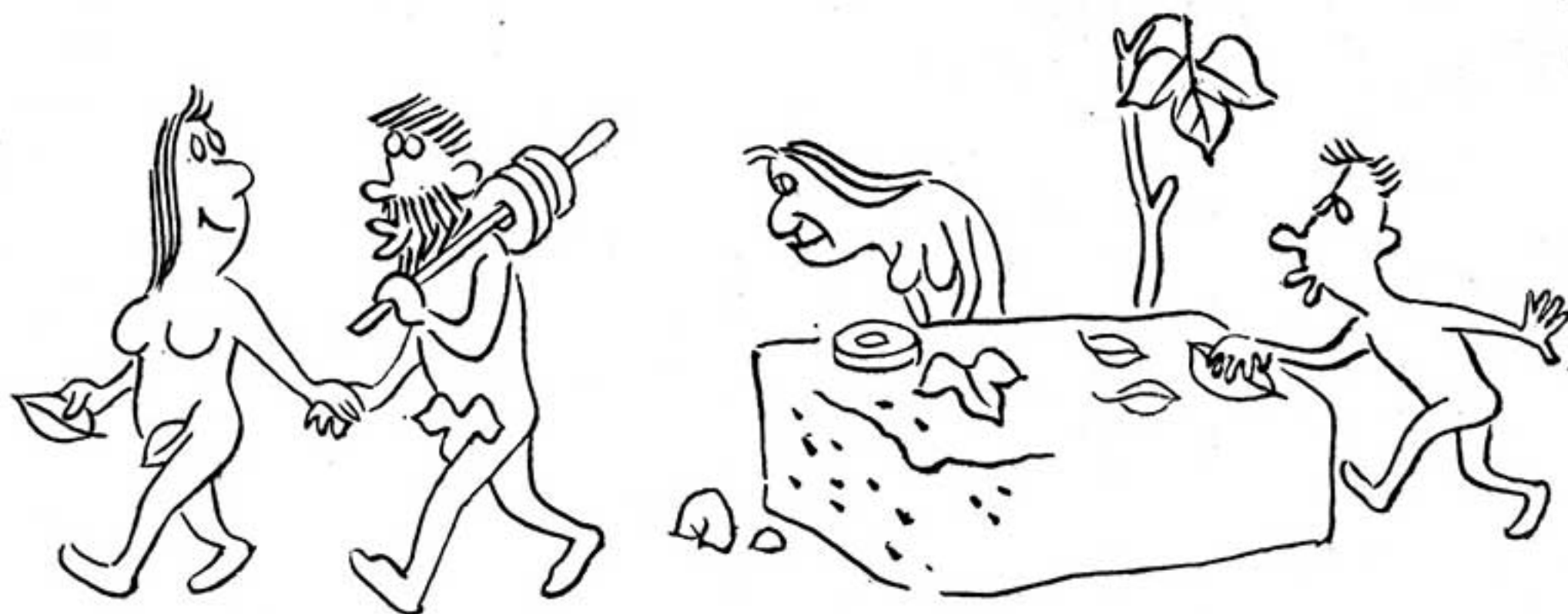
コレハ
オドロ記⑤

葉っぱブーム

左次郎



①



②



そのころ
女の葉っぱを
集めることが
流行した

③ これを見せて
自慢しよう



④ どうだすごいだろう

ハハ
そんなの
価値ないよ



⑤

俺のはちよ
いと
ちがうぜ



⑥



⑦



⑧



⑨

という
わけだ
どうせ集める
なら
使用中
のにしな



⑩

価値ない
ことが
わかったかい
ハハハハ



⑪

エーイ残念
むねん



⑫



よし
奴になんか
負けるもんか
おんや?

⑬



これは
たいへん
ちかごろ
流行の

⑭



ちかんだ

⑮



危機一髪

⑮



そのかわり
これを
もらうよ

⑮

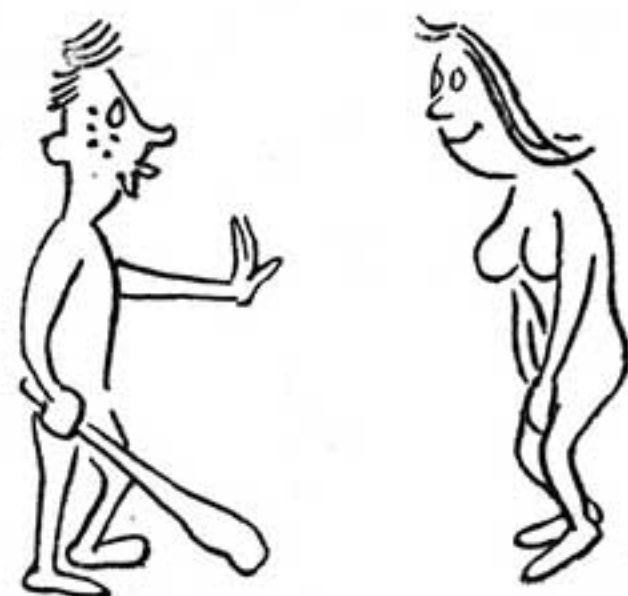


⑮



という
わけさ
どうだい
最高だぜ

⑮



ありがとう
ございました

お礼なんか
いいよ

⑮



そして現代
その後裔が
あらわれるに
いたった

詩人Kの流転角

かびや・かずひこ

秋吉 巒・絵

①

H・Kは東京のS区内で、小物専門のちいさな印刷所を営んでいる男である。

三十八歳、五尺そこそこの短軀と童顔、いつもジャンパーにサンダルばきといったきがるな格好で、私を訪ねてくる。

商人だけに、腰は低く、言葉遣いもていねいだが、そうしたなかになにかものおじせぬ不逞さが、私には窺える。いわゆる、"いん

ぎん無礼"ともいうべき感じ……

家庭はかれより九つ年下の妻とふたりきり。その妻女は、H・Kの仕事のアシスタントでもあり、一家のきりもりもしているわけだ

H・Kはまた、市井の詩人でもある。かれが単に八句Vと称している短詩形のことを多く作るが、ときに長詩形の作品もものする。

そしてその作品には、みずからの同性愛のあれこれをうたったものらしいものが、いくつかみうけられるのは、いうまでもない。

私に示したかれの最近の詩に、つぎのようなものがある。

△ああ、また……

胸の血があやしく炎えさかる
私は野獣ではないのだ

それなのに 何故こうも吠え
つづけなければならぬのが
冷たい雪の夜

月にむかって吠えつづけたあ
のとき

真夏のギラギラした太陽の下
海鬘へむかって吠えつづけた
あるとき

ただ一人のひとを 幾とせも
求めつづけ

この胸の血汐を掌のひらほど
もみせず

ひっそりと愛しつづけなければ
ならない

この業の鞭を悲しくつつんで
きた筈なのに

ああ、また……

あやしくも今宵もあなたの裸
像が迫ってくるV

この作品でもわかるように、H



・Kは、恋愛に情熱を燃やすタイプである。いつの恋愛においてもそうらしい。

H・Kがみずからのホモセクシヤルの性向を自覚したのは、まだ生地北海道にいた思春期であるが、相当に成人するまで、精神的なものであり、それも相手にたいする一方的な、熱烈な思慕にのみとどまっていた。

ホモを肉体的に体験したのは、二十九歳のときである。そのころにはすでに現在の妻と結婚しており、東京で印刷業を営んでいた。

その年の早春、店の公休日の一晩、Kは単身で、フラリと浅草へ足を伸した。

目的はあった。そのころ出刊されていた。『N』という雑誌に、私がかいた都内のゲイ・バーのルポルタージュ風の記事があり、そのなかに浅草のそれにつき「洋服でゲタバキでもきがるにゆける。中年のボーイをおいた店がすくなくないうんぬん」としるされているのをみて、遊心が動いたから、

ということであった。

Kは少年時代から、自分よりはるかに年長の同性に心をひかれるタイプだったのだ。

六区の映画街を通りすぎて、私の文章のなかに記されていた『L』という店をみつけたとき、Kは胸がときめいた。

すぐにははいれなかった。二、三度その店の前をゆきつもとどつした未、ようやく度胸をきめて、入り口のガラス戸を開けた。

店内はおでんや風で、長いカウンターをかこみ、数人の客が杯を傾けていた。

Kが片隅の席に坐ると、一人のボーイがKの前にきて、注文をきいたのち、銚子とおでん皿をはこんできて、Kの杯に酌をしながら「映画のお帰り」

とかなんとかきいた。

それはありふれた愛想の言葉ではあるが、そこらの飲み屋の女がいうのとは違い、同志に話しかけるような親愛さがこもっていた。

Kもしたしげな微笑でそれに答

えながら、はじめて、そのボーイの顔をみた。

年のころ三十五、六歳、中背のいかつい体つき、いかつい顔——ぜんたいに野暮ったい感じの男だ。

このシマのゲイ・バーには、このようなオールド・ボーイ、しかも、ハンサムでもなんでもないのを雇っておくのは、こういう型のボーイをこのむ客がくるからにはかならない。

H・Kもその一人だった。

かれはそのボーイYに、一目で心を奪われた。

胸うちに情炎を燃やししながら、Kはそれから毎夜のように『L』に通い、幾日目に目当てのYにプロポーズした。と、

「嬉しいんですが……だめなんですよ」

と、Yがすまなそうな顔でいった。

「だめとは？」

Kがせきこんでたずねると、Yはチラリとマスターのほうに流し

目を送りながら、Kの耳に口をちかつけた。

そして、自分はこの店のマスター（六十年配）と愛人関係、というよりも夫婦のような関係であること、また自分自身が耳鼻科（老人愛をいうこの道の通語。語源はジジ科を訛ったもらしい）であることを、Kにささやいたのである。

②

対象の相違とあれば、この道では如何ともなしがたい。Kはいさぎよく、Yをあきらめた。

それ以来、かれは、浅草のゲイ・バーの耳鼻科趣味の店を、そこそこ出入りするようになった。

新仲見世通りの『T』を知り、田原町の『U』を知った。六区の『M』も知った。

こうした店には、下町辺の商家の主人らしい中年の客が、よく遊びにきた。それらの一人二人に、Kはひそかな思慕をいだいたこともあった。

Kに『あさくさの空V』と題する

一連の句があるが、それはこのころ詠んだものらしい。そのうちの二、三を挙げてみると――

△絢らん 下駄ぼこぼこの軒の

犬V

△慕情 ひそやかな草履の脚さ

ばきV

二句ともに、男色者の自嘲と矜持とが、たくみに詩われている。

「このあいだ、ひさしぶりに“T”へ行ってみました」

とKはさきごろ私を訪ねてきたときに、こんな話をした。

「マスターはあいかわらず、温顔でゆったりした人柄でしたが、むかしがたりをしていると、幾月の流れの無情をひしひしと感じないではいられませんでした。」

“U”の格幅のよかったマスターも、悲惨な病気で死にましたし、ぼくがほのかな愛情を感じていた、日本橋のそばやのご主人とかいうひと、どうした迷いか、たちのよくない若い男に貢いで、その後、店の経営がうまくいかず服毒自殺をしたそうです。

それから、ぼくが熱愛をささげた“L”のYも、マスターと別れて、T県の妻子のもとへ帰ったとかいうことでした」

懐旧の情にたえない、というよ

うなKの表情であった。話がちよつと前後したが、かれはこのような浅草放浪のうちに、あるとき“T”のマスターから、この店の客のGという中年の男を

紹介された。

四十二、三歳、中年肥りはしていないが、骨太らしいしっかりした体つき、にがみばした、というよりも、ほどよくにがみのおちついた容貌。I県の公務員で、東京へ出張のたびに、浅草のゲイ・バーで一夜の歓楽を買っていくということであつた。

Kはこういうタイプの同性にも弱い。また相手のGも、Kを好んでいるようであつた。

ふたりはしきりに酒を酌みかわした。飲むほどに酔うほどに、Kの情念は沸^なつてきた。Gの瞳も燃えていた。その瞳のなかにとびこ

んでいききたいと、Kは思った。

いきなり、GがKをだきすくめた。と思うや、唇に唇をおしあてた。Gの口のなかにふくんでいた酒が、Kの口内にちよろちよると流れこんできた。

酒はのどを通り、下へ流れおちていく。Pのさきまでもしみとおっていくような、ころよきであつた。

そのままの姿勢で、Kはじつと快感にたえていた。

やがて、Kのしずかな吐息が声となつて、Gのグランスにむさぼりついた。

他の客が自分たちをみていようと、どうしてしようと、Kの念頭にはなかった。

この夜以来、ふたりは逢うごとに愛情を深めていった。すくなくともKは、全身の情熱をかたむけて、Gを愛した。そのころのKの

句二、三――

△接吻のあと、グレイス・ケリ

ーのことなど談せりV

△燃えては消え 骨休まらぬ

日のあかしV

△燃えるのは 花の精か 裸像の影に臥すV

△花抱きしまま 裸像をめぐるある夜更けV

また、Gのことを回想して、Kはつぎのように語っている。

「あのひとのなつかしい体臭……汗かきのあのひとの汗を、私はなんど拭ってあげたことでしょう。拭っても拭っても、深海の藻のよう濡れていた体に、私もくらげのようにまつわりついて、離れませんでした。」

けれど、そのうちに、あのひとと逢うことが、しだいに怖ろしくなってきたのです。それは、私の全身全霊をもつての愛情でも、あのひとのすべてを、“私だけのもの”とすることができないことを覚^きつたからでした。

そのときばかりは、あのひとが死んでくれればいいと思ひました。そして、冷めなくなつたあのひとの死骸に、自分が恍惚としてほほずりする姿を想いうかべたも

のでした」

恋の瞬間々に、Kは花火のように運命をかけていたのだ。

が、この言葉でもわかるように、

このころには、Gとの烈しい恋も、それが烈しいだけに、はやくも終局がちかづいていることを、Kは覚っていたのである。

そしてその終りがきた。

③

ゲイ・バーで男色の相手をもとめることは、たやすい。相手が自分とおなじホモであることがわかっていいるからだ。

しかし、純タチすなわちホモのケのない男性を、ホモの相手にもとめることの難しいことは、だれしも推察できるだろう。

ところが、この純タチを愛の相手とすることこそ、おおかたの男色者の理想なのである。なぜ、そうなのか——答は簡単、純タチこそもっとも人男Vであるからだ。

もともと純タチめいた同性、とくに野暮なく、不美貌な、男臭い

男をこのむKは、ゲイ・バーの遊びで度胸がついたためか、Gと別れて以後、純タチのなかから愛の相手をさがしはじめた。

「さがしはじめた」というと、なにか計画的のよういきこえるが、そうではなく、ホモの相手なしではいられなくなったKが、周囲の正常な男性に眼をとめはじめたのである。

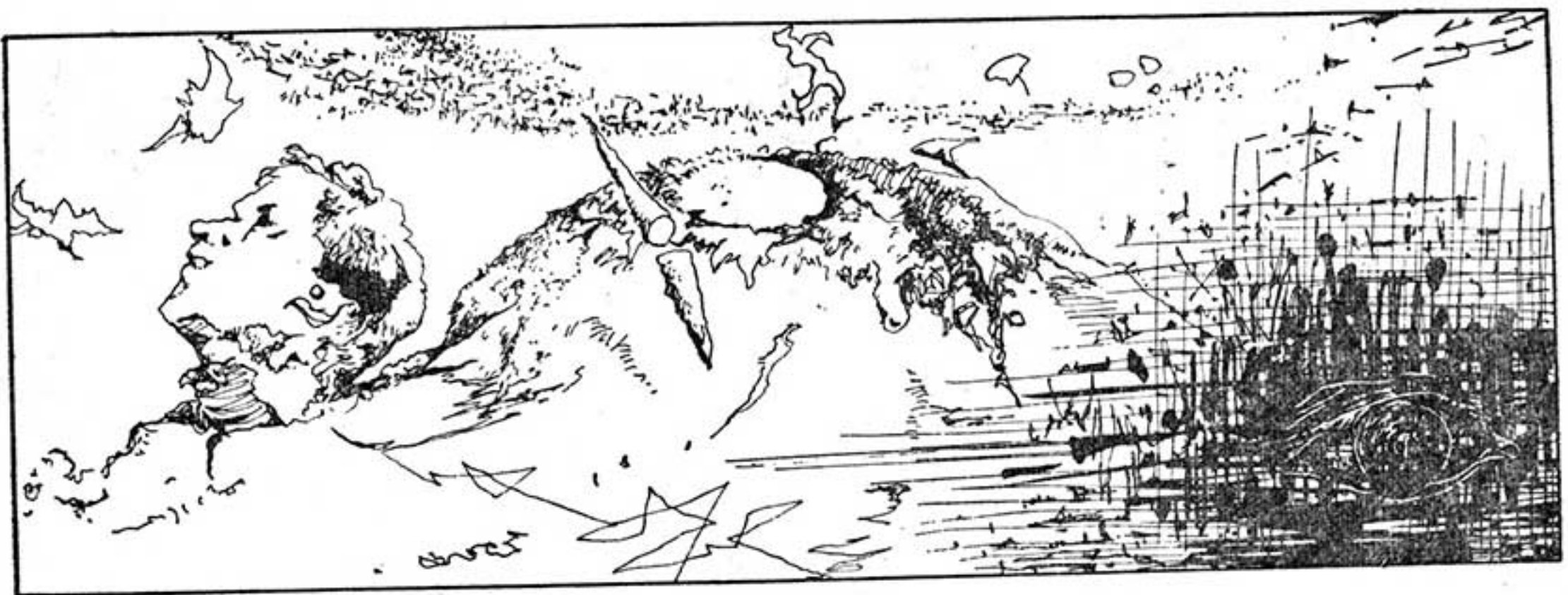
そして、まず、目にとまったのが、かねて心をひかれていた、おなじ町内に住むNとよぶ商店主。五十がらみ、Kのこのみのタイプの男である。

その年の秋、町内会委員の一泊旅行のとき、KはNといっしょになった。「この機会にこそ……」とKは心をきめた。

一行は目的の温泉地の旅館につき、入浴の後、銚子を傾け、夕食をすませると、また湯につかりにゆく者もあった。

Nが浴室へ立つのをみると、Kはすぐそのあとについた。

ふたりは、いっしょに脱衣をし



て、浴池にはいった。

「いいきもちですねえ」

Kはそういいながら、Nにちかよったが、その股間に手を伸ばした。

「りっぱな道具だなあ……」

Kは感嘆の声を発した。

男同士のPのつかみあい、あながち男色者でなくとも、友人同士などでふざけ半分によくやることだ。少年時代にはもちろんのこと、相当いい年令のおとなのあいだにも、酒に酔ったときなどにはままみられる。

あいてのNも、おそらく、Kの酔ったまぎれのじょうだんと思っただのだろう、

「やあ……どうも……」

などと微笑いながら、べつにKの手を払いのけようとしなかった。

Kは陶然たるきもちだった。

私は多くの男色者から、これと似たような経験談をよくきくが、こうした場合、かれらの頭は、かならずといってよいほど、自分に

有利に考える。つまり、自分自身のそうした行動にたいして、相手が黙ってなすがままにまかせているときは、相手は自分に好意をもっている、とうぬぼれてしまうのである。

否、こうした場合のみでなく、ホモの交際において、男色者は相手の心理を読みとれないことおびただしい。頭が自己本位にかたまっているのだ。

男色者の告白や手記が、なまの貴重さをもっているとともに、一方また、第三者の冷徹な判断を必要とする所以も、ここにあるのである。

さて、Kのような美術的天分の豊かなものでも、そのご多分にもれなかった。いや、美術的天分が豊かなだけに、そうした独断がいっそう甚しかった、といいかえたほうがいいだろう。

KはあいてNの自分にたいする好意を、すっかり過信して、有頂天になり、Nのからだからいつまでも手をはなそうとしなかった。

それのみならず、Nにたいしてその場で、おのが思慕を告白さえしたのである。そのときNは、「ありがとう。好いていただいて嬉しい」

といった、とKは私に語っている。

それから二日ほどたった日、NからK宛の親展の封書が届いた。さっそくKがひらいてみると、

「自分のような者をすいてくれるご好意はありがたいが、自分はそうしたことに全然関心のない人間だから、このことはあきらめていただきたい」

という意味のことがしるされていた。

付度^{そんたく}するに、NはKから思慕をうちあけられたとき、そのケがなただけに、事の意外にギョツとしオゾケを振るったのではなからうか。

しかし、相手がおなじ町内の者なので、恥じをかかすのもわるいと思い、その場は婉曲にとりつくろい、あとから手紙でことわった

ものなのであろう。

つぎにKが心をひかれた純タチの男性は、かれの家のちかく交番に勤務している警官であった。

その警官Sは三十二歳、いなかになかした感じの、ものがたそうな男である。

戸口調査などで、Kの家にときどき顔をみせるSに、Kはほれてしまったのだ。

Sの立っている交番の前を通るときなど、Kが目礼すると、Sもにこやかに微笑ってこたえる。そのようすは単なる辞礼的なものではない、あいても自分に好意以上のものをもっている、とKは確信をもった。

その後あるとき、Kは、家族調査にきたSと、店の上りかまちで雑談をしていたか、そのうち、心にもえあがってくる情炎をどう抑えようもなくなった。

さいわいに、妻は外出して不在だった。Kは会話のなかに、それとなくSにたいする愛慕のこぼれをもらすと、いきなり、あいての肩をだいて、接吻した。

このときのことを、Kは、「Sは拒絶しませんでした。いやむしろ、受諾の反応がみとめられました」

と私に語っている。

また、接吻のあと、Sは「男からこんなことされたのは、はじめてです」とKにいったということだ。

やはりSも自分を愛していたのだと思い、Kは確信を強めた。

その後のSの態度は、前とすこしもかわらぬようにみえた。Kが交番の前を通るとき、Sはあいかわらず、親しげな微笑をKに送ってきた。

と、それから一カ月ほどもすぎたころ、Sの姿が交番にみえなくなった。別のみなれない警官が勤務していた。

Kは心配になって、別の警官にSのことをたずねた。

「Sさんは他の署に転勤になったのです」

とその警官は答えた。



なぜSは自分に黙って、他へ転勤したか——その理由をKは、も

のがたいSが、自分と秘密の交際

をすることを、自分の妻にわるい

と考えたからだ、と自分にもSに

も好意的な解釈をしている。

が、この場合も、KがSから愛
されていると信じているのは、か
れの独りよがりであると私は解す
る。

いずれにしても、Kは、愛撫の
形態は受け身らしいが、思慕する
相手への求愛は、きわめて積極的

であり、攻撃欲・征服欲がすこぶ
るたくましいのである。

④

その後の初秋のことであった。

Kは、店の公休の日に、妻とその
弟を同道して、葛飾のY町の海へ
沖釣りにでかけた。

船頭を雇った。三十がらみ、浅

黒くやけた二の腕にモンモンなど

いれていたが、すこしもやくざっ

ぽさはなく、むしろ野暮くさい感

じの、ブッキラボーな男。腰から

臀にかけての線が、ぴんとひきし
まって美しく、Kを魅縛した。

Kは一目でその船頭Rにほれて
しまった。

かれのこのみの対象は、警官の

Sあたりから、年令がずっと下降

したらしい。老人愛はさほど膠着

したものではなかったのだ。

そのときは妻や弟といっしょだ

ったので、Rにたいして、なんの

意志表示もせず、そのまま帰った

が、数日すると、妻には所用と偽っ

て、単身でY町へでかけRを雇い、

海のうえでRをかきくどいた。

「おれにはかかあがあるんだ。そ
んなことでけん」

Rはそういつて、拒絶した。

「ほくにも、あんたも知ってるよ
うに、女房があるよ。しかし、男
と男との愛情は、それとは別のも
のだ。あんたはそういう経験がな
いの？」

「ねえ……だが、お客さんはそれ
ほどおれをすいてくれるのか」

「もちろんだよ。あんたに怒られ
て、海へつきおとされもいい決心
で、このことをうちあけにきたの
だ」

「そうか……おれはいままで、そ
んなに人からすかれたことはね
え」

Rはなにか考えこむふうであっ
た。Kはここぞと、さらにはげし
くくどきよった。だいたいがまじ
めなKだから、熱情が面に溢れて
いた。

ついにRは、Kの強烈な情熱の
前に降服し、首をタテにふった。
その日はやくも、Kは船頭を旅

館に誘って、情をまじえた。そのとき、Rに歓びの反応があった、とKは語っている。

以来、Kは月に一、二度の程度で、Rと逢って歓をかわし、また金銭的にもかなりRに貢いだようである。

Rとの愛撫をうたったものらしいKの詩に――

△愛しき きみのいれずみ

今宵もふるえて われを抱け

り

いれずみ 魔物のごとくわが

魔羅をさぐれり

やがて新しき地図 いれずみ

を彩り

はげしきキスのあと きみは

優しく睡る

また、つぎのような句もある。

△フエラチオ 薔薇の座にひか

るV

△エレクション 雲の無限につ

ながるV

△ファルロス 月の雫のただひ

とつV

このRの場合は、だれにも多少

は潜在しているホモのケが、前項のNやSの場合のような嫌悪感なしに、Kによって開眼されたものとみていいだろう。

Rとの交情は、一年ほどつづいたが、もともとは男色者ではないRなので、その後全くかれと交わりを絶つにいたった、ということである。

⑤

このようなKの長年にわたる男色行動を、かれの妻は全くきづいていない、とKはいつている。豪語している、といってもよいほど確信的にいうのだ。

私はこれには大いに疑問をもっているのだが、それについてはここにはしるすまい。世の男色者の妻にたいして、警告文をかいいてい

るのではないから……。

また、Kは「妻をこよなく愛している」といつている。精神的にも肉体的にも……。

「それはあなたが妻にかくれて男色行動をしていることの、妻にた

いする、贖罪的な愛情ではないのか」

と私が問うたところ、Kは、

「けっしてそうではない」

とムキになって否定した。

Kがホモの愛人によせる手紙の形式の文章のなかで、妻にたいする愛のこころをのべた一節があるので、ぬきがきしてみよう。

「私は妻帯者なのです。むろん妻をこよなく愛するものです。このまずしい生活をきりもりたててゆく、彼女のけなげな真情を思った瞬間、私のこころは、この上もない幸福感にみちあふれるのです。

あなたと交歓のあと、みなぎる汗をぬぐって、暗い星空をみあげたとき、ふっと私は彼女のことを眼にちらつき、悔悟の涙で胸をぬらしました。早く家へ帰って、ざんげの十字架に自虐したい衝動にかられたのです」

「いま、これを書いているすぐ傍で、彼女は洗いものを整理しています。△こんな夫婦Vはそうザラにはないでしょう。彼女に、この

△秘密Vを知らさないだけでも、私は最も不倖な夫となるのですが私はこの償いのために、彼女を愛しているわけではありません。ほんとうに、女の愛らしさを、忍従のやさしい掌の温かさを、ひとしお感ずるのです。

ああ、あなたは嫌悪の情を示していらいっしやる。なさけないフェミニストとけいべつなさる。それもいさぎよく甘受しましょう」

「この矛盾、二つの愛の世界を同じ身に宿すことは、一体どちらが真実なのでしょうか。

しかし、私はこの小さな体で、しんけんに真の愛情を吐露したいと思いつているのです。

二つの真珠――これを得ることができたら、この上もない倖せですが、あなたにとって何という迷惑なことでしょう」

■裏窓忍者絵物語

伝忍女木朽説妖

島本春雄・文 鬼頭 暁・絵

① 簀の中

雲間を洩れた月光が、京口門、上舟渡、下舟渡、同心口……と、細長い帯のように流れる由良川の水面に反射して、まるで幽界の川のように、蒼白い不気味な色に染めあげていた。

朽木三万三千石・福知山城の城

壁を音もなく伝いおりて、水かさ増した由良川を泳ぎ渡った男が、対岸の簀の中でホッと一息ついたとき、月はふたたび雲間に隠れ、天も地も川も墨一色に塗りつぶされた。

異変は、この闇の中で発生した……。殺気の爆発と、刃と刃の激突！ 何者かが忍び装束のこの男

を斬ろうとし、それを受けた刀が闇空で火花を散らしたのである。

焼け鉄の匂いが鼻を衝いた。

（——相手は四人、しかも女ばかり？ むむ、朽木の女忍衆か）

相手の正体を見やぶったとき、江戸隠密の多胡源十郎は、その足首に激痛を感じ、はつきりと敗北を意識した。



② 巨木の美女

朽木領下六人部の田舎道を、埃にまみれて一人の男が歩いている。

それは奇妙な男であつた。

歩きながら、たえず口の中でブツブツ意味のくみとれぬ言葉をつぶやき続けている。しかも、一歩踏みだすたびに、その身体が左右に大きくゆれた。これは右足が縮んで、かなり目立つ跛のせいであり、その上、さらによく見ると、左耳が斬り落されて、耳朶の姿がなく、左手の指もまた親指と第二指を残すのみで、あとの三本は付け根から消えていた。

しかし――

ひよこたん、ひよこたん……そんな感じで歩きながら、その歩度は常人のそれよりもはるかに速かつた。

一陣の埃風が吹き抜けていった。

「ふふふふ」

真塵巻きを背負つたこの乞食男が、いきなり含み笑つたのは、一昨夜の光景を思い出したからである。

綾部領に近い山の中で、うら若い美女を巨木の枝から逆吊りにして、そのむき出しの柔肌を心ゆくまで責めさいなんだあのときの光景を……



③ 隠密執念

「ほざけ、朽木の墨付はいずれに隠した？
たとえ耳を削ぎ、指を落し、足の筋を抜いても吐かせてみせる。このおれは跛ですんだが
そうなりや、うぬは躰になるぜ。耳なし指なしの躰女忍か、うふふ」
思い出し笑いを続けながら跛男は歩いている。跛男——それは朽木の女忍に襲われて、命だけはとりとめた多胡源十郎の変り果てた姿であった。



④ お墨付狩り

將軍吉宗は、諸大名を押さえるために、お庭番隠密を諸国に放って、お墨付狩りを実行した。神君家康公お手渡しのお墨付——所領安堵のそのお墨付をたてに、ともすれば傲然と構える十数家の大名から、問題のお墨付を奪ってかれらを青菜に塩の状態にしてくれようというのがその目的であった。

多胡源十郎は朽木藩潜入を命じられ、首尾よくお墨付を奪ったが、由良川の藪で朽木の女忍衆に奪いかえされ、復讐の鬼と化している。傷いえた半年後、この男は朽木女忍の一人を襲って、陰惨な復讐の牙をむいたのであった。……



⑤ 四諦の女忍

朽木家には、近江朽木の地頭職以来、湖水女忍の血を連綿と伝える水忍者——四人の女忍が仕えていた。

苦女、集女、滅女、道女——四諦からとったこの四つの名を代々伝えて、苦女は城の北を、集女は東を、そして滅女は南、道女は西を警固するのがならわしとなっている。

由良川簀の暗闘に破れて京へのがれた多胡

源十郎は、寛文九年以来、朽木家の家臣となっている永住隠密榊原越前からの密報により、朽木のお墨付は、四人の女忍のいずれか一人が秘匿していることを知った。

城内の宝庫に戻すより、女忍の一人に托したほうがより安全と判断したのは藩主の朽木候だったという。

しかし、城中に幕府の永住隠密がいたので、この奇策も筒抜けであり、復讐に狂った多胡源十郎は、京を発して、まず手はじめに

東の守りとして綾部領に近い山屋敷に住む集女を襲った。集女は〈鬼〉と化した源十郎のあらゆる加虐にも屈せず、ついに口を開かなかったが、最後の火責めには、抗しきれず、「お墨付は水に……」

と、謎めいた言葉を洩らして絶命した。

「——水、水……水……」

多胡源十郎はつぶやきながら、ひよこたんひよこたん歩いている。次の目的は、朽木領の南で忍者守りにについている滅女であった。



⑥ 洞峠の甲賀刀

隣藩柏原領から朽木領の南へ入る洞峠の嶮道に粗末な茶店がある。

この茶店を守るのは、美貌の女人であり、その名を、めつ——といった。朽木女忍の一人、滅女である。

この女の眼をかすめて、洞峠から朽木領へ潜入することは不可能にちかい。

しかし、跛の源十郎が、この峠道をのぼっ

て来たのは、領内からである。ここに滅女の油断があった。しかも相手は偽装の跛乞食でなく、あきらかに不具者と見えたのだ。

「み、水を……おめぐみくだされ」

跛乞食の源十郎に、あわれっぽい声でせがまれた滅女は、この男のあまりの変貌に、それと気づかず、湧き水を溜めた桶のほうへ身をかがめた。

多胡源十郎は、この一瞬の〈虚〉を巧みにとらえた。

背に負った蓑巻の中には甲賀刀が巻きこまれてある。源十郎の右手がその櫓を握り二本指の左手が背後から滅女の首に巻きついた。

「あつ、む……む……」

「動くな！ 動けば甲賀刀が、うぬの脇腹をつらぬくぞ」

甲賀刀の刃先が、事実、滅女の脇腹を浅く突き、にじみ出る血に濡れはじめていた。

「ふふ——ふふ」と源十郎は嘲笑した。



⑦ 汚辱の滅女

「うぬらのために、生れもつかねえ片輪者となった多胡源十郎だ。見ろ、手を、耳を、足を……くそつ、甲賀者の執念がどんなものか……どんなものか……どんなものか……」

歪んだ顔を、さらにねじまげた源十郎は、どんなものか——と叫ぶたびに、縛りあげた滅女を引きずり廻した。その黒髪を掴んで、茶店の前の土の上に、美しい滅女の顔をこすりつける。

「ふた目と見られぬ顔にしてやる！」

源十郎の眼は妖しく光っていた。

⑧ 水……水……水

近江湖水族の血と修法を伝える滅女も、復讐に狂った源十郎の、その邪悪な加虐の手には抗しきれなかった。

そして、集女と同じように、

「お墨付は水に……水、……水……水……」

と、謎のような言葉を残して失神したのであった。

「水——水……水。なんのことだ。水がどうしたというのだ？」

失神した滅女を洞峠の洞の一つに閉じこめて、多胡源十郎は峠をくだった。



⑨ 水透破の儀式

忍者備えの西守りは朽木女忍衆の中で一番若い、十六才の道女である。

道女は榎原口の脇にある女人屋敷で起居していた。朽木の女忍は、十六才になると、子をもうけるために発生はっしゅの地近江におもむいて当地の水透破（湖族ともいう）の族長と、しとねを共にする。

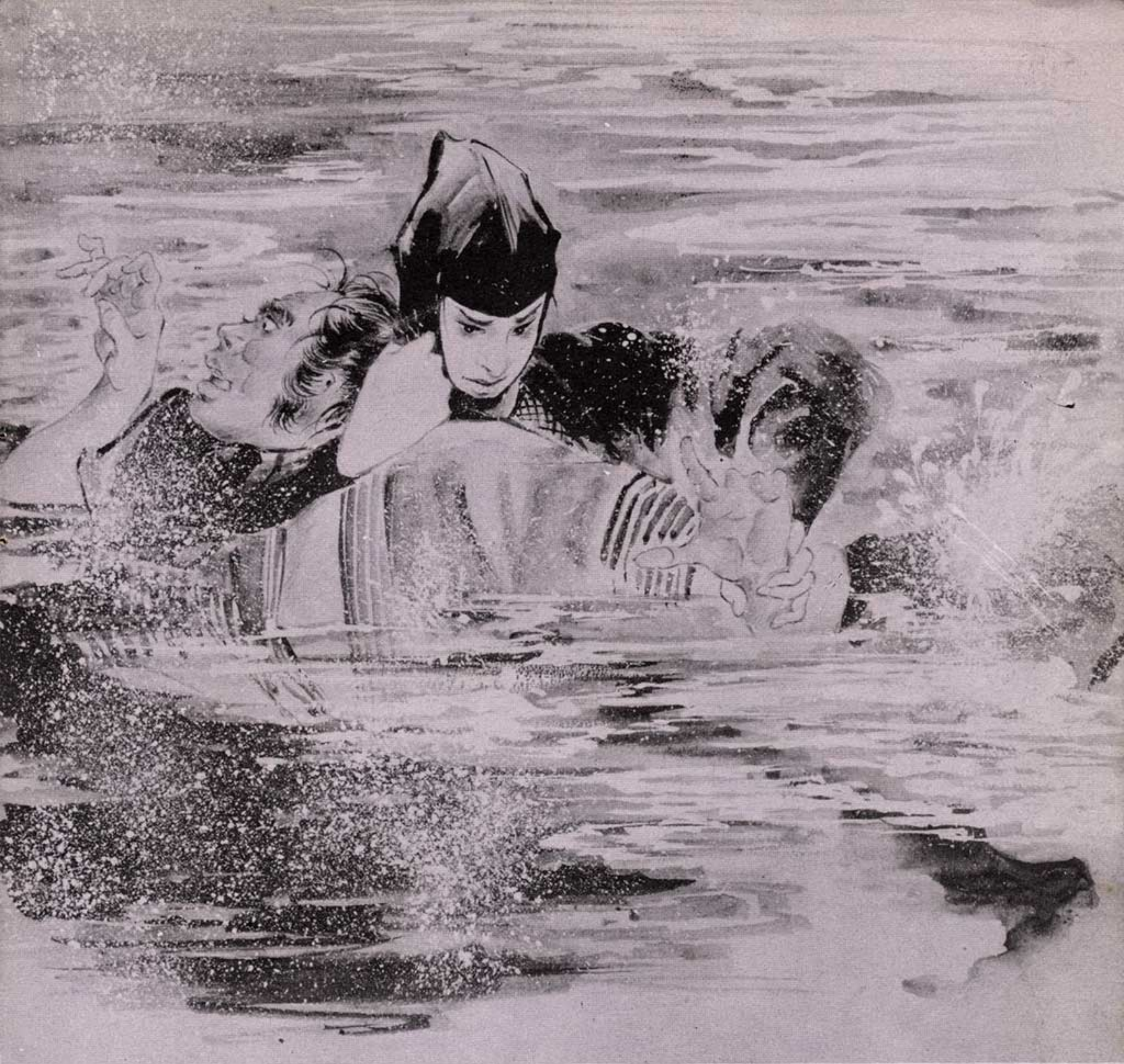
この破瓜の儀式を終えて帰国した道女は、生れてはじめての心の動揺と、羞恥と、違和感のために疲れ果て、ぐうすりと寝込んでいた。

跋隠密の多胡源十郎は、壁を破って、この土蔵のような女人屋敷へ浸入したのだが、ふだんの道女ならば、枕元に忍び寄られるまで気づかずに寝入っているようなことはなかったろう。——しかし、この夜は、ハッと気づいたとき、すでにその首筋を源十郎の二本の指で押さえられていた。

女人屋敷は、その地下に朽木藩の武具の一部をたくわえてある。源十郎が女忍の道女を、あのいまわしい乳房縛りでいためつけたのは、地下の武具庫へ移行してからであった。

乳房が醜惡な珠と化す地獄責め——やはり、道女も、屈服せざるをえなかったようだ。





⑩ 水地獄

「水……水……水……。やっぱりわからねえや。どいつもこいつも、それ以上はなんにもしらねえとほざきやがる。けっ……いいさ、残る一人が本能寺にきまつてる。たとえ八つ裂きにしても、朽木のお墨付は取りかえして見せるぜ」

多胡源十郎は由良川の岸に立った。雲間から月光が洩れ、足もとの川は冥府の流れのようにな蒼白く不気味に光った。

朽木の女忍衆最後の一人である苦女は、北備えとして、由良川の川小屋に住んでいる。跛になった源十郎は水に弱く、用意した小舟で由良川を渡ろうとした。苦女の住む川小屋は対岸にあるのだ。

小舟は川の中流に來た。異変は、このときに発生した。小舟が突然左へかしぎ、続いて横転したのである。流れの中へ抛り出され、水を吞んだ源十郎の首へ、背後から柔かい腕が巻きついて來た。

「うぬは、苦女ノ……く、く、苦女……」

わめき、もがきながら源十郎は川底深く沈んでいった。「お墨付は水稻荷の祠の中さ」という、苦女の嘲弄するような声を最後の記憶として、多胡源十郎はその生涯を終えた。

ミッドナイト

カメラ…吉田 久



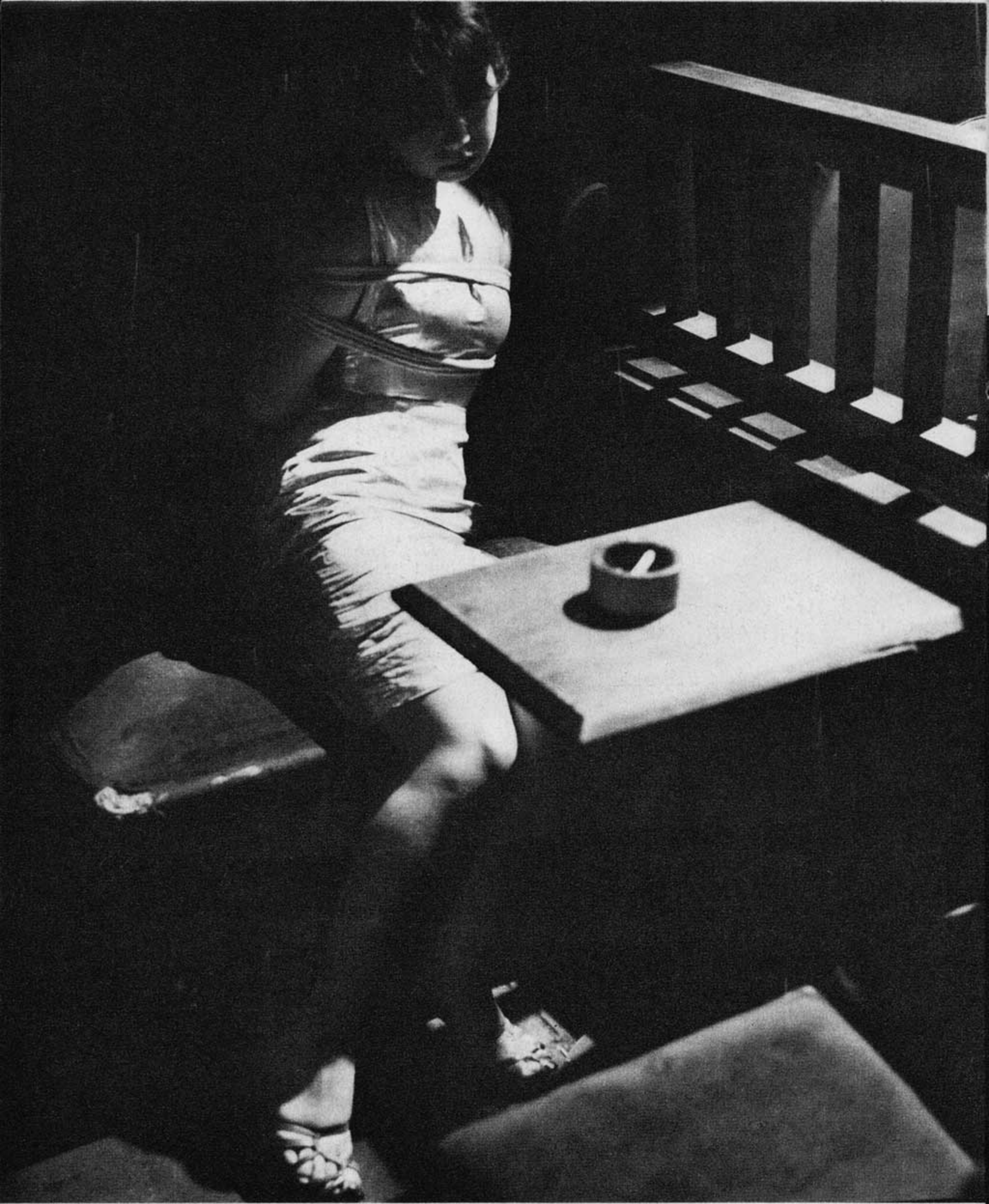
モデル…高野晴子

エダ・キリコ







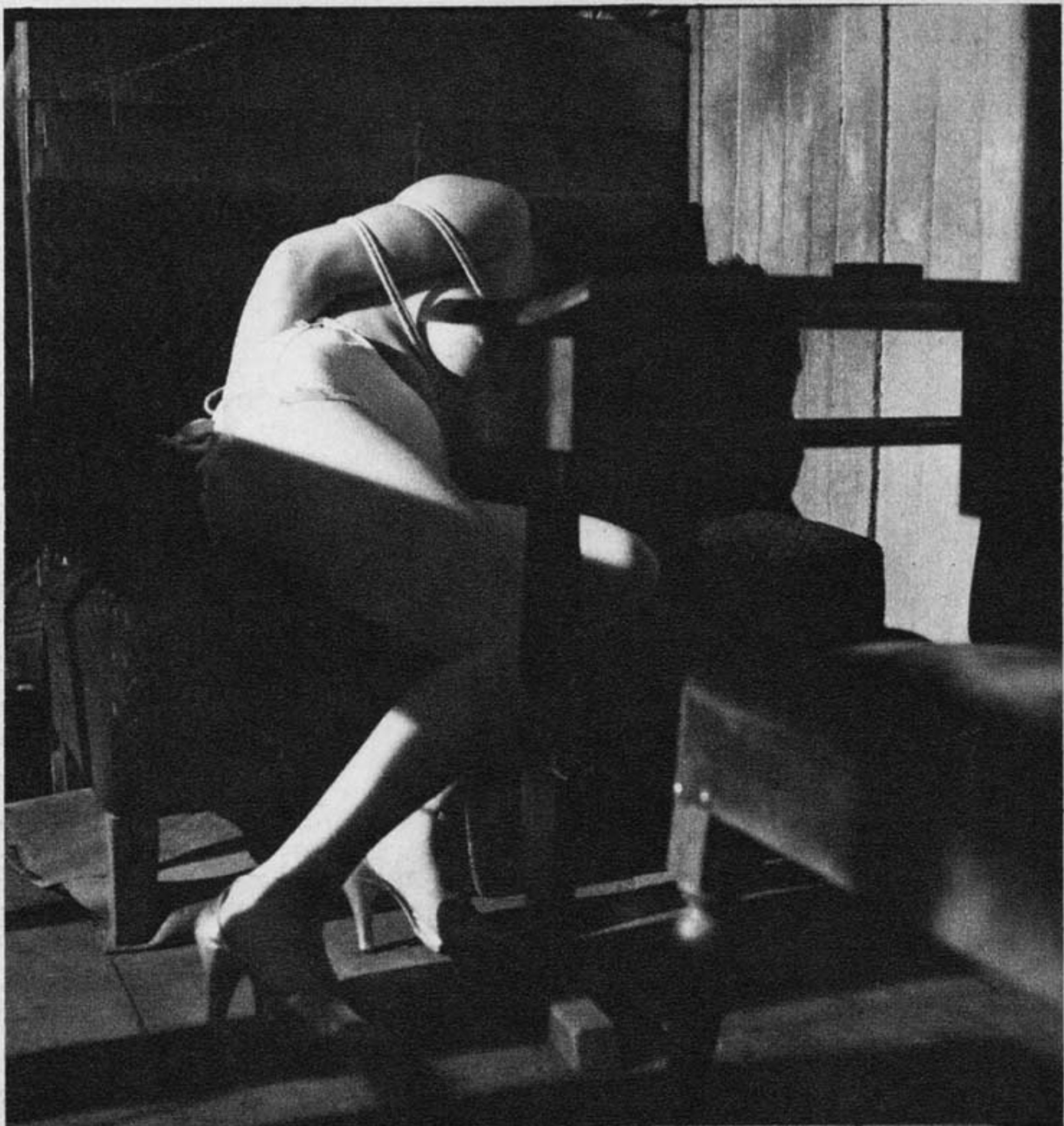






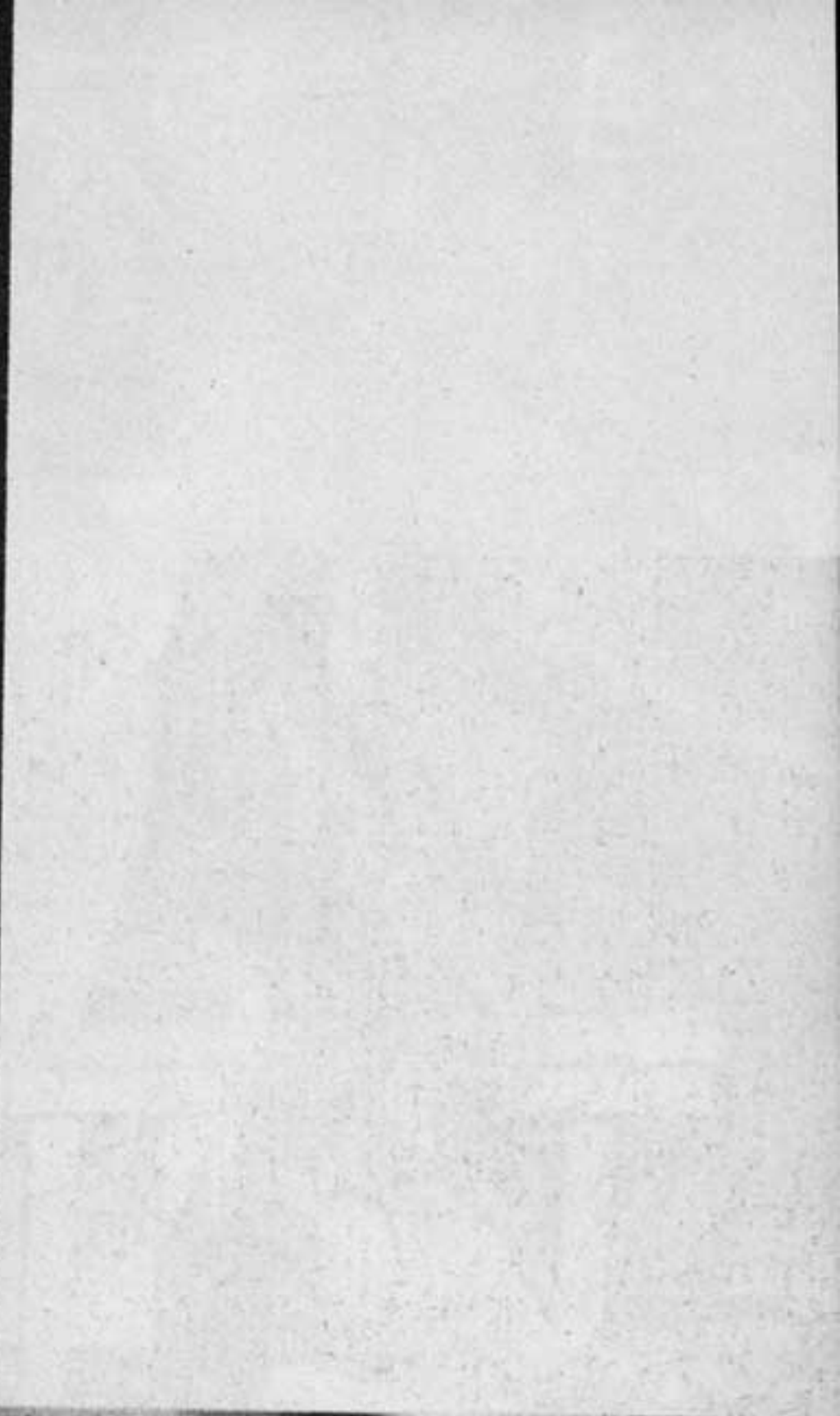




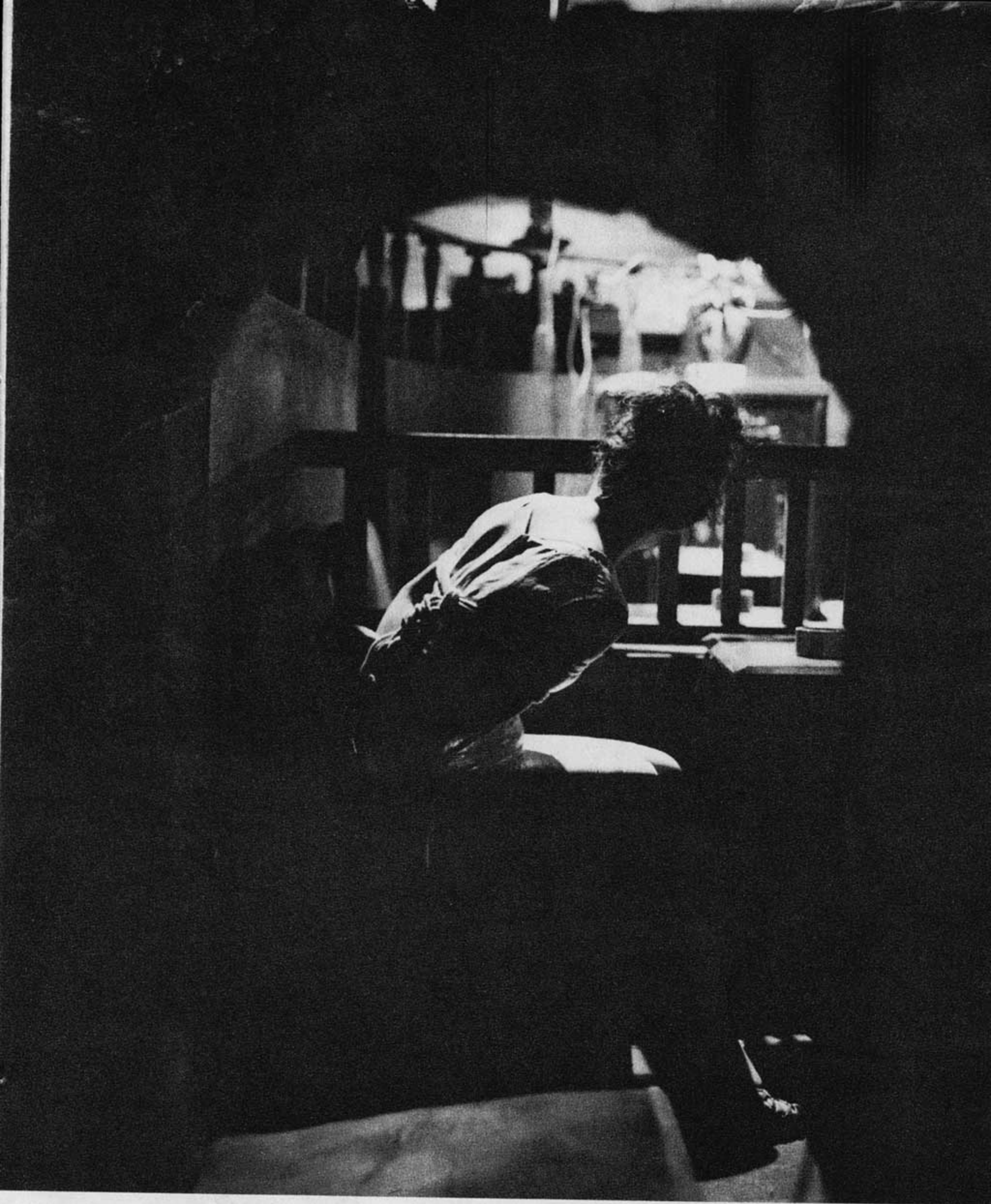








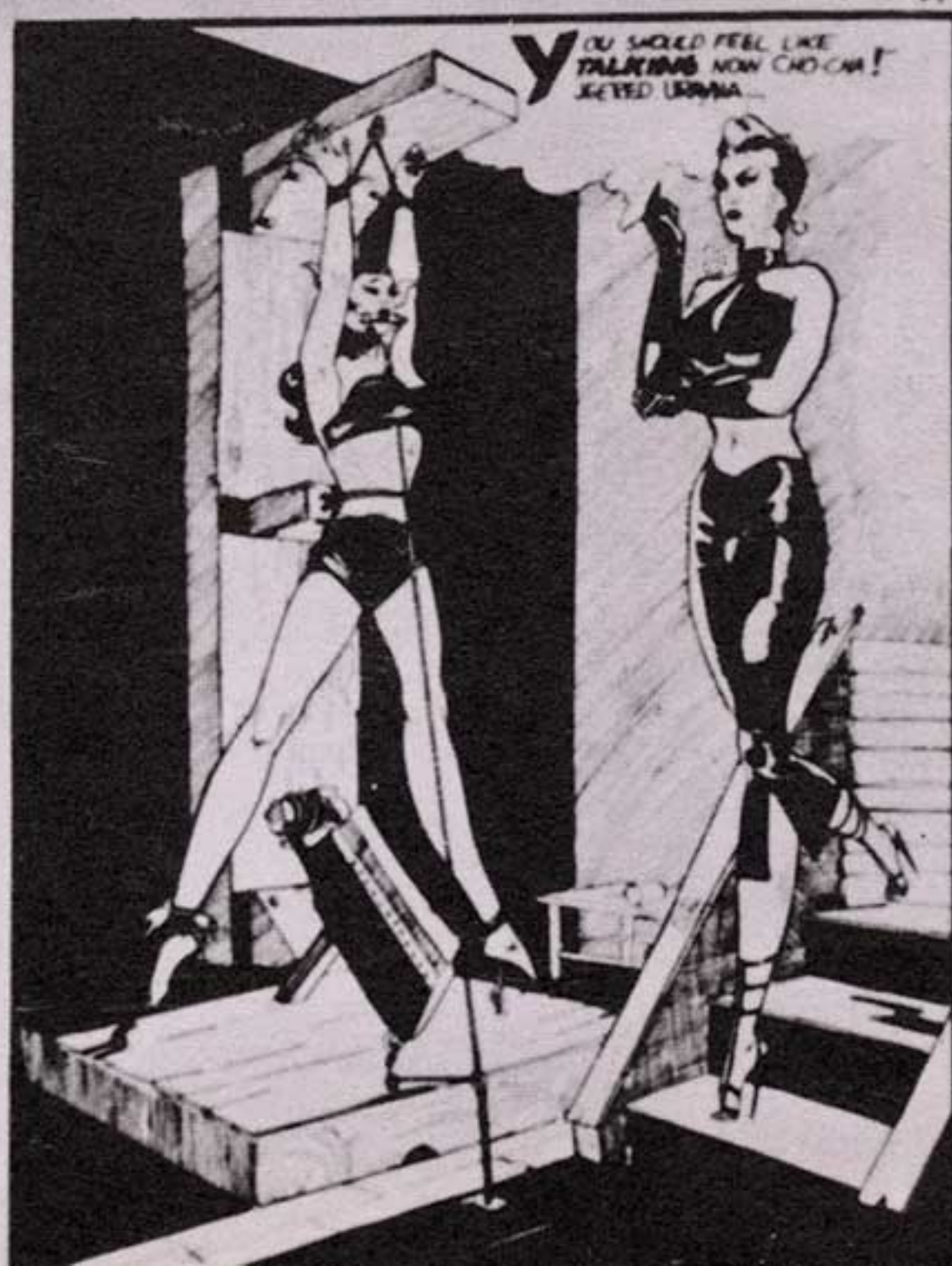




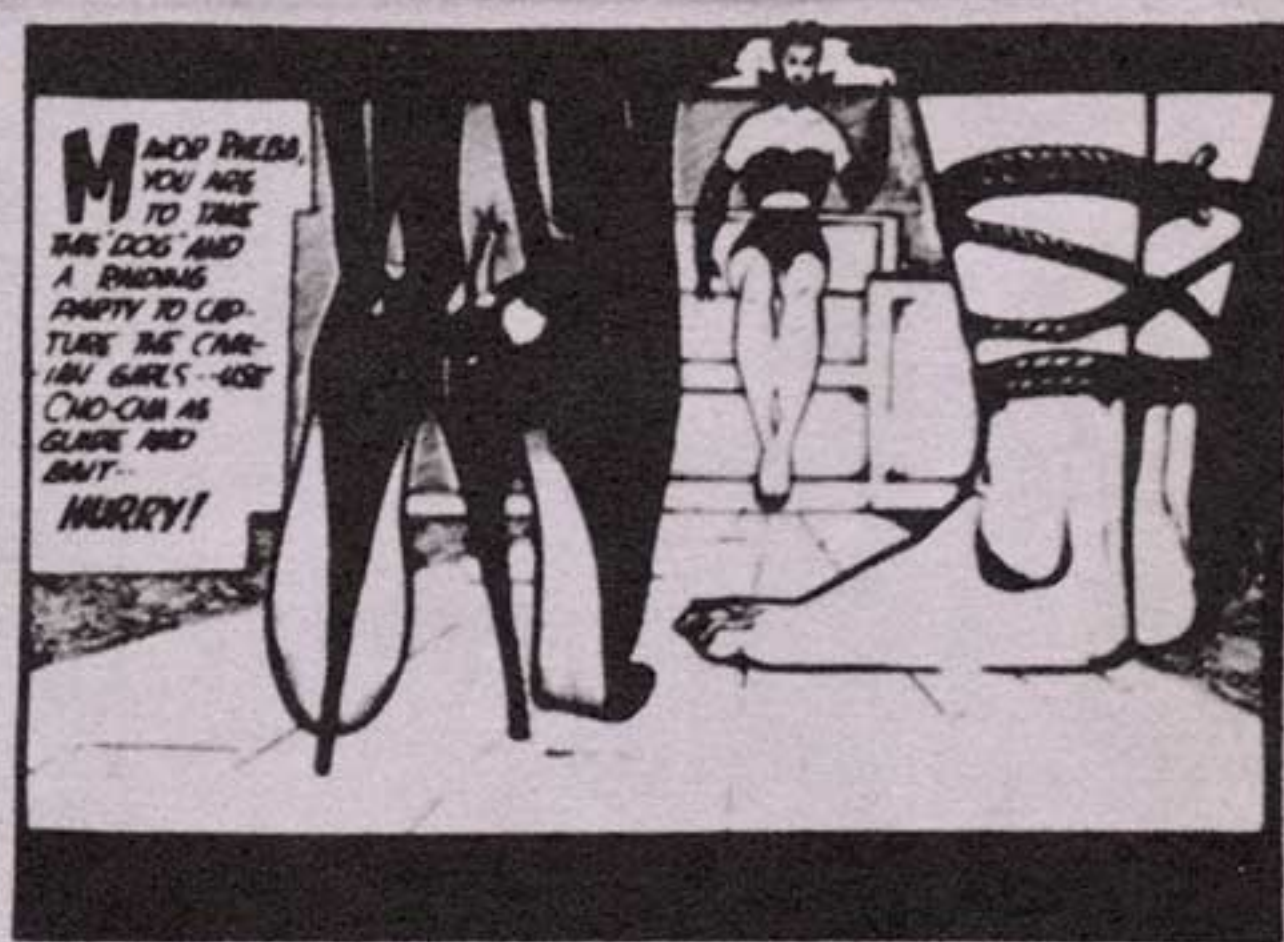
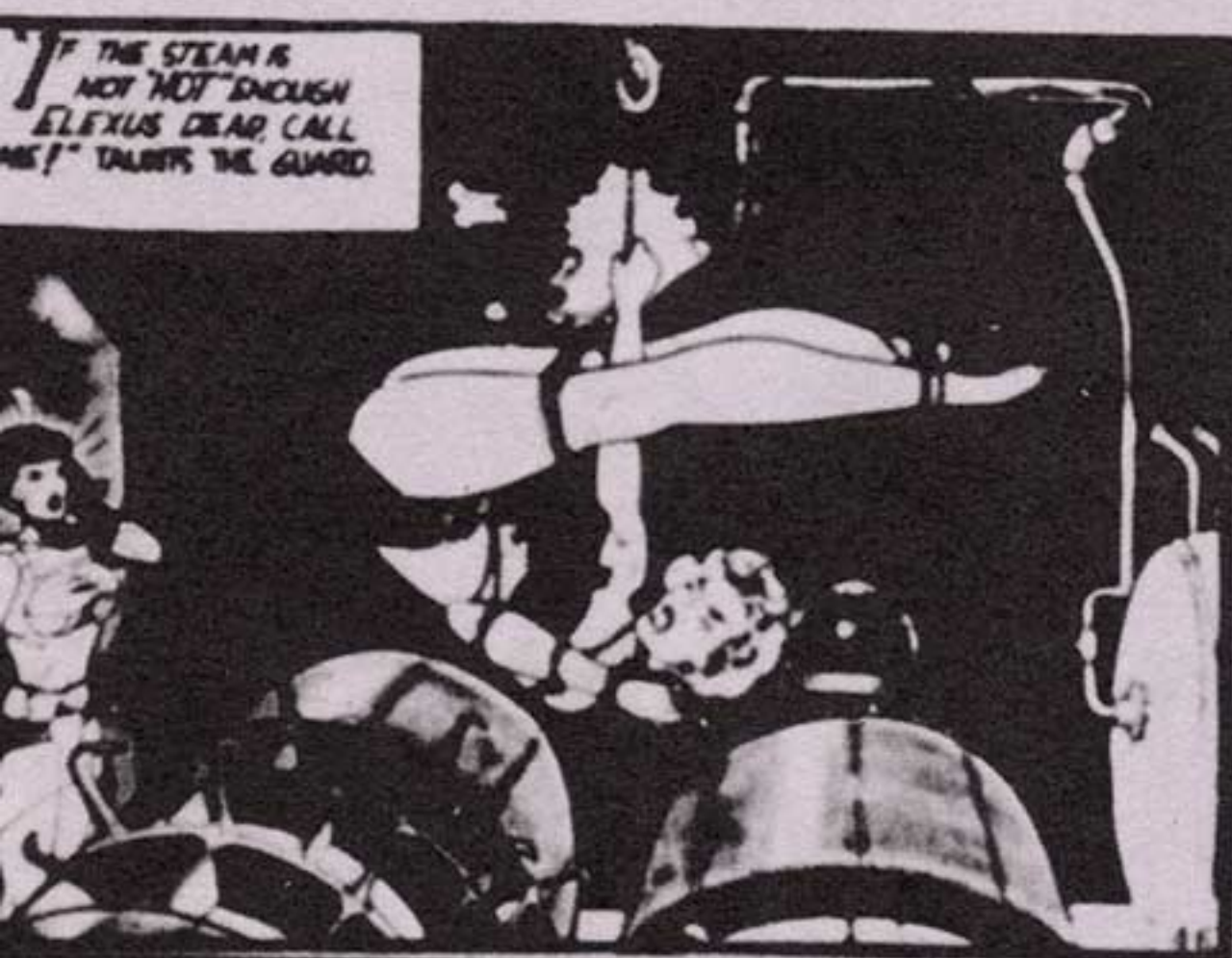
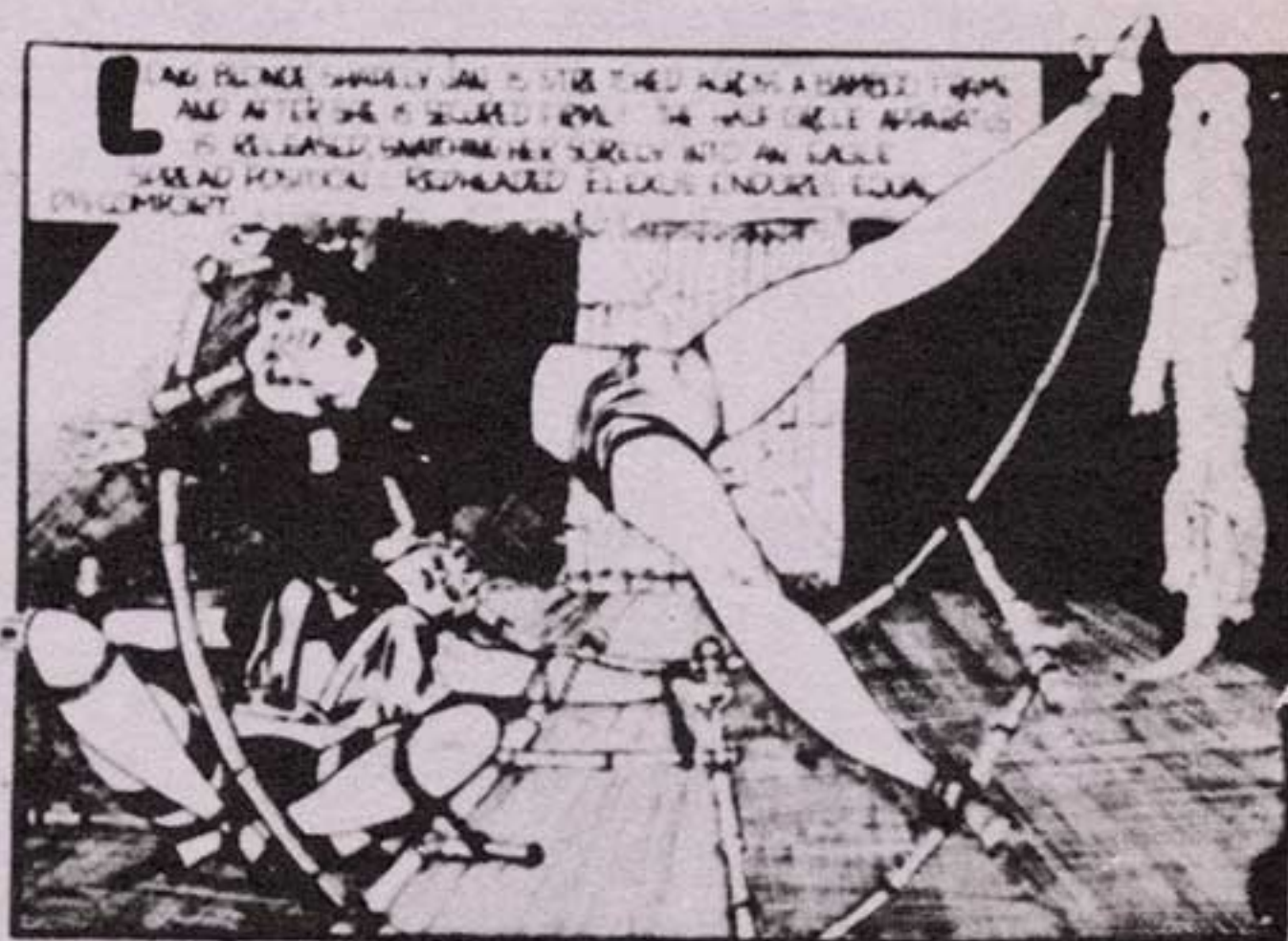
海外 S M 絵物語 より



38



フェニクス商会・特約





10



JANS ORDEAL EQUALS HER COMPANIONS. "IF URANNA DOESN'T HURRY TO SEE YOU, I'M AFRAID THERE WON'T BE MUCH OF YOUR FACE LEFT... ROPES TIGHT ENOUGH?!"



O'CHEELA, VOLUPTUOUS LEADER OF THE SAVAGE TRIBE, TOYS WITH HER FAVORITE PETS WHILE "CHO-CHA", WITCH DOCTRESS BRINGS THE NEWS OF THE CAPTURED PAIR. "CHANDA M'BOKA" (BRING FORTH THE CAPTIVES) ORDERS O'CHEELA.



MAJOR RHEBA AND HER RAIDERS SPOT THEIR QUARRY. "ATTACK!" SHE ORDERS.



35

ON THRU THE INTERIOR OF THE HUGE CASTLE OF URAYNA, O'CHEELA'S WITCH-DOCTOR CHO-CHA IS LED TO REPORT HER NEWS.



27



PRINCESS ELAINE'S TERRIBLE FATE.



A ARRIVING AT THE GALLEY, THE PRINCESS AND HANDMAIDENS WERE TO BEAT THE BOAT CAPTAIN. SINCE ALL MEN OF CYPRUS HAVE BEEN KILLED YOU MUST USE THE MAIDENS TO DO YOUR WORK. REPORTS 24-45



C WITH GLORIA JONAH AND THE OTHER CYPRUS CAPTIVES ARE TIED TO THE OARS OF THE HUGE GALLEY. HAVE FOR DAYS THEY WILL SUFFER THE ORDEAL OF POUNDING THE SHIP TO WOODS.



E ELAINE A SALTED GAS PLACED IN HER MOUTH AND A JAG OF WATER JUST OUT OF REACH IS PLACED IN A TINY CELL. IN FRONT THE VESSEL FIGHTERS WILL BE ANGRY UNLESS YOU SURRENDER YOUR GOLD. THIS WILL LOOSEN YOUR TIGER.



D DETERMINED TO FORCE MEN FOR ELAINE TO SURRENDER HERSELF AND THE TREASURE THE ROMAN PRINCESS HAD NO MERCY ON THE CYPRUS RULERS FOLLOWERS.

B BY ORDER OF HIGH PRIESTESS LUCRECE EVERY CYPRUS SLAVE GIRL IS BEING AND MARCHED TO THE ARENA.

PRINCESS ELAINE'S TERRIBLE FATE.

A THE PRINCE OF THE ROMANS... THE SMALL SLAVE OF CYPRUS WHO KILLED THE FEW REMAINING ROMANS UNDETERMINED BY THE ROMANS... BUT THEN THE TIDE IS TURNED BY AN ARMY OF ROMAN SOLDIERS WHO CAPTURE ITS KILLER, PRINCESS ELAINE AND THE MOST BEAUTIFUL MAIDENS... THE PRINCESS IS TO BE DELIVERED TO THE VESTAL PRIESTS FOR THEIR ANNUAL SACRIFICE TO VESTA, GODDESS OF FIRE. THE PRINCESS TO THE SLAVE MARKET.



YOU MAY FIND THE HEELS OF THESE SH... WHAT HEAVY FAITHFUL ONES, FOR THEY ARE FULL OF GOLD. ITS THE ONLY SAFE HIDEAWAY FOR OUR TREASURE, AND WE MUST SAVE IT FROM ROMANS! HURRY, HURRY ELAINE, THEY'RE VERY NEAR!



WITH A FEW HOURS, THE INVADING ROMANS BURST INTO THE PRINCESS CASTLE AND QUICKLY SEIZE THEM. "FAITH, GLORIA, DON'T RESIST" COMES OUT THE BEAUTIFUL PRINCESS. "SUBMIT TO YOUR CAPTORS?" ONE OF THE ROMAN MAIDENS GLEEFULLY SAYS "NO, WHAT PRIZES FOR OUR SLAVE MARKET," AND THEY QUICKLY BIND THE CYPRIANS.



OVER CASTLE LEFT IN RUINS, ELAINE IS SECURELY BOUND AND GAGGED AND CARRIED OFF BY HER MERELESS CAPTORS.

BALVA, CAPTAIN OF THE INVADING ARMY, SAYS "WE MUST BE SURE YOU DON'T ESCAPE ELAINE... YOU'RE TO BE DELIVERED TO THE VESTAL PRIESTS, FOR THEIR ANNUAL SACRIFICE!"

EPISODE 1

YOU MISERABLE HUSSY NATALIE, YOU FOULED MY SLAVE! SHRIEKS FLAVIA AS SHE DISCOVERS THE "THORN-BALL" IN GLORIA'S HEEL... "BY THE GODDESS VESTA, YOU SHALL BE TAKEN TO TANIA, THE SLAVE MARKET MISTRESS, FOR PUNISHMENT!"



THIS IS HOW I DEAL WITH CHEATING SLAVE MISTRESS TANIA TELLS FLAVIA... "I HOPE YOU ARE PLACATED..." "WELL, DONE" ADDS FLAVIA. THIS WILL TEACH HER TO NEVER BETRAY ME AGAIN! MEANWHILE LUCIA IS SUPERVISING THE SLAVE GIRLS FOR THE "THREE-LEGGED CHARIOT RACE"...



BECAUSE IT'S AN OLD SLAVE MISTRESS, SHE'S VERY OLD AND FAITH EXERT THEIR EFFORTS TO WIN THE FINAL RACE WHILE JOAN AND VARY MUST WATCH MUCH AS THEY CARE.

女の「魔」をまさぐる舟橋聖一



安 東 泉

1

愛欲的情調の世界を描いて卓抜なる両雄に谷崎潤一郎と舟橋聖一がいる。年齢的には、このふたりの間には、十八年ほどのズレがあるが、セックスという本来最も殺伐にして単一なる生殖本能を、このふたりほどそれを能動的に、美しい色彩を持つ陰影に富んだ情調的濃密な詩で、うたいあげた作家はほかにいない。

谷崎の世界も、舟橋の世界も、男と女とのもつれやからみ合いからかもし出される、妖美なおいを鋭敏な嗅覚でかき分けていく世界である。明晰な知性度のかった鷗外や漱石とは異質のもの、泉鏡花や岩野泡鳴に連なる皮膚感覚からくる世界である。

とはいいながら、谷崎と舟橋は、つづまるところまたふたりながら、その特色において違ってくる。谷崎の世界、舟橋の世界の厳然たる相違が、やはりそこには存在

する。それは何であるか、ここに要約してみることにしよう。

谷崎をささえるバックボーンはマゾヒズムだということとは、以前本誌でも『痴癪老人日記』を解別しながら説明した通りである。マゾヒズムは、もともと西欧的な発想に負う部分が多く、そのせいか谷崎の描く女はナオミは元よりのこと、純粋な下町っ娘である春琴でさえ、何ほどのバクくさがさが付いて離れない。谷崎はしかもその武器はハナである。つまりかく文学である。にのいの文学である。

ところが舟橋は、手指を武器とする。かくということより、なで回す文学である。かくことがあったとしても、手指で触れ、なでてみて、それからその指先のかおりに酔う、という傾向がある。ここに、かくという西欧的な所作が、なでるという日本的所作と対置して感じられるのである。これが谷崎と舟橋を大きく分ける眼目の一つ

ではなからうか。

舟橋には、従って直接的なマゾヒズムはない。いったん、なでてみることに先決なのである。この点からいえば、舟橋のほうが、谷崎よりはよりリアリストであるわけである。谷崎の幻想趣味は舟橋にはない。舟橋文学は、実に典型としての、日本男児の文学なのである。

2

日本男児の典型の一つとして、江戸っ子というのがある。ケンカっぱやくて情にほだされやすい。そして意地っ張り、江戸趣味的なダンディズムを信条とする粹好み、これが江戸っ子であり舟橋イズムでもある。井伊直弼（花の生涯）にしても菊中方哉（雪夫人絵図）にしてもそれである。頑固なまでにかたくなな変人、伊助老人（悉皆屋康吉）に至っては、特にそれが特徴的に活写されている。

この点、谷崎が軟派中の軟派であるに比し、舟橋は軟派中の硬派ということになる。硬派とて女は好きだ。コマタの切れ上がった女にあだっぼさに江戸っ子は弱かった、と同じように、舟橋も女に弱い。あだっぼさを置きかえて、それを女の魔性という。魔のあるところをそつと手指でまさぐって、愛のあるところを玩味しようという、江戸っ子の色好みが舟橋のモチーフである。

日本男児は青畳に床の間を背に、湯上がりに美女の酌で灘の生一本、そうして酔いの回りかけた目で女の魔のあるところを捕えようとする、そのポーズがとりも直さ

ず舟橋のポーズなのである。村山たか（花の生涯）も、追川襟子（木石）も、女めくらのお鶴（女めくら双紙）も、信濃雪（雪夫人絵図）も、そうして夏子（芸者小夏）も、みんなこうした江戸っ子舟橋が、捕えようとする女の魔を体現したものである。

江戸っ子は女が好きである。裏切られても、踏みつけにされても、それでも女が好きである。ともすればこぼれ落ちようとする掌中の玉を、あるいは追っかけても追っかけてもするりと身をかわす、そういう女をつかまえるのが好きである。そしてつかまえると、じっと両掌に包みこんで、その中でハトのように身じろぎする柔らかな手ざわりの女の感触を愛するものである。それが舟橋文学のモチーフである。

愛するものを大事にし、かわいがることにおいては舟橋は人後に落ちない。それが時にはマゾヒスティックな擬態をしばしばとることになる。康吉が主家の娘お喜多にまめまめしく仕えるあたり（悉皆屋康吉）、実験動物を扱う襟子のキビキビした冷たい手つきのあたりといい（木石）、みんなM的な情景の描写である。

3

マゾヒズムは、舟橋文学の一の骨格として見のがせない。まずその視点から、長編『花の生涯』に目を向けてみよう。

『花の生涯』は映画化、テレビドラマ化もされた、ご存じ井伊直弼の最後までを女色ぶんぶん花やかに描き

上げた大長編で、舟橋の代表作品の一つである。この作品の中での井伊直弼は、幕閣の大雄としてでなく、一個の艶福家直弼としての面が強調されているのはねらいとして当然であろう。彼は恵まれ過ぎるほどの妻妾を、兼ね合わせて持ちながら、一介の三味線の師匠、村山たかに、最も強く心を引かれている。村山たかは、

『ただ美しいのとはわけが違う。いわゆる美貌には、素直な、のびのびした美しさと、そうでないのとある。恐しさを伴うような美しさ。何もかも、吸いとられてしまいそうな美しさ。もっと端的に云えば、男という男を迷わすに足りる美しさ』

を持った女である。村山たかをめぐって、直弼とその畏友、長野主膳とのかっこうがからむ。主膳は国文の学者、直弼のその道での師であり家来でもある。主膳は直弼をまたこの上ない主人とあがめ、尊敬を払うという、またとない間がらにありながら、村山たかを争いあう段になると、ふたりながら一步もあとにはひけないのである。

たかはたかで、直弼を慕うかたわら主膳を恋い、主膳を恋いながら直弼を慕う、たとえていえば浮気な女、舟橋流に言うところの魔性の女である。結果的には男心をチリチリと痛めながら、あちらに飛びこちらに飛び、つかまえるようになると、するりと身が変わる。変幻の女である。

村山たかは舟橋にとっての理想の女だという。理想の女が、理想どおりに『花の生涯』で描ききれたか、という段になると少し疑問ではあるが、舟橋文学の骨格とし

ての女色が、どういう性格のものを真髄とするか、その手引きとして村山たかを見るとよくわかる。

たかは、同時に幾人もの男を愛することができる女である。いわば多情な女だ。といって、軽々しく心移りをする尻軽女ではない。彼女の愛は、それぞれに真剣である。金や名声で彼女の心を買うことはできない。だが結果的には多くの男心を迷わし、苦しめ、自在に振り回し、そのために中には破滅する男も出る。犠牲者が出る。それをたかは、あまりよくよく良心的な苛しやくで苦しんだりしない。

その時その時の自分の肉体と心の収まりどころを求めのにひたむきで、そのための犠牲者には一顧をだに与えようとはしない。利用できる相手とみれば、遠慮なく踏台に使う。かくて寺侍多田一郎も、あわれ村山たかの魔力のいけにえとなり、廃人同様のていたらく。一郎の息子、帯刀は、たかへの献身のために父を売り、ついには三条河原で打首になる。

4

村山たかを一般では、

『多賀村に古く棲む女狐と信じている。着物の上から、お臀を触った位ではわからないし、蓮の湯へ入るときでも、妖術のかかっている中は、尻ッぽを出さないが、一日に一度は正体をあらわすときがある。いくら狐でも、一日中休む暇なく、化けてはいられない。一日に一度、狐に戻るの、息がつける。そこを狙って、お臀をまく

れば、フサフサと金色の毛がはえているのだと』

だれもが信じているのである。その狐にもたとわれる妖しい美と毒を持つ村山たかは、踏台にすべき男は踏台に、肉の炎を休めてくれる男はそれ用に、その使い分けで男を操っていく。といって、使い分けしていく身の所作は、悪玉女のような意識的なところやステ鉢などころはなく、本能的に身についたもので、それなりに自己の行為にはチャンとした筋と自信を持っている。

長編が成功するかしないかは、映画と同じく脇役の出来不出来で大抵は決まる。『花の生涯』での脇役、多田一郎、多田帯刀を主軸にして、それは皆村山たかの犠牲者で構成される。つまり脇役の効果は、マゾヒズムの効果なのである。

村山たかは井伊直弼と長野主膳を同時に慕っている。慕うだけでなく、才気走った彼女は、いわゆる政敵の多い直弼や主膳のため、風雲あわただしい京・大阪、あるいは江戸と駆けめぐって、女だてらの隠密として敏腕を振るう。踏台にすべき男は踏台に、そして選ばれた第一の男が多田一郎であった。ことさら呼ばなくとも、踏台は向こうからやってくる。村山たかの美しさと魔にひかれて、自分の身を滅ぼしにやってくる。多田一郎はたかの美貌に心も失せ、懇願する。

『おぬしを妻にすることさえ出来れば、拙者はすべてを奪われても本望。——おぬしを仕合せにするために、拙者の生涯を賭けることをお誓いする——』

それに対して村山たかは、

『では、私が、一生どんな贅沢をしても、あなたは困りあそばしませぬか』

瘋癲老人を相手に、三百万円ものキャッツアイを買わせようとして、じんわりと女の魔を散らつかせながらささやく、あの颯子の勝ちほこった口吻がここではうかがえる。

5

多田一郎と村山たかの生活ぶりを、少しのぞいてみよう。

『たか女が足腰がだるいというところ、多田は按摩までしてくれる。』

「拙者は、この世に栄達の望みはない。勤皇の、佐幕のと、血眼になる興味もない。おぬしのためなら、喜んで何でもしよう」

それが多田の生活信条である。女のために、たとえば、按摩をしようとも、三助の真似をしようとも、別段に照れ臭いという顔もしない。第一按摩にしても、三助にしても、素人ばなれがしているのでたか女は吃驚した。

「どこで按摩術など、習いおぼえられましたの」

二月半ばの寒い日である。たか女は、置炬燵に身を横たえながら、多田に腰のあたりを揉んでもらっているのだ。——多田はいかにも、嬉しそうに眼を細くして、炬燵蒲団の下に入れた手を、小まめに動かして行く。押す手、揉む手が、壺にはまり、指の感覚も、武士のものと思われぬほど、柔軟に感じられる。

「さあ、こんどはそちらの足を揉んで進めるかな」
「アレ。くすぐったいわな。——療治代はおいくらじや」

このようにして、地位も財産も武士としてのほこりも捨て果てた多田も、所詮はたかの踏台にすぎず、役に立たず足手まといとなるや、おきまりの様に捨てられる。

だが、多田は幽鬼のようになってたかの後を追う。たかが身を隠せば、何としてでもそこをつき止める。ここに、按摩久の市というのが、隠れ家に居るたかのかかりつけの按摩として通っているうち、同じ久の市に、偶然多田も治療してもらったところから、たかの隠れ場所が多田の耳に入る。多田は、たかが真実慕う長野主膳の名をかたって、彼女を呼び出そうとするが、気を察してほかへ身を隠す。

多田は腹いせに久の市を斬り殺す。つまり久の市は、飛ばっちを受け、たかの身代わりに殺されたようなものだ。身代わりといえば、田舎芝居の床山の小母さんが、彼女の見ている前で、彼女のために、彼女の身代わりとして無残な殺され方をする場面がある。

『たか女は、またも自分の身代りになった人に対して、冷静』

なのである。

6

有名な血の粛清、安政の大獄を陰から推奨し、そのために多くの働きをしたのは、この村山たかである。長野

主膳と共に、井伊直弼の良き手足であった。たかの謀者としての働きで、多くの志士がつかまり残殺された。みんな徹底的に殺してしまわねば、たかは血にうえた女狐であった。

この女狐の美しさに心引かれ、彼女に献身し、父を売り、身を殺してまで彼女を崇拝し通したのは多田一郎の息子、多田帯刀であった。村山たかの、第二の踏台となる男である。

帯刀は、父にそむいて彼女に仕える。そのくだりの一節を、

『またお腰など揉んで進めましょうか』

「では、暫く、揉んで下され。いつも、そなたに揉んで貰うと、何も知らずに、ぐっすりと夢路に就くわいなア」
「ごめんなされませ」

と、帯刀は行儀よく、袴のまま居ざり寄ってたか女の腰に手をあてる。たか女は人情本を読んだままだ。――

「この位で、よろしゅうございますか」

「もそっと、強う揉んで下さい」

「斯様でございますか」

「遠慮せずと思うさま、揉みほぐしてたもいのう」

「はい、この辺でございますか」

「おお、いい心持ちじゃわいな――私はもともと按摩好き。江戸でも、久の市という力の強い盲人に、よく揉んで貰いましたのさ――こんどは、膝の上をずっと揉んで下されや」

こうまで、毎日を献身の日々で暮らした帯刀は、最後

にたかをかばいだてしたため、三条河原で打首になる。女の踏台としての一生を終わるのである。

恋敵、井伊直弼や長野主膳をにくむあまり、多田一郎は、井伊派の敵と気脈を通じる。井伊派の女間諜、村山たかは、帯刀とはかって逆に多田を逮捕、京から江戸へ護送する。

多田とたかは、戸籍上はまだ夫婦である。帯刀は多田の実子である。それが夫の身で、父の身で、妻や子に捕われの身として唐丸籠で送られる運命のいたずら、この状況設定はこれこそマゾ以外の何物でもないではないか。

村山たかに見るこういう女の魔が、舟橋の最も理想とするところであれば、そのまま舟橋の分身と見られる井伊直弼や長野主膳が彼女の一挙手一投足に、ただ落ち着きもなく身もそぞろというのは、よく得心のいくところではあろう。

7

女の魔を谷崎はハナでかくが、舟橋は手でなでる。文字通り、彼の作品には按摩の場面が随所にある。《女めくら双紙》は盲目の美しい女あんまを主人公にしたものであるが、それより、按摩の場面で白眉なのは《雪夫人絵図》である。《雪夫人絵図》の全編を通して、マゾ的気分を抜きにしても、この按摩の場面が最も光る部分として印象される。

ここに誠太郎という若者がいる。調子のよい、戦後派青年の一つのタイプだが、その誠太郎が信濃雪、つまり

雪夫人の魅力のとりことなる。

斜陽華族の令嬢であった雪が、不幸な結婚に耐え、理解者や崇拜者にはげまされ、からくも生き抜いてくるが、最後には一番心を許し信頼していた女中の浜子にも裏切られ、破局が近づく。だれもが彼女を見捨てて去っていった。その雪に、ひざまづくようにして忠誠をちかうのが誠太郎であった。

『「おくさま。浜子姉ちゃんの代りに、ぼくをお傍において下さい。どんなお世話でもします。心を入れかえます。——浜子姉ちゃんが、駆落したからは、もう、おくさまの忠僕はぼく一人です。生れ変わったようになります。いのちをくれと仰言れば、すぐにでも、平気で死にます」それは本心だった。

彼は雪夫人に殉ずるための、短い一閃の火花を無上に美しいものと思うのである。

「おくさま。肩をおもみいたしましょうか」

雪夫人はただ「お入り」と仰言る。

「おくさま。これでは、きつうございましょうか」

「もっときつく」

「はい——時に、おくさま。お洗濯ものも、ぼくに洗わして下さいませんか」

「お前は男でしょう。男は女のを洗ったりするのはおかしい」

「ぼくは、召使いですから。召使いは、男でも女でも同じこと。主人の御用は、何でも致さねばなりません」

「……………」

「おくさまはやっぱり、水臭い」

「お黙り。黙って、揉んで下さい」

「はい」

「もつと、きつく」——「もういいから、お下り」と雪夫人が言った。

「へい、お腰の方は？」

「もういいの」

「へい。では、また、夜分に——何か、することがありましたら——おくさま。ほんとに、お洗濯はごさいませんか」

「ありません」とキツパリ言う。

「では、御用がなければ、お庭の草でも、むしりましょう」と誠太郎は、神妙に、はだしになって、庭石をふんだ」

按摩は誠太郎の日課である。というよりこのことこそ▲雪夫人絵図▼の眼目であり、舟橋の按摩イズムの総決算なのである。このリズムは繰り返し繰り返し強調され高まってゆく。

8

『御み足を揉みましよう』——雪夫人は昨夜一夜、まんじりともしていないので、うつら、うつらした。腿から膝、膝からふくらはぎ——三里を押して足首まで揉みおろし、足はじかに、甲とうらを、強く押す。そのの、くり返し。

「もういいわ。お休み」

「へい。まだ、大丈夫でございます。浜子姉ちゃんと、同じ位、揉まして——」

雪夫人はそれでもと強くは、拒もうとなさらない。——誠夫郎は、ここぞと、力をこめるうち、いつか白い湧き雲の中へ、つるし上げられるような実感と共に、身が汚れた。その雲の中で、雪夫人は神の如く眠っていた。——このように、誰知らず、夜毎に、身を汚すことが、今では彼の涯しなき祈りでさえあった」

『やっぱり、おみ足を、もまして下さい。僕は、物足りなくって、眠れません』

「おくさま——カンベンして下さい。黙って寝ます。こうして、おくさまのお傍に、ジッと、置いといて下さい。おくさまに捨てられたら僕は死にます」

窓をしめた。雪夫人が足をのばすのを持って、いつものように、夜具の中へ手を入れて、膝をまさぐった。雪夫人も黙って、するまに、させている——』

これほど強烈な按摩精神があるのか。そして舟橋文学のこの按摩イズムは、まぎれもなくマゾ以外の何物でもない。女体にさわる、ふれる、という舟橋文学は、女体をなぐさみものにするためのおさわりではなくて、誠太郎のように、多田帯刀のように、夏子の肌をさすったりお風呂で背中を流してやる楠見さん（芸者小夏）のように、女体崇仰のマゾヒズムが根底にあるのである。

▲雪夫人絵図▼の真の主人公は、かくしてわがまま破れん恥な雪の夫、直之でもなく、一見健全な良識人に見える方哉でもなく、また、ほとんどの部分の語り手である

女中の浜子でもない。戦後派青年の誠太郎こそこの作の主人公であり、誠太郎の雪夫人に対する献身的な崇仰の念が、この作の帰結となって完結するものである。

9

舟橋文学の秘密を探るために、ここで視点を当てるべきは、《雪夫人絵図》と《花の生涯》の二作品に見られる、きわめて類似したというより、ほとんど同じ構成、同じ効果についてではなからうか。

この二つの作品は、材を一方は戦後の没落華族、一方は幕末の歴史上の人物、というように、時代と人物を大きく異にする別様の仕立てで書かれているように見えるが、その実この二つの作品は、まるで一卵生双生児の類似するがように、そっくりそのまま同じものといって差しつかえないほどに共通した骨組みで成っている。

信濃雪はそのまま村山たかである。信濃直之は長野主膳と多田一郎を取りませ、菊中方哉は井伊直弼である。そうして誠太郎が多田帯刀で浜子は佐登である。こうしてこの二つの作品で語られるのは、女の魔に対する男の迷いである。

《花の生涯》は井伊直弼という歴史上の人物に仮托しての、切ない男の定まりない性のあり場所を、撫然たるさまで想い描いたものである。村山たかは里人から女狐であると信じられた。信濃雪は蛇である。ソソとした雪夫人が、いかにあやしげに、さながら白蛇の精でもあるかのように、舌をチロチロと出して男身にまわりついて

くるか、作者は少しうるさいほど繰り返し書きこんでいる。うるさいといえば、村山たかを女狐として、もてはやすくだりも、何か執拗でくどすぎる。くどすぎるほど女の正体について舟橋は執拗な関心を払わずにはいられないのだ。

男を書くことは、女以上にむずかしいと言われる。舟橋文学にとっての致命傷は、まさにこのことではなからうか。戦時中、彼は《男》という作品を発表した。それが果たして題名どおりに男であったかどうかは別としても、《花の生涯》の井伊直弼や長野主膳の色どりは、あまりにも漠として生命感がない。

わずかに多田一郎のおもしろさがその空隙を救ってくれるが、これは《雪夫人絵図》の直之や方哉にしても同じことが言える。本来、劇作家である舟橋聖一が、久保田万太郎と並んでの会話の達人であることには異論がないとしても、そして間合いの他の文が簡潔ですっきりとした名文であるとしても、何か或る退屈な間合いの長さを感じるのはどういうことか。会話だけが生き生きとして、他の文でどうも今一本の追い込みがない。

《花の生涯》は史実をふまえた後半のくだりで盛り上がるが、前半は冗長である。《雪夫人絵図》は芝居の書割を背景にしたの、人形浄瑠璃を見るようで、人物の動きにリアルな流動感がなく、ただ誠太郎と雪夫人とのあのマゾ的名場面がなかったら、この作は死んでしまう。

舟橋文学が真に本調子に、その真価を発揮してみせたのは《芸者小夏》であろう。簡略なしかもなまめいた語

り口、妙を得た会話、手ぎわよい筋の運び、《芸者小夏》は舟橋文学の代表作として大きく喧伝されたいものである。

10

だが一方で舟橋は、《悉皆屋康吉》という名品を書いている。これは彼のおそらく最高のものではないだろうか。終始一貫した過不足ない筆の運びは流く、芸術家をもって自負する職人一代の生活記を、狂いのない構成裡に収めきって、むしろここにこそ彼の描かんとした典型的日本男児の一つのタイプが、井伊直弼では果たせなかったタイプとしての男が生き生きと描き切れている。

久保田万太郎の江戸っ子ほどの歯切れのよさはなく、谷崎潤一郎の難波っ子ほどの執念はないが、この両者の間隙を埋めるに足る造形を舟橋は《悉皆屋康吉》で果たした。《芸者小夏》と並らべての好対照であろう。

関東大震災で没落した主家に、一徹に、奉公人としての信義を貫き通す職人康吉の姿、まして主人の娘、お喜多に仕える身の幸福は寝食を忘れるほどのものとして献身する康吉、それを軸に、古き良き江戸時代からの庶民としての伝統が、下町風俗の中に盛り込まれ、むしろ求道精神にも比すべき江戸っ子のキップが、強固な職人氣質で裏打ちされて地道な感銘を呼ぶのである。

康吉は名を成し、お喜多を妻に迎える。あれほど崇仰的であった主家の娘、お喜多を妻として、自己の支配下におく。彼は昔は昔、今は今、お喜多を完全に自分の

思いどおりに支配しようとする。だがお喜多は、一つ容器内に、じっとおとなしく収まっているような意志のない女ではなかった。しかし、康吉が愛するのは、こういうつかまえておとなしい女のあやうさ、女の魔なのである。舟橋が《花の素顔》というのは、こういう女の正体をさしているものである。

女好きにかけて、谷崎と舟橋はまた好一対でお互いひけはとらない。谷崎の描く春琴やナオミは一つの理想である。舟橋の描く雪夫人や夏子は現実の中の理想である。谷崎はより理想主義、舟橋はより現実主義、前者は理想のにおいをかぎとろうとし、後者は現実の手ざわりを追い求めようとする。

しかし雪夫人や夏子の手ざわりは、遂にまだ春琴や颯子のにおいの域を、抜くことができないのである。





たくましい集団

「私を深く埋めて」の悲願にかられながら、女ばかりの学校に特例入学をした話を先号では書いた。中野のO洋裁学院である。この学校については、その後五年ほどたつてのつい最近、またひょんなことから後日譚がそれにくつつくことになるが、それはこの文のあとに書くことにする。

二、三日、朝日新聞本社の掲示板でスポーツ関係の報道写真を見た。六月二三日、上野公園一帯で繰り広げられたオリンピックのつどいという、体育祭典で、女子体育短大や教育大の女子体育学生一千余名が、上野広小路を歩武堂々の大行進をするところの写真である。

はちきれそうなくたくましい若い肉体を誇示しながら、彼女らは勇壮に行進する。純白のスポーツシャツに黒いパンツというそろいのいでたちで、何のためらいも恥じらいもなく、花の素肌を日の光にさらし、公衆の視線に臆することなく大道を大行進する若い乙女たち。一枚のただの写真、ただの報道写真。しかしそこには女の集団が発するあの花のかおりが満ち満ちる。汗のにおいが発散する。私をそこに深く埋めての激情がそそられる。

新聞社のすぐそばには、日本劇場がある。しなやかな踊り子の姿、花やかなステージのラインダンス。舞台と照明に飾られての人氣スターたちがシナをつくる。スチール写真が劇場の内外にはり出されている。タイツ一つの女豹のようなポーズ。挑発的な脚線美、はね上げた足先のかわいらしい銀のクツが、はじめてとんでこちらのヒタイを蹴りつけそうだ。

だがマゾヒストの視線は、女子短大生の大行進の報道写真のほう



■体当たりマゾヒズム論・15

ああ、ぼくは

女、女、女の大行進の下に
骨片となって踏みしだかれない

水 尾 究

江 渕 晃 夫 ・ 絵



に氣をとられるのだ。さんさんと降る夏の日の下で、観衆注視の大道の真中で、あの目くるめく真夏の熱気の中で、彼女らの汗のにおいにむせながら、汗のしずくが垂れる炎熱のアスファルトの下に、私を深く埋めてもらいたいと思うのである。

或る少年が石を持って皇太子と妃殿下の行列に飛びこんだ。私も石を持ってこの女性大行進の最中に飛び出してみたい。私のかほそい骨がらのような肉体こそみじめだ。私の細いすぐにも折れそうな腕で、このたくましい女性の大集団に石を投げたとて、何ほどのことがあろうか。

女性集団の大行進は、さながら戦車集団のような圧倒的力でもって、私をからだごと踏みつぶしてゆくことであろう。そうして、私は、深くその足下のアスファルト中に、もみがらのようにくだけ散って踏みこまれてしまうのだ。

終わりが始まり

中村真一郎の自伝『死の影の下に』の一節に、次のような部分がある。

『奥さん。僕のそういう、父の死に対する不安のようなものは、何かその後の僕の人生そのものの根元に浸み透り、父が死んでしまっただ今でも、僕を養っているような気がするんです。そして愛は苦痛に外ならないという、公式のようなものが、幸福に向って歩み出そうとする僕の足を、じっと引留めて了うんですよ。……川上夫人は悪戯らしく微笑を浮べると——あら、子供って皆そんなものよ。大人になれば、そんなこと癒ってしまいますわよ。——』

私は自分の軽卒な告白を後悔した。此の夫人はいつも自分の外部にばかり生きている不幸な人間なのだ。物事をいつも軽薄な形式的

な方面にばかり整理して、その類別し得ない本質を深く掘り下げることを絶えてしない』

そうなのだ。マゾヒストは彼らに、彼女らに苦しめられるのだ。

世の中には川上夫人が多すぎる。「私を深く埋めて」と言ってみたとこで、川上夫人はたわいなく相好をくずして、

「ばかなことばかり考えてるのね。どうかしてるんじゃない。精神療法か何かして、スカッとすんのよ」

明快な診断と処置が直ちに与えられてしまうのだ。それで終わりののだ。

だが、マゾヒストのこの内的な独白と思念は、実は終わったはずのところから産まれてくる。

女性大行進のパレード写真に見入っていたのはぼくひとりではなかった。ほかにも幾たりかの男たちが居た。彼らにとっても、もちろんそれは、十分興味が持てる写真であるには違いなかった。ともかくそこには女がいた。

シャツとパンティだけのはちきれそうな肉体の群像が行進していた。でもしばらくすると、ほかの男たちはやがてあきて、写真の前から歩を移す。彼らの思考はそこで止まりだった。若い女の肉体、そこまでで終わりだった。一目見ただけで、もうわかってしまう、そんな物わりのよい興味の示し方ですべてだった。

だが、みんながそうして、他へ歩を移していったその後にはぼくの誕生はあった。みんなの終えてしまった通俗上の思念の果てから、あのひたすらなるMへの悲願がゆう然とわき上がってくるのであった。みんなの終わるところがぼくの新しく始まる出発点であった。

有閑婦人のつどい

一度、吉祥寺の古い屋敷町の中の、人形教室とやら小さい木札が門柱にはり出してある家に、生徒として入門したことがある。人形づくりは、それも楽しいことであるに違いなかった。

家はサカキの生垣をめぐらして、奥に尖塔まがいの洋風の屋根を見せた応接間の、古い和洋折衷の住宅であった。このあたりは戦災を免れていたもので、戦前からの物寂びて落ちついた、いかにも郊外の住宅地らしい、静かな雰囲気満ちていた。

人形教室の木札のかかった家は、その中の一画にあった。外からうかがっても家の中はシンと静まっていた。人形教室なぞわざわざ開かなくとも、生活に事かくような裏さびれた空気はどこにもなかった。実利上の理由より、この家の夫人の退屈な余暇を過ごす、一つの趣味的な教室なのであった。

それは小さな集まりにしかすぎなかった。ひとりの派手好きなその家の奥さん、兼人形造りの先生を中心に、わずか四、五人位のグループで、応接間を教室代わりに、お互いに打ちとけあった気やすさから、たわいのない雑談に興じながら、趣味としての人形造りを楽しんでいるのであった。

そこへぼくが割りこんでいった。たった二度の通学で、それだけで断わられてしまったが、その短い二度だけの通学の思い出は、なかなか忘れがたい思い出を残した。

「お気の毒なんですがね。やっぱりほかは女ばかりでしょ。ですからね——」

一度入学を許してくれたその家の主婦は、ぼくが男であるということより、ぼくの見すほらしげな様子と、ぼくの手がかりのつかめないようなたよりなさに、一抹の不安、気味悪さ、軽べつを感じたのであろう。そこへ他の奥さんたちが、

「あの人、なんですか。第一、気味が悪いわ。まるでバカみたい」といったようなことを言い出して、それでぼくの通学は、あえなく拒否されてしまったことになったのであろうが――。

それは小さなグループにしかすぎなかった。でも、それだけに一体になって身を寄せ合っているような、こういう有閑婦人のつどいの中へ、テーブルを囲んですわっている彼女らの、円周を描くように取り巻くその椅子の真中に、私を深く埋めたいのである。

草むしり

人形づくりといえば、西荻窪のM洋裁学院の或る人形教師の思い出がある。

M洋裁学院は、中野のO服装学院とは違って、規模もずっと小さく、生徒数も少なかった。学院というにしては貧相だった。建物も普通の住宅に毛の生えた程度の二階建ての木造で、それに、はげかったペンキで塗ってあった。

学院には洋裁、手芸、編物、人形、書道、生花といった幾種類もの講座があったが、中にはただ看板だけで、全然生徒の居ない講座もあるようであった。表面にぎやかそうに見えて、その実内容は細細とした、間貸し経営であった。

ぼくはその中の人形科に入学したが、人形づくりをやるより、他の生徒の散らしっぱなしの布切れを集めたり、オガクスをはいたり、ちやうど冬のこととしてストーブのマキくべのほうにせいを出したりのほうが忙しかった。

人形づくりの教師は、四十年ばいのゆったりしたことば数の少ない婦人で、キラキラ光るような、紺青の布地の着物に、派手な大柄の帯をしていた。その服装は冬の間中、変わらなかった。

春になり、庭の雑草が生え始めるころ、その教師はぼくの勤勉ぶりに目を留め、自宅の草取りをやってはくれないかと持ち出した。自宅には大学生の娘と、高校生の息子が居た。ぼくの目当てはもちろん娘のほうであったわけだが、ぼくが庭で草取りをしている間中それがすっかり見えるあけ放した居間の中で、それが自慢であるらしい美しいソプラノで歌ったりしていたが、ぼくのほうについて注意を注いでくれはしなかった。

一顧だにする価値のない、すこぶる程度の低い男が庭先で働いているに過ぎないので、娘としてはむりからむことではあった。それでもぼくは、彼女の自発的な注意を引くために、ひたいの汗をぬぐうかたわら、何度庭石の上の彼女のはき物をそろえたり、手やソデ口でそれをふいてみせたりしたとか。

M学院には、三か月ほども通ったろうか、一度アメリカ帰りだという、ペラペラした不似合いな原色ずくめの洋服を着こんだ、院長女史が、威だけ高に手伝いの人の婆さんをどなりつけているのを聞いたことがある。院長自身もかなりの年である。

「エッ、どっちが主人ですか。主人はわたしなんですよ。それが何ですか。ヘタにブスブス私に文句ばかり言うとは！」

この婆さん同士のやりとりは、ただ醜悪なだけであった。ここにはもはや私の深く埋まる場所は無かった。ただ妙に寒々とした、やりきれない味気なさが残るだけであった。

野菜クズはいやだ

マゾヒストはぜいたくである。深く埋まる自分の場所を、花と香料でこの上なく美しく飾らたいのである。

「エッ、どっちが主人ですか。主人はわたしなんですよ――」

このせりふに、生々とした女の情感が満ちあふれたなら、これはすばらしいせりふとなるであろう。だが、チンドン屋の婆さんのように、ただ異形の布切れをピラピラ当てがって新しがっている院長女史が、年がいてもないヒステリックな叫びを上げる図がらに、この



せりふはおぞましい。
小さな、裏通りの寺小屋式洋裁学校の、やっとこさ経営の貧相さが、このせりふで勝手口の野菜クズのすえたようなにおいを放つのだ。



いつまでも美しくあれわが妻よ——若山牧水の歌の心が女人渴仰の感情を最高度に高め、陶醉境にいざなう、あの幻想的な自己埋没の儀式。女性はいつまでも美しく、はつらつと、健康であれ、そしてつつましくほこり高くあれ、されば我、御身らの輝けるがごときその勝利の微笑を仰ぎみつ、その輝ける美の力に畏怖しつつ、足下にひざまづかん。

花と香料のかおりが満ちてほくのからだを踏みこえてゆく。幾人の女の足がほくを踏んでゆくだろうか。花やかな女子大生のパレード。そして有閑婦人たちのしめやかな笑い。赤い毛糸のスリッパをはいていた人形教室のあの婦人、しめやかな笑いが続き、ほくは身を投げる。円座の足元深く、だれにも知られず土の中へ踏みこめられてゆく。

だが、野菜のクズはいやだ。女の無知な、エゴイスチックな、ヒステリックな叫びはいやだ。女性の栄光を損なうみにくさには、ほくは目をおおう。

料理助手

高田馬場のM服飾学院、Y警察署長夫人だという院長は、水ぶくれにふくれた五十女だった。そこではほくは料理科に入学した。院長はジャラジャラしたネコのような愛想笑いで物を言い、絶えず人の心を気づかいし、自分が雇っている講師たちにも下手に出るようなお世辞を欠かさなかった。

これは、院長が八方美人型の如才ない婦人だということより、彼女の小心キキ、そしてコウカツな打算がキツネの計算のように身につきすぎていることの証明であった。

場違いな入学志望者、水尾究に対して、露骨な警戒心を示すこ

ともなく、生徒がこれでひとりふえる、といった、身についた営業意識のほう先走って、適当な愛想笑いをふりまいた。

「男の方で料理を。結構ですわね。入学規則と願書を受付でもらって——、そうです、そうです、いつからでも結構ですから」

その横太りに太った、それで、かなりタルミのきたのど元の皮膚が、呼吸のたびに伸びたり縮んだりしていた。

院長がほくに対して、お客さんに対するような、シナシナなをつくるおしろい気の浮いたような態度を一変させ、キツネの正体を丸出しに、日ごろは不似合いな高調子の声色を、生地そのままの低い地声の、高圧的な調子に変えてしまったのは、最初の日からわずか三日も経たないうちであった。

それはほくが、生徒の身分から、料理科助手に立場が変わってからであった。

「あの、院長先生ですか。ほく、この前の水尾です。ほく、お願いがあんです。ほく、月謝が払えないんです。ですからほく、その代わり使ってもらいたいんです。おそうじでも床みがきでも、くつみがきでも——」

やたらにほく、ほくを連発しながら、しどろもどろに電話でこん願したのは、その前日のことだった。

「電話でもなんですからね。いらして下さい。それでご相談しましょうね」

まだそれまでは、院長の態度は初回の時と変わらず丁寧だった。

残飯オケ

ほくが通された学院の中の一間、居間兼食堂部屋の畳の上に、院長は応接台を前にすわっていた。そこは家族だけの部屋だった。洋

裁手芸の教師兼助手をしている娘がふたり、親類からあずかって夜間高校に通わせているという、半ば家事の手伝いの娘がひとり、それから小さい男の子がひとりいた。これも縁続きの子を、あずかっているということであつたが、そういう家族の中で、院長は初めて持前の生地をそのままさらけ出して、冷たくごう然とすわってぼくを迎えた。

「ちようどだれか手伝いにほしいと思つてたところで、しばらく料理の先生の助手をやつてみたら。それから床がよくれるからね。床みがきも毎日やってみてちようだい」

給料は幾ら、だとは言わなかつた。月謝免除の特典を与えるかわり、それは当然だろうという顔付だつた。

娘ふたりは、何か年の若さから、ぼくをどう扱つていいか判断がつかないように、手をつかねて、回りからぼくの動作を薄笑いでながめているというふうであつた。親類の夜間高校生の娘も当たらずさわらずの態度であつた。

食事の後片づけや食台のふきんがけを、進んでやるように務めても、見てるのがまどろっこしいのか、高校生の娘はおもに自分の手でやってしまう。台所の流し場に置いてある、ナベ底の汁や、食べ散らしの茶わんにサラの中のごれ物を、ぼくは高校生の娘の見ているところで、目につくように手ですくったり、かきとったりして食べてみせた。マユをひそめかげんに彼女はだまってしまう。おとなしい礼儀正しい娘であつた。

昼間彼女は、家事と電話の受付を受持つていた。ぼくが最初この学院に電話をかけたとき、

「はい、M服飾学院です。院長ですか。はい、おりますがどちらさまでしょう」

といった感じのいい、応接をしてくれたのは彼女であつた。

料理科は若い娘たちでにぎわつていた。週三回の実習と講義には、ぼくも生徒として参加する。一つのテーブルに四人掛けで、そのテーブルが十台あつたから、四十人の定員であつた。三十九人が女でひとりが男、その男と一つテーブルの三人の女の子は、それとは言わぬが困つたような顔で、それとなく警戒し合いながらぼくを表面上は無視していた。

そうして茶わんむしやケーキの実習が終わつたあとの試食を、ぼくは待ちかねたように、そのまま自分たちの食べた残り物を備え付の大きな残飯オケに捨てにゆかせぬ前に、娘たちのその残り物を、まず手近の同じテーブルのものから手を付けて食べ始めた。それでいっそう困つたような困惑が娘たちの間に起こつて広がつた。

ぼくは自分が教室備え付の残飯オケではないかと思つた。そのようにふるまつた。残り物の汁をすすり、実をつかみ、骨をかじり、流し台に立っているのは持ちこまれてくる他の生徒の食器のごれ物を、一手に引き受けて洗つた。そのように埋められることを喜んだ。

「この人、先生の助手にどうぞ使つて下さい」

院長がぼくを料理の先生に紹介していった。先生はどこかの板前で男だつた。庖丁一筋に生きてきた男の持つ、あの勇みはだのぶつきらぼうさがあつた。どちらが雇い主かわからぬように、院長のほうがおどおどして、男はごう然としていた。だが、彼はぼくを紹介されると、テれたように横を向いて、ぼつの悪さをぶこつた無表情さでまぎらわしながら、ほかのことに話題をもつていった。

しかし、助手とはいつても、ぼくのつもりでは、その料理講師の助手でもなく、院長の助手でもなく、ひとえに大勢の、女性だけの

教室という、その女性たちの集団総和の中に、学院の設備の一つとして、たとえば残飯オケのように、たとえば足場となる床板のように、女性グループの底のほうに埋められるという、そういう助手のつもりであった。



生徒集団の底に

或る日、見慣れない娘が受付の窓口のあたりにすわっていた。彼女はほくを見ると、さも旧知の仲のように、ニッコリとおえんだ。

だが、その笑い方が、ちょうど珍しいオモチャをおもしろがってながめる好奇的な意味合いに感じられたことから、彼女がとっさに、新潟方面に出張教授に行っていた院長の長女だということがぼくにはわかった。

彼女のことは、家族の間でよく話題に上っていたし、それだけ彼女も、前もってぼくのことを聞かされていただろうから、それである冷笑するような残忍な笑い方が、つじつまがあってわかったのだ。彼女は年は二十三だということだが、母親以上に人使いが荒らかった。脱いだばかりのまだ暖かいスリッパをとって、院長先生のところへ持って行ってらっしゃい、と、ちょうどスリッパを捜してららしい奥の間の母親のところに、それを初日から板についた命令口調で言いつけたりした。

ぼくは彼女のお気に入りになくなった。家族の者の食事の後片づけで、ぼくが二番目の娘のはき出したみそ汁の中の煮干しまで、ぐちゃぐちゃにかみしだかれて吐き出されたその煮干しまで、きたながりもせず食べたからである。当の本人の二番目の娘は、自分の吐き出した物をすぐ目の前で食べられるという恥ずかしさで赤らんだが、長女は母親と顔を合わせ、ニヤリとぼくそえんで言った。

「この調子だといいいじゃないの。使えそうよ。食事だって家族と別に食べさせたっていいし、それにあんた——洗たくもするんですよ」

半分はぼくのほうに。

それでもぼくは、ぼくのつもりとしては、院長一家の使用人ということではなく、大勢の生徒たち一同の、その集団の底に身を沈めておくことのほうが、はるかに望ましい状態だった。

ただひとりの奴隷

とにかく、M服飾学院では、ことはうまく運びそうに思えた。何度か通っているうち、生徒たちの間にも顔が知られるようになってきた。生徒たちの一段下の、共有の使用人として適当に使ってもよい男だと、時には彼女らのくつみがきをすることさえあった。もっとも、院長や娘たちは、学校そのものの、または院長の家族への奉仕を特に要求して、ぼくが一般生徒たちの、個人的使役に精を出すことは喜ばないようであった。

だが先にも書いたとおり、院長はY警察署長夫人であるところから、ぼくの身許に興味を持ち、ぼくの帰宅の電車に、こっそり尾行のため同車し、家までついてこようとしたことがあった。

身許が不審ということより、ぼくの家庭のだれかに会い、場合いによつては一生飼いごろしにしようともいう、そういう相談をするためだったらしいが、これがため、ぼくは急にM服飾学院から身を隠さねばならぬことになった。たいへん残念な気がしてならなかった。

その心の高ぶりの持っていていき場所がないまま、三年ほどごぶさたしてしまっていた、中野のO服装学院を、再び訪れてみたい誘惑にかられた。

何といっても、あのかきはまだ療養所暮らしの不自由な身であつたし、通学の自由はなかった。

しかし、今は通学はもちろん、パートタイムで働くだけの時間の融通はつきそうであった。女の学校、女の集団、女のグループ、その中にただひとりの男として、奴隷として、身を埋めんという欲望は一向に衰えを見せなかった。

女、女、女

三年ほど経過する間に、O服装学院の院長O女史は、かなりなゼイ肉を増して太っていた。三年前はこんなでもなかった。まだスキツとした美しいところがあつた。

暑い日、彼女は大儀そうにしていた。こわごわ尋ねていったぼくをよくおぼえていた。

「今おじさんのところにいるんですって。だったら、一度そのおじさんに、ご苦労でもここへ来てもらうように——いいね。こちらでおじさんあてに手紙を書きましょう」

アゴをしやくると事務長らしい四十男が、院長の代筆で手紙を書いた。

『水尾君を当校専用の雑役にお願いしてもよいと思うのですが、一度保護者としてご来校願えませんか』

ぼくがとつさに考えついで言つた架空のおじあてに事務長は手紙を書いた。

その事務長が新しい院長の夫であつた。そのことはその後の様子ですぐわかつた。

院長の自宅に案内されたとき、自宅の外見上のりっぱさに比べて、ひどく屋内が荒れているのに驚いた。赤ん坊がギャーギャー泣いて、流し場に、くさった乳の臭いがこもっていた。やせた婆さんが、ちょうど漁師村の婆さんのようにのそのそ歩き回っていたが、それが院長の母親であつた。

そこに当家の主人、というより、院長のコシ巾着のようにへばりついている中年のいやらしさだけが目立った事務長と、事務を手伝っているふたりの弟が帰ってきた。これがこの家の家族構成の全部

であつた。院長自身、だらしなくエリ元をはだけ、風を入れるように、股を広げてスソをたくし上げ、ぼくのほうを見てニヤリと笑つた。

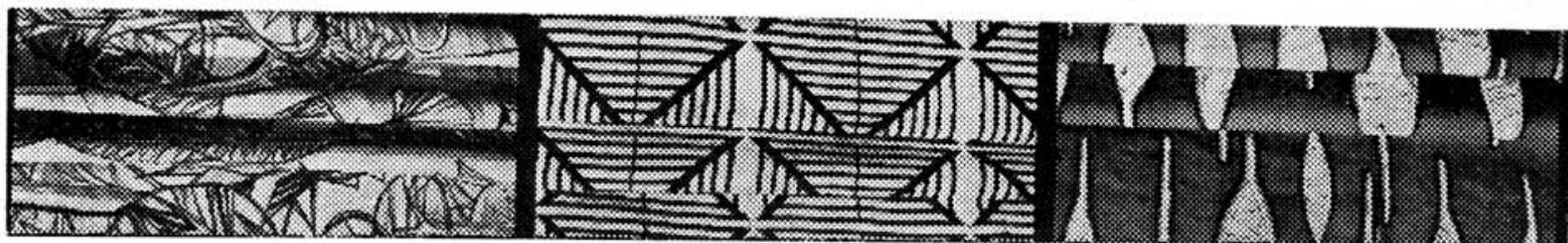
ぼくはすっかり幻滅を感じた。これが服装モード界で名を成したO女史の素顔なのか。

ぼくは、女、女、女の中に深くからだを埋めて土足にかけられたい。

だがその場所は花のかおりで、むんむんする女のおいで、満たされてありたい。その場所は、いったいどこにあるのか、ともかくぼくは、その日一日だけで、O服装学院には二度と足を向けなかつた。

しかし、深く心に残る悔恨じみた感情を、いつまでも消せなかつた。





■たとえ卑怯とよばれても負けてはならぬこの一戦
劣等感をくつがえせ！ 淑女学院やっつけろ！

お転婆学園奇襲作戦

郷 保 夫

1

市主催の体育大会は、いよいよ、あと十日後にせまった。

宿敵、淑女学院のバレーチームに打ち勝た
んがため、お転婆学園側の謀略は、ますます
熱心の度を加えていった。

実力では、淑女学院のチームに勝てっこな
いのである。

いまさら、どんなに猛練習したところで、
あと数段、淑女学院の実力は、上である。

大会の日が切迫してくるにしたがい、その
差というものは、重苦しく、絶望的に、お転
婆学園にのしかかってくる。

しかし、負けることはできない。絶対にで

きない。

どんな手段をもちいても勝たねばならぬ。
過去の屈辱をはねかえし、長年つみかさな
った、みじめな劣等感から、脱却せねばなら
ない。

「淑女学院の生徒は、みんな、あたまがよく
て、美人ぞろい。おまけに、運動神経もすば
らしく発達した生徒ばかりだから、対抗スポ
ーツにも、センスを発揮して連戦連勝。お嫁
の売れ行きのいい、万能才女ばかり」

「——お転婆学園の生徒は、みんな、あたま
がぶくて不美人ぞろい。おまけに、運動神
経までにぶいから、なんのスポーツをやらせ
てもダメ。お嫁にいけないような女の子ばか
り」



などという、屈辱的な世評を、こんどの体育大会をチャンスに、くつがえさねばならぬのだ。

2

さて、その淑女学院バレー部のキャプテン波多野志呂子（はだのしろこ）は、前にも書いたように、牛乳を練り固めてぬりつけ、さらに真珠の粉でみがいたように色が白く、美人であるが上に、元来、非常に従順な性質である。

それもそのはず、志呂子は、この市に本社をもつ、N軽電機工業株式会社社長の令嬢なのである。

カラー写真で撮って、婦人雑誌のカラーグラビアページに、にっこり笑って掲載されるような「良家の子女」なのである。

社長である父親には、メカケが半ダースほどいるという噂だったが、そんなことはともかく、志呂子はおとなしい、いい娘だった。

つまり、淑女学院の生徒のなかでも、もっとも典型的な「淑女」なのだった。

であるから、志呂子は、数日前あんなにも自分をひどい目にあわせた、白バラ塾の英語の女教師、伊治目鯛代（いじめたいよ）先生の前に、ふたたび、すがたを現わしたのであ

る。

「先生、ごめんなさい。おうちで、よく考えてみましたら、やっぱり、私がわるかったのです。こんなやさしい英訳ができなかったなんて、ほんとうに、恥ずかしいことでした。

やはり、私の精神は、どこかたるんでいたんです。こんなことでは、とても、めざす大学へなんか合格できません。ふかく反省しました。先生、おねがいです。もういちど、私をきびしく教えてやってください。こんどこそ一生けんめい、勉強いたします」

といって志呂子は、伊治目鯛代の前に、さながら、白百合のような、かれんな一礼をしたのである。

さすが三十三歳の鯛代先生も、この度を超した従順さには、目をパチクリさせた。

淑女というのは、じつは、たいへんに恥じ知らずな女のことをいうのかも知れない。

才女というのは、じつは、たいへんに神経のにぶい女のことをいうのかも知れない。

しかし、恥じ知らずの鈍女であれ、なんであれ、志呂子の外貌が美しく愛らしいことには、まちがいない。

鯛代先生は、志呂子の殊勝な申し出に、思わず、にやりと笑い、くちびるの外へはみだしかけた大きな歯を、あわてて左手でおおい



かくした。

そして、いった。

「よくいってくれました、志呂子さん。先生の真意がわかってくれて、ほんとうにうれしいわ。なみだがでるほどよ。では、これから、えんりよしないで、びしびしやらせてもらうわよ。みんな、あなたのためなのよ」

鯛代先生は、出ッ歯をかくした手で、こんどは、なみだをふくマネをした。

泣くマネをしながら、鯛代先生はことばをつづけた。

「ねえ、志呂子さん。きくところによると、あなたは淑女学院の、あの有名なバレエ部のキャプテンなんですってね。すてきだわ。それでね、志呂子さん。いいことをひとつ、お教えするわ。それはね、あなたのチームのひとで、なまけたりする部員がいたら、私の方法のように、罰を加えればいいってことよ。女の子というものは、やはり、からだに直接加える罰が、いちばん、効果的なよ。私は体験的に、それを知っているの」

鯛代先生は、ここで近眼鏡の奥の目を光らせ、大きな歯を、パクリとあけて笑った。

それは、オールドミス of 劣等感と、憎悪と嫉妬と、そのほか、もろもろの感情がこもった、複雑でへんにいやらしい笑いかたであった。

た。

「でも、先生、うちの学院は——」

といいかける志呂子の口をさえぎって、さらに鯛代はつづけた。

「さて、志呂子さん。きょうはひとつ、あなたに命令することがあります。そうです、命令です。あなたは、かならず守らなければいけません。なんどもくり返すようですが、それは結局、あなたご自身のためになることなんですからね。……命令というのは、これから、私がほどこすタテ縛りの縄は、私がいいというまで、とってはいけません。私が、はずしてもよろしい、とゆるすのは、あなたが、大丈夫もう決してなまけない、という確信を、私に抱かせたときです。わかりましたね」

このことばをきいて、志呂子は全身から血のひくのおぼえ、半歩ほどよろめいた。

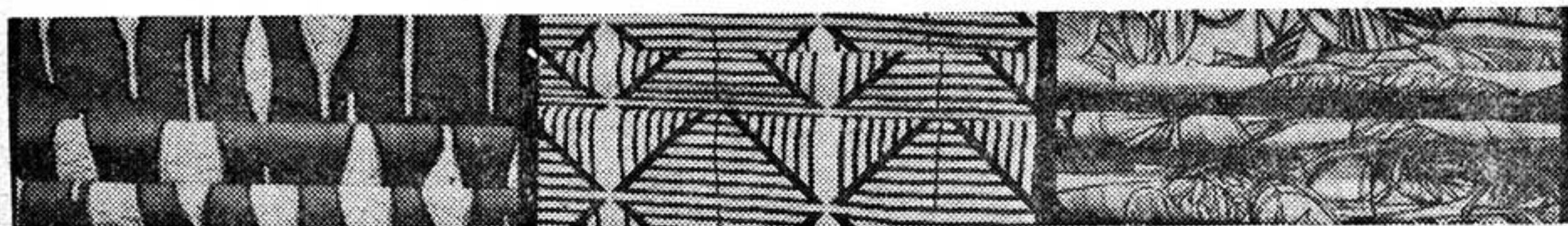
「先生、またですか！」

志呂子は、かわいいくちびるを白っぽくさせて、哀願の表情になった。

「そうです。また、マタですよ」

鯛代先生のひくい鼻が、かすかにうごめいた。志呂子の哀願の表情が、また、すばらしくかわいい。

「でも先生、きょうは私、まだお仕置きをう



けるようなことは、ひとつも——」

「おだまりなさい。ついいま、どんな命令にも服従すると誓ったばかりじゃないの！」

いつのまにか、鯛代先生の手には、長い縄がにぎられていた。

——ああッ！

志呂子は、のどの奥で悲鳴をあげ、逃げかけたが、そこはそれ「淑女」の「淑女」たるところである。

「服従」は、まさしく「美德」なのである。

志呂子は、観念して、まつ毛の長い両眼をとじた。

3

女の英語教師は、まず、志呂子のおなかのまわりに、ちょうど、スカートのベルトのよう、縄を三巻きした。

それから、べつの縄をれいのように、タテにして前からくぐらせ、うしろへまわした。

「もっとひらいて！」

と、女教師は叱った。

叱りながら、女生徒の背後へまわって、縄を両手でつかみ、ぎりぎりしめあげた。

「く、く、くう……」

という声が、志呂子ののどからもれた。

かれんにも、両腕を胸にあて、しっかりと

抱きしめながら耐えている。いじらしいというか、可憐というか、まったく素直である。

女教師は、その顔面を必要以上に志呂子の腰の前に近づけ、かがみこんだ。

そして、ちょうど、中心部にあたる箇所、三個ばかり、縄の結び玉をつくった。

そうしておいて、また、後から前へ、前から後へと、縄をくぐらせるのである。

「さあ、もういちど引っぱりな。両足をふんばって——」

と、声をかける。ぎゅうぎゅうとしめあげる。

「う、う、むうん」

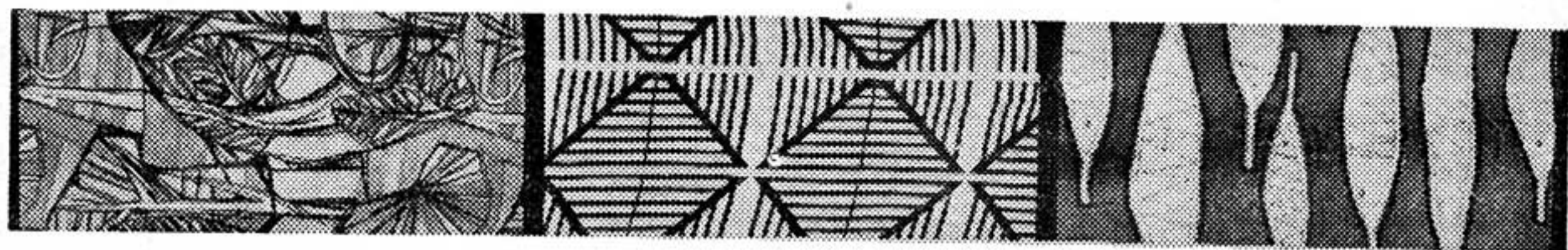
うめかすにはいられない。志呂子の白い額には、汗がうかんだ。

その額に、髪の毛が四、五本たれさがり、汗にぬれて、それがまた愛らしく美しい。

美しい女性というものは、なにをしても美しい。

醜い女というものは、どんなにポーズをつくっても、醜い。

「さあ、いかが、結び玉のぐあい？ この縄は、ここできちんととめておきますよ。そしてこれは、先生の許可がでるまで、絶対に自分でゆるめてはいけません。おトイレへいくときや、お風呂にはいるときには、こ



らんない、この縄の端を引くのです。タテ縄だけ、はずれるでしょう。この縄だけをはずして、パンティをぬぐのです。そして、用がすんだら、また、ご自分で縛っておくのです。これから当分のあいだ、毎日、私が点検しますからね。わかりましたね。これもみんな、あなたを大学に入れるためなんですよ。だから、辛抱しましょうね。このことは、あなたのご両親にも、秘密ですよ。知られたら第一、あなたが恥ずかしいんですものね」

「はい……」

志呂子は、中心にくいこんだ縄の力に、耳まで赤くそめながらこたえた。

「それでは、あなたと私が、いま約束したこと、復唱してみましょう。まず、いちばんめは？」

「はい。なまけないで、よく勉強し、来年はかならず、目的の大学へ進学すること……」

「それから？」

「あの……パンティを、勝手にぬいだり、はいたりしてはいけない、ということ。この縄を、先生のおゆるしがでないうちに、自分でとってはいけいということです。……」

蚊のなくような声で、志呂子はこたえた。

「よく言えました。いい子ちゃんね。先生はますます、あなたが好きになったわ。それで

は、きょうのお勉強をはじめましょうか」

「はい、おねがいいたします」

といって、カバンの中から教科書を取りだすために、二、三步あるいた志呂子は、たちまち、その場にうずくまった。

結び玉、タテ縛りの効果は、てきめんなのである。

女教師の、近眼鏡の奥の小さな目が、にんまりと笑った。そして、いった。

「ああ、ちょっとお待ちなさい。このあいだの写真が、できていますよ。とってもよく撮れているから、みせてあげましょう」

「写真？」

と、不審な表情をした志呂子は、すぐに思いついて、みるみる顔を赤くした。

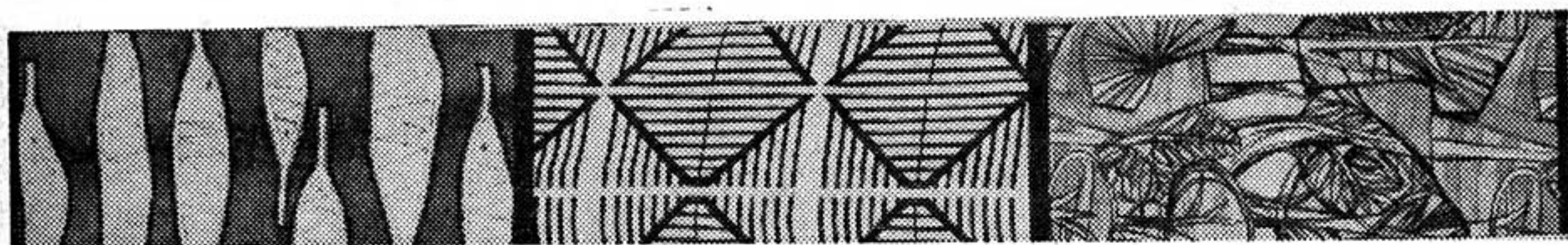
数日前、この女教師にはじめて縛られ、さんざんのお仕置きをうけたとき、たくさん撮られた写真にちがいない。

「いいえ、先生。けっこうです。そんな写真みたくありません！」

志呂子は思わず、語尾をつよくさげんだ。

「そんな写真とはなんです、そんな写真ですって？ まあ、あなたは、なんという侮辱を私にあたえるのです！」

鯛代先生の地金の、ヒステリーが目をむきだした。



「でも、先生、あたし、いやです」

「まあまあ、そんなに恥ずかしがらないで。

だれでもない、あなた自身の写真なのよ。

とてもきれいに写っていますよ。これは、ぜひ、見なければいけません」

「いやです、ゆるしてッ」

志呂子は泣き声になった。「良家の子女」

は、この種の羞恥には弱いらしい。

「そうですか。そんなわがままをいうのでしたら、また、うしろ手にぎゅうぎゅう縛りあげ、うごけないようにしてから、むりやり、見せてあげましょうかね」

鼻の両わきに、ふかいシワを刻ませて、鯛代先生は凄んだ。

意地悪さをむきだしにしたときの彼女の顔は、まったく、ぞつとするような、つめたい凄みがある。

うしろ手にぎゅうぎゅう縛りあげる、という一言に、志呂子は青ざめた。

蛇にみこまれたカエルのように、おとなしくなった。

「さあ、この椅子に腰かけなさい」

おごそかに、女教師は命じた。

そして、志呂子の目の前の机の上に、れいの写真をならべたのである。

三十数枚のキャビネ判であった。

「さあ、見るんです。目をつぶってはダメですよ。一枚一枚、よく見るんです」

「はい……」

残酷ななかにも、妙に美しい白黒の光景が志呂子の目のなかいっばいに展開した。

——これが私のからだなのかしら？

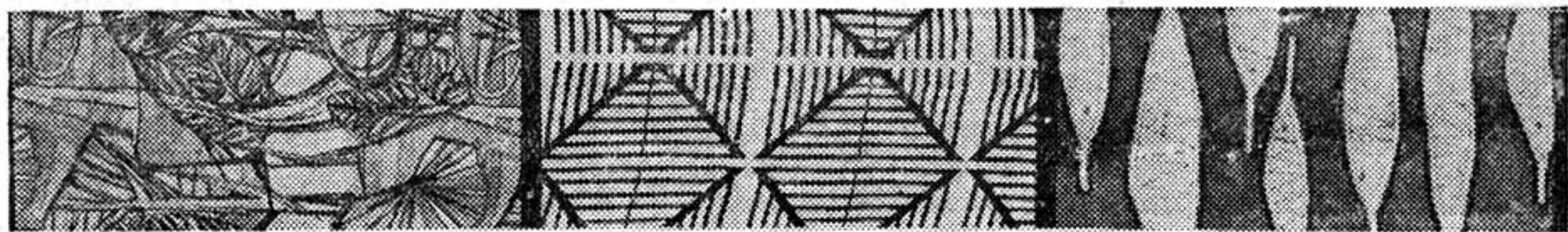
ねんど細工のようにねじまげられ、こねまわされてはいるが、まさしく、自分にちがいない。

きびしく縄目にかかり、もがきのたうっている自分の肉体。いましめられた四肢の、異様な躍動。

だが、羞恥のきわみ、といった表現の写真もある。志呂子は、目をとじた。

心臓が、なにかで叩かれているような音をたてている。

「いいこと？ これらの写真を、よくおぼえておくんですよ。これはぜんぶ、あなたのポーズなんですからね。もし、今後、あなたが私の命令をきかないときには、この写真をあなたのお父さんとお母さんにお送りしますからね。それから、淑女学院の院長先生にもお送りしましょう。たくさん焼き増しして、町じゅうへ配給してもいいわね。いいえ、先生だって、そんな汚らしい行為はしたくありませんわ。ただ、あなたが私のいうことを



きかないときには、そういう手段もあり得るということなの……」

ここで鯛代先生は、かん高い声で笑った。

志呂子は、蒼白になってきいている。

「そこで、あなたが、どのくらい私のいうことをきけるか、ちょっと試してみましよう。いいですか。あした、大会に出場するあなたの学院のバレー部の選手たちを、全員、この教室へつれてくること。じつは私、ものすごい淑女学院びいきなの。こんどの試合で、どうしても、あなたがたに勝っていただきたいの。そこで、私からも直接、選手みなさんにおねがいしたいの。ファンのひとりとして心からの激励をしたいのよ。ほかならぬ、あなたがキャプテンをしているチームですものね。私にとって、選手みなさんがたは、とても他人とは思えないわ。おわかりになってくれる？」

鯛代先生は、ここでちょっと、やさしい声をだした。

心の意地悪な女が、親切ぶった声をだすときほど、いやらしい、気味わるいものはこの世にない。

どう、とり澄ました声をだそうとも、それはいかにも芝居めいてきこえる。

歯槽膿漏患者の歯ブラシで、自分のたべる

おサシミをなでられるときののような気もちである。

「……」

鯛代のことばに、さすがに志呂子は沈黙した。この三十三歳の女教師の本心がどこにあるか、志呂子にはとうてい判断できないにしても、なにかしら、不安と警戒をおぼえたのである。

「どうなの、いやなの？」

鯛代は、猫なで声でいった。

「……」

縄の結び玉が、中心部にくいこんだ。

「じゃ、この写真を、ご両親にお送りしましょうね」

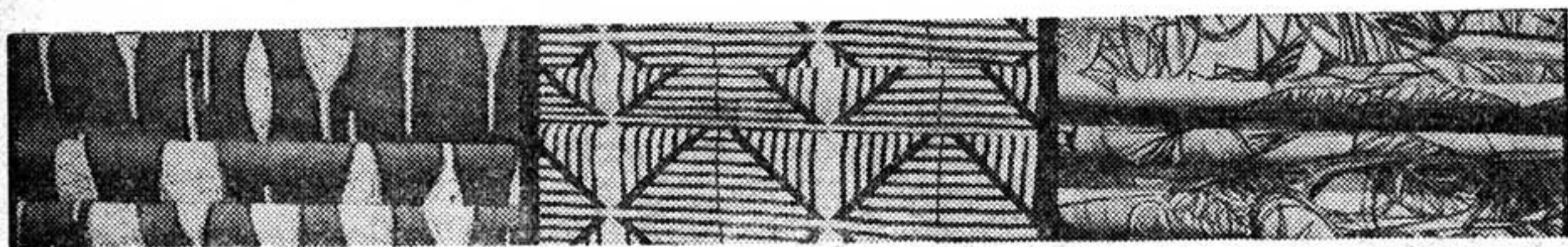
「先生、つれてきます。あすの夕方、バレーの練習が終わったら、すぐにみんなを、この塾の、この教室へつれてきます」

志呂子は、こう約束せざるを得なかったのである。

4

意地もあつたし、打算もあつた。

打算というのは、むろん、成功した場合、佐渡先生の男性としての、自分のものにできるといふ、夢のようにすばらしい契約についてである。



伊治目鯛代は、佐渡先生の考えた筋書きどおりに、自分が演技できたことを、うれしくてたまらなかった。

むろん、そのかげには、白バラ学習塾の経営者、欲野深男（よくのふかお）の無言の協力があつただけけれども、とにかく、予期以上の成功をおさめたのである。

淑女学院チームのキャプテンを、あろうことか、常時タテ縛りにして、その行動力を完全に束縛してしまったことだけでも、お転婆学園チームにとって、たいへんなプラスである。

——こんなに成果があがったのだから、あと五回ぐらいは、追加できるわ。

鯛代はそう思うと、口笛をふきたいような気もちである。

はじめの約束は、七回だけだった。

そのうちの一回は、その秘密の相談をうけ契約した旅館の一室で、手つけとして、さっそく、すませてしまった。

佐渡先生のテクニクは、手足がくたくたになるほどの、すばらしいものであった。

悲しいことに、そして恥ずかしいことに、

それまで鯛代は、処女だったのである。

第一回目というものは、そんなによるこびはないということをきいていたのだが、どう

してどうして、佐渡先生の技巧は、まったく鯛代を夢中にさせてしまった。

こんなすばらしい時間を、どうしていままで経験しなかったのか。

いまさらのように、鯛代はくやしがつた。この十数年間を、無駄にすごしたようなものだ。

鯛代は、なぜこの世の中に男と女が存在するのか、はじめてわかったような心境になった。

もっとも、経験しようにも、それまで、世の男どもが、鯛代を相手にしなかったのだから、なんとも、致しかたない。

縛りあげた波多野志呂子を撮影して、焼きあがったその写真と引き換えに、鯛代は二度目の実行を、佐渡先生に要求した。

二度目は、初回よりも、もっとすばらしかった。

——あと、五回ある。

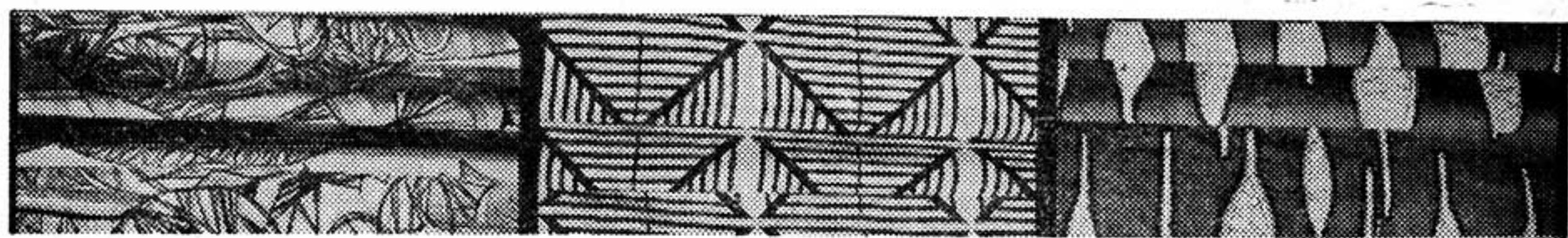
と、泣きながら、たのしみだった。

同時に、さびしくもあった。

——もうあと、五回しかない。

ということにも、なるからである。

しかし、こんなにも歴然たる成果が現われたいま、あと五回ぐらいの追加を要求するのは、当然の褒賞であり、権利だともおもう。



——そうすると、プラスして、あと十回になる。

ゾクゾクと、ふるえのくるような、たのしみである。

快樂とは、こころよく、たのしむことだ。

こころよく、たのしむことを、どうして世間のひとびとは、ときに、罪惡視するのか。

ついこのあいだまで、自分も同じく快樂を罪惡視していたくせに、鯛代はそんなことを実感として、感じはじめていたのだ。

さて、この日の報告を、鯛代は、れいの町はずれの旅館の、思い出の一室で行なった。「そうですか。それじゃ、あすの夕方、敵のバレーチームの全員が、あの白バラ塾に集合するんですか。そいつはうまい」

と、佐渡先生はよろこんだが、まもなく、「なんですって？……あと、五回追加？……ふうむ……まあ、なんです、しかたがない。わかりました……」

降参したように、あたまをさげた。

「うれしいわ。それじゃ、今夜、一回……」すかさず、鯛代は、つけこんだ。

5

つぎの日の夕方。

白バラ塾の裏から、その内部へ、十名ほど

の人間が、こっそりと、忍びこむような格好で、つぎつぎに影を消した。

まず、佐渡先生。

つぎに、ご存じお転婆学園の、勇猛なるキヤプテンの意地悪子（いじわるこ）。

古参部員で、チーム内いちばんの実力者、槍手婆子（やりてばあこ）。

体重七十三キロの腕力ナンバーワン、白井豚子（しろいぶたこ）。

同性いじめの天才、影ひなた。

そのほか、バレー部員のなかで、とくに腕ッぶしの強い、五、六名の女の子が、こっそりと白バラ塾へはいつていたのである。

彼女たちの数名は、なにやら機械のような四角いものを、手にさげている。

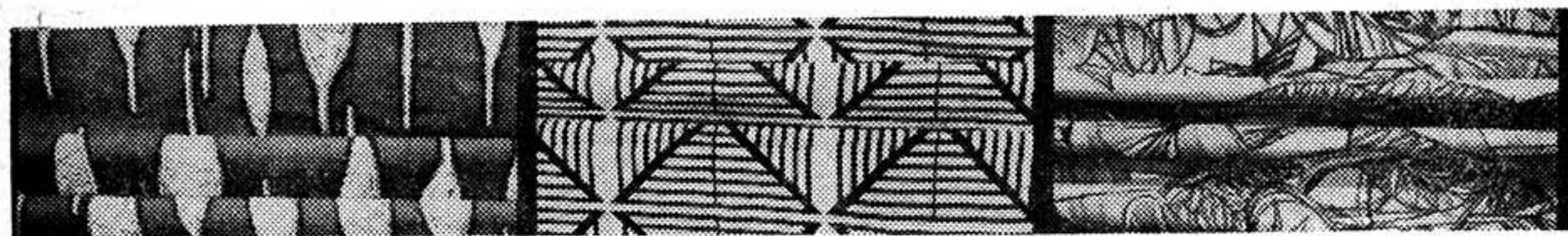
お転婆学園の猛女たちが、ぜんぶすがたを消してから、約三十分経過したとき、こんどは、表口の玄関へ、かわいい生徒たちの顔がみえた。

「ごめんください」

と、しとやかな声がかかる。

不安のためか、やや青ざめた顔色の波多野志呂子にみちびかれた、淑女学院バレー部の名誉ある八名の選手であった。

——へんだわ。なんだか、きょうは、ずいぶん、ひっそりしているわ。



と、志呂子の不安は増した。しかし、いまさら、どうにもならない。

志呂子は、自分のつれてきた選手たちを、一応、応接室へいれると、鯛代先生呼びに慣れた二階への階段をあがっていった。

いつもの部屋のドアを、ノックする。

「先生。ご命令によりまして、淑女学院バレ―部の選手をつれてまいりました」

「おはいりなさい」

と、鯛代先生の声。

「失礼いたします」

志呂子は、ドアをあけて、室内に一步、足をいれた。

「待ってたのよッ」

さけぶようにいうと、鯛代はすばやく、志呂子にとびかかった。

スカートのホックをもぎとり、ベルトをはずそうとした。やせているくせに、この女教師の腕力は、なかなかのものだ。

「あれッ、先生、なにを――」

おもわず、志呂子は抵抗する。

「まあッ、あなた、抵抗するんですか。まだあなたにはわかってないのね。あれッなどという口で、先生、きょうもよろしくおねがいします、となせ言えないんです。まだまだ、反省がたりないのね」

「でも、先生、きょうは――」

「でももストもないわよ、志呂子さんッ」

と、へたな駄ジャレをとぼしながら、鯛代先生の手は敏捷にうごいた。

スカートは志呂子の足もとにうずくまり、ブラウスも部屋のすみに、白い鳥のように飛びこんでいった。

「またですか、先生！」

鯛代先生の手のにぎられた縄をみて、志呂子は悲鳴をあげた。

もう、鯛代は無言である。

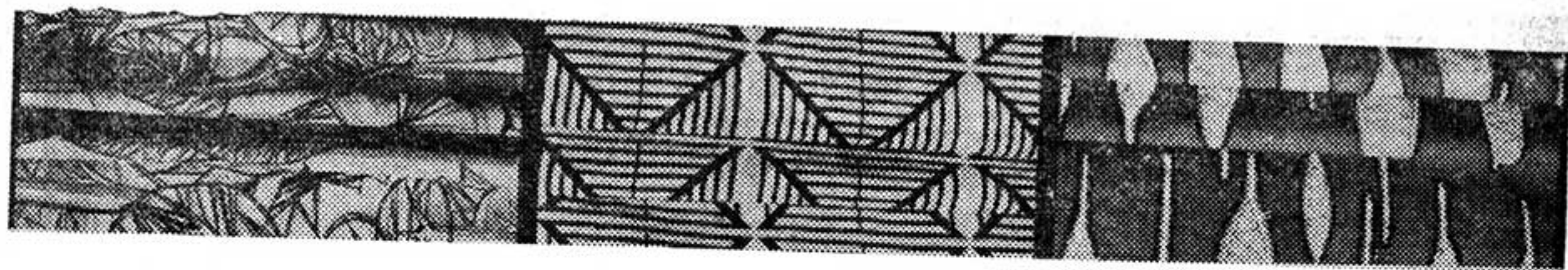
志呂子の左右の腕を、ぐいぐい背後へねじりあげる。まるく愛らしい手首を、ひとつにかさねて押さえつける。そして、その手首から、ぎりぎり縄をかけていく。

手首から腕へまわし、胸にかけ、しめあげひきしほり、また手首へもどして幾重にも縛りあげる。

すっかり手慣れた縄さばきで、たちまち、志呂子を高手小手に荷づくりしてしまった。

「まあ、このパンティは、この前のときのまね。よろしい。よく先生の命令を守ったわね。おかげで、だいぶ汚れてしまったわね。汚れたパンティのはきごころは、どう？」

さすがに、志呂子は、くちびるを噛んだ。階下には、自分のチームの者たちがいるの



だ。キャプテンのこの奇妙なすがたをみたら
なんというだろう。

志呂子のその顔色をみて、鯛代先生は微笑
しながらいった。

「さあ、下におりましょう。あなたのチーム
のバレー選手たちに、このすてきなスタイル
をみていただきましょう」

「あッ、先生、それだけはゆるしてッ。いく
らなんでも、いやです。恥ずかしい！」

鯛代先生は、にやにやしながら、志呂子の
もだえる様をみつめていたが、いきなり彼女
の、格好のいい鼻をつまんだ。

「うッ、はあッ」

志呂子は髪を左右にふり、口をぱくぱくさ
せた。

両腕は背中にしっかりと縛りあげられている
のだから、鯛代の乱暴な手を払いのけること
はできない。

鯛代先生は、片手ですばやくハンカチを取
りだすと、志呂子の歯と歯のあいだに押しこ
み、首のうしろでむすんだ。

「ううッ、むッ！」

即席のさるぐつわである。鯛代のハンカチ
は、色気のない大きなやつだったから、十分
にさるぐつわの用をなした。

「さあ、こうしておいて、あなたをみんなの

前にさらすのよ」

「むうッ、ぐうッ！」

と抵抗する志呂子を、つきとばし、つきと
ばし、階下へひきずりおろす。

淑女学院の選手たちは、応接室に待たされ
たままでいる。

待ちくたびれてもいい時間なのだが、そこ
はそれ、上品な教育法をもって鳴る学校の生
徒だから、みんな神妙な表情で、きちんとひ
さをそろえて、ソファに腰かけているのであ
る。

このとき、きゆうに、ドアのむこうで、何
やら、大きな物音がした。

彼女たちの視線が、いっせいに、ドアのほ
うに向いた。

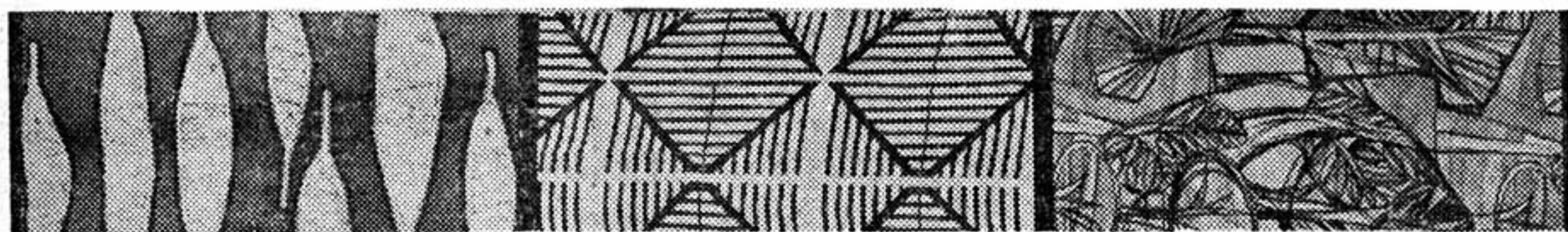
乱暴ないきおいで、ドアがあけ放たれた。
同時に、白い大きなものが、廊下からころ
がりこんできた。それは、ゆかにころがって
にぶい音をたてた。

「あッ、キャプテン！」

と、ひとりがさけんだ。

その白いものは、みじめにも素肌に縄をか
けられ、高手小手にいましめられた、波多野
志呂子だったのである。

おまけに、キャプテンの顔には、ハンカチ
のさるぐつわが、きびしくくいこんでいる。



「どうしたんです、キャプテン！」

選手たちは、いっせいに、志呂子の周囲に集まった。

このとき、顔半面を黒いマスクででおおった七、八名の怪人が、ドアからいっせいにこの部屋に乱入してきた。

黒いマスクとは、鼻から上の、目だけをおおったボール紙製の、子どもたちがよくギョングごっこなんかで遊ぶ、れいの安物の玩具である。

だが、そんなものでいくら顔を半分かくしても、髪かたち、服装などで、その怪人たちが女の子であることは、すぐにわかる。

「しずかにしたほうがいいよ！」

先頭の怪人が、凄んだ声でいった。だが、やはり、女の子の声だ。

「どなたですか、あなたたちは？」

淑女学院チームのひとりが、隠せずいきいた。

「だれでもいいさ」

むしろ、怪人たちのほうが、ひるんだようである。

「私たちのキャプテンを、こんなにひどい目にあわして。……これはとても、いたずらや冗談とおもえません！」

りん然として、彼女はいった。堂々として

いて、りっぱである。

「そうともさ、いたずらや冗談でやってるんじゃないよ！」

先頭の黒マスクが、肩をそびやかしていった。どうやら、この声は意地悪子らしい。

「無駄なことをしゃべっていないで、早くやっちゃったほうがいいよ」

と、ささやいた黒マスクは、槍手婆子だった。

「そうとも、キャプテン。早くこいつらを縛りあげて、ひいひい言わせてやりたいよ」

と、吠えたのは、どうやら白井豚子のような。

みると、黒マスク側のほうは、それぞれ、みんな縄たばをつかんでいる。

淑女学院チームの選手たちを、この白バラ塾の応接室に奇襲し、縛りあげて、はずかしめようというのだ。

バレーのほうの実力では、とうていかなわないとあきらめたお転婆学園側の、せっぱつまった末の、奇襲作戦であった。

「それッ、やっちゃまえ！」

意地悪子の右手があがった。カン声とも、嬌声ともつかぬ声が、いっせいにこった。

毒ぐもに巻かれる弓子



1

弓子は、目の前にそろえられた食べものを
ようやくぜんぶ食べ終えた。

そんな弓子のようにすを、目をほそめて観察
しながら休息しているのは、このアラビアの
城のあるじ、Qである。

弓子は、屈辱のうめき声を、必死になって
耐えていた。

声をあげると、すぐにお仕置きが待ってい
るのである。

テーブルの上には、あのうす気味わるいく
すぐりセットが、いつでも使えるように、そ
のままならべてあった。

食事のあとの休息の時間が、一時間ほど経
過し、やがて、弓子の身心には、ふたたび、

北園透一郎
頭鬼 暁・絵

生気がもどってきた。

「フフフ。若い子は、回復力が盛んだねえ」

Qは、微笑をもらした。

そして、くちびるから葉巻きをはなすと、ベルを押して、世話係を呼んだ。

「テーブルを片づけて、全身美容のしたくをしてもらおうか」

弓子の顔色をうかがいながら、Qはゆっくりいった。

「かしこまりました」

世話係は、徹底的に従順である。一礼すると、テーブルを片づけ、そのあとに、あらたに、さまざまな道具を持ってきて、弓子の前にならべた。

弓子は、ぎくりと、肩をふるわせた。

その奇妙なかたちをした道具が、なんの目的のために、いま弓子の眼前にそろえられたのか、彼女は、早くもさとしたのである。

「もう、ゆるして。かんにんして！」

耐えきれず、泣き声をあげた。

「いい声だ。ぞくぞくする」

Qは、目を糸のようにほそめた。

「あなたは、鬼です、悪魔です！」

「弓子のからだを、美しく、みがいてあげようというのだよ。痛くもなんともないから、じっとしておいで」

Qは言いながら、テーブルの上から、オシメとオシメカバーを取り上げた。

「全身美容中に、したくなったら困るから、いまのうちにしておこうね。さあ、おとなしくしておいで」

Qは弓子の髪に手をかけた。

「ああ、それはイヤ、イヤ。かんにんして。おトイレに行かせて。逃げたりなんかしませんから」

弓子は、いつのまにか習得した、自然に出る甘えた声で哀願しながらもがいた。

Qは、オシメをつかみかけていたが、その声を聞くと、

「フム、そうだね。行かせてやってもいいな」と、つぶやいた。

「そうだな。お小用がすんだら、しずかにこのお椅子に坐ると約束するなら、行かせてあげよう。約束するかね」

「ハイ」

弓子は小さな声で返事した。

「よしよし、いい子だ。もちろん、おトイレに行く前に、さるぐつわをするのだよ」

「また、お口をくくるの」

弓子は言いよどんでうつむいたが、やがてあきらめたらしい。

「おとなしくしていますから、あんまりきつ

くしないで」

言いながら、口を開いた。

「フフフ、本当に、いい子になったね」

Qは笑いながら、細く切ったガーゼを弓子の口にたっぶりつめこみ、二重さるぐつわをかけた。

「むっ、むっ」

弓子は、早くもそのつらさ、苦しさにうめき始めた。

「それでは、ついでにチャドルをして上げよう。ハレムの女の身だしなみだからね」

言いながら、テーブルの上からビニールの袋を取り上げ、中身を取り出して、弓子に広げて見せた。

弓子はそれを見ると、激しくうめいて、身をもだえ始めた。

それは、弓子がはじめからはいっていた下着で、さつき準備室でオシメといっしょに汚して脱がされたものだったのである。

弓子は、必死に頭を振って逃がれようとしたが、それはむろんあがきでしかなかった。

Qは、難なく、それで彼女の顔の眼から下をくるんでしまった。

「フフフ、自分の排泄物で汚れた下着もまた、オツなおいがするだろう。従順にかいでいるんだよ」

Qは笑いながら、そのまま、しばらく弓子をうめきもだえさせていた。

弓子は、カガミの中に、下着で包まれた自分の顔を見て、新たな羞恥と屈辱にまた涙を流した。

弓子があきらめて静かになるまで待つてから、Qは世話係を呼び寄せ、

「この泣き虫の赤ン坊を、おトイレに連れていってくれ」

と、命じた。

世話係は、移動椅子を用意して、そこへ弓子を移し、育児室の便所へ連れていった。

育児室の便所は、二つの小部屋にわかれ、それぞれに異った型の用器が入っている。

和風のもの、洋風のもの、そして、立ったまま使用する特殊な型のものの三種である。

むろん、これらには、弓子を固定する装置と、羞恥責めのための仕掛けが組み込まれているのである。

弓子が連れて行かれたのは、真ん中の一段高くなった所に、白い和風の便器がすえてある清潔そうな個室であった。

世話係たちは、そこで弓子を移動椅子から解いた。

両側の床に取り付けてあった足枷をびっちり

りはめ、つぎに横手に据えてあった複雑な機

械から水平に伸びているごつい鉄の首枷を、弓子にはめた。

この首枷は、上下と前後には弓子のもだえにに応じて自由に動くもので、彼女が逃げ出すのを予防する目的のものである。

「じゃ、三分間だけお手手を自由にして、一人だけにしてあげるから、その間にお小用を

すませておきなさいね。ホラ、後始末のタオルはここにあるわ。きれいにふいておくのよ。それから、お手手が自由になったからと

いっても、パンティのほかはいじっちゃだめよ。いいわね。三分たったら、また来るわ」

世話係は言うのと、弓子の後手錠をはずして出ていった。

その磨かれたドアに、外から錠がかけられる音がすると、弓子は、ちよつとためらった後、自由になった手をチャドルの結び目に持

っていった。

三分たつまでにまた、あてとけばいいわと思ったのである。

ぬれた下着のチャドルは、ほんの三分間だけでもはずしておきたいほど、耐えがたい恥辱をあたえるものだったのだ。

臭いチャドルがはずれると、トイレには香水がまかれていますらしく、甘いよい香りがただよっているのに、弓子は気付いた。

その香りは、自分の尿のむれたにおいを、弓子に、はっきりさとらせる効果があった。

弓子は、つぎにさるぐつわに手をかけた。しかし、これは、がっちり締め上がって止め

金がかかっており、疲れた彼女の手ではとてもはずせそうにもなかった。

さらに弓子は、首枷と足枷を調べてみて、ひよつとしたら逃げ出せるかも知れないと考

えていたのは、甘い考えであることを知った。足は、床に固定した靴をはかされたようにな

っており、足首には皮ベルトが巻かれている。首枷は、彼女の首を巨大な手のように

がちり捕えて錠がかけられていた。「こんなにまでしなくなつて。もう私は逃げ

出せないのだわ」

弓子は悲しくなつて、新たな絶望の涙を流した。

Qは、こうして幾重もの拘束を弓子にほどこすことに熱心なのであり、また、これが弓

子から逃亡の意志を奪う効果のあることも知っていたのである。

声を殺して泣いていた弓子は、ふと、三分間という時間の制限を思い出した。

「早くすませておかないと、また何をされるか分からないわ」

弓子は、あわてて下着をずらし、白い陶器



にしゃがもうとした。

その時、急にドアの錠の開く音がすると、

Qが入って来た。弓子は、思わず

「いま入って来ちゃ、いや」

と、大声でさげんだ。

むろん外にもれたのは、

「むっ」

といううめき声だけである。

Qはその間に、遠慮なくズカズカと入って来た。ニヤニヤ笑いながら、弓子にはめられている首枷の機械のボタンを一つ押した。

すると、カチリと小さな音がして、同時に、

今まで自由に動いた首枷はビクともしなくなってしまう。

「三分たったよ」

Qは言った。

「むっ、むうん」

弓子は、動かなくなった首枷の下で、なおも身体をよじる。

「すぐにすませますから、ゆるして」

と、言いたいのだが、苛酷なさるぐつわがそれをゆるさないのだ。

「フフフ。まだかんじんなことをすませていないのだね。悪い子だ。それに、チャドルを取ってしまったのだね。後でお仕置きだよ」

Qは言った。

「さあ、お手手をはなして、弓子の可愛いふくらみが見えるようにしてごらん」

「むうん、むうん」

「オヤ、これも言うことを聞かないのだね。よしよし、じゃ、くくってあげよう。お仕置きをしてもらいたいのだね」

Qは、かんたんに弓子の手を後にねじり上げると、手錠をはめてしまった。

後手錠がはめられてしまうと、弓子は急に静かになった。この無防備なからだに、どんなお仕置きがされるのかと思うと、手足がすくんでしまったのである。

Qは、そばにひかえていた世話係に、

「締め具を持って来てくれ」

と、命じた。世話係は、すぐにその複雑な道具を持って戻って来た。

「弓子がおとなしくお手手を後にまわさなかった罰だよ」

Qは言いながら、締め具で弓子を縛り始めた。

それは、弓子の全身のサイズに合わせて、あらかじめロープを組み合わせる結び目がついてあり、背中で三カ所ほどの尾錠を締めると、完全な後手締めが出来たようになったものである。

Qは、弓子の後手錠をはずし、締め具で手首を背中に高々と吊り上げた。

その痛さと苦しさに、弓子のうめき声は、一段と高くなった。

「どうだね、弓子。これが、高手小手という縛り方なのだよ。弓子みたいに可愛い女の子には、いちばんよく似合うのさ。フッフ。身体にびったり合って、気持ちがいいだろう」

笑いながら、弓子の表情をながめる。

弓子の柔らかな肌に、黒い絹のロープが食いこみ、幾重ものくびれができている。

その痛々しい哀れな風景は、とっても可愛

らしいものである。

Qは、締め具の部分の嚴重さを、満足するまで充分調べてから、今度は首枷の機械を操作した。

すると、首枷はゆっくり下がりはじめ、弓子は、いやおうなしに陶器にしゃがまされていた。弓子は、高手小手に縛り上げられた手が、さらにしめ上げられていく痛さに、うめきながら必死に首枷に抵抗したが、首枷は、生き物のように巧妙に、しかも力強く弓子を押さえつけ、とうとう彼女は陶器の上にしゃがまされてしまった。

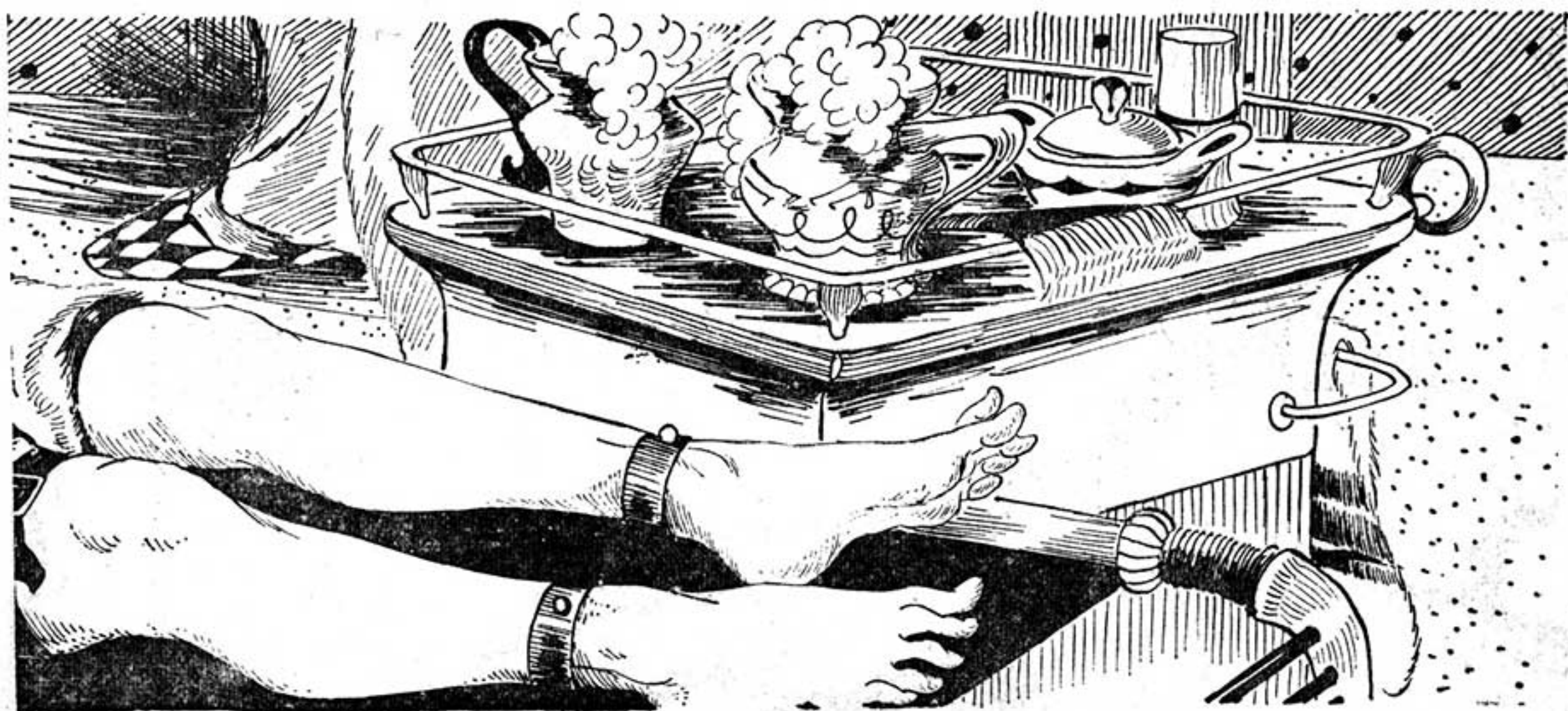
弓子は、羞恥に全身を真紅にそめてうめきもだえている。

Qは、そんな弓子を眺めて、フッフと笑いながら、陶器をこそそといじっていたが、やがてそれを押し始めた。

おどろいたことに、陶器は、固定された弓子をのせたまま、軽々とうごきだしたのである。

陶器は、弓子をのせたまま、育児室の広間に運ばれ、その大きなカガミの前に据えられた。

弓子は、いやでもそのカガミに写る自分の恥ずかしい恰好を眺めねばならなかった。ごつい首枷が、うつむくことをゆるさないの



ある。

「フフフフ、こうしてするのも、また気分が
変わっていいものだよ。さあ、えんりよなく
してごらん。おっと、チャドルが取れたまま
だったね。いくら自分の下着がいやなおい
だからと言って、勝手に取ってはいけないの
だよ。さあ、もと通りにあててあげるから、
今度はしずかにかいでおいで。もっとも、も
う取ったり出来ないだろうけどね」

Qは、弓子の顔をもとのようにパンティで
くるんでしまった。

「むっ、むっ」

「さあ、早くしてしまい。いい子だから。
フフフフ、下ばきをはいたままだから、しよ
うとしても出来ないのかね。かまわないから
そのままおし」

しかし、いくら命令されたとはいえ、弓子
には出来ることではない。

涙をいっばいためた瞳をQに向けて、弓子
はゆるしを乞うた。

「フム、まだ言うことが聞けないのだね。じ
ゃ、こうしてあげよう。すぐに、なにもかも
汚したくなるよ」

Qは、くすぐりセットの小箱を持って来さ
せ、中身を取り出した。

弓子は、身も世もあらぬ恰好で、もだえさ

せられた。れいによって、足のうら責めであ
る。

たっぷりくすぐられて、弓子がぐったりと
なってしまうと、ようやく手を休めた。

「さあ、もう、あきらめてするね。いい子だ
からね」

言いながら、弓子の前にまわって、弓子を
前から眺めるような目つきで、へんな声をだ
した。

「ホラ、ホラ、いい子だ。シーコイコイ。シ
ーコイコイコイ」

恥ずかしい音がやむと、

「よし、よし、いい子だった」

弓子は頭をなでられながら、そのまま、れ
いの責め椅子のある小屋に入れられた。

「さあ、もうおとなしくお坐りするね」

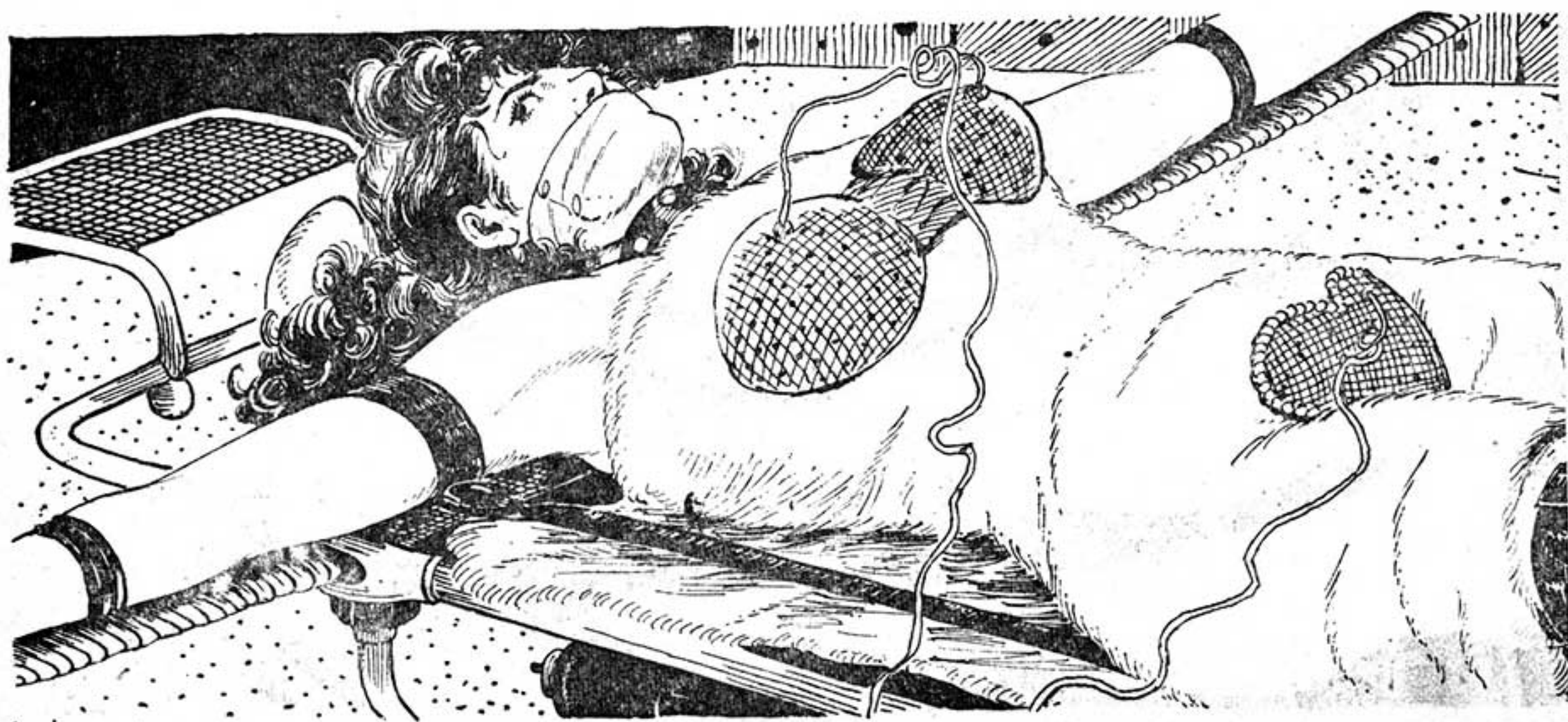
弓子を陶器から解放すると、ぬれた衣類を
脱がせてから、椅子に坐らせた。

弓子は、もうあきらめて、するがままにな
っている。

Qは、弓子の上半身を縛り上げていた締め
具も解いたが、すぐにまた、椅子に嚴重に固
定してから、ていねいにふき清めた。

弓子は、その屈辱も、じっと耐えしのばね
ばならなかった。

「さあ、それではさるぐつわを換えてから、



約束通り、全身美容してあげようね」

Qは、弓子のさるぐつわを解き、ガーゼを引っぱり出して、顔をていねいにふいてやった。

「今度は何をするの。もうかんにんして」

弓子は哀願していたが、Qが、さっき汚した下着を弓子の口につめようとしているのに気付くと、

「イヤ、イヤ、そんな汚ならしいことしないで」

と悲鳴を上げ始めた。

しかし、その悲鳴も、もはや、大きな声にはならない。その哀れな声も、Qにとってはすばらしいのだ。

可愛い悲鳴を上げる口に、開口器をはめる。

ぬれたパンティを押し込んでしまうと、ふたたびもと通りに皮の二重さるぐつわをはめさらに、パンティのチャドルをあてた。

口につめられたびしょぬれのは、弓子の口にちようどいっぱいの大きさに作られていた。

身体検査の結果は、ここにも利用されていたのである。

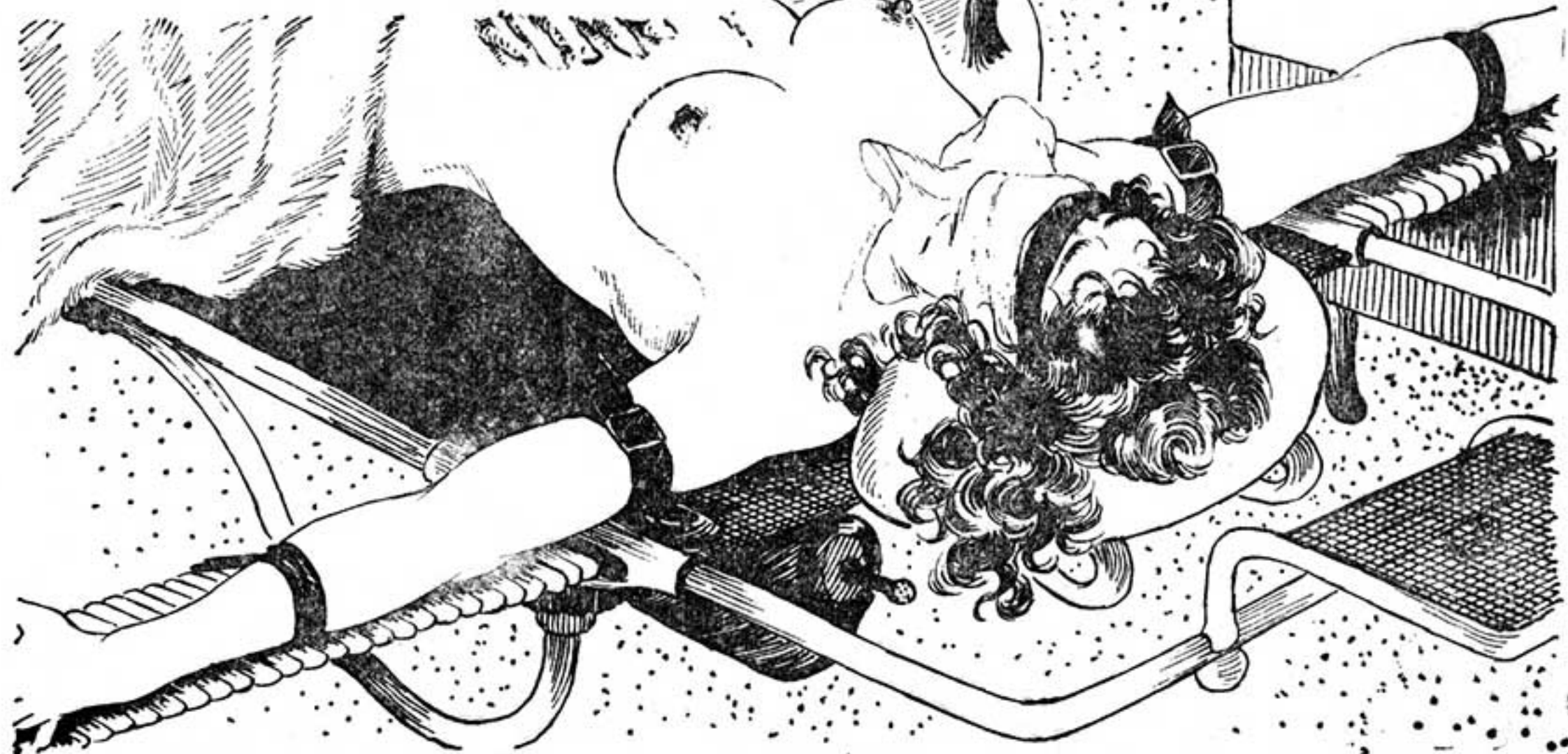
「フフフフ。弓子が、なかなか自然の生理を処置しなかった罰だよ。どうだね、自分の液



体の味とにおいは、フフフ。これからの全身美容は三時間ぐらいかかるが、その間、じっくり味わっておいで。そうすれば、もっといい子になるからね」

弓子は、大きくあえいでいたが、やがて全身の力がぬけたように、椅子の上でぐったりとなってしまうた。

どんなに抵抗しても、結局はQの思い通りにされてしまうということを、弓子はこうして、なんども、なんども、思い知らされるのである。



しばらく、屈辱に打ちひしがれてしまった弓子の、哀れな姿態を眺めていたQは、世話係たちを呼び、

「石けん美容の用意をしてくれ」

と、命じた。

世話係たちは、さまざまの道具を責め椅子のまわりに持って来て据えた。

道具の用意がととのうと、二人の小間使いが、それぞれ金色と銀色の大きなカップに、石けんを泡立て始めた。

美しいピンク色の粉石けんをたっぷり入れ、その上にいろいろな薬品を一つ一つ精密に計って入れてから、充分に泡立せてテーブルの上に置くと、

「どうぞ、ごゆっくり」

と言って、世話係たちは部屋を出ていった。「では、そろそろ始めようか。ホラ、ネンネしてごらん」

言いながら、そばのスイッチを押して、弓子の坐らせられている椅子の背をたおし、弓子を寝かせると、つぎにもう一つボタンを押して弓子の全身を大きくひろげさせた。

弓子は、恐怖に大きく眼を開き、Qの表情を必死に追いながらふるえている。

「よしよし、何もそんなにこわがることはないのだよ。おとなしくおめめをつむっていれば、とっても気持ちがいいし、その間に弓子のお身体が、いっそう、きれいになるものだからね。フフフ」

笑うと、小間使いの用意したカップの中の銀色のものを取り上げ、そばにそなえてあった柔らかな刷毛で、石けん液を弓子のからだにぬり始めた。

ぬるツとした石けん液を、柔かな刷毛でぬられるのは、異様な気味悪さ、くすぐったさ、そして恥ずかしい。

「むっ、むっ、むっ」

弓子はうめき、身をもだえる。

それにかまわず、純白の可愛い素肌になつぷり石けんをぬりこむと、今度は、むしタオル器から熱いむしタオルを取り出し、素肌をたっぷりくるみ込むように、ていねいにあてた。

「むっ、むっ」

「フフフ。どうだね、いい気持ちだろう。そのままじっとしているのだよ」

むしタオルは、美しく色付いた乳首だけが顔を出すようにして、乳房を包んでいる。その上にさらに、柔らかな厚い布で出来たブラジャーのようなものをあて、両脇で椅子に止

めてむしタオルがずれないようにした。このブラジャーも、乳首の部分にだけ小さな穴があけてあったが、べつに電気のコードがついていて、そばの機械につながっている。

これは電気ブラジャーと呼ばれるもので、電気を通すとブラジャー自身が熱くなり、むしタオルがさめないようにするものなのである。

つぎに、Qは金色のカップを取り上げた。

弓子は、その石けん液が今度はどこにぬられるかを、本能的にさとった。ハレムの女として、最も大切な、いつもQの気に入るように美しくしておかねばならない場所である。

「むうん」

弓子は、Qを見上げ、ぬれたひとみでゆるしを乞うている。

しかし、ゆるしてもらえるはずはない。

「さあ、これでおしまいだよ。後はじっとしていればいいんだからね」

言いながら、ブラジャーとバタフライのコードがつながっている機械のスイッチを入れた。

すると、少しさめかかって来ていたむしタオルは、ふたたび熱くなり、弓子の最も敏感な美しい部分を、じっとりむし始めた。

熱さは、火傷を起こさない程度の最高の温

度を保つように、注意深く調節されていた。

こうしておけば、石けんにくまられるさまざまな薬品が、熱と湯気でますます柔らかくなった肌にしみこみ、その効果が早く現われるのである。

二十分ほどたつと、石けんを取り換えるために、胸のものも、そのほかのものもはずし石けんをふき取った。

つぎに、Qは、氷でひやしたタオルを、むされていた部分にあて、ふやけた肌をひきしめた。

これは、石けん美容の効果をいっそう高めるものなのである。

こうして、充分にひやしてから、ふたたび石けんをぬりこんでむしタオルをあてる。

これを五、六回くり返すと、予定の美容効果が現われるのである。

その効果というものを、Qはニヤニヤ笑いながら、弓子に聞かせた。

素肌にぬられた石けんは、肌を美しくし敏感にさせる効果があった。

しかも、くすぐり責めの時に用いられたクリームと異って、長時間にわたってその効果は続き、素肌に加えられる刺激や、後に行なわれる乳房美容や豊胸術にも好結果をもたらす、言わば、ハレムの女の基礎美容とでも言

うべきものであった。

もう一つの、金色のカップに入った石けん液にも、同じような効能があったが、その上もう一つ異った特徴があった。

この「アラビアの城」のハレムに閉じこめられている女たちは、皆、この美容を毎週一回は必ず受けねばならぬことになっていた。

むろん、色は、その女に一番よく似合うものが選ばれる。しかし、少くとも髪の色とは異なるものでなければならぬのである。

髪の色と異った色に染められることは、女たちから逃亡の気力を失なわせ、服従とあきらめを持たせるに充分な心理的効果がある。



弓子は、この恥ずかしい美容の効果を開かされると、くるしいさるぐつわの奥から異様なうめき声をしぼり出し、何とかむしタオルを取ろうと身をもがいた。

しかし、むろんこれは無駄なあがきでしかなかった。弓子の筋肉からは、次第に力がぬけていった。

Qは、満足そうなふくみ笑いをもらしながら、二十分ごとに石けんをぬり換え、その間は、つめたい水を注入したり、黒い髪の毛をもてあそんだりしていたが、やがて、美しい女性たちが、恥ずかしい全身美容を強制されてあえいでいる絵や写真を見せ始めた。

それは、明日からの弓子の運命を暗示するものであった。

用意したものを全部見せ終わると、Qは、弓子に目隠しをほどこした。

「さあ、もう、じっとしているね。いい子だからね。あとは、いま、むしてもらっているところに、じっと意識を集中していればいいのだよ。とってもいい気分になってくるからね」

「むうん、むうん」

弓子は、低くあえぎ続けていた。

石けんの効果は、三回ほど取り換えられるところから、次第に現われてきた。

石けんをぬられたときのくすぐったさに、何もかも忘れた。

弓子は夢中になってもがかねばならなくなつた。

そしてそのとき、弓子は、自分の身体にまだかつて経験したことのないような奇怪な変化が起こっているのに気付いた。

彼女は、その恥ずかしさに、全身を真紅に染めた。

Qは、石けん美容の効果が、予定通り現われてきたのを見とけると、電気ブラジャーと電気バタフライの上に、それぞれ冷水点滴器を取り付けてから、部屋を出ていった。

冷水点滴器は、一定時間ごとにつめたい水をむしタオルの中に注入し、ふやけた肌を鍛練する。

Qは、ハレムのほかの女たちに、今夜の最後の訓練をほどこしに行ったのである。

しかし、二十分ごとに必ず戻って来て、弓子の石けんを取り換えるのを忘れなかった。

六回目の石けんがふき取られると、Qは弓子の身体を注意ぶかく調べて、満足そうに笑いながら、ベルを押した。

世話係たちは入って来て、弓子のかがかやくような白肌を見るといっせいに感嘆の表情を浮かべた。

「マアマア、本当にきれいになったこと。やっぱり弓子ちゃんには、それだけの素質があったのね。とっても可愛いいわ。世間にはもちろん、このハレムにだってこれだけの女の子はいないわ。旦那さまは、本当にいい子をお手に入れましたのね」

世話係は愛想よく言った。

「フフフフ。いや、私もこれほどとは思わなかったよ」

Q満足そうに笑ったが、「仕上げにかかってくれ」と、命じた。

美容師が呼ばれ、いよいよ仕上げが始められた。

「じゃ、まず、お胸のあたりから始めましょうか」

美容師は言いながら、弓子の肩からクリームをぬり、マッサージを始めた。

弓子の双丘は、すぐそれに反応した。恐ろしいほどの美容効果である。

マッサージは、すぐにQの手に変わり、美容師は、手伝いのほうにまわった。

いま行なわれているのは、弓子に対する訓練の一つなのだ。

充分クリームがすりこまれ、肌がすこしべたついてくると、Qは手をとめた。

美容師は、その上にべつのクリームを、肌が見えなくなるほど厚くぬってから、柔らかなタオルで上半身をおおった。

「ハイ。これで肩からおなかのへんまでは終わりよ。じゃ、もうひとつのほうも、ちゃんとしましょうね。じっとしていなければだめよ」

美容師は言う、弓子の腰枷をさらに巾の広い、嚴重なものに換え、つぎに太股にも枷をどこして、弓子の腰が、ピクリとも動かぬようにしてしまった。

こうしておいてから、美容師は、小さなクシを取り、ようやく金色に光りはじめたものを念入りにとかし始めた。

それは弓子の毛髪とおなじく、豊かで美しかった。彼女の性格を表しているかのように素直であった。

弓子は、泣いて身体をくねらせたが、がちり固定されているのは、美容師の作業には、なんの影響もあたえない。

すき終わると、美容師は小さなハサミを取り、チヨキチヨキと鳴らしながら、それを刈りだした。

むろん全部刈ってしまうのではなく、長さをそろえ、格好をよくするためである。

大体の形がととのうと、今度は、シェービ

ングクリームがぬられる。

「弓子ちゃんに似合うように、芸術的な可愛い形に作ってあげるわ。お利口ちゃんだから、おとなしくしていってね。すぐ終わりますからね。なんにも恥ずかしいことはないわ。昔の中国の女性も、ローマやアラビアのハレムの女も、みんな、この部分をきれいにしていたものなのよ。ホホホ」

美容師は笑うと、小さなカミソリを用いて注意ぶかく身をかがめた。

弓子は、無駄と知りつつも、必死に泣きもだえた。



そうしているほうが、まだしも屈辱感から逃がられるような気がするのである。

美容師は、手を休めることもなく、こまかい絵を描くように作業を続けていたが、やがて終わったらしい。

「いかがでございますか」

と、Qにたずねた。

「結構、結構。こうすると、弓子はいっそう可愛らしいな」

「本当に。こんなにブロードの似合う子は始めてですわ」

美容師は言いながら、乳液とクリームをたっぷりすりこみ、ふたたびクシとハサミで最後の手入れをしてから、部屋を出ていった。

「フフフフ。とってもきれいになったよ。じや、もうすこし、このまま、じっとしているのだよ。クリームが全部弓子の肌に吸収されたころに来て、弓子にも見せてあげるからね」

言うと、弓子にうすいカバーをかけてから、部屋を出ていった。

弓子は、目隠しをされたまま、自分の哀れな身体を見られる時の来るのを、泣きながら待っていた。

こうして、弓子は三十分ほど放置されていた。

これは、弓子に自分の身体の哀しい運命を

さらに認識させるのに十分な時間であった。

やがて、Qは戻って来た。

「どれ、どれ。きれいになったかな。いっしょに調べてみようね」

椅子を操作して弓子を起こし、目隠しを解いた。

「では、上半身のほうから見せてもらおうかね」

Qは、羞恥にもだえ始めた弓子から、ゆっくり、ブラジャーをはずした。

隆起は、弓子自身ですら見とれるほど、美しく変わっていた。

肌は、しっとりとなめらかなようにピンク色に輝き、頂点に向かうに従がってその色は次第に濃くなっている。

大きさは、前とほとんど変わっていないようであったが、弾力が増し、プリプリとふるえ、よく熟した果実のような、なまめかしい情感がただよっている。

「だんだんに大きくしてあげるから、楽しみにしておいで。もちろん、ブラジャーや乳枷は、そのたびに新しいのを注文してあげるからね。フフフフ。じゃ、もうひとつの箇所も見てみようか」

Qは、タオルのおおいも取って、弓子を生まれたままにしてしまった。

カガミに写った弓子の身体は、予想以上に恥ずかしいものであった。

明かるい電燈に照らされて、きらきらと輝くブロードは、ハート型の可愛らしい形だった。

弓子は、ただ、ほうせんと自分の肉体の美しい変化を見ていたが、急に黒い瞳に涙があふれてきて、さるぐつわの奥で激しくむせび泣きだした。絶望の涙である。

「よしよし、泣くんじやない。ハレムの女性はおかなくてはならないものなのだよ。いい子だから、もうあきらめておとなしくおし。可愛い赤ン坊として、いつまでもたいせつに、可愛がってあげるからね」

Qは、弓子をあやしながら、涙のかれるのを待っていた。

「さあ、もう、私の言うことをおとなしく聞くな」

Qは、弓子の心理が完全に屈伏したのを見とけてから、たずねた。

弓子は小さくうなずいた。その動作にも、あふれるほどの羞恥をたたえた、哀れな処女の風情がただよっている。

「よしよし、いい子だ。じゃ、世話係にオネンネの仕度をしてもらおうね」

Qは、世話係を呼んで、合図した。

世話係は心得て、弓子を責め椅子から解き、ぐったりとなった弓子を移動椅子に移して、シャワー室に運んでいった。

そこで、やっと、いやなにおいのするチャドルとさるぐつわを解かれた弓子は、シャワーの下につながれて、温い湯をたっぷりあび、汗を流した。

シャワーが終わると、マッサージベッドに移され、弓子は改めて全身のマッサージを受けた。

弓子は、もう従順に、その平和な快感に身をまかせていた。

乳液と高級パウダーで、全身の仕上げがすむと、弓子は寝室に運ばれていった。

寝室は、すばらしく、広く豪華であった。真ん中に、なまめかしく装飾された、大きな、まるで王様か貴族の使うようなベッドがどっしり据えられている。

その部屋のすみにある三面鏡の前に坐らされた弓子は、全身美容とマッサージで存分にみがかれ、なめらかになった肌に、あわい寝化粧をほどこされていった。

寝化粧のすんだ素肌に、絹物の小さなネグリジェを着せられ、柔らかく口をおおうピンク色のさるぐつわをはめられ、後手錠と足錠

で自由を失なった弓子は、なまめかしさのなにかにも、はっとするほどの気品と清純さにあふれていた。

「きれいになったわ。じゃ、このまま、しばらく旦那さまのいらっしゃるのを待っていてちょうだいね。しずかにしていなきやだめよ。何もこわいことなんかないわ。いい子にして、たっぷり可愛がっていただきなさいね。また、あしたの朝来てあげるわ」

世話係は言うど、小間使たちを従えて出ていった。

弓子は、涙をたたえた瞳をカガミに向けたまま、じっと待っていた。

もはや逃亡の気力は、まったく失われていたし、その手段もなかった。

やがて、身仕度をととのえたQが、部屋に入ってきた。そのすがたを見ると、条件反射のように弓子はまたもやふるえ始めた。

「よしよし、こわいことなんか何もないのだよ。じっとお目々をつむんでいれば、なにことも幸福に、ちゃんとすましてあげるからね」

弓子を抱き上げてベッドに運び、そこに取り付けてあった首輪をはめて、弓子をやさしく寝かせた。

「むっ、むうん」

「さあ、そんなに固くならないで、全身の力をぬいてごらん」

弱々しく波うつ弓子を見て、ますます愛情がもえたつ。

弓子は、白い可愛い蝶々だった。春のあたたかい日をあびて、ヒラヒラと楽しげに遊んでいたところを、大きな毒ぐもに捕えられたのだ。

くもは、蝶々を、ネバネバする丈夫な糸でぐるぐる巻きにしてから、自分の秘密の巣へ運んだ。

蝶々は、ぐるぐる巻きの糸の中で、はかなくもだえていたが、やがて、毒ぐもから注入される毒で、次第に身体がしびれていった。やがて、身動きできない蝶々の心臓に、くもの針が、つき刺さる。

白蝶は、ああ、とせつない吐息をあげた。それは、もっともつらい、最後の絶望の声だった。

自分の運命が、またあたらしい段階に突入していくことを、弓子は、娘の本能で敏感にさとした。

それは、清純で美しい過去との、いよいよ最後の訣別の瞬間であった。

蝶々の背すじに、悪感がはしった。全身の筋肉が、のけぞった。





土 牢



地下牢

ミッドナイト 撮影記

エダ・キリコ

さて、私にとって、何の変哲もない一本のロープが、きわめて表情豊かに、ずいぶんとドラマティックなしろものに見えてきたことは確かです。

そして、それに対して私が抱くイメージは、人間的な、いえ、あまりにも人間臭いと換言したほうがよろしいかもしれません。

そんなくさぐさのなりわいごととは、だいぶかけ離れています。

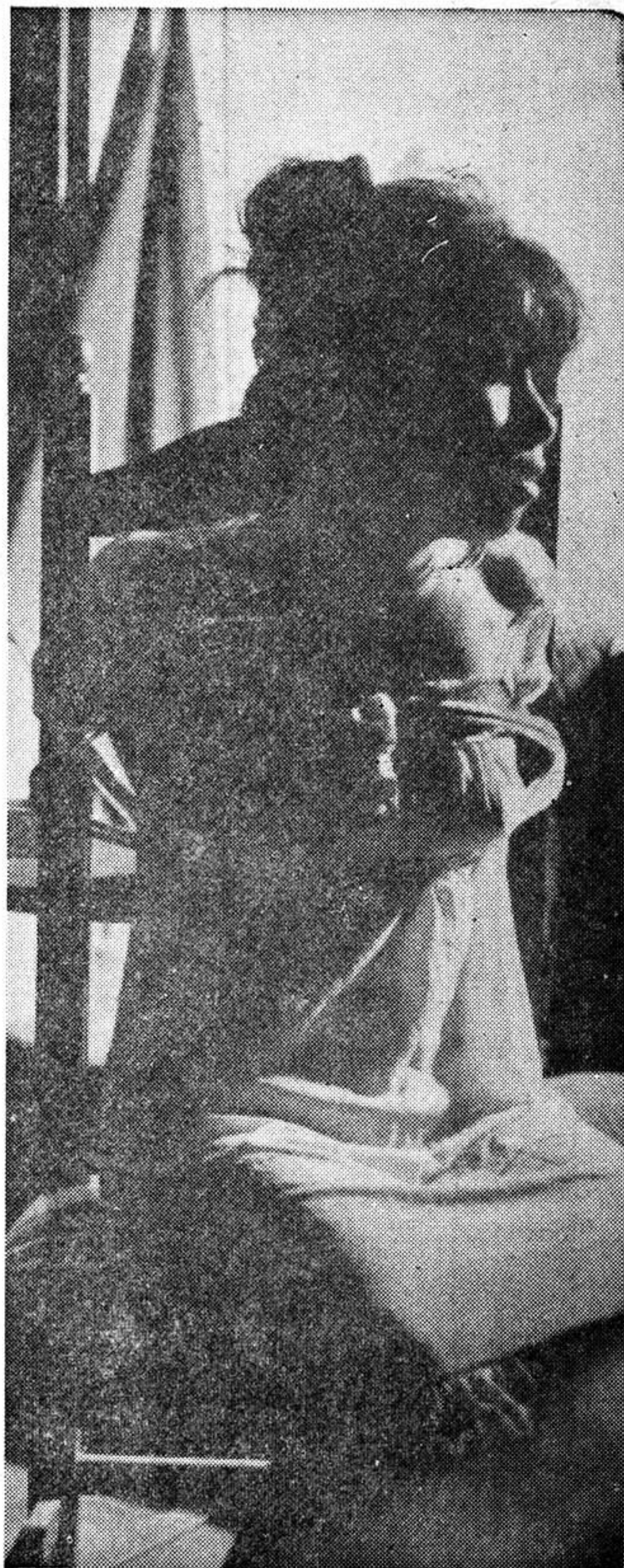
まだ、私は「お若い」のでしょう。それは、私にとって非常に劇的な詩を抱かせる対象な

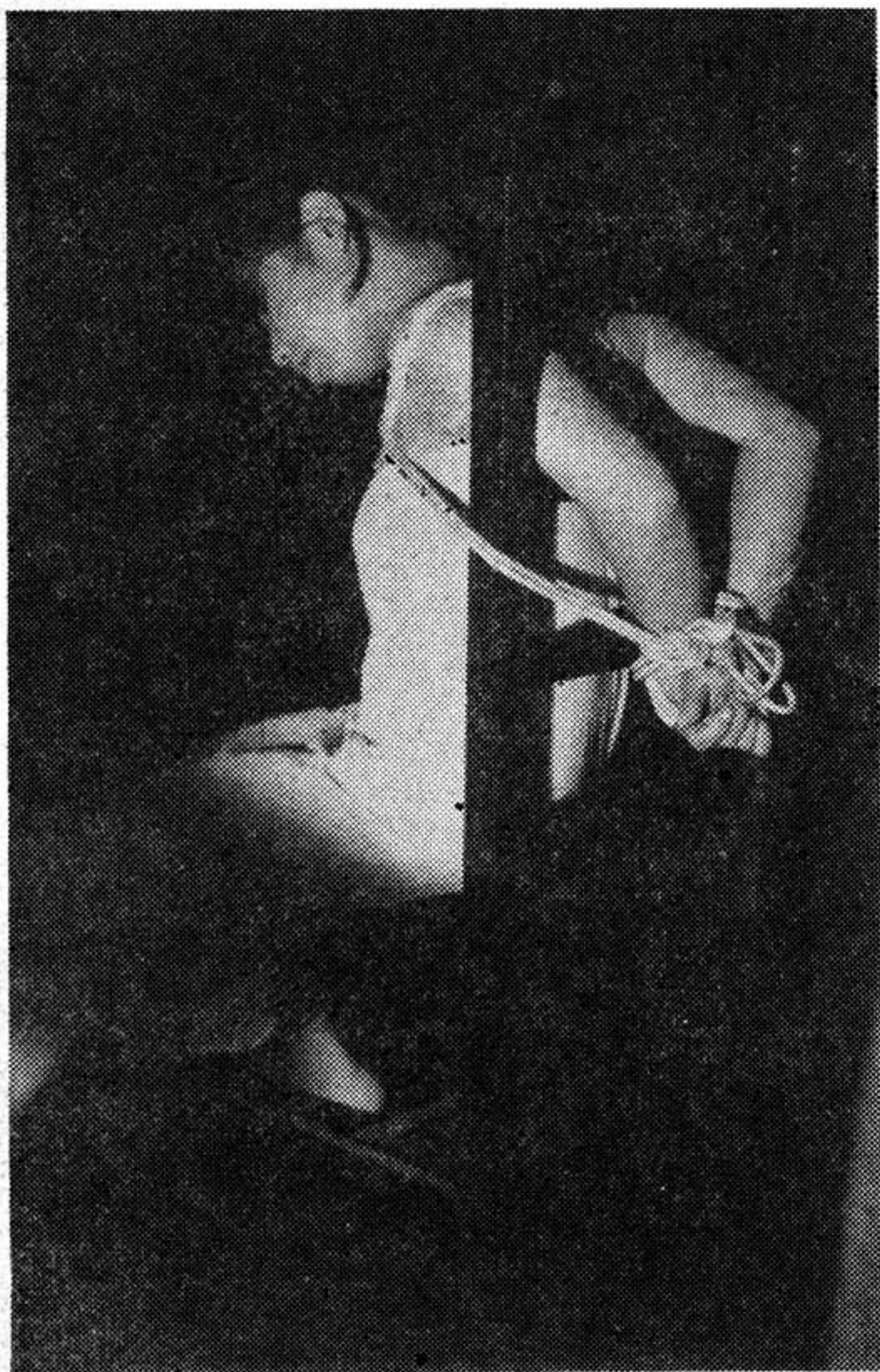
のです。

だから、そのロープが、私のからだにくいこむとき、私はその苦痛を表現することよりも、むしろロープと私のからだとが一体となって、ひとつの詩を表現できたとしたら、ある一部分の人達にとっては、はなはだ御迷惑なことなのでしょうけど、私にとってはこのうえもなく倅せなことなのです。

ロープが私のからだにくいこむとき、私はそれほど苦痛を意識しません。

なによりもまず、ひじょうにドラマティッ





クな気分支配されてしまうのです。

苦痛をより美しく、詩的なものに表現するためには必要なことなのかもしれませんが、「裏窓」の基本線とだいたいぶかけ離れていたとしたらそれは誠に残念なことであります。

などと正直なところ、縛られて、被写体となっている間は、そんなキザなことなど考えてはいないのです。

まるで汚らしくて、古ぼけた椅子やテーブル

ルが、がたびし置いてあって、夏になると十数カ所にそなえてある埃だらけの、くたびれた扇風器がいつせいにガタガタ音をたてて回りはじめ、冬はと言えば、これまたとても奇妙なかたちをした自家製のストロープが活躍をはじめるといふケツサクな、それでも北歐的で、ちよっぴり素敵なムードをもった名曲喫茶が中野にあります。

きょうのドラマのために、深夜、私達はそ

こへ乗り込んだのです。

舞台が日頃おなじみの場所であるという気安さ、きょうのヒロインは、私ではなく、その哀れなヒロインが縛られて苦痛にゆがむさまを、サディスティックな笑みを浮かべて、とくと鑑賞できる機会を得たことへの期待など、そしてまた「前科者」でもありませんし、仕事を楽しむための条件は充分にそなわっていました。

で、私、不貞くされることもなければ、メイキャップだってちゃんと自分でやりましたし、勿論、怖いなどと言って駄々をこねたりもしませんでしたし、多分に「いい子ちゃん」だったってことは確かです。

さて、きょう私が、引き立て役をつとめたモデルさんは、相当に美しい乳ぶさをもっておりまして。

そのゆったりとした胸のふくらみへ、ロープがかけられると「ああ、もったいない！」などと、嘆息しなければならぬほど、それは、マシマロみたいに、しろくて、柔らかさうで、とにかく美しかったのです。

私、これでも、ショウシンショウメイ、おんななんでも、そんな美しいからだに血のにじむような残酷な仕打は憎みたくもありません。

そうした欲望は、対象が、美しければ美しいほど、激しくなるのかもしれませんが。

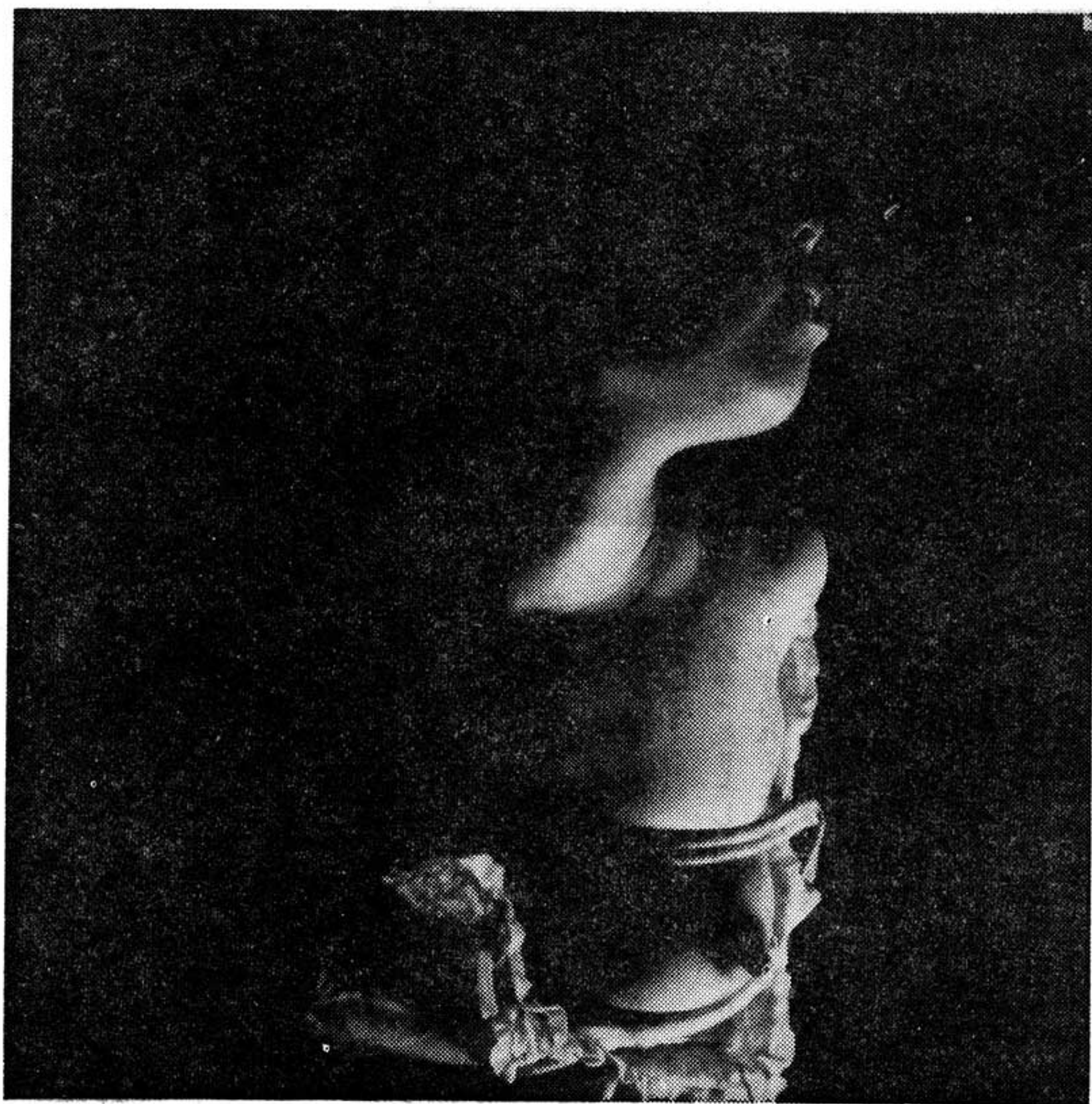
ずたずたにひき裂いたり、血だらけに、痣だらけに、傷だらけにしてやろうなどと、まさに、素晴らしい破壊の精神です。

ところで、きょうの私も相当苦しい目にありました。

日頃、ゴム草履の愛用者である私にとって、おそろしくかかとの高いパンプスや、コルセットやブラジャーなどは、およそ縁遠い私に、肌にくいこみそうなほどきっちり締ったドレスは、これぞマゾヒズムの極致なりと云うしても決してオーバーではなかったようです。

まるで肌を着たように、呼吸ひとつにもいちいち気をつかわなければならぬほどびったりと私のささやかな曲線をおおい、私のむなもとを激しく波打たせるこの銀びかのドレス、私のからだじゅうの重みをすっかりつまさきの方へ集めてしまったパンプス、そうして正直なところ私は、その苦痛を、緊張感を秘かに楽しんでおりました。

で、私、そういった緊張感とは、とりもなおさず快樂に通じるものではなからうかなどと、イヤ申し訳ない、これは私のささやかなマゾヒズム体験論でありました。



さて、北欧のメルヘンでも思いおこさせるようなこの素敵な一隅に、肌もあらわな二人の美女(?) がのたうちまわってるさまを想像してもごらんない。

思わずなまつばを飲みこむ殿方もありました。

だが、残念なことに、まだ子供にちかい私には、快樂だとか、欲望だとか、悪徳の夜だとか、そんな人間臭い、おとな臭いことがらには、まるつきり関係なく、それでもやはり、素敵な気分浸っちゃうんですなあ。

そこで、「縛られても、ちっとも痛そうな顔しないから、もっときつく縛ってあげようか？」などと、からかわれてしまうんです。

気の毒なヒロインは、柱を背に、そうして私は椅子の背に胸をねじまげられ、私のからだのうえてロープだけが生きていて、深く深く、私のからだのなかにくいこんでくるのでした。

不自然にねじまげられた両腕と、堅い木とが互いに摩擦しあって、しだいに、私の両の腕は麻痺状態に襲われはじめました。

そうしてロープだけは、ますます強く生きてくるのでした。

ひざっこぞうがガクガク小刻みにふるえ、からだじゅう血のように熱くほてり、まる

で、あの鈍くて、白くて、どっしりと重たい真夏の太陽の感じ。

しびれの感覚に悩まされながらも、あぶら汗をにじませ、被写体としてのお役目に、ちゃんと私は忍んでおりました。

私にとっては、ながいながい、そして強烈な「時間」でありました。

常に「おわり」が用意されているという安心感は、このような苦痛を超越させるほど、私を強くさせます。

もし「おわり」が予期できなかったとしたら、果てしなく続くものであったとしたら、それこそ、私は戦慄を覚えないわけにはいきません。

苦痛が強ければ、それだけ、自由の身を許されたときの快感は大きく素晴らしいものなのです。

まず、でっかい溜息をひとつ。

両腕はだらしなく下へおっこったまま、どうにも自由がきかなくなっちゃってましたっけ。

私のからだには、そこ、ここに刻まれた縄目にそって、むらさきっぽい斑点だらけ。

その痛ましさに、我と我身を愛撫いたしました。

ほんとうは、どなたかにやっていただきた

かったのですけれど(?)。

で、その縄目をひとつひとつ確めながら、微笑いたしました。

「きずあと」って素敵だ、そうして、何と意味深いしろもの！

ここで、私は私のなかに「きず」というもののへの愛着を確めたのです。

なるほど、なるほど……。

「裏窓」へ、もう一步接近したってことなのかな？

そして、こうして、夜が終って朝がはじまるうとしているやさき、私達の仕事は、この残酷なドラマは、ようやく結末を得ました。

コルセットだの、ハイヒールだの、くそくらえ！

私は、自由の身への賛歌でもうたいながら夜明けのみちをたどります。





自分と同じ罠に仕掛けられ、この密室に連れこまれたのだ。

「こ、こんな可愛らしいお嬢さんをつかまえてどうしようっていうんだい！」

伴内の弓の折れが、再び、ついとのびて、その部屋の一隅をさした。

そこには――。両手首を前に縛りあわされ、それを目の高さの棚にくくりつけられた娘が、背中をこちらに向けて坐っていた。

同じく腰のもの一枚残さずにむかれた裸身は、ひと目で、いまだ男を知らぬ生娘のそれと知れる。

猿ぐつわを噛まされているらしく、はげしい身悶えをみせているが、声はきこえない。

その白々とした背中に、何やら異様な絵が描かれてあるのを見さざめて、お紋はぎくりとした。

裏窓叢書第一集

「狂異地獄肌」より

価四百円 八十円

渋川伴内は手にした弓の折れの先端で、お紋のまなざしを、次の部屋に導びくのだ。

「少し暗いが、よくみろ、お紋」
お紋の眼が、そこにうごめいている光景をみて、愕然と開いた。
「あッ！」

和蘭陀椅子から、半身をのりだしてのぞきこむ。

全裸の娘が、むごたらしく縛られて、床の上のところがされているのだ。

両の腕が、背中に高々とねじまわされ、麻縄がぎっしり噛みついていて。胸にかかった縄は、乳房にまで喰いこんで、やわらかな半球の肉を、まっぶたつに割っていた。

（死んでいるのかしら？……）

いや――その白い乳房が、かすかな息づかいをみせてふくらみ、あえいでいるのは、娘がまだ、生命の炎を燃やしている証拠だ。

裸身を腰から、くの字にまげ、やや俯伏せになって、羞恥の陰影をかくしているのだ。

（そうか。やっぱり！……）

女は、格子の間から手をさし入れる。その手を、赤い小牛ほどの犬は、長い舌で舐めまわした。「どうだい。この中で、犬といっしょに仲好くしているかい」しのぶを振り向いて、ニンマリと女が微笑した。「この中へ素っ裸にして後手にし

ばって入れておこう。逃げることはできないんだ。この檻の口を、めていくからね。面白いだろう。お前さんは、ただこの檻の中で、素っ裸のからだで逃げ廻るのさ。ころげ廻るのさ。あたしが出してやるまでさ。後手にしばって置く。しまいには、くたびれてうごけなくなるんだ。どこを赤が舐めても、しまいにはお前さんは好きに犬にさせるようになる。素っ裸で後手にしばられたからだを、お前さんは犬の前に投げだすようになるんだ」

女は、檻の中の犬を見て、恐怖に目を見ひらいているしのぶを見ると、ニヤリとする。自分でも、

その思いつきが気に入ってしまったのだ。「さあ、見てるだけではいつになってもはじまらない。素っ裸になって手をうしろへお廻し、しばって檻へ入れてやる」「いえ……」「素っ裸になるんだよ」「お願いです。この檻の中に入れ

ないでくださいまし……」しのぶはあとずさる。手を合さんばかりに、目が女を見て哀願する。が、女は、自分が思いついた遊びが、気に入っている。女の手が、しのぶの長襦袢のはしをつかんだ。ああ、と、しのぶは声に出ぬ悲鳴を上げる。

裏窓叢書第二集

「黒蛇呪縛」より

三百五十円 八十円



博士の容貌は怪異だ。ぼうぼうたる白髪が耳の上におおいかぶさり、肩まで垂れ下がっている。頭もひげも白髪だ。その白髪のなかに、酒焼けた赤い皺だらけの顔がうずまっている。

「ごらんない、博士」

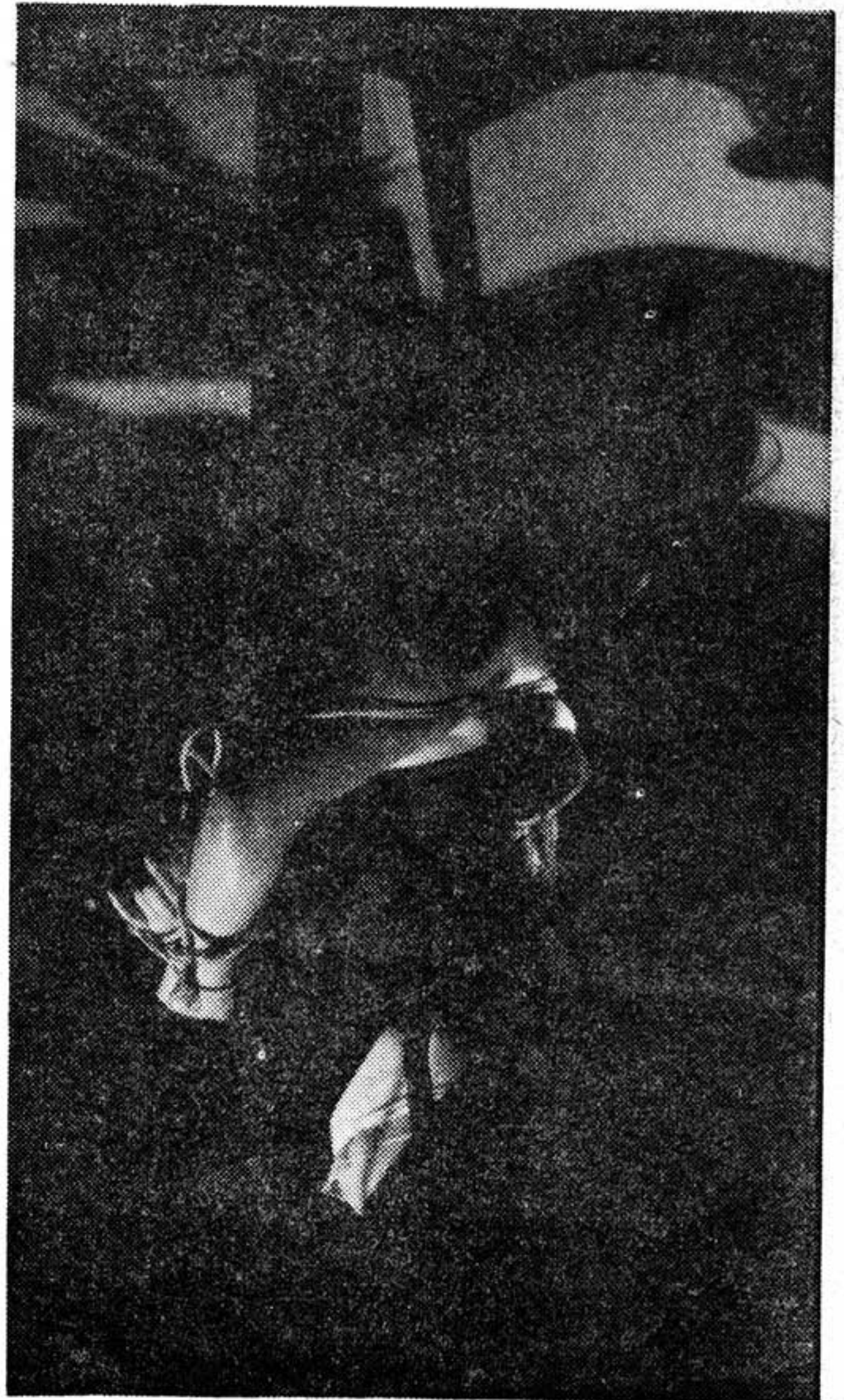
黒和田は、手をのばして二人の女の肩にかけてあるコートを剥ぎとった。コートの下は下着一枚の女体である。まばゆい白色の半裸だった。

それを凝視し、白ひげの中の博士の口がパクリとあいた。ザクロのように、どす黒い赤さをもった口腔だった。

「アアア……」

博士は啞のように、阿呆のようになり声をあげた。これは嘆声なのだ。博士の唇から涎が流れはじめた。

まぶたに白くかぶさった眉毛の下から、獣的な眼が、登美子と朱実の縄のかかった胸のあたりを、喰いつくように見つめている。そ



の視線が、やがて女のまくれあがった下着の裾のあたりにおりた。ねばりつくような眼の愛撫だ。

——新しい女……新しい女だ、しかも、二人……ううう！……。

口のなかで、うめくようにつぶやいた。

「うふふ……登美子に朱実とかいったな。可愛い娘たち。さあ、

顔をあげてあれを見なさい。あの檻のなかを……」

博士はゆっくりと腕をあげ、指をさす。そして、左手に握った二本の縄尻をはなした。

登美子は、呆然としてその場にぐずれ倒れた。うしろ手のまま、檻の前までかけ寄ったのは朱実だった。

「姉さん」朱実はさげんだ。三人のなかの一人は、たしかに姉のミドリなのだ。やっぱりここに捕われていたのだ。

「姉さん！」

裏窓叢書第三集

「地底の牢獄」より

三百五十円 八十円



下げ緒は重ねられた美鈴の手首を締めあげて、むごいほどの強さでぎりぎりと胸に喰いこんだ。

自由を奪われるという恐怖に、美鈴は必死にあばれるのだ。

「美女というものはさすがだ。若衆姿もあでやか——」

縛り終えた主膳は、みだらな輝きを双眸にかすめさせて呟いた。

前髪立ちの若衆髻をふり乱して

くの字なりに地面に転された美鈴は、男の姿をしているために、異様なほどのなまめかしさを全身に漲らせていた。

荒れ果てた寺内には、薄墨色の闇が滲みかけている。

美鈴の閉じられている睫毛が、これから加えられようとする屈辱

に、せつなく震えている。

口の中に湧く粘った唾を、ごくりと飲みこんだ主膳は、美鈴の猿轡にくびれたおとがいを掴んで、顔を自分のほうに向けさせた。

「うううっ」

と美鈴は耐えられなくなったのか、にぶいうめきを猿轡の奥から絞り出すのだ。

主膳の手がするりと動いて、着

物の襟を割り払げたのである。ぬめやかな肩が、あたりの冷たさにすくんだ。ゆたかな双つのふくらみを、隠すために無理に締めつけている晒布を、張り裂くかのように、激しい鼓動が波うっていた。

ずるずると晒布は、主膳の手によって引きずり下ろされる。すると、それを待ちかねていたように双つの乳房がむっくりとこぼれ落ちた。

「ふふ、これはたまらぬ」

みだらなふくみ笑いを吐き散らして、主膳の掌がむっちりした乳房を掴みこむ。

無垢の肌を男の指に、なぶりまわされる嫌悪の情に、美鈴は身をのけぞらせて逃げようとするが、縛められた体はわずかな動きしかできなかった。

裏窓叢書第四集

「残酷裸女絵巻」より

価 四百円 千八十円



「知らぬ——？」

陣内の双眸が異様に光った。

「知らぬか、よかろう」

ゆっくりと脇差を鞘ごとぬいて

陣内が呟いた。

鞘は胸に喰いこんでいる縄の間

をくぐる。隙間もなく、肌に沈ん

でいる縄を、鞘がくぐっただけで、

雪絵は鋭い痛みを覚えた。

「小手調べだ。物たりまいがな」

鞘に縄を巻きつけて、陣内はじ

わじわとまわしはじめた。

「う、う——う」

こじりあげる脇差の鞘に、縄が

からみつき、きしみながら締って

いくのだ。手毬のように、乳房は

ふくれあがって、こぼれ落ちそう

になる。その苦しさ、痛みに雪絵

は裸身を悶えさせる。

「あ、あッ——」

身をのけぞらせて、雪絵がくね

った。

「どうだ。少々はこたえるか。甲

賀の責めはまだ厳しい」

と、陣内は鞘を握んだ手を、動

かし続けながらはきつけた。

「申せ。道玄は火薬の製法はどこ

に隠した」

「知りませんッ。本、本当です」

声をふるわせて答える雪絵。あ

ます所なく、男の眼に裸身をさら

しているという羞恥も、乳房をち

ぎらんばかりに喰いこむ縄の痛さ

には勝てない。

「もう、おゆるしになって——」

ただ、哀願するばかりの雪絵。

と、陣内が新しい拷問の方法を

考えついたのか、にたりとした。

乳房を責め続けていた脇差を胸の

縄目から抜いたのだ。ゆるんだ縄

に、ふたつのふくらみがほっとし

て喘ぐ。

陣内はむしり取った雪絵の長襦

袢の中から扱帯を拾った。真紅の

扱帯、その眼も覚めるような扱帯

を、縮んでいる雪絵の足首に巻き

つけていく。重ねた両足首を、か

たく扱帯で縛りあげると、力にま

かせて裸身の両側に引きこんだ。

「ひえッ」

と、思わぬ荒々しい力に雪絵の

咽喉が泣いた。

海老のように、白磁の裸身をま

るくする雪絵。両腿がひらいた。

痛さには抗えないのだ。あぐらを

組むような形に変わっていく雪絵の

脚。扱帯に括られた両足首は、じ

りじりと胸のあたりに引きあげら

れる。つま先が乳房の先端に触れ

た。

「う、う——」

羞恥と苦痛が雪絵の肌を紅く染

めた。嗚咽の声がもれる。凄まじ

い海老責めである。

あまりにも強烈な緊縛である。

已れの姿態を想像しただけでも、

裏窓叢書

第五集

責め肌忍法

¥ 400 千 80円



松江源之進が大炊頭から隠れキリシタンの詮議を委ねられたのは、もう夏が終わったとはいえ、残暑きびしい九月であった。

数年前、大がかりなキリシタン狩りが行われてから、表面上、信者は居ないものと思われていたが、それだけに根強いデウスの信者は地に深くひそみ、隠れキリシタンの群れはふえているものと思わねばならなかった。

時は享保三年。

暗黒政治家田沼意次の抬頭してきた頃であった。それにもまして昨年からの飢饉が続き、人心は何ものかにすがらねば生きていけぬ状態であった。

折りしも、城抜けを企てた一人の奥女中の荷物から、デウスの像が発見されてお上の怒りは燃えあがったのだ。

事もあるうに奥女中に信者が居たとあつては、お上の御威光上ゆるせぬものであった。

仔細はこうだ。春日局付き奥女中浪路は腹痛と称して二、三日前から休んでいたが、その日宿下がりをお願いした。

浪路は武蔵在に百姓をしている父から、家の窮乏を告げられ手助けを求められたからでもあったが、悪政と飢饉のために苦しめられ

■切支丹受難録

蛇樽女切支丹

義川源

東桂史・絵



ている農民の生活を耳にするにつけ、日夜ただれた愛欲の宴の続く城中がたまらなくわずらわしかったのだ。

大炊頭は浪路の身もとを調べ、家臣に命じてひそかに荷物を調べさせた。

当時宿下がりをお願い出る者にする手続きのひとつではあったが、浪路は許可が下りないうちはと油断していたのが不運であった。

これは例のないことであつた。許可があつてから初めて形式的な荷物調べが行われるのが常であつたのだ。さしずめ浪路はキリシタニ信仰を傍見されていたものと見える。

デウスの像は柳行李の底から発見された。大炊頭は將軍吉宗におのれの落度を詫び、隠れキリシタンの一掃を確約した。

松江源之進は、小伝馬町の牢屋につながれた奥女中浪路の前に、ゆらりとその瘦身を現わした。

「おのれか、かくれキリシタンと申すのは」源之進の細くつり上がった眼が、蛇のように冷たい光りを放ち、浪路の全身をねめまわした。

浪路はあわてて帯のない白衣の前をかさね合わして後ずさった。

「お上を怖れぬ不屈者めッ」

浪路はすでに七日間、大炊頭の検問に会い、



やつれてはいたが、二十一歳の女盛りは、隠すに隠せぬ豊満な色気を発散していた。

源之進はおびえている女を、足さきでその弾力を楽しむように、ぐりぐりと踏みつけた上、

「今夜は存分にねむっておけ、ウフフフ」と陰気な笑いを浴びせて牢屋を出た。

「五助ッ、しかと見張れ、調べは明朝六ツ、

例の場所へ引き据えろッ」

「ヘッヘイ」

非人頭の五助は源之進の足下へひざまずき手鎖を受けとった。

——女牢は小伝馬町の牢屋敷の北の端に作つてある。普通、四、五人を一牢に雑居させた。

各牢には牢名主が居り、その上に牢屋全体

を管理するものとして在宅役付囚人が存在した。現今でいう模範囚である。衣服はすべてお仕着せの木綿の白衣である。

浪路は、もちろん雑居牢ではない。戸前口から雑居牢の反対の棟に独居牢があった。いわゆる重罪犯のみが収容されたのである。

非人頭はこれらのすべてを統率する立場にあった。

浪路は粟粥にたくあん二切れ、塩汁一わんの粗末な夕飯を食し、静かに牢内に坐した。

こうなったからには、如何なる苦しみにも耐えねばならなかった。

思うことは父であり、母であり、そして兄の身の上であった。恐らく捕縛されたであろうし、自分と同じ運命をたどるかと思えば申しわけなさもひとしおであった。

浪路は松江源之進の酷薄な表情から烈しい詰問を予期した。怖ろしさは彼女の胸をしめつけたが、自殺することは、デウスの神に背くことであった。ただ神の導くまま、浪路はおのれの運命を甘受せねばならなかった。

牢格子から吹き入ってくる湿った風は、束ねられた浪路のおくれ毛を散らした。

『九月十日、大炊頭より詮議方のあった、春日局付奥女中浪路二十一歳。生国武蔵在、元郷士田中三郎衛門五十二歳が長女なり。母ト

ヨ五十歳、長子小助二十六歳、ともに農事に従事す。皆これ縛につく。踏絵の結果隠れキリシタンなること明白なり。隠れキリシタンの集会所に関しては、口をつぐんで語らず。明日は浪路を責め抜くとす』

筆をおいて源之進は浪路の豊かな姿態を眼前に浮かべ、はやくも、みにくい興味を湧かせていた。

当時キリシタン信仰者の罪は、親族はいうに及ばず、縁者にまで極刑に付した。

幕府がいかにキリシタン宗徒に対し、嚴罰をもつてのぞんだかがわかる。

大炊頭はもとより、この枝葉にあたる浪路一家を刑に処したとて、満足すべきではなかったのである。

キリシタンには、必らず集会所があった。その集会所を突きとめて伴天連どもの根幹を断つつもりであった。

その集会所を白状させるのが松江源之進の使命であったし、すべてを委ねられた一因でもあった。

2

翌朝、浪路は非人頭の五助によって拷問蔵へ引き据えられた。

しめった土間の上に引き倒された浪路の両

手の手鎖が、ガチャガチャとむなしい音で鳴った。

「浪路、面を上げい」

源之進の凄みのある声が澄んだ空気を破った。

浪路の白い顔は、窓から射し込む朝の陽に、さわやかな美しさを見せていた。

「おのれはあくまで集会所の在り場所を白状せぬと申すか」

源之進は浪路の、その悟りきった者だけが持つ澄んだ瞳に裂しい憎悪を抱いた。

「デウス様、お許し下さい。この哀れなる人びとを」

艶やかさを失わぬ浪路の唇から、静かに唱文が流れた。

「おのれッ、この源之進を嘲弄致すか」
カッとなった源之進は、激しく女の頬をたたいた。

浪路はしかし微動だにしなかった。

「くそッ、いまに泣き言を唱えさせるぞ」

源之進のそぎ落ちたような頬に残忍な影が走った。

「五助ッ、手鎖を解け。籠釣瓶だッ」

「ヘッ」

五助が、その命令に、いやしい目を光らせた。

そしてそのたくましい腕を浪路の襟にかけて、やにわにぐいと引きむくように転がした。玉のような肌が、土間の黒土の上に、目に泌みるような鮮やかさで浮きあがった。

「その腰のものもだッ」

「ヘッ」

さすがに浪路は、女の身を羞じてこぼれるような胸のふくらみをかき抱き地に伏した。「籠釣瓶」本来は「逆海老縛り宙吊り」という。

すなわち「籠釣瓶」とは、まず囚人に縄の禪をしめさせ、両手両足を背後に回し弓なりにさせ、両手首両足首を合して一緒に縛すところがある。

海老責めの逆となる。而して肩を二重に縛した縄を縄禪の三ツ頭、すなわち後の結び目から引いた縄とをもって背後に縛した両手両足首の縄目に通し、天井に水平に吊り下げるをいう。

この様をもって「逆海老縛り宙吊り」またの名を「籠釣瓶」に似るところから単に「籠釣瓶」とも称す。

弓なりにそった体、背後に縛された両手両足、体内に喰い込む縄禪の苦痛耐え難く並の者でも半刻と持たぬとある。

さて浪路は、容赦なく土間に転がされ、心



杖

得た五助の淡紙色の手が浪路に麻縄を喰い込ませた。

身悶えて逃がれようとしても五助の太い腕にはかなわず、きつちりと麻縄は締められた。

ついで両手、両足が背後に回されて縛られ、弓なりにそった浪路は、手足をもがれた巨大な虫のように土間にうごめいた。

それはあくまで奇怪な姿態であつたが、源之進はその落ちくぼんだ両頬にどんよりと赤味を漂わせた。

「よし五助ッ、吊り上げい」

五助と浪路の美しい姿態にのどを鳴らし、鼻頭に汗をにじませていた。

北町奉行所与力、松江源之進と非人頭五助は、この拷問蔵においては、完全な同志であつた。

ろくろがきしみ、弓なりに曲がつた浪路の裸体は、平に徐々に天井へのぼっていった。

肩口から引かれた縄と、縄禪の三ツ頭から引かれた縄は、十二貫の女体を見事に宙に浮かせた。

浪路はデウスの神を念じながら、思いもよらぬ苦痛に全身を身もだえさせた。

豊かな胸が大きく波うってあえいだ。

汗とも脂ともつかぬものが皮膚から流れ出した。

やがて、烈しい苦痛が浪路におそいかかった。弓なりに曲がつた背骨、重さを加えた吊り縄は、彼女の肉体をギリギリと噛んでいったのだ。知覚はしびれるような痛みを訴えた。

円心を描いて、ゆっくりと頭上を回る浪路の白い姿態に、源之進は、ますますそのうすい唇を歪めていった。

「いうか、いわぬか」

源之進は浪路の頭髮をつかんで、ぐいぐいと引き回した。浪路の全身から脂汗がにじみぬめぬめと光った。

浪路は耐えた。

死よりも激しい苦痛に、その白いつややかな顔はひきつれていったが、神への祈りはやめようとはしなかった。

「デウス様、お許しください。この哀れなる人びとを――」

きれぎれに浪路は祈った。

「チッ、まだ世迷言を」

舌打ちして、源之進はむずと片手を伸ばした。

「五助、もっと引き上げろッ」

「ヘッ」

あまりの凄絶さに、生つばをのみこんでいた五助は、あわてて、ろくろをきしませた。

キリッキリッと、拷問蔵の空気をふるわせ

て、不気味なろくろのきしむ音が響いた。

一寸、二寸と上がるたびに、浪路は、いよいよ弓なりに曲がり、縄はギリギリと喰いこんだ。

浪路の白い肌は赤くなり、ついで紫色になり、やがてまた蒼白となっていた。脂汗がポタポタとしたり、土間の地を濡らした。「いえ、いうんだ。おのれら氣ちがいどもの集り場所を」

源之進は狂ったように、折れ弓のさきで浪路の肩をこづいた。

「旦那ッ」

五助が源之進の袖をつかんだ。

「これ以上、無理でやす」

その言葉が終わらぬうちに浪路は、

「ウムッ」

とうなると、下部から水液を洩らした。それは悶絶の兆しとある。五助は手早く引き縄をゆるめて、失神した浪路を土間へ下ろした。

「ふん、強情な奴め」

源之進は芋虫のように転がつた浪路に唾を吐きつけ、折れ弓のさきで、喰い込んだ縄をぐいとこじ上げた。

失神した浪路のその青白い顔には、もはや苦痛はなかった。

神を信ずる者だけが持ち得る一種のやすら



ぎさえもうかがわれた。

「下げるッ」

源之進は縛を解いた五助にいった。

乱暴に活を入れた浪路は、申しわけに衣服をまとわされた姿で牢内に戻された。

戸前口に在宅役付の女囚人が出て、五助の手から浪路を受けとり、直ちに畳部屋に寝か

しつけた。

——これは当時の獄内の習慣で、白状せずに戻った時は、他囚人一同で戸前口の畳部屋で酒を吹きかけ身体を柔らかくもみほぐすためである。その時は、痛みのために泣き叫ぶが、回復は早い。

一方、三郎衛門も小助も、それより前に、

松江源之進の下役同心の手で、幾度か拷問に付されていた。

一回目は叩きであり、二回目が石抱きであった。

叩きは一回打つこと、百五、六十にして止めるを常とした。

これで白状せぬ時は石抱きとなる。これが

杖

短時日のうちに交互に繰り返された。

三郎衛門も小助も、何度か気絶し、蘇生した。日を経るに従って、頑丈な体軀は、みるみる肉が落ち、ひげはのび、見られた姿ではなかったが彼らは、まったく白状しようとはしなかった。

3

隠れキリシタンの詮議は難渋していた。

大炊頭はあせった。

「明日は、余が直々に立ち会う」

源之進が大炊頭にそういわれて引き下がったのは、浪路への「籠釣瓶」が行なわれてから、中二日たってからであった。

浪路は相変わらず牢屋に端座したまま、朝晩デウスに祈る以外は、黙然として乱れた姿を見せなかった。

それがまた、源之進の自尊心を傷つけた。

『明日は大炊頭のお出まし、いよいよ蛇責めを試みんとす』

その夜の日誌には短かくそう書かれた。

ほのめく行燈の明かりを受けて、この職務に忠実な典獄吏は、ひそかに陰惨な笑いを洩らした。

悶えのたうつ女身の様が、早くもこの男の脳裡に映える。

「蛇責め」

蛇責めは木馬責めと同じく、足利時代からあったと伝えられる。

日本古来の刑罰法のうち、その非情冷酷の点において他に類をみない。

これは責めそのものではなく刑罰の一種であったが、源之進のあくなき非情は、これを浪路の身にほどこそうというのである。

蛇は女体を好むといわれる。

女体であって初めて、その効果は大きかったのだ。

一命も保障の限りではなかった。たとえ死んだとしても、この時代の拷問は、咎めを受けなかったのだ。

これを親族に見せることにより、その目的を果たそうという考えもあった。

その日は朝から陰うつな雲がたれこめ、風が強く吹き荒れていた。

午の刻、大炊頭は単身、面を頭布で包み、小伝馬町牢内の一室に立った。拷問蔵の裏に三十坪ほどの庭がある。

そこに大きな樽が四ツ据えられてあった。げんげんな面持ちで訊ねる大炊頭に、源之進はいんぎんに答えた。

「は、今日は珍らしいものをご覧に入れまする」

「珍らしいものとは？」

「蛇責めにござりまする」

「なに」

興趣の浮かんた大炊頭の表情をみて、源之進は自信をもち、

「必らず白状させてみせまする」

と答えた。

塀外に小砂利を踏む音が聞こえ、小用口がギイと開いた。まず役人のひとりが顔を出した。

「連れてまいりました」

「よし、中へ入れろ」

縞木綿の囚衣を着せられた三郎衛門は、高小手に縛られ、大樽の前に引き据えられた。ついで小助、トヨの順に並んで据えられた。その後、六尺棒を持った役人が、ひとりずつついた。

やがて非人頭の五助が、拷問蔵の脇道から浪路を引き連れてきた。

浪路はわずかに腰を短い赤布で覆っただけのすがたであった。

束ねられた黒髪が、風に吹きちぎれたように肩の上で舞った。

その白い肌は、幾多の血を吸ったこのあたりの景物には似合わず、華やかな大輪の花のように痛ましかった。



三郎衛門、トヨ、小助にとっても、久びさの対面であつた。

浪路は、連日の拷問に苛なまれやつれ衰えた父の姿をみた。

小助もまた同様であつた。トヨは涙ぐんだ眼で何十日ぶりであつた娘の痛ましい姿をみた。

「浪ッ」

思わず叫んで小腰をあげたが、トヨは役人に縄を引かれてむなしくよろけた。

三郎衛門は、浪路を見て大きく顎を上下させた。すべてをデウスの神にまかせるというのだ。

その意味を読んで、浪路はにっこりと笑つた。

「その方たち、あくまでシラを切るとなると、当方にも用意があるぞ」

ねっとりとした声で、源之進はいった。

——静寂が流れた。

「いわぬと見える」

源之進はにたりと笑つた。

「しぶとい奴よのう」

だれにともなく、呟くようにいって、大炊頭は浪路の白い姿態を目を納めて見た。

腰の赤布が鮮やかであつた。

風が吹くたびにゆらめいた。

「この上は、さらに拷問にかけて白状させるぞ」

再び源之進の陰気な声が流れた。

「三郎衛門、トヨ、小助、そなたたちはまず、見るがいい。かわいい、娘がわめき吠えるさまを」

三郎衛門をはじめ、トヨ、小助は思わず、ハッとなって源之進を見た。

源之進の片手があがった。

浪路は五助にひきたてられた、大樽の前に立たされた。

「わかるか、それが——中を見せよ」

五助は浪つの肩口を押して、大樽の中をのぞかせた。

「ヒッ」

みるみる浪路の顔は蒼白となった。

大樽の底には、二、三十匹の青蛇シマ蛇が、その長い胴体をたがいにもつれ合わせ、ぬるぬるとうごめていたのだ。

「わかったか」

と源之進にいわれるまでもなく、浪路は全身の毛穴がアワ立つ思いであった。

三郎衛門も、小助も、トヨも、目を剝いた。「フッ、フフフ。おどろいたか。それとも、白状するか」

乾いた源之進の笑い声に、トヨは、

「鬼ッ、ひとでなしッ」

と絶叫した。

そのトヨの狂乱を、三郎衛門は無言でたしなめた。

トヨは唇をかみしめ、ククッと泣き伏した。そのさまを、じっと見た源之進は、その頬にカミソリのようなわらいをみせた。

「五助ッ、中へ入れろッ」

観念したとは言え、浪路にとって、これは血の凍るような思いであった。

左右の手は、しっかりと大樽の壁に結ばれた。

大樽の蓋がかぶらせれ、首だけが、直ン中をくり抜いた蓋の孔から、上に突きだされた。自由のきくのは下半身だけであった。

足の裏を、くるぶしを、蛇のつめたいぬるぬるとした胴体がまとわりついた。

「始めまする」

源之進は準備のとのつたのを見て、大炊頭にいった。

「うむ」

大炊頭もまた、源之進のこれからの方法を期待し、魅了されていた。

「五助、焼酎をそそげ」

「ヘッ」

五助は、一斗樽を軽々と持ち上げると、無

雑作に大樽の蓋の端の孔から、焼酎をそそぎ入れた。

浪路は足さきの感覚で、つめたいねっとりした長い生きものが、その緩慢な動作から次第に激しい動きに変わっていくのを、おぞましく感じていた。

樽の底にうごめいていた蛇の群れは、焼酎をそそがれて暴れ始めたのだ。

浪路ははじめて源之進のねらいを知って、恐怖のために総毛だった。

身をくねらせ、もがいてもしよせん、蛇の群れにはかなわなかった。

おびただしい蛇の群れが、その長い胴体で脚にまつわり、上へ上へと這ってくるのを、浪路は防ぐことができない。

五助は、恐怖にひきつった浪路の表情を横目でながめながら、つぎつぎと一斗樽を空けていった。

蛇は焼酎を浴びて、その量のふえるにしたがい、われさきにと浪路のからだにのほり這いつづけた。

その不気味につめたい無数の蛇に全身を這われ、浪路はもはや生きた心持ちはなかった。デウスの神に祈るだけが、残された唯一つの救いであった。

三郎衛門も、トヨも小助も声を励ましてハ

ラショを唱えた。

風はさらに強くなった。

その唱文の声は風に吹きちぎれ、強くよわく、浪路の周囲を流れていく。

焼酎は、ついに乳房の上にまで達した。逃げ場を失った蛇は浪路の柔肌を喰いやぶりはじめた。

「ギャッ——」

はじめて浪路は悲鳴をあげた。

蛇の一匹が鎌首を持ち上げたのだ。ついでまた一匹。

それが皮切りだった。つぎつぎと蛇は鎌首を持ち上げてきた。

あふれた数匹の蛇が、大樽の縁から外部へこぼれだし、地の上へ落ちた。

そのまま、身をくねらせながら這いつづけ

る。ひと声、するどい悲鳴をあげると、トヨが失神した。

浪路がひきつるような泣き声をあげた。

生きながら蛇にさいなまれる女の、魂も凍るような悲痛な泣き声は、おりから降りだした大粒の雨音にも消されず、このおぞましい庭内にひびきわたった。

「どうだ、まだ白状せぬか！」

松江源之進も、雨に負けまじと声をはりあ

げた。

浪路の顔が、青白い怨念に燃えて、源之進を凝視した。

半面にぬれた髪の毛が貼りつき、幽鬼に似た表情であった。

「おのれッ」

源之進は、手にした笥で大樽を打った。

沛然と降りつづける雨に洗われて、浪路の血の気を失った顔は、がくんと横にかたむいた。

這い落ちた一匹の大蛇が、チロチロと燃えるような舌を出して役人の足もとに近寄った。

大炊頭はさすがに面をそむけた。

仁王立ちになった源之進は、勝ちほこったような哄笑をあげた。

それは職務に忠実な神経が、血をたぎらせて歓喜の声をあげている姿でもあった。

三郎衛門も小助も、心中いかばかりであったろうか。

すでに小助は生きた面持ちがなかった。

三郎衛門のみが、わずかに自若として唱文を唱えていた。

「つぎ、小助ッ」

ギクッとして小助は肝をふるわせた。

彼は恐怖のために、その腰さえも定まらな

かった。

全身ガタガタとふるえおののく小助に、源之進はあごをしやくった。

「どうだ、白状致すか」

小助はうつむいた。

「それとも蛇の餌食になるか」

源之進の勝ち誇った威猛高の声は、小助の耳に突きささった。

ひざの立たない小助に、役人が、縄じりをぐいと引きあげた。

つぎの大樽がはこぼれ、小助の前に置かれた。

「さあ、お前の番だ」

小助のからだだが、二人の役人の手によって左右から抱きあげられた。そのときだった。

「申しあげます、白状いたします！」

小助は、血を吐くような声でさげんだ。

源之進の顔に、微笑がうかんだ。

大炊頭の表情からも緊張がゆるみ、ゆっくりと、あごがうなずいた。

それから二日後、小助の自白によって、集会所が襲撃され、十数人におよぶ男女宗徒が捕縛された。

ゴルドンの記憶

⑦

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵



クロレラ

相馬篤太郎の惨殺死体が発見されたのは、奥多摩の秋川溪谷でだった。樹林の中にうつ伏せで、半ば腐らんしていた。博士が失踪してから二か月目、思いがけぬ結果とはなった。家人からの捜索願いはとくに警察に出され、三流新聞や週刊誌が、扇情的な記事でそ

れを怪事件としてあおりたたてたが、だれも腹の中ではタカをくくっていた。奇人という定評のある博士の、これは人騒がせな一時的失踪であるとして、警察では捜索に熱を入れなかった。扇情的な記事を書きたてた三流新聞の記者たちも、もちろん小林春吾も、本当にこのような大変な惨事を産もうとは、思ってもいなかった。面白おかしく、失踪事件に事

よせて、老学者の奇行に尾ヒレをつけ、あてやかなスキャンダルの色合いをつけることに真剣で、肝心の博士の運命を、真に気づかった者はまずなかった。少なくともわたしを除いては――。

夫人は、死体を一目見るなり泣きくずれた。立会いの署員の制止も振りきって、いきなりなきがらに取りすがった。白髪が多くまじっ

たかみの毛が、幾筋も幾筋もほつれて、両耳の上のあたりで舞っていた。いつもは取りすました、あの同じ女とは思えなかった。初老の女の疲れが、一どきに水を吹き出すように彼女の後姿は衰えて見えた。

「お気の毒なこと——」

立会いの坂崎警部は静かに頭を下げて言った。室内には陰気な黄色い光線が、ほこりっぽい印象で、この光景を浮かび上がらせていた。

単なる失踪事件が、これで奇怪なる殺人事件に一変した。地元世田谷署には早速本部が

設けられ、警視庁から腕ききの刑事が数名ほど応援にきた。

解剖の結果、死因は奇怪なことに、餓死だということであった。死後十一、二日経過、死亡推定日は六月二十日の夜、もしくは二十一日未明。胃の中は食物の残渣は何もなく、ワラくずがわずか、胃壁のヒダにはりついてた。それに何ともおぞましいことに、回虫の幼虫が何びきもとぐろを巻くように、生きて動いていた。そしてわずかに、顕微鏡下に緑の染色体を持つ、植物性プランクトンが検出されて、関係者を驚かせた。プランクトン

去られ、博士も行方不明となる。

わたしは大阪商船の上島氏と、彼の知り合いである不思議な女予言者サレアとのあやしい運命のもつれに巻きこまれてゆく。何か不思議な世界を暗示する『ゴルドンの伝説』に関する古文書を、上島氏はわたしに、いわくありげにあずけたまま出航する。美しい上島夫人、芙美子とふたりでその出航を見送った時の思い出が印象的だ。わたしの心は芙美子に傾いていた。

『ゴルドンの伝説』の古記録の、本当の持主、人文学者の相馬博士に会う機会をうる前に、留守中、正体不明の女に記録は持ち

は分析の結果、クロレラであることがわかった。

坂崎警部

「餓死ですって！」

発表にざわめきたった記者団から、いちように意外な、という驚きの声があがった。

「われわれだって予想外なんですが、解剖結果がこう出たんですから——」

署員自身、いぶかしげに語尾を濁したような、自信のない口調だった。というのは、死体は一見してわかるように、無残な外傷が無数にあって、その中には打傷あり、切傷あり、刺傷あり、強く圧迫するか締めるかしてのうっ血の跡もあるというように、残虐な集団リンチの形跡が歴然としていたからであった。

博士は何者かの手でかどわかされ、大勢に寄ってたかって責め殺されたのだ。右はお骨がくだけて、皮と肉といっしょに土色になってくずれていたのは、強く蹴られたあとであった。左目ふちからハナ、耳にかけて、無数に小さな針の刺痕があった。刺痕といえば、下腹部から男根にかけてやはり針穴のあとがあった。パサパサにかわいてツヤのない白茶っぽい毛がたるんで、よじれたようにシワの深い、下腹部の皮膚に疎生し、そのまばらなわ

前号まで

わたしは大阪商船の上島氏と、彼の知り合いである不思議な女予言者サレアとのあやしい運命のもつれに巻きこまれてゆく。

何か不思議な世界を暗示する『ゴルドンの伝説』に関する古文書を、上島氏はわたしに、いわくありげにあずけたまま出航する。美しい上島夫人、芙美子とふたりでその出航を見送った時の思い出が印象的だ。わたしの心は芙美子に傾いていた。

『ゴルドンの伝説』の古記録の、本当の持主、人文学者の相馬博士に会う機会をうる前に、留守中、正体不明の女に記録は持ち



びしさの上に、焼けただれた先端が、むし焼きにされたカメのコウラのように、しわぼんで縮かんでいた。

「まったくひどいもんだ、こんな殺しは初めてだね」

一目見ただけで歴然だった。だが、死因はそういう目をおおしめる残酷な外傷の中にはなくて、餓死であると、飢え死であると、にわかには信じられなかった。

だが、考えてみると、このほうがよっぽどひどいことかもしれない。博士が何者かの集団の手でどこかに監禁されていたことは確かだ。そうして、食事を与えられず、毎日の責め苦の中でやっと耐え、最後に来たものは死、いちどきの死でなくて、徐々に来る飢えの死を、監禁者たちは舌なめずりしてそれを毎日ながめながら暮らした、考えるだけでもこれ以上の残酷はなかった。

しかし、報道関係者たちが、胃の中から検出されたクロレラの話が聞かされていたら、もっとセンセーショナルな話題を世間に投げかけたことであつたらうが、それは坂崎警部の強い意見で、部外者には発表されなかった。

人里部 落

「だめでした」

刑事のひとりが監識のほうからもどつてきた。指紋がとれなかったことを言っているのだ。

「よし、わかった」

坂崎警部は大きくうなずいてから、みんなを呼び寄せた。

「何か意見があるか」

だれもしばらくは声がなかった。前夜来から徹夜で寝不足の、赤い目がテーブルの周囲に集まっていた。

「要は博士が何のためにこじきに変装したかだ、これが解ければ後はずるずるといくんだが――」

警部はくちびるをかんだ。厚ぼったい精神的なくちびるである。もちろん各方面の聞き込みは時を移さず行なわれていた。学界の先ばい、友人、知人関係はもちろん、千蔵船橋の自宅周辺で、日ごろの博士の実際生活について、一つでも多くの聞き込みを得ようとした。その聞き込みから、こじき変装の秘密を解く手がかりが得られたら――、

「こじき、こじきになぜ主任はこだわるんですか」

「君、こいつは何度もいうとおり、殺人事件ではあるが、そのもとは失踪、というより誘かい事件だ。ところがね、博士はだまって子



どものようにさらわれたというより、博士のほうが進んでさらわれに自分から出ていった形跡がある、こじきになって何をしようとしたか、どこへ行ったか、何を見たか、これを知るのがこの事件のカギだ」

奥多摩秋川溪谷は中央線から分かれた青梅線のさらに小さな支線、五日市線の終点、五日市からさか上る。本宿の部落から上流は千間尾根のなだらかな起伏を中央にはさんで、北秋川、南秋川と分かれている。谷が深いのは南秋川のほうだ。相馬博士の死体が発見された場所は南秋川の人里部落のはずれであった。人里と書いてヘンポリと呼ぶ。東京の秘境のうちにはいる。その一画はまばらな栗林であった。斜面から北側に深く、南秋川の瀬音が高い。その向こうの手近な尾根が千間尾根で、格好な都民のハイキングコースとなっている。現場がこことは考えられない。いったいどこから運ばれたのか。博士はどこに監禁されていたのか。六月二十日から二十一日の朝にかけてが死亡推定時刻として、その後、この部落付近で怪しいと思われる特別の聞き込みはなかった。

欲望

午後六時ごろ、青白い顔の男がエテルナの

前を一度素通りした。店はしまったままで、まるでアキ家のようなであった。男、つまりギター弾きの流しの男は、しばらくの間立ち止まって、店のようすをうかがうようにのぞいていた。ドアの前に、円いホウロー引きの残飯捨てが置いてある。二、三びきの小バエがせわしなくその上を飛びかっていた。

二度目、午後七時ごろまた男が現われた。キクがひとりだけ来て、表をはいていた。

「どうしたの、きょうは商売道具も持たず」「あア」

男は、このあたりを回るとき、いつも手離したことのないギターを、今日は持たない素手のままの両手を開いてみせて、小首をかしげた。

「またどっか、遊びに行かないか」

「誘いにきたの」

「そうだよ。今度は前のようなヘマはやらないよ」

男はキクの、あのとときのゾツとするようなからだの冷たさを、思い出していた。それだけでその上パンティーをはく気にはなれなかった。だが今度は、別の目的があった。

「ママがうるさいからね。でもいいわ。だって、やっぱり今度もだめだと思うな。あんな、わたしをこわがるんだもの」

キクは表をはき終えると、さっさと店の中にはいっていった。

参宮橋近くのホテルだった。緋の色の重いカーテンにダブルベッドがあった。

待つ間もなく、女があとからやってきた。

エリ元の深くくけて見える、ワンピースを着ていた。

「約束通りにやってきたわ」

「ママはどうしてた」

「うん、大丈夫。うまく言っただけから」

男はキクの手をとって引き寄せた。汗ばんだ女のおいが、かえって冷房のあるため、冷たい冷えた空気に乗って、ムツと男の鼻腔を打ってきた。男には不思議な酔心地が起った。自信に裏打ちされた欲望だった。

『なに、こんな女ぐらい』

とたんにキクはするりと頭を後にのけぞらして、ケラケラと、あの時のような、カン高な調子で笑った。

キ　ク

一時間も経ったであろうか、室内にはただ夜の深さがあった。マクラ元のあわい照明燈の光に額の中の王子さまがほおえんでいた。幻想的な絵である。だれのものか、画題はサン・テクジュペリの「星の王子さま」人間社

会以外にそんな世界があるのか、男は水差しの水を一口ふくんだ。そして横だきに深くだいたキクのからだに添って、ノド仏から胸のふくらみへ、顔をずらして押し当てた。唇に、ムチムチした、はずんだような暖かい感触があった。唇をゆるめ、舌先でなぞるように谷間の溝をたどると、つい今しがた口に含んだばかりの水がガラガラと垂れて、下腹部のほうへ流れた。

きょうのキクは暖かいからだをしていた。何も恐れるところはなかった。はずんだような血潮の暖かさが汗となってふき出していた。阿麻という男にエテルナの店のことを尋ねられたとき、キクとこのことをついしゃべってしまった。

『パンティ一つのはだかにしたはよいが、おっぱいんとこだいたら、まるで氷みたいに冷たいんだ。何だかゾツとしたね』

流しの男はそう言った。そこでわたしは男に頼んだのだ。そこだ、その妙にヒヤッとした感じなのだ、そのゾツとする気色の悪さなんだ、それがなぜか、どうしてだか、もう一度彼女を連れ出して調べてみてくれないか。

とにかくキクのことばかりではなく、エテルナという店に関することなら何なりと、特にマダムについて何でもいいから聞き出して

はくれまいか。

羽虫が一羽、スタンドの回りにバサバサと耳ざわりの音をたてていた。

「キク、この前は どうしてあんなにからだが冷たかったのかい」

「あんたがわたしをこわがってたからよ」

「ふーん、こわがって、ね。そうかもしれん」

男は、キクの左手指をまさぐりながら言った。

「ところでキク、お前、故郷はどこだい」

「さあ、どこでしょう。わたしになんか、故郷なんて気のきいたものがあつたかしら」

「そうか。故郷はないのか、——だったらマダムは いったいどこの人だい。どこから来たんだい」

「マダムだっておんなじよ。さてどこの人だかね」

左手指をひっこめて、キクは向きを変え、仰向けになった。ベッドがかすかにきしんで鳴った。

「ルミはどここの者だ」

「あんた、妙にどこだ、どこだってどこだわね。ルミだっておんなじよ。故郷なんかありやしないわよ」

「そうか、三人が三人共、そろいもそろって故郷なしね」



「いいじゃないの。そんな人のことなんか」
男は左手をひじ枕にし、右手は伸ばしてキ
クの乳首をつまんでいた。
「そして今、どこから通ってんだ」
「当ててごらん」

男の右手が不意に荒ら荒らしくキクの乳房
をはじきとばした。
「ふざけるない。さっきからおとなしくきい
てりゃいい気になって、人をばかにするのも
いい加減にしろ」

男は片ひじついて半身を起こし、大きな声
でどなりつけた。

電 話

相馬博士の殺害事件からこっち、わたしは

会社の仕事もろくろく手につかなかった。新聞でもほとんど前例のない怪事件として報道している。警察でも空前の規模の動員をかけて動いている。だが、この事件の本筋をいたいだれが知っているというのか。上島氏にサレア、芙美子夫人、バー・エテルナ。サモア島の奇怪な遭難者ジャスミティの不思議な体験と死。そうして人づてにささやかれるゴルドン伝説。博士は伝説に殺されたのだ。

　　といって悪ければ、伝説に関する何らかの秘密を探ろうとして殺されたのだ。これは上島氏にも言えることだ。キューバ近海で偶然と消失した海上の奇怪事も、根は一つの線でつながるものだ。この意想外な事件の背景を説明したとしても、これをまじめに受け取る者が何人いるだろうか。

　　早仕舞をして会社を引き上げようとして帰りかかったところへ電話、小林春吾からだった。

「新宿のボンで待ってる」

　　行くとさっきから待ってた見え、少しいらだたしげな中にもすっとほけたような笑い方で、手をあげた。

　　こんな男が、と思いながら、やはり久し振りに会うとなると、親しみがわく。わたしのほうも、彼にはいろいろと話題がたまってい



た。

西 司 郎

「ホット、二つ」

暑さの中で、むしろ熱いコーヒーの味はさわやかだ。

「いや、驚いた……こんな大事件になるとはね」

「それで警察の動きは」

「それがよくわからんのだ。六月二十日から二十一日にかけての死亡推定時刻と、死因は飢餓によるもの、というだけで、ほかは黙して語らず——、どうもね。単純な誘かいじやなし、怨恨の線も薄いし、それで突発的なものではなく何か根があつて深いというんだから——」

「用件を先に聞こうか」

わたしは言つてコーヒーを一口飲んだ。

「いや、前の変てこな記事の責任もあつて、おれはまじめにこの事件に取り組むつもりでいるんだ。そこで君にいろいろと手伝つてもらつて——」

わたしは内心おかしかった。立場が逆ではないかと思つた。本筋を押えているのはこちらだ。それだけの手も打つてある。手伝うのはこっちでなく小林のほうだ。



「阿麻君、君といつか行つたエテルナというバーだがね、あそこでこじきと会つたろ」
「うん」

わたしはドキリとした。或る線を押えてきたな、と思つた。

「おれはあのとき、どうも相馬博士じゃねえかと氣になつたんだが、君は相手にしなかつたね」

そうだった。あれはわたしのミスだった。

あの時、小林春吾の疑問をまじめに考えて、こじき、つまり博士をつかまえていたら、こんな事件も起こらず、あるいは上島氏消失事件をも未然に防げたかもしれない。

「そうだ、悪かつた。君の推測どおりあのこ

じきは相馬博士だったんだ」

「そうか、君もそう思うか。そこで、なぜ彼がこじきになつたか。おれは思うに、博士の隠れた面だね。こじきになつて夜のネオン街に出没する、つまり彼には人には言えない変質者としての秘密があつた。——」

小林のハナの穴がふくらんで、汗の玉を浮かべていた。がっかりしたような、ホツとしたような、微苦笑ともつかぬ表情で、わたしはコーヒーをもう一口すすろうとカップを持ち上げたが、すっかりカラになつていた。とんでもない見当違いをしている小林があわれでもあつたが、でも仕方がなかった。

「あつ、もうこんな時間か。悪いけど失敬す

るよ」

小林の落着きのなさは、もう日ごろからのとおりなので、気にもとめず、

「だれかと約束でも——」

「そう。ちよつと見送りに——」

「だれだい、その人は」

「君は知らないよ、西司郎という博士だ」

「西司郎？」

どこかで聞いた名だ。何だかひっかかりがある。

「京大の先生で、今度、アフリカの原始部族と野生チンパンジーの生態調査に出かけるんだ」

そこで思い当たった。新聞の夕刊で見たんだ。六、九月の乾期、アフリカに第二次アフリカ類人猿学術調査隊出発、その隊長が西司郎教授だった。

調査隊はもうとつくに出発していたのではなかったのか。でも、遅れて隊長ひとり、あとから現地のどこかに急行するのだろうか。そこで先行の隊員たちとおち合って、それから本格的な調査が始まるのかもしれない。

とにかく事件とは何の関係もないことだ。わたしはだから、それ以上の詳しいことは聞かなかった。第一、小林春吾がひどくとり急いでいるふうに見えもしたし——。

穴ぐら

何かヌメヌメした、冷いやりとした感触で意識がさめた。

暗いじめじめした穴ぐらのような感じだった。どこに出入口があるのかわからない。でも暗やみに目が慣れると、ほんやりと周囲の状況もわかってきた。

流しの男は、頭を振って立ち上がろうとした。だが妙にからだが言うことをきかない。自然立ち上がりかけた両手が前に落ちた。四つんばいの格好である。

『——どうしたというのだ。ここはいったいどこなのだ。おれはあれから——、そうだ。キクとホテルで寝たんだ。まだコシのあたりが、こう、抜けたようにだるくってしょうがねえや』

自然薄笑いが浮かぶ感じになった。

『そんなこたあ、今さらどっちだっていいとして、あの時、おれはそれとなく探りを入れてようとして、キクが変にカンぐりやがったんだな。おれはカッとした。ふざけるねえ——どなりつけたがあとがいきねえ。それっきりだ。そのあと、何があったんだ』

男は四つんばいのままカブリを振った。頭のシンがシーンとしびれる。不愉快なしびれ

方ではない。どっちかといえば、妙に甘ったるい説明のつかない気分なのだ。それでいてからだがいふことをきかない。

無理に動こうとして四つんばいのまま前からだをずらすと、変に暖かくて、弾力のあつものに手先がふれた。

「ギャオ」

突如動物の叫びで何やら立ち上がった。見れば人間である。いやゴリラかもしれない。かすかな光線で、いやに光る目と、毛髪のようにふるえる体毛を見た。よほど毛深い人種か、とも思えたが、その男？ には、後に丈一尺ほどの尾があった。もしこの場にわたしや上島氏が居たとしたら、その奇怪な男？ はサレアの舞台でのゴリラ男、いや、有尾人であることをすぐに認めたであろうが、流しの男にそんなことがわかうはずもなく、ただ意外さに、トッサの気構えて息をのむばかりであった。

もしかしたら、変な夢でも見ているんじゃないか、男は自分で自分の身をつねって、そのことを確かめようとしたが、思うだけで動きがとれず、四つんばいの姿勢をくずすことができなかった。

ゴリラ男は二声、三声、さらに何か声高に叫ぶと光る目でこちらを見すえた。男は自由

のきかぬからだかくやしかった。逃げるか、機先を制して飛びかかるか、どちらか一瞬に事を決しないと身が危ないと思った。一瞬、二瞬、緊張した時間が過ぎた。しかし変化はなかった。ゴリラ男は立ち上がったままの姿勢でいた。

その時足音がした。低い、しめやかな音である。どこからどう近づいてくるのか、すつと音もなく消えいるような止まり方で男の前に立った。

馬と男

驚いたことに、それまで立ちはだかつていたゴリラ男が、不意にスツと身をかめると頭を地にすりつけ拝むようにするのである。女は——そう、女に間違いはなかった。トカゲの皮を被布として身にまとっていたが、かな薄い光線の中に、両足がスツと延びて神秘的な白さを浮き出させていた。

「お気付きのようですわね」

声におほえがあった。

「お前は！」

「そうよ。キクよ。ホ、、、」

「ご機嫌はどういうことなんだ。何が起こったというんだ」

「あなたが悪いんだわ。わたしたちの身の上

に余計な興味を持つんですもの」

キクはなまめかしげな呼びかけ方でそういうと、いきなりことわりもなく、ヒョイと身軽に足をはねて、横すわりに四つんばいのままの男の背の上にすわった。

「何をするんだ」

激しく叫んで、背の上から女をはねとばそうと身を動かしかけたが、思いどおりにはからだは動かなかった。

「だめよ。もういくらじたばたなさっても、手遅れだわ」

「背中に腰かけるなんて、とんでもねえ、ど

かんか。そこをどくんのだ」

「だって、ちょうど腰かけるのにつこうがよいんだもの」

「腰かけや馬といっしょにする奴があるか」

「馬、いいことおっしゃるわね。わたしね。

馬に乗るの、大好きなのよ。こんなぐあいにね」

ことばを言い終える間もなく、キクは瞬間に身をひるがえし、今度は両足を広げて男の背に馬乗りにながった。女の体重がモロに男の背と、手足を圧した。だが、男は振り払うことも、手足を曲げて腹ばいになることもできない。

「くやしがることもないでしょう。馬にして

もらえるなんて、あんた光栄よ」

キクは男の耳をなぶるように小さな指先でもてあそび、髪の毛をいじったりした。

「いったい、お前は何者だ。いや、お前ばかりじゃない。マダムは？ ルミは？ お前たちは何者だ」

女たちが、ごく普通の人間でないことが、男に初めてわかった。

「いい馬だこと。どう、少し調教してあげましょうか」

キクはニコリと笑ったようだった。カカトで強く男のワキバラを打ち、両ヒザでしめつけた。ドスツと、シンにこたえる手ごたえがあった。するとどうだろう。あれほど手足のきかなかった男のからだは、何かに引かれてもするように、女を背に乗せたまま、スルスルと暗闇の中を歩き出した。

「あんたが知りたいという、マダムやルミに会わしてあげるわね」

カカトが拍車を当てるように、さらに鋭く男のワキバラを蹴った。いつのまにか、さきほどのゴリラ男は、もうその場には居なかった。

(未完)

読

者

コ

1

ナ

1



★他にも多くのご投稿がありました
たが、スペースの都合で掲載でき
なかったことをおわびします。こ
のらんの投稿はハガキでも結構で
すからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌
次号をお送りします。誌上匿名は
自由ですが、住所、氏名はお書き
ください。（読者コーナー係）

まったく北園透一郎先生の「アラ
ビアの城」は何回にわたって掲
載されるのですか、長くつづく
とおもしろ味がなくなります。
七月号の絵物語「鞭のニコラス」
八月号の「密林の美女」九月号
の「魔女アクリカ」などは、
いままでの絵物語より新しいア
イデアがあり、おもしろく読ま
せてもらいました。

（鹿児島・KN生）

★日本のSMマガジンとして最
高の貴誌が、カナダ・フェニク
ス商会等と特約、海外の公刊誌
よりSMフォトを八月号で多量
に公開しているのは、国際的S
M誌としての使命を果たしてき
たとよろこびにたえない。その
ためにも日本の縛りフォトには
長襦袢などの日本的ムードのあ
る縛りフォトを掲載していただ
きたい。八月号には「砂の上の
船」など季節感があっていいが
いま一步不足だった。「大江戸
文学と西村みゆきの「裏窓」的
分析」は読ませた。「残念なり
猿飛佐助」も忍者ものブームだ
けに楽しませてくれた。

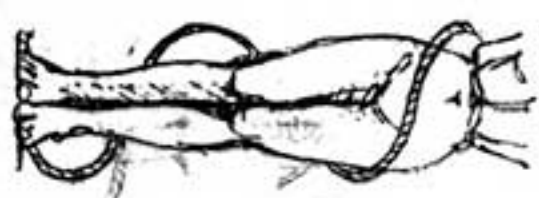
（東山三十六峰生）

★九月号における森下高茂氏の

「現在マゾヒズム文化時評」は
真に「裏窓」という雑誌の、批
判的精神というか、面目躍如
たるものがあつた。サドを理解
することが、インテリの資格と
誤認しているいわゆる特権階級
に、氏は痛烈な批判の鞭を加え
ていた。実際、自称インテリた
る人たちに、どれだけサドが理
解されているだろうかというこ
とは、ちかごろはやりの残酷も
の映画、出版物を一見すれば
いかにひとりよがり過ぎない
ものかということがわかる。か
れらや、かれらに付和雷同する
一般大衆が、単に鞭打ったり傷
つけたりすることがサディズム
だと曲解し、現に法や社会機構
のなかで、平然とおこなわれて

いる残酷物語に気づかぬかぎり
悲劇は永遠につづくだろう、そ
のことは、「食人国旅行記」の
理想主義」のなかで安東泉氏が
適確に指摘している。かれらに
くらべれば、むしろモデルのエ
ダ・キリコ嬢のように、いかに
もサドを理解できるかのように
ブラズに、悪あがきせず、サド
を肌で感じるような文章がここ
ろよい。（東京・アンテナ）

★暑くなつて、編集の仕事もた
いへんなことと思います。「裏
窓」の本はおもしろいだけでな
く、考えごとで気がむしゃくし
やするとき、仕事をやる気がし
ないときに読むと忘れてしま
います。こんな雑誌はどこをさが
してもありません。五月より始
ま



読者コーナー



説をたくさん掲載して下さるようお願いいたします。

(豊中自衛隊H・N)

★八月号を拝見、正直なところガッカリした。時代小説というのは「残念なり猿飛佐助」と、「切支丹散華」の二編だけで、ほかに絵物語「ぬめ肌女郎」があるばかり、小説としてはいずれも力作とはいえるが、むしろ現代小説「アラビアの城・お仕置きにぬれる弓子」「お転婆学園秘密作戦」「女の争い」等にくらべて内容の迫力に欠けるのはどうしたことか。このへんで万里小路昆、飯田豊吉、小田切爽先生らの登場を願ひ、現時代作家陣の奮起を望みたい。オフセットページ「東京―神戸」などは紙数の浪費でしかない。といって小言ばかりならべるのではなく、グラビアの海外SMフオトは最近の傑作で、海外ものあまり好きでない小生も、充分満足し得るものであった。

(東京・裏野窓一朗)

★拝啓、貴誌いよいよご繁栄の段、およろこび申しあげます。九月号でいちばん感じたことはグラビア「海辺のうた」に出演されておられるエダ・キリコさんの、マルキ・ド・サドの著書

に対する評論でした。私たち誌者は、毎月貴誌のグラビアに掲載されているモデルさんたちの私生活や、撮影時の心境や、大きくいえば思想などを知りたい気もちがあります。八月号に同じく、エダ・キリコさんが書かれた「撮影行」は、要にして簡を得た、そして、センスにあふれた好文章でした。非常におもしろく拝読しました。「食人国旅行記」についての文章は、正直なところ、私の頭脳ではいささか理解できにくいところもありましたが、彼女の考え方、生方が、バク然とわかる気がしてき、これも興味ぶかいものがありました。グラビアの女性モデルに、同じ号の本文に文章を書かせるなんて(それも堂々と鑑賞に耐え得る)まったく、そういう意味でも、異色の雑誌ということができます。とにかく、エダ・キリコさんという女性には、大いなる興味がもてます。縛られるモデルが、単なる人形ではなく、血のかよった人間であるということ、これは、私たち読者には、たいへんなシゲキであるわけです。また、このエダ・キリコさんを素材としての吉田久氏のカメラは、とくに最

近、好調のように思えます。背景の選定の巧さ、構図、角度の鋭さは、一級のものだと思えます。サディズムを前面に押し出した写真をみたいのが、私たち読者のいつわらぬ気もちですが世間情勢とやらの関係で、カメラマン、編集部のご苦労は、わかるような気もします。ともあれ、サディズムと、女体と、風景と、そして詩情のふしぎな融合は、新鮮で前衛的なシゲキを私たちにあたえます。編集関係諸氏の、今後のご発展を期待いたします。(北海道・湯川生)

★わたしの住んでいる町は人口三十万という大きな市のくせに本屋さんが数えるほどしかありません。だから「裏窓」の発売日には必ず勤め先の大坂で買って帰りますが、それも娘さんなど店にいとどうも買えなくて方ほうの本屋さんをぐるぐるまわり、おじいさんかおばあさんのいる店でやっと手に入れる始末です。五年も前からずっと買っている「裏窓」もずいぶんたまりました。ひととおりの読みでしきりと本をばらばらに解体し、好きなところだけとって二三冊を合本して、ときどき読みだしてはまた読むのが楽しみです。三年前から新しいとじかたの本になり、合本できなくて困りました。それが、それでも嫌いなペーじはとり除いて、いわばわたしの「裏窓」はサド特集号とでもいえましょう。最近の貴誌はますます斬新さを加え、近代化する世相に決しておくれをとつていませんが、「裏窓」という雑誌の性格は現実から遠く離れた時代もの、夢幻の世界に遊んでこそ社会から白眼視されることなく、わが道を歩んでゆけるのではないのでしょうか。とかくいうわたしは、なにを隠そう時代もの、和装ファンなのですが、決して我田引水ではないと思うのです。その意味で九月号は小日向一夢先生の「絵本いろはうた」同じく潮一樹先生の「小笹姫受難」島本、堂先生の「海賊虹姫伝奇」や井村、古正先生の「変幻白だぬき」など、満足に価するものがありました。これに喜多玲子、豊田みのる両先生の絵でも加われば、それこそばらばらにしたいのですが、グラビアに時代緊縛写真をなんとか載せてくれないものでしょうか。さし絵にくらべて写真においては最近さっぱりで、わず

海外の公刊誌より

カルフォルニア・フェニクス商会・特約



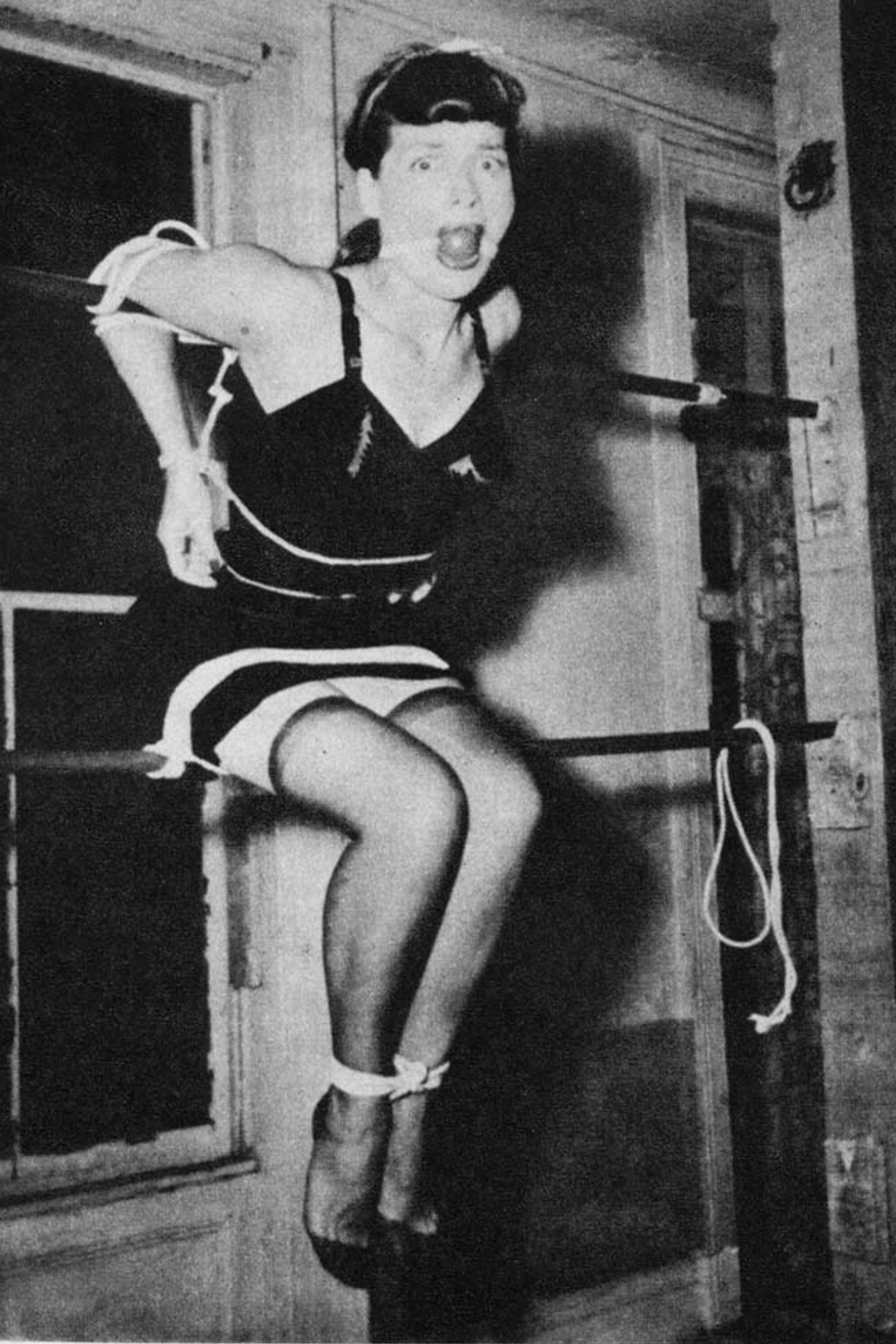














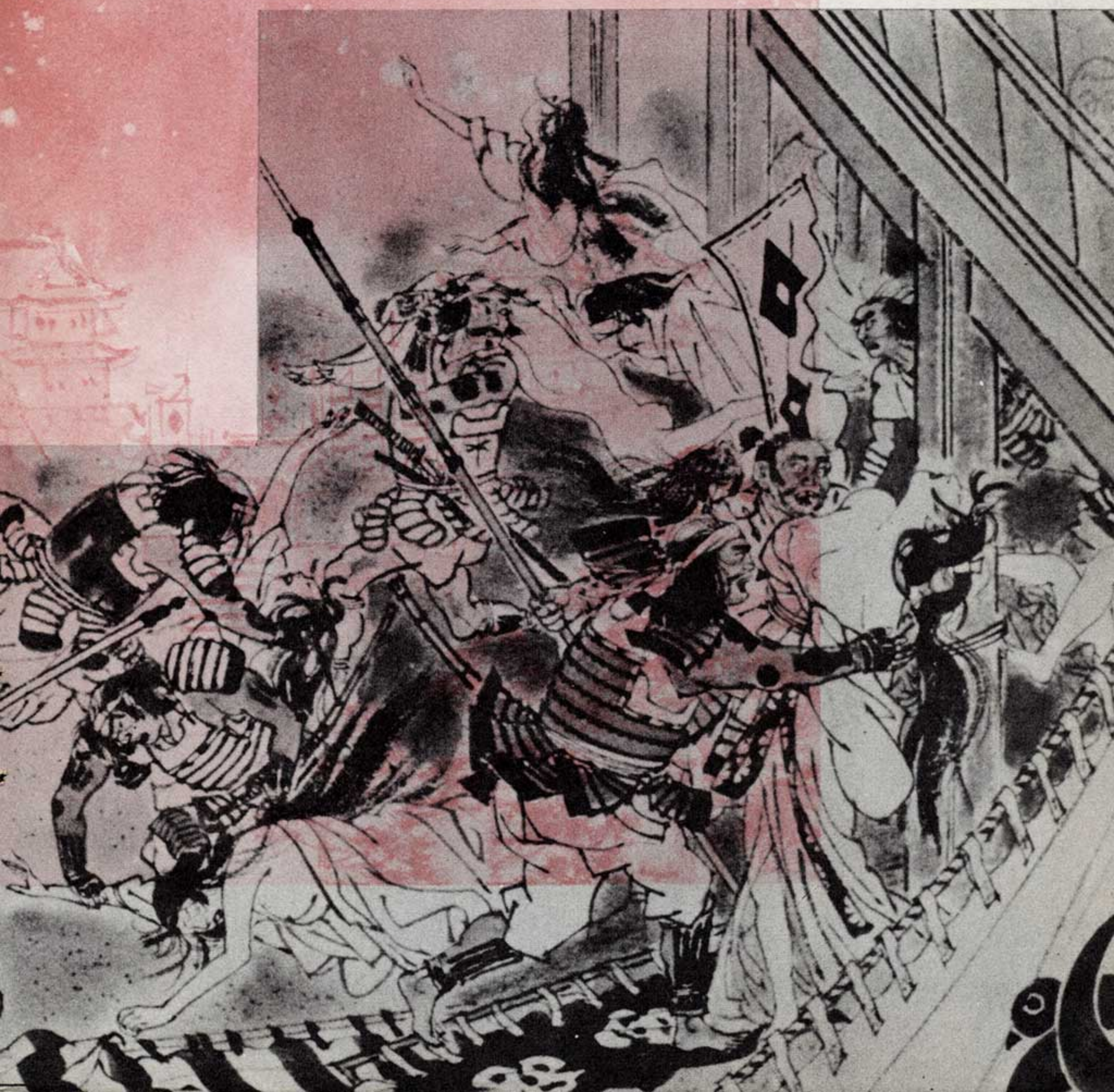
雁形城落城因

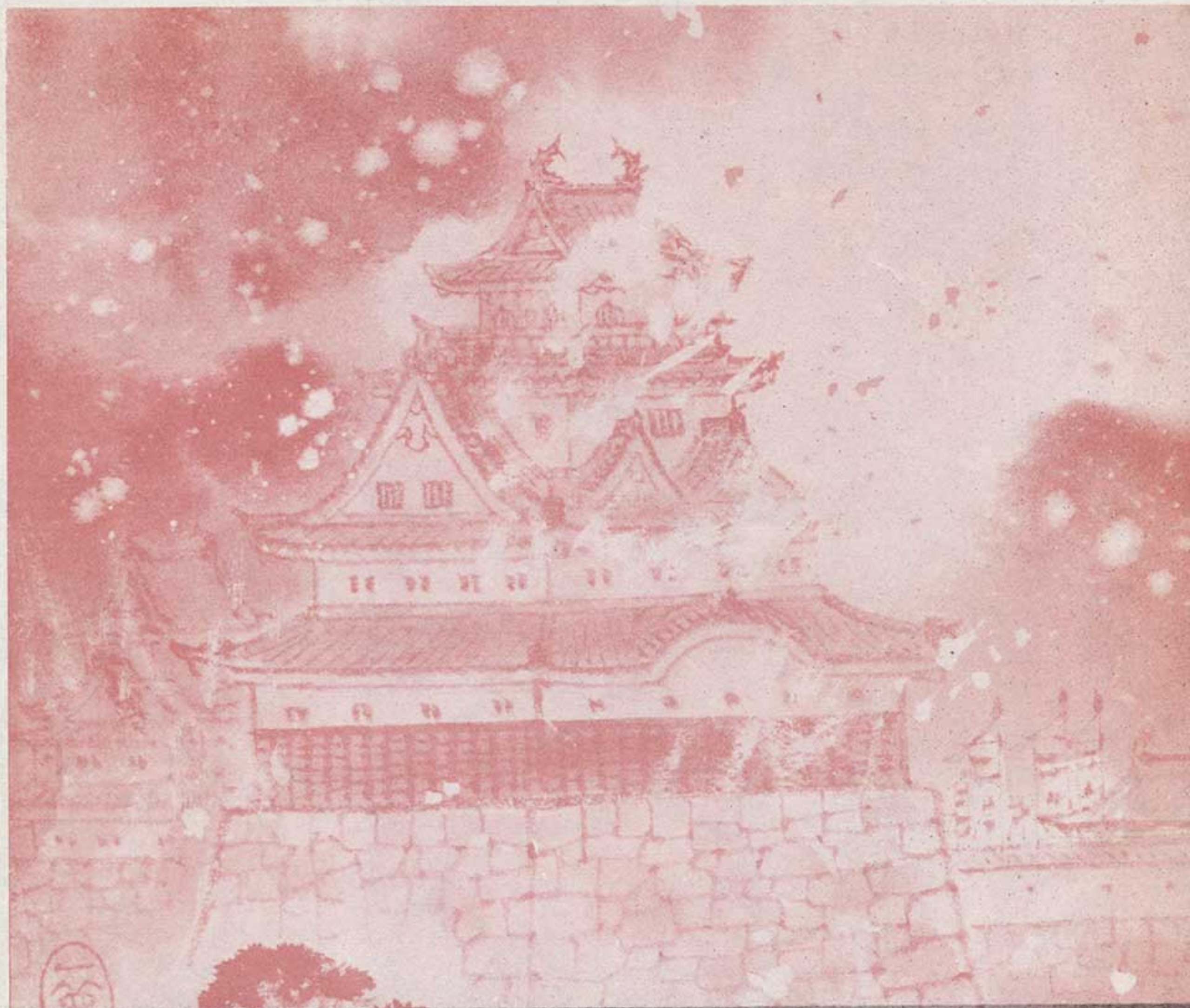
小日向一夢・絵

人質磔刑



落城賦







裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302振替東京10756久保書店宛

38年(九月号)二五〇円

○裏窓草紙「絵本いろはうた」

うた・宮古志満夫

絵・小日向一夢

○絵物語 海賊虹姫伝奇

文・島本 春雄

絵・春日 章

○絵物語 変幻白だぬき

文・井村 錠

古正 英生

○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館

★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集

★グラビア・海辺のうた

夜のなげき

吉田 久

★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介

小笹姫受難(小日向一夢・絵)……潮 一樹

特製マゾキン(山田彬弘・絵)……嶋岡 晨

魔女アクリリカ(中川彩子・絵)……春川光彦

鬼頭晩画集「美しきものの檻」

絵物語 必殺のデリンジャー……落合竜二

体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究

現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂

穴(あな)……(都築峰子・絵)……石山省一

お化粧される弓子(鬼頭晩・絵)……北園透一郎

★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集

38年(八月号)二五〇円

○絵物語 東京——神戸十六時間

文・祖父江 新

絵・山田 彬弘

○絵物語 めめ肌女郎……

文・矢桐 重八

絵・春日 章

○絵物語 密林の美女……

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

○西部 紅のライフル……

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

★グラビア・砂の上の船

漁師宿にて

吉田 久

★グラビア・海外サド写真特選集

残念なり猿飛佐助(小日向一夢・絵)……井村 錠

妖異水底に沈む(秋吉巒・絵)……信夫 澄夫

お仕置きにぬれる弓子(鬼頭晩・絵)

北園透一郎

お転婆学園秘密作戦(江淵晃夫・絵)……郷 保夫

女の争い(都築峰子・絵)……五所 章

フィギュア・トレーニング……春川 光彦

切支丹散華(東桂史・絵)……北村 仙也

現代マゾヒズム文化時評(17)……森下 高茂

38年(七月号)二五〇円

○絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八

絵・春日 章

鞭のニコラス……

文・春川 光彦

絵・中川 彩子

続・アラビアの城

文・北園透一郎

泣きじゃくる弓子

絵・鬼頭 晩

吉田 久

グラビア・静かな山林の午後

闇に光る

吉田 久

○絵画集・サデイスチンの微笑……江淵 晃夫

切支丹女牢……喜多 玲子

南北戦争以前……鬼頭 晩

海外SM絵物語……フェニクス商会

切腹殉教記(小日向一夢・絵)……黒部 恭治

しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵)

北野 竜一

くたばれッ淑女学院……郷 保夫

西鶴におけるマゾヒズム……安東 泉

血染め白百合(古正英生・絵)……佐藤達四郎

体当たりマゾヒズム論(12)……水尾 究

38年(六月号)二〇〇円

○鬼頭晩時代妖美術集……鬼頭 晩

○中島喜美時代妖美術集……中島 喜美

グラビア・幽囚の部屋……吉田 久

○絵画集 続・美しき海賊船……フェニクス商会

七つの大罪(中川彩子・絵)……落合 竜二

続・異端の終末……芦田 奈貴

おどろ記珍化論……左 次郎

「ロリータ」における

ニンフェティズム……安東 泉

「夜と霧」……黒田 史朗

放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ

月光の道で……河村 童八

鬼婦長……丸 亀恵子

夜の妖蝶……立原 道夫

ボスには乳房がある……五所 章

体当たりマゾヒズム論(11)……水尾 究

きんぎれ不動(小日向一夢・絵)……庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)……黒部 恭治

忍法「乳影」(鬼頭晩・絵)……島本 春雄

妄執侍(古正英生・絵)……潮 一樹

霧姫変化(鬼頭晩・絵)……佐藤達四郎

ゴルドルンの記憶(3)(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

38年(五月号) 二〇〇円

絵物語・白蟻闇若衆……………文・島本 春雄
……………絵・東 桂史

・流刑星の美女たち……………文・豊田 一狼
……………絵・山田 彬弘

江渕晃夫耽美画集……………江渕 晃夫
グラビア・夢幻のへや……………藤沢 修

・美しき海賊船……………フェニクス
・くさりと美少女……………商会・提供

海外SM画傑作選……………井村 錠
茅女物語……………潮 一樹

会津の女兵……………飯田 豊吉
その夜……………阿麻 哲朗

ゴルドンの記憶 (2)……………村山 省
椎名夫人の足……………かびや・かずひこ

ほも紳士録……………森下 高茂
現代マゾヒズム文化時評 (14)……………水尾 究

体当たりM論 (10)……………北野 竜一
私の愛した女優……………北園透一郎

アラビアの城……………祖父江 新
孤島の復讐鬼……………葦田 奈貴

異端の終末……………豊中 夢夫
背後の脅迫者……………郷 保夫
ばんざいッお転婆学園……………郷 保夫

38年(四月号) 二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……………文・島本春雄
……………絵・秋吉 轡

・マドリーナと黄金の靴……………文・松平莊司
……………絵・中川彩子

・白狐のお新いろうさんげ……………絵・東 桂史
小日向一夢妖美画個展……………小日向一夢

グラビア・黒猫といす……………毛 卓三
・黒いタイツ……………猪島 昌也

・鏡と女……………藤沢 修
・パウリーネ夫人のピクニック……………フェニクス

海外SM画傑作選……………井村 錠
ゴルドンの記録 ①……………阿麻 哲朗

処刑の図……………三鬼 俊
無分別な夜……………海老沢七郎

大阪非情地帯……………豊中 夢夫
内外ミュージックホール・スナック集……………藤沢 修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話……………北野 竜一
文芸評論「醜いコメディ」について……………安東 泉

ほも紳士録 ④……………かびや・かずひこ
A子の話……………南 ゆり

体当たりマゾヒズム論 ⑨……………水尾 究
舞踏会の贅……………春川 光彦
のぞきの大スケ捕物帖……………飯田 豊吉

38年(三月号) 二〇〇円

絵物語・スリーペット号……………文・豊田一狼
……………絵・鬼頭 暁

・不時着す……………文・島本春雄
……………絵・古正 英生

・白峰の女忍者……………文・矢桐重八
……………絵・小日向一夢

・黒猫を捕えた①②……………毛 卓三
海外SMフォト・画傑作選……………泰西出版資料

醜いコメディ……………淡路周五
大根無頼……………祖父江 新

和装恋慕……………宮古志満夫
ほも紳士録 (3)……………かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論 (8)……………水尾 究
猫……………村山 省

犬とギプスと搾衣……………春川 光彦
不死身の女……………海老沢七郎

「蠍たち」にみる……………安東 泉
あるサディスチンのタイプ……………鬼頭 暁

鬼頭暁時代妖美画展……………左 次郎
うら八捕物帳……………飯田 豊吉

「裏窓」湯河原へ行く……………編集部

38年(二月号) 二〇〇円

絵物語・姫法師呪文……………文・島本 春雄
……………絵・小日向一夢

・変化黒髪小僧……………文・京 剣児
……………絵・古正 英生

秋吉轡妖美画個展……………秋吉 轡
グラビア・黒い皮のスタジオ……………泰西出版

・美の凝結……………金井 行雄
・美の模倣……………金井 行雄

海外SM画傑作展……………泰西出版
島原の子守唄……………春川 光彦

金色の胸毛……………立原 道夫
郡氏の応接室……………豊中 夢夫

代用品じゃつまらない……………九十九 郎
フォルリ城の花嫁……………三鬼 俊

おれの名はダニエル……………祖父江 新
愛の戦慄と充実……………白木ゆりこ

体当たりマゾヒズム論 (7)……………水尾 究
ほも紳士録 (2)……………かびや・かずひこ

新・森茉莉論……………間野 嶺
新・安岡章太郎論……………安東 泉

女因お蓮の死……………小田桐 爽
浪人夢想日記……………市原 砂夫
カブー家の第三夫人……………加木れい子

38年(一月号) 二〇〇円

絵物語・ハレウィンの歌う首……………文・松平莊司
……………絵・中川彩子

・赤鯨奇伝……………絵・小日向一夢
……………文・島本 春雄

・隠密麝香猫……………中島 喜美
山田彬弘妖美画個展……………山田 彬弘

・美の彷徨……………北 好夫
・美の孤立……………金井 行雄

クリスマススイヴに悪魔がくる……………九十九 郎
赤い血のうずまき……………関町 妙男

仮面のたわむれ……………溝口 雄太
黒い幻想……………白木ゆりこ

小さな赤い腰巻の記憶……………外村 良
体当たりマゾヒズム論 (6)……………水尾 究

夜の感觸……………万里小路 崑
忍著遁走記……………祖父江 新

決闘立花屋……………花巻京太郎
女性的情念の三十年……………かびや・かずひこ

「叩び声」を解剖する……………安東 泉
小説「連」のレスピアニズム……………間野 嶺

婦人機密将校ポーション……………泰西出版資料
売られていく玩具たち……………北園透一郎

37年(十二月号) 1100円

絵物語・洞穴の姫と	文・松平 莊司
片耳の悪魔	絵・中川 彩子
・耳の戦慄	絵・曾我部 泰
・妖説黒縄盗賊	絵・小日向一夢
グラビア・犬と女	毛 卓三
・美の発端	北 好夫
・美の展開	毛 卓三
・美の落差・ほか	金井 行雄
かわいい調教師	北園透一郎
殉国	中康 弘通
投げ節お駒	花巻京太郎
締めつける愛情	春川 光彦
東京午前零時	豊中 夢夫
日本刑罰史(終回)	名和 弓雄
ほも・とその周辺(終回) かびや・かずひこ	水尾 究
体当たりマゾヒズム論(5)	安東 泉
新・三島由紀夫論	小田桐 爽
お春さらわれ草紙	浦戸 宏
千代の青春	三津井弓雄
赤い城	神原 栄知
ある身の上相談から	羽鳥なつ子
イラ ラする夜に	鈴宮 英樹
風雲地獄街道(終回)	

37年(十一月号) 1100円

絵物語・かわいいアンヌの	文・松平 莊司
ほうけん	絵・中川 彩子
・異聞・牛裂きの刑	絵・東 桂史
・宝石の血	絵・秋吉 鬱
グラビア・美の鋭角	毛 卓三
・美の冗舌	金井 行雄
・美の傾斜	金井 行雄
・美の断面・ほか	金井 行雄
海外SMフォト特選集	泰西出版資料
あわれ雪路	丸亀 恵史
おかつばとおさげの間	間野 嶺
霧笛の町	五所 章
妖美画傑作選	沖涉二 都築峰子
火刑幻想	多賀 満
夜の画帳	鳴滝 三郎
足	村山 省
体当たりマゾヒズム論(4)	水尾 究
さまアみろ	春川 光彦
ある恋の物語	山木 節夫
不安と絶望から幸福への道へ	桜井 和子
畜獣デリムソン(終回)	阿麻 哲郎
ほも・とその周辺(9) かびや・かずひこ	鈴宮 英樹
風雲地獄街道(6)	

37年(十月号) 1100円

絵物語・ひざまずいて	絵・秋吉 鬱
・柔肌切支丹	絵・曾我部 泰
江洲晃夫妖美画個展	江洲 晃夫
グラビア・舞台名	金井 行雄
・たわわ	藤沢 修
・美と醜のあいだ	金井 行雄
ある青年の休暇	ゴードン社・提供
紅の私刑	五所 章
女奴隷の浴室	東島かおる
妖しい体臭の夜	市川 菊夫
畜獣デリムソン(11)	阿麻 哲郎
鬼洞又四郎の煩惱	小田桐 爽
ギラルド王の金色奴隷	松平 莊司
現代女牢記	多賀 満
江戸の怪談	河西 恒一
ほも・とその周辺(8) かびや・かずひこ	美濃村 晃
海外SM映画ご紹介	水尾 究
体当たりM論(3)	村山 省
盗む	馬場 弘二
おろかな馬のものがたり	鈴宮 英樹
風雲地獄街道(5)	

37年(九月号) 1100円

絵物語・凄絶めくら忍法	絵・東 桂史
・密林の女王ムムタル	絵・中川 彩子
・蛇と鞭	絵・山田彬弘
北原環妖美画個展	北原 環
グラビア・SM式美容鍛練法	毛 卓三
・屈曲	毛 卓三
・悪夢	毛 卓三
・女ひとりのへや	猪島 昌也
・かわいいくちびる	毛 卓三
お浜の受難	花巻京太郎
山小屋の暴風雨	駒井たまき
戦慄の女体爆弾	綾川 妖司
鈴の泣き声	浦戸 宏
白痴美の女	青柳貫次郎
日本型罰史(3)	名和 弓雄
ほも・とその周辺(7) かびや・かずひこ	安東 泉
「癡癡老人日記」を解剖する	八巻 令
タロの恋	水尾 究
体当たりM論(2)	霧山 志郎
女賊と姫君	阿麻 哲郎
畜獣デリムソン(10)	三枝喜久治
鬼婆のすむ家	鈴宮 英樹
風雲地獄街道(2)	

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号) 二〇〇円

絵物語・最初の火星入……………	絵・山田 彬弘
〃 鞭に生きる女(5)……………	ウアン・ロッド
〇海外SMフォト特選集……………	
〇中川彩子妖美画個展……………	中川 彩子
★グラビア・時代劇のムード……………	猪島 昌也
〃 石伐り場の女……………	毛 卓三
〃 沼のほとり……………	毛 卓三
フォト時代劇・島抜け伝八……………	海老沢七郎
旗本被虐年譜……………	島本 春雄
鼻には鼻を……………	九十九 一郎
脱走兵とその妻……………	竹谷 十三
姫に捧げられた人獣の話……………	白畑 高之
ほも・とその周辺(5)……………	かびや・かずひこ
地獄で泣け……………	万里小路 崑
武后秘話……………	綾川 妖司
奇縁縁切り檀……………	小田 桐 爽
絵本かぞえうた……………	喜多 玲子
畜獣デリムソン(8)……………	阿麻 哲郎
忘念油屋火事……………	竜崎 聖吾
現代マゾヒズム文化時評……………	森下 高茂
菰塚温泉のおもいで……………	影 なぎさ
裏窓タウン……………	編集部・編
風雲地獄街道(2)……………	鈴宮 英樹

37年(六月号) 二〇〇円

絵物語無残女忍者記……………	文・矢桐 重八
〃 時間旅行機第一号……………	文・豊田 一狼
〃 鞭に生きる女④……………	文・ウアン・ロッド
〃 フン族の暴雄アッチラ画……………	中川 彩子
碧眼蛮女伝……………	小田 桐 爽
肉の濁流……………	城堂 純
畜獣デリムソンⅦ……………	阿麻 哲郎
グラビア追いつめられていく演技……………	毛 卓三
〃 和室のひとり……………	猪島 昌也
〃 女体倉庫……………	毛 卓三
〃 ふとんの上で……………	猪島 昌也
色鬼島田……………	竜崎 聖吾
桜とサムワイとサディズム……………	浜野 真砂
哀艶十六夜街道……………	文・円城寺 達
A心酔のタイフ……………	かびや・かずひこ
日本刑罰史(1)……………	名和 弓雄
稲妻さんげ……………	万里小路 崑
現代マゾヒズム文化時評……………	森下 高茂
黒髪幻想曲……………	室 文彦
地獄船青竜号……………	永井卓二 郎
縄を待つ女……………	堀越 早苗
風雲地獄街道(1)……………	鈴宮 英樹

37年5月号 ぜんぶ 売り切れました

37年(四月号) 二〇〇円

〇グラビア・はんにゃのめん……………	吉田 久
〃 ゆがむ豊胸……………	藤沢 修
〃 いすと女……………	吉田 久
〃 片隅にうごめく……………	猪島 昌也
〇絵物語・地獄への招待状……………	文・小川 左門
〃 〃ある夜の強盗……………	文・藤見 郁
〃 〃砂漠の恐怖王ハッサン……………	文・松平 莊司
リボンに巻かれる娘……………	画・中川 彩子
姫肌受難船……………	綾川 妖司
奇妙なあしながおじさん……………	黒部 恭治
畜獣デリムソン(5)……………	阿麻 哲郎
私本・礼津女切腹抄……………	団 克衛
なめたい……………	田沼 醜男
日本拷問史(3)……………	名和 弓雄
フォト・ストーリー・鞭に生きる女(2)……………	ウアン・ロッド 作・画
〃 妖蘭亭の愛欲……………	豊田 一狼
捕われた姫君……………	宮古志満 夫
姫君様御入牢……………	小田 桐 爽
おえん地獄夢……………	五斗六 太郎

37年(三月号) 一五〇円

〇グラビア・沈黙のポーズ……………	吉田 久
〃 ソファベッドのあるへや……………	藤沢 修
〃 もたえ三熊ほか……………	編集部・編
〇絵物語・青い野獣のブルース……………	烏丸 克彦
〃 〃女忍伝奇館……………	文・黒部 恭治
不貞現場の女……………	春川 光彦
畜獣デリムソンⅣ……………	阿麻 哲郎
マゾヒズム文化時評……………	森下 高茂
由美子よ逃げ……………	竹谷 十三
鞭と縄と美貌の迫害者……………	院南 五郎
〇絵物語・吸血鬼号の女囚……………	文・島本 春雄
日本拷問史②……………	名和 弓雄
美妃責め行者譚……………	来島 撰次
フォト・ストーリー・鞭に生きる女①……………	ウアン・ロッド 作・画
〇絵物語・煩惱地獄医者……………	絵・中島 喜美
極楽バンテイ往生……………	室 文彦
マングローブの葉かげで……………	松平 莊司
海老沼武七の執念……………	小田 桐 爽
黒い鉄の扉……………	南郷 京助